

【異伝】 ファイナルファンタジータクティクス

下野カズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「果たさねばならない志と、約束された出会いと別れがある」

誰の言葉だっただろうか。僕にはもう思い出せない。

別れがあった。新しい出会いもあった。そして、仲間と共に果たすべき道があった。

デイリータ。

きみには多分、僕の思い出すこの言葉は単なる絵空事。そうでなければ空想と現実逃避の作りものだと揶揄するだろう。

僕はその理想を追い求める。

誰に笑われようと、他の誰でもないきみに馬鹿にされてもかまわない。

それが僕と、出会った仲間たちと共にする思いの形だから。

初めましての方は初めまして。以前、12clubの名前でファイナルファンタジータクティクスの小説を上げていました。お久しぶりの方はお久しぶりです。

二年前くらいから無断失踪してしまったことをまず、ここでお詫び申し上げます。

いくつか作品を上げて、だいぶ蛇足気味だったことを悔やみつつも、新たに筆を持つのが怖かったということがあります。

それでも、改めて自分の作品を見直して、やりたいこと、やりすぎたことを見つけられたような気がしたので、こうして筆を再び持ち上げた次第です。

相変わらずの見切り発車ですが、大らかな眼で見守っていただければ幸いです。

—追記—

拙作に評価も付けていただいた方、たいへん嬉しく思います。良ければツイッター主演の作品も見てやってください。

目次

序章 転生者たち

プロローグ《榎宮ゆかり》 | 1

プロローグ《加室美月》 | 5

プロローグ《神崎タクマ》 | 8

獅子戦争《アラズラム・J・D》 | 12

序章《クレステイア・アルヴァン》 | 19

序章《キラ・シルベント》 | 24

序章《クラウス・マツケンロー》 | 29

Chapter 1 持たざる者

士官候補生たち | 37

父・バルバネスの死 | 44

剣士アルガスとの出会い | 48

ダイスダーグとの再会 | 56

ドーターのスラム街 | 65

エルムドア侯爵救出 | 77

ガリオンヌの領主 | 84

骸旅団の女剣士 | 93

怒りのデイリータ | 102

暗躍 | 112

レナリア台地 | 120

風車小屋 | 130

ジークデン砦 | 142

そして僕は逃げ出した…… | 153

幕間 それぞれの一年間

幕間 《クレステイア・アルヴァン》

159

幕間 《キラ・シルベント》

164

幕間 《クラウス・マッケンロー》

169

Chapter 2 利用する者される者

オヴェリア追跡

174

アラグアイの森

183

デイリータとの再会

193

機工士

204

ドラクロワ枢機卿と聖石

212

聖石に群がる者ども

222

枢機卿の怒り

234

ゴルゴラルダ処刑場

243

利用する者される者

254

ライオネル城

262

ライオネル領・ルザリア領間

273

獅子戦争勃発

280

幕間 獅子戦争開戦直後

幕間 《クレステイア・アルヴァン》

295

幕間 《キラ・シルベント》

304

幕間 《クラウス・マッケンロー》

309

Chapter 3 偽らざる者

雷神シド

315

占星術士オーランとの出会い

319

ザルバツグとの再会

324

”異端者”として

333

オーボンヌ修道院	344
強襲	357
魔人ベリアス	368
ゲルモニーク聖典	374
オヴェリアとデイリータ	384
雷神シドの息子	388
天道士ラファ	396
バリンテン大公の野望	407
邂逅	419
惨劇の痕	426
もうひとつの力	443
幕間 悪意ある者たちへ	
幕間 《クレステイア・アルヴァン》	454
幕間 《キラ・シルベント》	459
幕間 《クラウス・マツケンロー》	466
Chapter 4 愛にすべてを	
聖石を持つ男	472
ドグーラ峠	475
自治都市ベルベニア	482
フィナス河	490
デイリータの想い	495

序章 転生者たち

プロローグ 《榎宮ゆかり》

side：榎宮ゆかり

ふんふふくん。

今日も美月ちゃんとおしゃべり出来て楽しかったなー。

私は心の中で歌うような心境で、放課後の帰り道を謳歌していました。

退屈な授業の時間の合間に話すなんてことないおしゃべり。今はこれが楽しくてしょうがないのです。

国語の時間は眠いし、数学の時間は頭の中で国会答弁しているみたいにぐちゃぐちゃだしで、まあひよつとしたら——いや、かなりの確率で赤点をとることはあるでしょうが。

まあそれは置いといて。

そうそう。

歴史の授業だけはまともを受け入れている自分もいます。歴史って実はこんななおもしろかったんだなーと、改めて脳内革命が起こったことに驚きを禁じ得ない自分。

それもこれもあのゲーム。

美月ちゃんが押しの一辺で貸してくれたゲームに原因があります。

『ファイナルファンタジータクティクス』

ゲームなんて初めてだなーと、美月ちゃんから携帯機プレイステーションポータブル（以下PSP）ごと貸してもらいました。

最初は取っつきにくいゲームだと思ってました。迂闊にも、そう思っておりまして。

始めた直後はよくわからなくて、それこそ説明書片手に何時間もシステムを確認しながら律義にチュートリアルを進めていました。

ダーラボンさん、眠くなってきました。

とりま、一通りのシステムを把握したところで本編開始。

始まったストーリーに微妙に置いてけぼりにされながらも四苦八苦、ダーラボンさんの眠たくなった指導のもと、敵をやっつけていきます。

ここもチュートリアル的なステージなのでしょう。主人公以外はオートで動くキャラクターたち。ガフガリオンさんカッコいいし、アグリアスさんも素敵です。

戦闘が終わってお姫さまの悲鳴が！

その悲鳴の主、お姫さまを無理やり引きずって、みぞおち食らわして気絶させる金の鎧の騎士。

アグリアスさんが制しますが、足の速い鳥さんに乗られてさっさか逃げられる始末。

そこに。

「……デイリータ？」

ガフガリオンさん率いる傭兵の一人、我らが主人公のラムザ君が眩きます。

ラムザ君、かわいい。

ここからようやく本編開始。もうこの時点でワクテカが止まりません。

ファンタジーの王道のようなストーリー展開に私は引き込まれていきました。

私、ファンタジーって大好きですよ。

これは最速で進めて美月ちゃんと語り合わねば！ そう決意した私です。

結果として一週間ぶっ続けでやり通して、美月ちゃんと休み時間ごとに語り合いました。

さすがにPSPごとソフトを借り続けるのも悪かったので、一週目クリアした段階で私もハードごとファイナルファンタジータクティクス買った私です。

ちなみに、ファイナルファンタジータクティクスが発売されたのは1997年。なんと私が生まれるより前の作品なのです！

スクウェア・エニックス、もとい旧スクウェアの黎明期に発売されただけあって、未だにコアなファンも大勢いらっしやるとか。かく言う私もその一人になっちゃいました。なんて罪深い美月ちゃん。

そんなわけで、購入してはや五周目くらいかな？ 数えてませんけど。

今回は誰を育てようかなー。何気に魔法適正の高いラムザ君を魔道士特化で育てるのもありかなー。

でも魔法適正といえどムスタディオ君も実は外せなかったりする。何せ銃が装備できるジョブが魔道士を延々育て上げてやっとなサポーターアビリティ『銃装備可能』という無茶振りをかましてくれますので。しかしそもそもムスタディオ君、初期ジョブで銃が装備できたり、初期からジョブチェンジ可能なアイテム士ですら使えたりするのでそこまで魔道士に傾倒する意味はなかったりします。でもそれでもあえて魔道士の道を行く。女は度胸だー。

あとアグリアスさんは強力な聖剣技を使えるホーリーナイト。消費MPゼロ、無詠唱で離れた敵をもぶちころがすさまはまさに王道の騎士。でもホーリーナイト自体は聖剣技以外、取り立てて優れたジョブとは言えないので、あらかた技を覚えたら物理適性の高いナイトにジョブチェンジ。さすがに魔道士にするには惜しい。

そんなこんなを美月ちゃんと机をはさんで語り合うひとは何にも代えられない宝物なのでした。

そうして充実した青春(?)を送っていたとある放課後の道筋。はい、最初の場面です。スキップしながら横断歩道を渡っていたそのとき。

キキイーツ!!

へ？

気付いたときには私は信号無視のトラックに撥ね飛ばされ、宙を

舞っていました。それをまるで他人事のように見ていました。
まるで靈魂が体から抜け落ちてそのさまを見ていたように。

ちよつと待つて。

私まだ、ファイナルファンタジータクティクス、隅から隅まで楽しんでいないのに――。

私の最後の思考は結局それでした。

プロローグ 《加室美月》

side : 加室美月^{かむろみつき}

ゆかりが事故に遭って数週間が経った。信号無視の暴走トラックに撥ねられ、一命は取り留めたものの未だ意識不明の重体らしい。それを朝の集会で、グラウンド上の高台に立つ校長先生が沈痛に語るのを、私は涙ぐみながら聞いていた。

もう会えないのかな。

もう、あの子とおしゃべり出来ないのかな。

そう思うだけで私の顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。

隣に立つクラスメイトがティッシュをくれる。

涙は拭いても、泣いて赤ら顔になった顔を隠すことは出来なかった。

放課後の帰り道、私はいつも家に帰る前に行く所がある。

ゆかりが今も眠る、3階建ての広い病院。その一室の前、ドアの上に名札が乗っていた。

『榎宮ゆかり』

カラリと扉を開けて、数日前に差した花を今日改めて買ってきた花束に差し替える。それから窓を開けて換気もする。

ゆかりは、呼吸器越しにわずかな呼吸と共に眠りについていて。

最初に来たときはどうやら私は酷く動揺していたようで、看護師さんに羽交い絞めにされた覚えがある。

ゆかり！ ゆかり!!

そう叫んでいた自分を思い出す。

今ではもうそんな気は起きない。ただ、眠り続けているこの親友が目覚めるのを待つ毎日だ。

「美月ちゃん」と呼んでくれる親友はもういない。他の誰もがはずっぱな私のことを「美月」と呼ぶ。馴れ馴れしく「美月ちゃん」と呼んでくれる子は彼女以外いないのだ。

ゆかりが眠るその脇にパイプ椅子を置き、私はそこに座って彼女の横顔を眺める。

彼女はそんな私のことを知ることもなく、ただ眠りについていて満面の笑みでゲームの話をしていた彼女のことを思い出す。

労働八号の起動イベントでラムザの命令でムスタディオをやったときは大笑いしたそうさ。それはないだろう我が友よ。

他にも色んな話をした。ラムザはモテるタイプではなくて、人徳で皆を引っ張っていくタイプだろうと言えば、じゃあ女性陣を見てラムザは誰を選ぶのかなーとか。それは邪推——もとい、彼のみぞ知るというものだろう。

雷神シドを見ては「うわっ……シドさんの全剣技、強すぎ……？」とか言いながら使うのを縛ったりとか。

他には、他には。

くっ、と不意に涙がこぼれた。顔に赤みが差し、感情の波が体内を昇ってくるような感覚を覚える。

と。

コンコンと、扉が叩かれてカラリと開いた。一声くらいかけてくれないのに。

「加室さん、まだいらしたのね」

看護師の女性が誠実な、それでもどこか面倒そうな声音で言う。そりやそうだろう。毎日のように面会に来るなんて、ご家族の方くらいだ。それならそれで家族の心情を察せようが、いちクラスメイ卜の私のご家族そっちのけで率先してやってくるものだから少しは気を遣えという感情が見て取れた。

「もう今日の面会時間もそろそろ終わりよ。帰りの支度をして、忘れ物のないようにね」

「すみません。〴〵迷惑をお掛けします」

まあそんな私はちっとも迷惑をかけているつもりはないのだが。

とりあえず上辺だけ、ペコリと頭を下げた。

ごめんね、ゆかり。また来るよ。

病院から家までの距離は歩いて約40分。遠いようでそこそこ近い距離というのが私の認識だ。国道沿いの道を外れて住宅街に入ると、途端に閑静な景観となる。

家に帰った私は適当に、今日の晩御飯はいらないとだけ母親に告げて二階の自室に鞆を仕舞いに上がっていった。

私から見てもできた母親で、「あらそう」の一言で片付けに入るのだ。まあ多分、明日の弁当のおかずになることだろう。

風呂に入るのも億劫で、シャワーだけ浴びた。火照った体はいい具合に眠気を訴えてきている。

パジャマに着替えて、自室のベッドにぼふっと体を埋める。

——眠い。

疲れているのだろうか。猛烈な眠気が体を支配していた。指一本動かすのにも相当な気力を要するほどの。

気力を振り絞って布団の中に潜り込む。時計は21時を差していた。

なんだか今夜は夢を見そうだ。

吉夢か、悪夢か。それも、相当に長い夢を。

私は目をつむり、溺れるような夢の泉の奥底へと沈んでいった。

プロローグ 《神崎タクマ》

side：神崎かんざきタクマ

オレは神崎タクマ。高校二年生。17歳。

慎重は170cm台で少し高め。

好きなものは才媛才女の無敵な女子とゲーム。嫌いなものは勉強一般。

友人の数は、あつげらかんとした素直で地が阿呆な態度に愛嬌があるらしく、そのおかげかまあ多い方だろう。

部活は、まあゲームが趣味というありがちなインドアではなく、体育会系のバスケットボール部に所属している。だが趣味の方が大事なんで、たまに練習の球突きに来るくらいで、半分幽霊部員。

そして今日も今日とて、オレは学校にPSPを持ち込んで、放課後のゲームに勤しんでいましたとき。

「おまえ、まだそれやってんのかよ」

級友の一人が、机に顎を乗せてゲームに没頭しているオレの頭上から声をかけてきた。

「おまえそれ何週目だよ。一年の頃から見てるけど、二年の今までそのゲーム以外やってんの見たことねえぞ」

「うるせえな、ほっとけよ。奥が深いんだよ奥が」

イヤホンを片方だけ外し、そいつに反論する。

オレがやってるのは『ファイナルファンタジータクティクス』という、オレが生まれるより前に販売されたゲームだ。

現スクウェア・エニックス、旧スクウェアの黎明期を代表するファイナルファンタジーシリーズのシミュレーションRPG版とでもいえば良いか。

基本的にレベルを上げて物理で殴れば勝てるゲームなのだが、それにジョブチェンジシステムが絡み合うと一気に奥が深くなる。

見習い戦士をマスターさせてナイト一本に縛るもよし。竜騎士にして槍を持たせたモンクを育てるもよし。火力一辺倒で二刀流格闘の筋肉忍者を作るもよし。

ちなみにオレはアグリアス姐さんやラファお嬢さん、メリアドール姐さんといった女性固有キャラが好みなので彼女らが仲間になつたら率先して育てることにしている。

アグリアス姐さんは、聖剣技が強いがホーリーナイトというジョブ自体が負け組一步手前なので、無駄にレベルを上げないようにしながら徐々にナイト系の拳骨げんこつが強いジョブにシフトするように育てていく。うまく『銃装備可能』のサポートアビリティを覚えたらそれを中心に、物理系アタッカーを選択するように仕向けていく。ちなみに、時魔道士というジョブには『テレポ』という超強力なムーブアビリティがあるのだが、そこまで聖剣技一本で魔道士ジョブをこなしていくのはやや重たい。なので若干妥協して、竜騎士の『高低差無視』を覚えさせて縦横無尽に聖剣技を練り出す忍者真つ青な軽業聖騎士の出来上がりだ。

ラファお嬢さんは固有ジョブが天道士という、魔力の高いまさに魔道士が天職というキャラだ。天道士というジョブの攻撃性能自体はかなり微妙で、天道士一本で育てていくとかなり辛くなる。なのでさつさと別の魔道士系ジョブにジョブチェンジするのがオレのおすすめだ。ちなみに白魔道士経由で話術士になり、サポートアビリティの『銃装備可能』という文字通り銃が装備可能になると、一気に攻撃性が増す。白魔道士は攻撃魔法のホーリー一本で育て、陰陽士は適当なアビリティを選びながら話術士を目指す。こうして『銃装備可能』を覚えたら今度は黒魔道士ルートに進むのがナイスチョイスだ。さすがに銃一本で攻撃するのはしんどい。なので黒魔道士になつてから本番だ。黒魔道士の間はブリザラ、サンダラ、トード辺りを覚えてから時魔道士へ。そこで無敵ムーブアビリティ『テレポ』を習得。距離も高低差も無視したあらゆる角度から銃や魔法で攻撃ができる万能魔道士の完成だ。

メリアドール姐さんは——なんていうか、固有ジョブアビリティがまったくシステムと噛み合っていない。モンスターも多く、メンテナンスをマスクデータに持つ敵相手には迂闊なほど手が出ない。そう、彼女の固有アビリティ『剛剣』は武器防具を破壊する、字面では強力

なアビリティなのだが、そもそも武具を装備していないモンスターにはなぜかダメージを与えられず、メンテナンス持ちは装備を壊されたり盗まれたりする危険性を完全無視する敵が持つっていると厄介なアビリティだ。そのおかげで『剛剣』の存在意義がかなり霞む。というわけで、アビリティには期待できないものの、アタッカーとしての素質は抜きん出たものがあり、いつそのことナイトやモンク、竜騎士や忍者を目指してみるといっそのはいかがだろうか。素の物理上昇率が高いジョブになれば、周囲が霞んで見えるほど立派なファイターに大変身だ。特にモンクや忍者と相性が良く、モンクの格闘と忍者の二刀流で頂点を狙える。それなら他のモブキャラでもいいんじゃないかって？ 大丈夫、愛があればなんでもできる。

そうそう忘れるところだった。

ドラグナー、レーゼ。テンプルナイト、ベイオウーフさんの嫁さんだ。ハッキリ言って彼女は基礎能力が他より二歩も三歩も抜きん出ている。ドラグナー一本で縛っても充分にやっていけるのだ。戦士系にするにも魔道士系にするにも最初のドラグナーのジョブアビリティ『ドラゴン』一本で育ってしまう。ハッキリ言って育ててもあんまり達成感がない。まあ物理も魔法も得意だから、話術士の話術とか侍の『放つ』を有意義に使える貴重なキャラクターといえそうなのだが。

と、これだけだとオレのおしゃべりだけで話が終わってしまう。

「ゲームもほどほどにしとけよ。生徒指導に見つかったらただじゃ済まねえぞ」

ふん、オレがそんなハマこくかよ。

さっさとオレから視線を外して教室を出ていく級友。

さてでは続きを、と思った直後。

「ん？」

PSPの画面がチラチラと白く、だが鋭く光ったような気がした。もしやPSPの寿命切れ？ おいおい勘弁してくれよ。

などと暢気のんきに構えていたオレを無視して、PSPが猛烈な光を発した。故障ではない。

「なんだなんだ」

真っ白な光がPSPの画面から教室全体を覆いこむ。

オレはその爆心地から逃れることもできず、体が吸い込まれるような感覚を覚えながら、ゲームの画面に強制的に飛び込まされていた。

「なんだなんだなんだーッ!?!」

そうして。

光も収まった後。

誰もいなくなった教室で、カタンとPSPが床に落ちる音だけが響いた。

獅子戦争《アラズラム・J・D》

私はイヴァリースの中世史を研究しているアラズラムと申す者……

貴君は”獅子戦争”をご存じかな？

かつて、イヴァリースを二分して争われた後継者戦争は一人の無名の若者、デイリータという名の若き英雄の登場によって幕を閉じたと言われて……

ここで暮らす者ならば誰もが知っている英雄譚だ。

しかし、我々は知っている。

目に見えるものだけが”真実”ではないことを。

ここに四人の若者がいる。

一人は名も名誉も持たない使用人。

一人はガリオンヌの地方貴族の栄達の道から姿を消した騎士。

一人は王都に仕える騎士ながら闇へと消えた若者。

そして、一人は当時、騎士たちの棟梁として名高い名門ベオルプ家の末弟。

彼らが歴史の表舞台で活躍したという記録はない……

しかし、昨年公開された（長年、教会の手によって隠匿されていた）”デュライ白書”によればこの名も無き若者こそが真の英雄だという……

いやいや、教会によればこの若者は神を冒瀆し国家の秩序を乱した元凶そのものだとか……

どちらが”真実”なのか？

さあ、私と共に”真実”を探求する旅へと出かけよう。

side：オヴェリア・アトカーシャ

オーボンヌ修道院の礼拝堂。

私はそこで静かに祈りを捧げる。

「……我ら罪深きイヴァリースの子らが神々の御力により救われんことを」

間を置いて、私の声を追うように護衛の騎士——アグリアスが口を開いた。

「さ、出発いたしますよ、オヴェリア様」

「もう少し待つて、アグリアス……」

「すでに護衛隊が到着しているのです」

アグリアスが忠言する。

そこにしずしずと寄って、私に話しかける神父——シモン先生。

「姫様、アグリアス殿を困らせてはなりません。さ、お急ぎを……」

シモン先生の言葉の後を追って、修道院の玄関が乱暴に開かれる音がした。

「まだかよ！ もう小一時間にもなるんだぞ！」

乱暴な声からアグリアスが私を庇うように声を荒らげる。

「無礼であろう、ガフガリオン殿。王女の御前ぞ」

静かな礼拝堂が再び沈黙に包まれる。

それに耐えかねたのか、ガフガリオンと呼ばれた剣士が敬礼したようだ。

「これでいいかい、アグリアスさんよ」

礼儀上の敬礼はしても、その言葉は粗野な口調だった。

「……こちらとしては一刻を争うんだ」

「誇り高き北天騎士団にも貴公のように無礼な輩がいるのだな」

ガフガリオンと呼ばれた剣士に、アグリアスは冷や水を浴びせるような冷たい声音で返す。

「辺境の護衛隊長殿には十分すぎるほど紳士的なつもりだがね……」

その通りだと、思う。

私は静かに、そんな私を護衛してくれる剣士の言葉は頼もしく感じた。

「それに、オレたちは北天騎士団に雇われた傭兵だ。あんたに礼をつくす義理はないんだ」

「なんだと、無礼な口を！」

アグリアスが激昂する。

私は静かに立ち上がった。

「わかりました。参りましょう」

礼拝堂から修道院の玄関へと向かい、歩みを進める私にシモン先生が枯れた声で私に呟く。

「どうかご無事で」

「シモン先生も」

別れの挨拶と共に、護衛隊と礼拝堂を出ようとしたところを。

修道院の扉がガタガタと乱暴に開かれた。そこから矢傷を負った男の騎士が入ってくる。

「アグリアス様……て、敵がッ！」

アグリアスはそれを聞くなり、修道院の玄関から駆け出す。

シモン先生が男の騎士に向けて一喝した。

「ゴルターナ公の手の者か!？」

黒い鎧兜の剣士——ガフガリオンがニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「……ま、こうでなければ金は稼げんからな」

その相貌を崩すことなく、ガフガリオンが傍に侍っている剣士に尋ねる。

「なんだ、ラムザ、おまえも文句あるのか……?」

ラムザと呼ばれた剣士が静かに反論した。

「……僕はもう騎士団の一員じゃない。あなたと同じ傭兵の一人だ」
ガフガリオンはチツと舌打ちして。

「……そうだったな。よし、いくぞッ！」

そんなやり取りをして、四人の剣士が修道院の外へと駆け出していった。

「神よ……」

私はその場で、再び神に祈りを捧げた。

side：ラムザ・ベオルブ

雷が鳴り響く大雨のさなか。

修道院を背に、敵の陣容を見て取ったアグリアスさんが唾然とした表情で呟くのが聞こえる。

「黒獅子の紋章だと……!? ばかな……! ゴルターナ公はいつたい何を考えているのだ!」

黒獅子の紋章、イヴァリースの北端、ゼルテニアの精鋭が所属する、騎士団の中でも生え抜きの騎士——南天騎士団の証だった。

「ここまでして、戦争を起こしたいのかッ!!」

アグリアスさんが怒りのままに声を荒げる。

そんな彼女を目に、南天騎士団のリーダーらしき騎士が勧告する。

「その女ッ! 無駄な抵抗はやめておけ! おとなしく王女を渡すんだ!」

騎士が恫喝する。だが果たして王女誘拐を完遂した後、僕たちを生かして帰すかどうか……

「さもなくば、その奇麗な顔に傷がつくことになるぞッ!」

恫喝を続ける騎士に向かって、ガフガリオンが余裕綽々として返す。

「フン、真正面から攻めてくるとはな。ゴルトーナ軍も能無しばかりだぜ!」

アグリアスさんが闘志を高め、ガフガリオンを牽制する。

「ならば、ここは我々だけに任せておくのだな!」

「それでは金が稼げんのだよ!」

言い合いながら、共に剣を抜く二人。僕たちも負けてはいられない

い。二人に倣^{なら}つて剣を抜いた。

「ラッド、ラムザ、クレスティア！ オレについてこいッ!!」

「いいか、一人残らず殺るぞッ！ 生きて奴らを帰すなッ！」

ガフガリオンが僕たち傭兵団に一喝する。それを留めたのはアグリアスさんだった。

「何を言うか！ 奴らを殺す必要はないッ！」

アグリアスさんが一喝する。

「ここで奴らを殺してしまつてはまさにゴルターナ公の思うつぼ！ 追いつき返すだけでいいッ！」

アグリアスさんの言うことも最もだ。だが彼らはオヴェリア王女の身柄を確保するためならどんな手段も躊躇^{ためら}うまい。

追いつき返すだけで諦めるような連中なら、そもそもここには来ないだろう。

「そんな器用なマネができるもんかッ！」

ガフガリオンの言う通りだ。悔しいがここは後顧の憂いを断つため、彼らを戦闘不能、もしくは倒すしかない。

「アグリアス様！ オレも戦線復帰いたします！」

「クラウド！ 傷を負ったおまえは足手まといだ！ ここは私たちに任せておけ！」

よろめきながらも気丈に振る舞うクラウドさんを、アグリアスさんが制止する。

「そうですよ、無茶しないでくださいね。クラウドさん。ここは戦闘のプロにお任せあれ」

クレスティアも軽口で彼に応ずる。

「ちいッ……い！ くそつたれ！」

矢傷を受けたせいなのか、はたまた戦闘に参加できないからなのか、クラウドさんが口汚く罵^{ののし}った。

だが、戦況は圧倒的にこちらが優勢だ。ガフガリオンとアグリアスさんの剣技が次々と敵を屠^{ほぶ}っていく。

僕やクレスティアができるのは彼らが討ち漏らした敵を始末するだけ。

しかし、敵の動きが妙だ。特攻するでも玉砕するでもなく、ただいたずらに時間を稼いでいるかのような。

敵軍を殲滅したとき、それは起こった。

「離しなさいッ！」

オヴェリア様の悲鳴が聞こえた。

正面は囷、本命は密かに修道院の裏から潜入していたのだ。

「しまった!!」

アグリアスさんが礼拝堂に飛び込み、いち早く裏門に向かった。

「こつちへ来るんだッ！ おとなしくしないかッ!!」

「誰が貴方の言いなりに……!!」

僕とクレスティア、クラウドさんも声のした方へと駆けていく。

「うるさいお姫さまだ」

オヴェリア様が気絶させられたのか、抵抗の音が聞こえなくなつた。

そこにアグリアスさんが駆け付ける。

「ま、待てッ!!」

「悪いな……恨むなら自分か神様にしてくれ」

気絶したオヴェリア様をチョコボに乗せたゴルターナ軍の騎士が修道院の裏手を走り去っていく。

同時に、彼はアグリアスさんとクラウドさん、クレスティアを見回して。

最後に、僕に眼を合わせた。

「……なんてことだ」

アグリアスさんが屈み込んで濡れた土に手を付き、泥が跳ねるのもかまわず地面を殴り付ける。

その間、僕はまったく別の事を考えていた。

「……ディリーター？」

よく見知った顔、どころではない。

「生きていたのか、デイリーター？ ……でも、どうしておまえがゴルターナ軍にいるんだ……？」

確かにあの姿はデイリーターだった。覚えていないはずがない。だけどもまた、生きていないはずがないと思っていた。”あの事件”から一年も経って、何故、今さら……？」

「どうして……？」

僕の疑問に答えるように、雷が一つ鳴った。答えは出なかった。

序章 《クレステイア・アルヴァン》

side:クレステイア・アルヴァン

はっ、はっ。

気付けば私は走っていました。

岩肌が覗く平原をあてもなく、です。

でも気付いたら走ってたっつてどういう状況なんですかね。

先頭を行く金髪の少年と、ロングのブロンドを揺らしながら全力疾走している二人について、私は走っていました。

とりあえず今わかることは。

殺気に追われている。止まれば死ぬ。

頭に刻み込まれたイメージでしょうか。

そのイメージの中では、大勢の人が死んでいました。

マンダリア平原で一時休憩をとっていた私たちを盗賊団が強襲したのです。

そうしてエルムドア侯爵が拉致され、私たちはそれをガリオンヌに知らせるために逃げているところ――。

おや？ 今、何か変なこと考えていませんでしたか私。

刹那、チョコボに乗った剣士が私の後ろから追い抜き、目の前に立ち塞がりました。

え、これってちよつと大ピンチなんじゃ。

先頭を行くロングブロンドの女騎士さんが剣を抜きます。

「貴公も騎士であるなら名を名乗れ！」

いやいやお姉さん。名前なんて聞いてる場合じゃないですよ。

目の前の剣士が無言のまま、剣を振り上げます。聞く耳持たない様子。

一合二合と剣を合わせますが、女騎士さんの方がだいぶ苦戦しています。走り疲れたところにこの奇襲。馬上からの攻撃をなんとかいなししている女騎士さん。でも結構ジリ貧っばい。

なんとか私でも力になれることはないのでしょうか。
前方を走るアルガス君が私に振り向き、怒声を飛ばします。

あれ？ また何か変なこと考えてたような。

「何をしている！ オレたちは侯爵様誘拐の件をガリオンヌに伝えな
けりやならないんだぞ！ 突っ立ってる場合か!!」

ええ!? でもそれじゃ、目の前で切ったはったを始めた騎士のお姉
さんを見殺しにする羽目になりますよ!?

アルガス君が速度を落とし、私の前に着いたところで。

ゴツ!!

問答無用で私の頬を殴り付けました。

「とつとと来い！ さもなくば貴様もその女と同じ、しんがり殿にして置いて
いってやろうか!!」

アルガス君、口角泡を飛ばして私の胸倉を掴みます。

と。

私たちが同士討ちしている間に、無情にもチョコボに乗った男が騎
士のお姉さんの胸板をその剣で貫き通してしまいました。うわ、痛そ
うー。

ずるりと剣が彼女から引き抜かれます。ぐらりと体を落とす騎士
のお姉さんに向かって、男が口を開きました。

「名乗れと言ったな、護衛の女。オレはギユスタヴ・マルゲリフ。骸旅
団の騎士だ。……もう聞こえていないか」

ギユスタヴと名乗った男が血で塗れた剣を振り抜き、逃げ遅れた私
たちに視線を向けます。怖い。あれは本物の殺人者の眼だ……

周囲に散らばる盗賊団に、彼は指示を飛ばします。

「残った数人でせいづらを片付けておけ。オレは本隊に戻って侯爵を
運ぶ」

ロングソードやダガーで武装した盗賊が、一斉に私たちに下品な目
を向けました。

アルガス君が私に命令を下します。

「さっさと来い!! それ以上そこで突っ立ってるつもりなら、貴様を野盗の餌にしてやる!!」

言うや否や、アルガス君は平原を真っ直ぐに走っていきました。

さすがの私も状況についていけないままですが、その後を追います。やっぱりまだ死にたくはないですからね。

走っている間にも、私は私の今の状況が一体どういうことなのか、無理矢理にも思い出そうとします。

私、確か学校の放課後の帰り道、信号無視してきたトラックに撥ねられたんですね。それで一命を取り留めたのか、死んじやったのかはともかくとして。

気付いたら今はこうして時代錯誤な格好をした盗賊団に襲われて逃げている……いくら何でも状況に無理がありますね。トラックに撥ねられたら野盗から逃げました、だなんて。

でもわかることもあります。

私は侯爵様のいち使用人として、侯爵様の護衛の任に就いておりました。ランベリー領からガリオンヌ領へのお供の一人として。

そこを強襲した骸旅団と呼ばれる盗賊団。侯爵様はすでに敵の手中にあり。私たちは援軍を求めてガリオンヌへ逃走する生き残り。

南天騎士団から出向した騎士のお姉さん。彼女は残念ながら、私の目の前で、骸旅団の手にかかって今まさに絶命したところでした。こんな私たちのために命を張ってくれたことにいくら感謝してもしきれません。

ここまで来て、私はようやく自分のポジションを把握しました。

私は今! 憧れの『ファイナルファンタジータクティクス』の世界にいる!!

状況は最悪ですけど、私は心の中で密かに「ひやつほー! 生きてて良かった! 死んでるかもしれないけど!」と雄叫びを上げておりました。

さてさて、歓喜の舞を踊りたいところですが、ここで暢気に踊ったら軽く死ねますね。喜ぶのは後にしましょう。

アルガス君の姿を目に止めながら、周囲にも目を凝らします。

敵勢は盗賊が数人、私たちを取り囲むように走り寄ってきます。どうも全速力じゃありませんね。追い詰めてゆつくりと始末すればいい、という腹でしょうか。

で、全速力で逃げるアルガス君。残念ながらそんな彼を嘲笑しながら盗賊たちは徐々ににじり寄ってきてくる模様。

私も全速力でアルガス君を追います。なぜなら……

え……？

なぜなら私、榎宮ゆかりは、アルガス君の使用人『クレスティア・アルヴァン』だから。

え、ちよ何その設定。

やっぱり私、ここでアルガス君の盾になって死んじやうんですか？やだー。

そしてとうとう、なるようになるが如く、私たちは平原の岩肌に追い詰められて囲い込まれてしまいました。

私は手にしたボウガン（道具袋に入っていました）を構えながら、役にも立たない牽制をします。アルガス君は私の後ろで、存分に私を盾に使っています。

いくら暢気な私でも、ここで恐怖を感じないほど愚かではありません。私たちはこのままここで儂く命を散らしてしまうのでしょうか。

そこへ。

「……………」

盗賊の一人が明後日の方に顔を向けて、私も倣ってそちらに視線を移します。

「しまった、北天騎士団のやつらだッ！」

死中に活を、というか不幸中の幸いですね。この場面で、ということとは……………！

私の物語は、また少し後に始まります。

序章《キラ・シルベント》

side:キラ・シルベント

「ん……うーん……」

深い眠りから目を覚ました私は、体を起こしてうーんと背筋を伸ばした。今日も快眠をとれたようだ。善哉善哉。

ベッドを降りてひとつ欠伸あくびをする。私は当たり前のように室内のクローゼットを開き、当たり前前のようにその中の服に手をかけた。

取り出した服はベッドに放り投げ、洗面所に張ってあった水をすくい、顔を洗う。髪を整えようと櫛くしを手に取り、鏡に映る自分の顔を見て。

「……誰？」

腰の手前まで届きそうなほど長い金髪と、中性的な顔立ちの、目つきがちよつと悪いくらいでいわゆる美少女といっても差し支えないだろう。

来ている服を見やる。昨日眠りについたときのパジャマではない。ネグリジェとパンツという下着だけの格好だ。途端に羞恥心が湧いてきた。

改めて部屋を眺め見る。木製のベッドに木製のクローゼット。花瓶には一刺しの薔薇が飾られていて、微かに開いた窓から流れるそよ風に揺られていた。

窓、と来れば狼藉者の侵入口の定番だが、外には植木が太陽を覆い隠すくらい植えられていて人が通る隙間もない。

とりあえず取り出した服に着替えてみたが、なんだか微妙に時代錯誤な衣装だ。質感もゴワゴワしていてあまり着やすいとは言えない。しかしそれしか着るものがないのでそこところは我慢しておく。

状況を整理してみる。

昨夜、私——加室美月は自宅で眠りについた。随分眠たかったのを覚えている。なら今見ている現実には夢なのだろうか。

試しに頬をつねったりパシンと叩いたりしてみる。痛い。

空想ではない。現実の痛みそのものだ。

それではここは一体どこ、何の現実なのだろうか。そう考えると、清流のごとく知識が静かに脳裏を駆け巡る。

ここは魔法都市ガリランドの王立士官アカデミー。私はその生徒だ。

それだけで私は事の次第を理解した。

ここは『ファイナルファンタジータクティクス』の世界だ。

ファンタジーの世界！　これだけで私は興奮を抑えられなかった。

何の因果か私はゲームの世界に入り込んでしまったのだ！

早速このことをゆかりに伝え——あ、帰る方法がわからない。それに、ゆかりはまだ意識不明で目を覚まさない。

ゆかりのことは気にかかるが、ならばここは観光といこうじゃないか。この世界で起こることを私なりに見届けてみよう。それが私の、ブレイブストーリーの処し方だ。そしていずれ、目を覚ますだろうゆかりにこのことを話してやるんだ。いや、眠ったままでもいい。ゆかりが喚起するほど自慢してやろう。

それにはまず、自分のポジションを改めなくてはなるまい。

自分の持つているゲーム知識と、部屋の中の書類の山を総ざらいして——と、そのとき。

コンコン。

部屋の扉がノックする音が聞こえた。

「開いてるよ、どうぞ」

がちやり。

「お邪魔するよ、キラ」

「相変わらず生活感のない部屋だな。家主の性格が察せられる」

私は不意の闖入者に、唾然とした。

金髪を後ろで縛って垂らしている青い衣装の少年と、簡易な鎧を身に付けたおでこを出したヘアスタイルが印象的な少年。

そう。この『ファイナルファンタジータクティクス』の主人公たちだった。

そしてキラと呼ばれた私は、この世界の私の名前を思い出した。

『キラ・シルベント』

「ここ王立士官アカデミーにおける、彼らの親友だった。

「また帝王学はデイリータの一人勝ちだったね」

「ラムザ、おまえは愚直すぎるんだよ。もう少し周囲に目を向けた方がいい」

アカデミーの試験で、デイリータはラムザをそう評した。

「大体、おまえこそ軍事学はトップじゃないか。一軍の将を担うことこそがおまえの強さだろう」

「そのところは油断しないさ。将として、周囲に被害を出さないためにも戦う術は学^{すべ}ぶべきだよ」

私はそんな二人を見ながら、改めて二人の強さをまざまざと見せつけられた気分だ。

確かにラムザは強い。強いがそれは匹夫の勇だということにまだ気が付いていない。それをデイリータはもどかしく思っているのだろう。

そして、ゲームで見続けていたがデイリータは相当に目端が利く。名門の片腕たる身分。それを捨ててまで英雄王と呼ばれるほどの立場までのし上がった手腕は感嘆するしかない。

この二人が噛み合えば、ラムザとデイリータも、そしてオヴェリアも救われたのだろうかと思う。

ラムザも異端者でさえなければ、デイリータと共に行く道もあったかもしれない。

不意にデイリータが私に眼を配らせた。

「で、影の首席のキラ・シルベントさんはオレたちをどう評価するんだ？」

そこで私に振るか。

自慢じゃないが、私には学問全般に対して滅法強い。トップには立てないものの、その二番手、三番手に食い込むというチートを与えられている。

そのせいか、アカデミーでは“影の首席”などと呼ばれる始末だ。

「きみたちの評に異議はないよ。ラムザは愚直に過ぎ、デイリータは正面からの強力な戦力を相手にするのが弱い。その辺を改善していけばひとかどの英雄になれる器があるさ」

「おまえの評を聞くと嫌味にしか聞こえないぜ」

おっと、それは失礼。

「二人とも、落ち着きなよ。キラこそ成績は充分良いのに、授業態度は最悪だってダーラボン教官のお叱りを受けているじゃないか」

「それは授業が退屈なのが良くないんだよ。あの教官の話は子守唄だ。眠くなるなっていう方が難しいんだよ」

あははと三人で笑い合う。

どうやら私の友人はこの二人だけらしい。少しだけ周囲に探りを入れてはみたが、どこか遠巻きに見られているような気がする。腫れ物に触る、といった表現は適当ではないが、遠慮がちに高嶺の花を見るようなそんな気配だ。

成績が良い事と、名門と名高いラムザ・ベオルブの取り巻きであるということが後押ししているんだろうな。

人気者は辛いものだ。ふっ。

などと考えていると。

「あのお〜」

どこか伏見めいた、間延びした声が横から聞こえてきた。

「ラムザさん、今から講堂に集合ですって。何やら北天騎士団の騎士様からお話があるとか」

名門の気配に圧倒されているんだろうか。その生徒は少しおどおどしながら用件を伝えてきた。

用はそれだけだった。

「それじゃ、他の生徒にも伝えなくちゃいけないので、よろしくお願ひしますね」

「ああ、わかったよ。ありがとう」

ラムザは朗らかな笑みを浮かべて女生徒を見送った。

こんな優しそうな顔立ちで、めっぽう強いのだから始末におけない。

「なんだろうな。北天騎士団が直々に生徒に話だなんて」

「そう言うデイリータはすでに察しがついているんじゃないのかい？」

「おまえにはラムザと違って心の中を見透かされているようで、なんだか怖いぜ」

ラムザはキョトンとした顔で。

「どういうことだ？」

「まあ、行ってみればわかるってことさ」

ラムザの問いには答えず、デイリータはそそくさと講堂に向かって歩いていった。

「私たちもその後を追う。」

私こと加室美月——いや、キラ・シルベントの物語はすぐそこから始まることになる。

序章《クラウス・マツケンロー》

side：クラウス・マツケンロー

王都ルザリア——その王宮の一角。

オレはそのさらに隅っこで座りながら、木剣で打たれた箇所を濡れたタオルで冷やしながら顔をしかめていた。

「いちいち……」

目の前ではアグリアス隊長が直々に近衛騎士団の訓練を行おこなっていた。隊長として忙しい身分でありながら、こうして先んじてオレたちの訓練に精を出してくれるのはありがたい。彼女にとっても、近衛騎士団の実力がどの程度かどのくらいなのかを常々測るためにそうしているのだろうが。

しかし、いざ目の前に対峙してみると実力が出せない気がする。アグリアスさんはいくら実力があろうと絶世の美女だし、剣を構えたその姿は凛としていてまるで美しい彫像のよう。なんていうか、負けるのが分かっているのに必要以上に傷を付けないようついつい手を抜いてしまうのだ。それが隊長に対する侮辱であるのは当然なんだが。

「よし、訓練はここまでー」

アグリアスさんの声が凛と響き渡る。

訓練を受けた他の皆はしっかりと整列し、訓練で疲れた体力気力を振り絞ってアグリアスさんの前に立っている。オレだけがよろよろとみつともなくその列の隅に立ち、せいぜいと呼吸を荒げていた。

「諸君らの実力は直に感じ取った。これからも互いに切磋琢磨し、王都の近衛騎士にふさわしい力を身に付けるように！」

アグリアスさんの発破に従い、近衛騎士たちが手を額に掲げ、敬礼の意を示す。オレもヘロヘロと、皆と同じポーズを取った。

「……ときにクラウス・マツケンロー」

アグリアスさんが不意にオレの名を呼んだ。

「おまえには言いたいことが山ほどある。しばらくここに残るよう
に」

うへえ、またお説教ですか。まあこの体たらくじゃあ仕方ないとも

言えるんですけどね。

「返事は!？」

「は、ははっ!」

アグリアスさんの一喝に、オレは委縮するしかなかった。

オレは『クラウス・マツケンロー』……元は神崎タクマ、17歳。身長は170cmちよつとで平均よりは高い方。

性根はポンコツ。愚直、単純で阿呆。よく言えば素直なところにステータスを割いてしまったのが幸か不幸か、あまり友達に困ったことはない。

まあそんなのが『ファイナルファンタジータクティクス』の世界、その騎士で通用するわけもなく。

要するに、王都の近衛騎士団に配属されているにもかかわらず落第騎士の汚名をかぶっているわけだ。

覚醒当時は「アグリアスさんの部下だぜ、いやっほー!」とか喜んでいただけ、近衛騎士のあれやこれやを実践していくうちにせつかくの喜びもすっかり冷めちまった。

近衛騎士たちがぞろぞろと王宮へと戻る中、オレはひとりアグリアスさんの前で敬礼のポーズをとったまま突っ立っていた。下手なマネをしようものなら何を言われるかわかったもんじゃない。

「……楽にしているぞ、クラウス・マツケンロー」

「はい……」

楽にしている、とか言われても字面通り楽にできるわけもなく、オレは黙ってアグリアスさんのお小言を聞く姿勢になっていた。

そんなオレを見てか、アグリアスさんは「はあ……」と溜息を漏らす。

目の前でシユンと立つオレに、アグリアスさんは木剣を差し出してきた。

「取れ。もう一度だ」

オレは目の前に突き出された木剣を手取る。いなや、アグリアス

さんはもう一方の木剣を構えて戦闘態勢を取った。

「私を殺すつもりで、本気で打ち込んでこい」

え、あ、いや。オレにはそんな胆力ないんですけど。殺すつもりだとか、そもそも女性に向かって凶器を突き付けるなんてマネできるわけが。

言うが早いか、アグリアスさんが動く。

びしりと小手を叩かれたと思えば、手の麻痺が治まる前に袈裟懸けに左肩を打ち据えられる。かと思えば次は横胴。弾かれたと思った瞬間には大上段に木剣を振りかぶり――。

そこまでやられて、オレは必死に木剣を頭上に構えて防御姿勢を取った。が。

アグリアスさんの木剣が、オレの木剣を叩き折ってそのまま頭部をしたたかに打ちのめした。

痛い。痛すぎる！

そこまでやられて、オレは地面に膝を突いて叩かれた頭を抱えた。アグリアスさんの冷たい一言が頭上からかぶせられる。

「今の攻撃でおまえは何回死んでいた？」

そんなの数えてられないですよ。もうすいませんでした、としか言えないくらいにやられっぷりで。

アグリアスさんがふうと息をつく。

「……後で私の執務室へ来い。説教はその後だ」

それだけ言い残して、アグリアスさんも王宮へと戻っていった。

「たはーっ……」

ボコボコにやられてオレは尻もちを突いた。座り込んだ瞬間、木剣で打たれた痛みと疲れがどっと押し寄せてくる。

「大丈夫ですか、クラウスさん。言いたいことがあるならちゃんと言わないと伝わりませんよ」

ちよつと言葉に棘がある女騎士――アリシアさんが冷えたタオルを渡してくれた。傷口に当てるとぞつとするような痛みがぶり返してくる。

「そうですよー。クラウドさんは体格もいいのに、耐久力は野ウサギ並なんですか？ あんな無抵抗にやられるなんて、訓練でもいい加減見て腹立たしく思えてくるってもんです」

こっちは天然毒舌の女騎士——ラヴィアンさん。

二人とも、わざわざオレを待たせてくれたのか。

「勘違いしないでください。もしも貴方がアグリアス様に殴り殺されていたら寝覚めが悪いですから、いざという時のために止めようと思っただけです」

友達甲斐のあるお二人でオレも感無量です。

「まあ、オレが本気出せば一発くらいは……って、いてて。ちよい、ポーションの直塗りは染みるって！ 頼んますからゴシゴシこすらないで！」

「貴方、本気で言ってるんですか？ 貴方の実力でアグリアス様に一撃を当てられるとでも？」

「いやいや、もし当てちゃったら珠のお肌が傷つくかなーとか考えると、なんか体が動かなくなるっていうか」

「馬鹿ですか貴方？ それとも馬鹿を通り越してナルシストなんじゃないですか」

どうやらオレがアグリアスさんを侮ったことを、アリシアさんは怒ったようだった。頬を膨らませて下からオレを睨んでくる。言っちゃ悪いが、ちよつと可愛い。

「はい、これでおしまい」

ラヴィアンさんが傷口の包帯を巻き終えて、ドンと押し出す。だから傷口は痛いって！

「アグリアス様から呼ばれているでしょ。早く行かないとまたお小言が増えちゃうよ？」

それは勘弁。

「ありがとう、二人とも。今度エールでも奢おしるよ」

「私たちは下戸です。良からぬことでも企おこんでるんじゃないですか「ねー」

意外。アリシアさんはともかくラヴィアンさんも飲めないとは。

「そんじや、ちよつと行つてくるわ。あー、気が重いつたらありやしねえ」

やれやれ、と重い腰をよつこらしよつと上げるオレに、アリシアさんがふと微笑んだ気がした。

「……なんだよ」

「いえ、貴方は変わらないのねって思いました。訓練ではあんなですけれどその素直な性質、多分アグリアス様も買っていらっしゃると思いますよ」

「褒めてくれてんのかい？ だったら今度……」

「そういうのはダメです」

「はいはい、ありがとうございます」

ひらひらと手を振りながら、オレも王宮へと戻っていった。

王都ルザリアの絢爛豪華な王宮。さすがにイヴァリースの中心とあつてか、中の華美な内装は元一般庶民のオレを圧倒してくる。

最初、ここに転生したときには調度品のひとつひとつが数万ギルクらいは下らないだろうななどと考え、歩くことも恐れおののいていたものだが、すぐ慣れた。慣れたというよりも馴染んだ、と言った方が正しいのかもしれない。ここではオレは庶民、神崎タクマではなく近衛騎士、クラウス・マッケンローなのだから。

執務室、といえばなんとなく高貴な印象を受けるが、何のことはない。ただの書類整理部屋だ。王宮の端っこにある小さな部屋で、アグリアスさんはそこで、訓練以外の時間は書類整理に追われている。

コンコンと、執務室の扉を叩く。

「クラウス・マッケンローです。参りました」

「入れ」

中から若干不機嫌な声でアグリアスさんの声が返ってきた。やっぱオレのせいだよねコレ。

失礼しまゝすと慄きながら扉を開く。中には書類が積まれたデスクに向かっているアグリアスさんがいた。

「少しキリのいいところまで終わらせる。おまえはそこに座ってくれ」

「はっ……」

やばい。心臓がどつくんどつくんと跳ねているのが分かる。言われるがまま、オレは執務室内のソファに腰掛けた。

しばしの間、沈黙が部屋を支配する。一方でオレの繊細な心のボルテージは上がるばかりだった。

アグリアスさんが席を立つ。紙っぺらを一枚取って、オレの対面のソファに座った。

「おまえに単独任務を与える」

座るや否や、アグリアスさんはオレにそう宣のたまった。

「任務……ですか？」

「ああ、だが公務ではない。全ておまえの判断で行動して構わない」

ガチャッと音を立てて、ソファの間にあるテーブルに袋が置かれる。中身は音から察するに、金貨だろうか。それもかなりの量の。

「少なくとも、路銀も用意した。後はこの書類を持って行け」

くるくると巻いて、きゅつと紐で縛る。路銀の入った袋の隣に、それは置かれた。

「言っておくが、中は見るんじゃないぞ。それはれっきとした機密書類だ」

「これをどこかに届けるのが、オレの任務ですか？」

「言っただろう。全て自分の判断で行動しろと」

「はあ……」

オレの頭はそんなに賢くできていない。よって、アグリアスさんが何を言いたいのかもよく理解できない。

アグリアスさんが居ずまいを正して続けた。

「いいか。これは最後通牒だ」

「最後……通牒？」

なんか、とんでもなく嫌な予感がする。

「先ほど言ったな。言いたいことが山ほどあると。あれはもう無しだ」

厳しい口調で彼女は続ける。

「その書類はガリオンヌの高貴な方々の、いわゆるおまえのマツケンロー家を支援してくださっている重要書類だ。有り体に言えば通行手形だな。それがあればガリオンヌでの自由な行動はある程度保障される」

つー、と冷や汗が流れ落ちる。腹も痛くなってきた。

ちなみにマツケンロー家とは、王家であるアトカーシヤの遠縁の縁戚というやんごとなき身分。オレみたいなアンポンタンが近衛騎士なんてものをやっているのはその影響でもある。

「いいか。おまえはマツケンロー家、ひいては王家に見放されつつある。要はガリオンヌで見聞を広げ、一皮も二皮も剥けて来いということだ。それがダメなら生涯、マツケンローの門を跨がせるつもりはないとのこと。意味は分かるな？」

「は……」

生返事を返しながら、オレの胃腸はぐるぐると回っている。早くトイレに行かせてくれ。

「……私の期待を裏切るな。己の手で道を切り拓け。名誉を大切にしろ」

話はここまでだと、アグリアスさんは打ち切り、再び書類の山が積みまれているデスクに戻っていった。オレは路銀と書類を手に、執務室を退室した。

やばい。

やばいやばいやばい。

このままじゃ家どころか、せつかくの『ファイナルファンタジータクティクス』の世界から見放されちまう。

オレのブレイブストーリー、こんなところで終わらせてたまるか。そう考えると、気分は落ち込んでいく——どこるか、闘志がめきめきと湧いてきた。

こうなったらやってやる。

このオレ、クラウス・マツケンローの底意地を見せてやるぜ！

こうしてオレの戦いが始まるのはもう少し後の話である。

Chapter 1 持たざる者 士官候補生たち

side：ラムザ・ベオルブ

僕たち騎士見習いが国中から集う王立士官アカデミー。それを擁する都市ガリランドはガリオンヌ領のいち都市でありながら、永世中立の立場を貫いていた。

しかし時代はそんな些事に構ってはくれない。

アカデミーの講堂に、北天騎士団の騎士がわざわざ士官候補生を集めて話をするとは、鈍い僕でもきな臭い気配を感じさせた。

講堂のあちこちから話し声が聞こえてくる。

「……昨夜もイグーロス行きむくろりよだんの荷馬車がやられたんだとさ」

「それも、骸旅団むくろりよだんの仕業なのかしら……？」

「それだけじゃない。貴族の邸宅が二、三、物取りの野盗に襲われたって話も出てる」

「もうこのイヴァリースに安心できる場所はないってことね……」

騎士見習いの生徒が口々に国内の不安を宣っている。そのため、騎士、僕たちの役目じゃないか。治安を揺るがす賊徒を討伐するため、僕たちは士官としての訓練を受けているのだ。

生徒たちの話し声をよそに僕はデイリータに話しかける。

「これから何の話が始まるんだろう？ 知らないか、デイリータ？」

「いや……ただ」

「ただ？」

珍しく歯切れの悪い親友の答えを促す。

「ああ、ある程度の想像はつくが……」

「というと？」

「ラーグ公がこの町へおいでになる」

「ラーグ公が……？ 何故？」

少しばかりの驚きを交えて僕は問い返した。

ラーグ公。公爵の位を持つガリオンヌの領主だ。そんなやんごと

なき御方がわざわざこの町にいらっしやるとは。

「ラーグ公だけじゃない。ランベリーの領主、エルムドア侯爵もだ」
驚きが倍加する。ラーグ公にエルムドア侯爵。お二人とも、国家の重臣を上げてても上から数えた方が早い傑物だ。

デイリータの耳の早さに感嘆しながら僕は答え返した。

「それは初耳だ。……公式訪問じゃないな」

デイリータは腕を組み直して、肩をすくめるように続ける。

「今のイヴアリースはどこもかしこも”危険地帯”ばかりだ」

「先の五十年戦争から、急激に野盗や強盗たち犯罪者が増えだしたからね」

「騎士団は八面六臂の大活躍だが、実際には人手が足りない……」

「で、僕たち士官候補生ってわけか」

そこに、僕たちの話の横から割り込んでくるはずっぱな少女の声が聞こえた。

「さてそこで問題。ラーグ公とエルムドア侯爵。お偉い方二名がわざわざお出ましになるほどの真意とは一体どういうことか。はい、制限時間30秒」

急に問題提起してきたのはキラ。アカデミーのほとんどの科目でベスト3をキープしている将来有望な女生徒で、僕たちのもう一人の親友だ。

僕は狼狽する。

「は、早すぎるよ。えーと……」

「簡単な話だ。ラーグ公とエルムドア侯爵、イヴアリースを代表する二大巨頭が手を結んで盗賊退治の諸手を上げる。そうなると他の地方の重臣たちも我関せずとはいられない。二人を中心に、芋づる式に国中を盗賊退治に巻き込もうって魂胆、だろ？」

キラがパチパチと手を叩く。

「ご名答。さすがはデイリータ。きみには王の才覚があるようだ」

「平民出身の王様か。それも悪くないな」

「デイリータ……それはちよつと不謹慎だよ」

「少しくらい夢見たっていいだろ？ そのときはラムザ、おまえを顎

できき使ってやるよ」

カラカラと、楽しそうにデイリータは笑った。

「一同、整列ッ！」

講堂の入口から大声が聞こえた。ようやく北天騎士団の騎士の話が始まるらしい。

わらわらと散っていた士官候補生たちが講堂の中心を割るように整列する。

そこに、北天騎士団の正装を纏った騎士が、僕たちの中央を通って教壇に立った。

「士官候補生の諸君、任務である！ 諸君らも知っているとは思いますが、昨今、このガリオンヌの地には野蛮極まりない輩どもが急増している」

騎士の言葉を一言一句、頭に刻み込んでいく。僕たちは今、これからのために戦いの準備をしてきたのだ。

「中でも骸旅団は王家に仇なす不忠の者ども。見過ごすことのできぬ盗賊どもだ」

骸旅団。話には聞いたことがある。今、イヴァリースで跋扈ばっこしている盗賊団の中でも頭一つ抜けた一団だと。

「我々北天騎士団は、君命により骸旅団せん滅作戦を開始する。この作戦は大規模な作戦である。北天騎士団に限らず、イグーロス城に駐留するラーグ閣下の近衛騎士団など多くの騎士団が参加する作戦だ」
果たしてどんな命令が下されるのか。僕はともかく、皆が納得できるように不安の少ない作戦だといいたいけど。

「諸君らの任務は後方支援である。具体的には、手薄となるイグーロスへ赴き、警備の任についてもらいたい」

ふう、と表情には出さずに安堵の息をついた。しかし手応えのない命令だな、と不満を感じる気持ちもあった。

僕自身も一端の騎士として骸旅団と戦い、戦功を上げたい。ダイスダグ兄さんやザルバツグ兄さんのような立派な武人に少しでも近づきたい気持ちがあったのだ。

不意にバンと扉が開いた。

外から北天騎士団の女騎士が駆け込み、教壇で弁舌をふるう騎士に何事かを告げ、足早に講堂を立ち去った。皆の視線は女騎士に集中していた。

教壇に立つ騎士が声を張り上げる。

「士官候補生の諸君、装備を固め、剣を手にとるがいい！」

ざわ、と一瞬だけ士官候補生たちが慄いた。

「我々北天騎士団によって撃破された盗賊団の一味がこの町へ逃げ込もうとしているとの連絡を受けた。我々はこれより町に潜入する奴等の掃討を開始する！ 諸君らも同行したまえ！」

ざわりと、場が大きくざわつく。壇上の騎士はそれに構わず、最後に僕たち士官候補生に発破をかけた。

「これはせん滅作戦の前哨戦である！ 以上だ！ ただちに準備にかかれッ!!」

話はこれで終わりとばかりに、騎士は講堂を走り去っていった。

唐突に実戦に放り込まれた士官候補生たちの顔色は様々だった。

初めての戦いに恐れおののく者。大声を上げて自らを鼓舞する者。仲間同士連携しようと互いに助け合うことを提案する者。

その中で、僕たちは。

「盗賊たちも運がなかったな。オレたちがいるこの町に逃げ込んでくるなんて」

デイリータは自信満々にそう言った。

僕はそれを咎める。

「功を焦って返り討ちに遭うなよ、デイリータ」

「そのセリフ、そっくりそのままおまえに返すぜ」

デイリータの言葉を右から左に聞き流しながら、ふとキラに視線を移した。彼女はくつくつと含み笑いを浮かべていた。

「どうしたんだい、キラ。やっぱりきみでも初の実戦は怖いのか？」

「そう見えるかい？ いや、実際には頭が冷えていないかもしれないし、少しパニックになってるのかもしれないけれど」

「けれど？」

僕にはなんとなく彼女が震えているのがわかった。だが恐怖からではない。

「ああ……武者震いというやつかなこれは。今から私たちの物語が始まるんだ」

「？ おかしなことを言うね、きみは」

side：キラ・シルベント

剣を取り、鎧を身に付ける。町中の民衆には盗賊が来ることを告げ、家の中に閉じこもるよう厳命した。

後は敵が町に現れるのを待つだけだ。

盗賊が現れ、私たちの陣容を見るなり先頭を走る盗賊が大声で喚き散らす。

「なんだ、ガキどもじゃねえか！ くくツ、ツイてるぜ！」

盗賊たちが後からぞろぞろと現れ、その誰もがニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている。

「いいか、野郎ども。このガキどもを倒せばいいんだ！ そうすりや逃げる事ができるぞ！ 気にすることあねえ！ 一人残らず殺つちまうぞツ!!」

命を大切にしない者はここまで下劣になれるのか。私の闘志に火が付いた。

「ラムザ、気をつけろ！ むやみに前に突つ込むなよ！」

デイリータがラムザに注意を促す。だが。

「侮るな、デイリータ！ 僕だってベオルブ家の一員だツ!!」

ラムザの声が聞こえたらしい盗賊が、また喚き散らし出す。

「ベオルブ家だ?! あの”ベオルブ”の名を継ぐ者か！ そうか、

おまえたちは士官アカデミーの候補生たちか！ ふんツ、貴族のくそガキどもがツ!!」

「おとなしく投降しろツ！ さもなくば、ここで朽ち果てることになるぞツ!!」

投降は無理だろう。盗み、奪い、殺した報いを受けることはイヴァリースの国法によって定められている。

「おまえたち、ひよつこどもに何ができるといふんだ!」

まあそんな事情に私たちが構う余地などひとつもない。

「おまえたち苦労知らずのガキどもにオレたちを倒せるものかツ!!」

残念ながらそれこそ見当違いだ。訓練を受けた人間が気合いだけのならず者に負ける道理はない。

散らばって寄ってくる盗賊を二人で囲い、一人ずつ千切って滅多打ちにする。古来よりこれに勝る陸の戦術は未だ発明されていない。

まあ長距離弾道ミサイルで町ごと消し飛ばすというなら話は別だが。

「なんでいいようにやられてやがる！ 相手はただのガキどもだぞ

!?!」

「お生憎あいにくさま」

私は喚き散らす盗賊の背後に忍び寄り、背中越しに言い放った。盗賊が驚いた様子で私に振り向く。隙だらけだな。

「貴方たちが言う貴族のくそガキどもはただの盗賊とは練度が違うんだよ」

振り向きざま、袈裟懸けに心臓まで達する斬撃を見舞う。あれだけ喚き散らしていた盗賊が、血を撒き散らしながらどうつとその場に倒れる。

「盗賊などという愚かな行為を何故、続けるんだ……?」

不意にラムザの声が耳に届いた。独り言だったのかもしれない。

「真面目に働いていれば、こんな風に命を失うこともないだろうに……」

私は肩をすくめた。
やれやれ、これだからボンボンの御曹司さんは。

side：ラムザ・ベオルブ

「全員、無事みたいだね」

辺りの盗賊を一掃した僕たちは一旦、町のひらけた一角に集合した。これからの指針を、士官候補生のリーダーとして総括しなければならぬ。

「で、これからどうする？ ラムザ」

デイリータの言葉に、僕は答える。

「士官候補生たちを連れてイグロス城へ行こう。元よりそれが任務だったわけだし、ラーグ公……ダイスターグ兄さんの指示を仰がなければ」

「期待してるぜ、未来のベオルブ家長」

「茶化すなよ。妾腹の僕にその資格はないよ」

僕は兄さんたちとは違う。二人の兄は父の正室の子だが、僕は妾腹の子だ。いずれはダイスターグ兄さんやザルバツグ兄さんが正室を娶って、その子が正式にベオルブの家を継ぐだろう。

僕はベオルブの家訓に従い、己の正義のために戦うだけだ。

「まだ盗賊の残党がいるかもしれない。後のことは北天騎士団に任せ、僕たちはイグロスへ急ごう」

そうして僕たち士官候補生は一路、成都イグロスを目指した。

その途上で、運命の出会いがあるとは露とも知らずに。

父・バルバネスの死

side：ラムザ・ベオルブ

五十年戦争末期、ベオルブ邸にて。

ベッドに横たわるは、武門の棟梁として敬われていた我が父”天騎士バルバネス”。

かつて15万の大軍を率いていた猛者であった彼も、病にて天に召されようとしていた。

「戦況は……どうか……？」

枯れた声で父が呟く。

その声にザルバッグ兄さんが答えた。

「我が北天騎士団の奮迅の働きによりランベリーを奪還いたしました」

胸を張りつつも、言葉の節々に悲しみの感情が見て取れる。

「鷗国軍がゼルテニアから撤退するのも時間の問題でしょう。すべては順調です。ご心配なく」

その後にダイスターグ兄さんが続ける。

「ラナード王子の側近、レナリオ伯に送った密使が戻って参りました」

彼もまた感情を押し殺した声音で答えていた。

「父上のご提案にレナリオ伯も同意するそうです」

「そうか……ならばよい……これで……長き戦いも……終わる……」

枯れ果てた相貌の父を見て、妹のアルマが涙ぐむ。

「お父さま……」

「よいよい……泣くな……娘よ……」

父の今際に惨事損ねていた僕に、ザルバッグ兄さんが苛立ちを募らせる。

「ラムザはどこだ……？　こんなときに……！」

そんな彼をたしなめるように、父はザルバッグ兄さん、そしてダイスターグ兄さんに言付けた。

「ダイスターグ、ザルバッグ……わしの自慢の息子たちよ……ラムザを頼む……。おまえたちとは……腹が違うが……わしの血を分けた

息子だ……」

ちょうどそのとき、部屋のすぐ外の廊下を走る者がいた。僕、ラムザ・ベオルブだ。

荒々しく扉を開く。

「父上ッ!!」

ダイスダーク兄さんがそんな僕を見て。

「……騒々しいぞ」

僕の不作法を咎めるように、静かに呟いた。

「よく来てくれたな……よく……顔をを見せてくれ……」

僕は父が横たわるベッドに近寄り、父の顔を覗き込んだ。

目元はくぼみ、頬はこけ、言葉も弱々しい。

「父上……」

「久しぶりだな……いい面構えになったぞ……」

僕は骨と皮ばかりにしぼんだ父の手を握る。

「学校はどうだ……? 春からは……アカデミーだな……」

父は最後の世間話のように、語り続ける。そして。

「よいか、ラムザ……」

彼は、続ける。

「我がベオルブ家は……代々王家に……仕える武門の棟梁……。騎士の魂は我らと共にある……」

僕への遺言として、その騎士道を僕に告げた。

「ベオルブの名に恥じぬ騎士になれ……。不正を許すな……。人として正しき道を歩め……」

父の厳しい言葉が、一言一句、僕の脳裏に刻み込まれていく。

「おまえはおまえの信じる道を……歩むのだ……。それが……。ベオルブの名が示す真の騎士道だ……」

「はい、父上……」

ふと、父は顔を上に向け滔々と続けた。

「デイリータはいい子だ。身分は違うがおまえの片腕として役に立つ……」

この場にはいない親友デイリータへの期待と慈しみを口にする。

「士官アカデミーへの……編入の手続きをとっておいた……。ふふふ……、学長は目を丸くしていたがな……。おまえに生涯仕える味方となるろう……。仲良くな……。」

「は、はい……。父上……」

僕の言葉を皮切りに、父は僕の手を振り払った。

「アルマを頼んだぞ……」

そう言っつて、父は静かに眼を閉じる。

「兄たちに負けぬ騎士になれよ……。ラムザ……」

その言葉を最期に、父は息を引き取った。

僕は眼を開いた。

ガリランドの郊外。ここまで来るとほとんど家屋も見えなくなり、まばらに伸びた雑草と樹木とが辺りを覆う。

辺りに備え付けられたベンチに座っていたら、いつの間にか眠ってしまったらしい。

「起きたか、ラムザ」

僕の肩越しに、デイリータが背中から顔を覗き込んでいた。

「……夢を見ていた」

「夢？」

「父の……父さんの最期の夢を……」

「そうか……」

言っつて、デイリータは僕の隣に座った。

「オレは両親の夢なんて、滅多に見ないけどな。物心つく前に死んだからかもしれないけど」

「デイリータ？」

「寂しいって思う時もあるっつてことさ。オレにもな」

遠くから「おくい」と間延びした少女の声が聞こえた。

デイリータが立ち上がる。

「そろそろ出発だ。日が落ちる前にはイグーロスへ行くんだろ？」

「ああ、そうだった。すまない」

「キラも呼んでる。早く行こうぜ」

言いながら、デイリータが士官候補生たちに声をかけ始める。

こんな時代だからだろうか。

夢を通して父さんが僕を叱咤激励しに来たのかもしれない。

それ以上は深く考えずに、僕は荷物を整えた。

剣士アルガスとの出会い

side：クレスティア・アルヴァン

エルムドア侯爵が誘拐されて早30分ほど。全力で盗賊たちから逃げる私とアルガス君はマンダリア平原の巨大な石灰岩の前に追いつめられ、生殺与奪の権を奪われてしまいました。

「こいつら、まだ息があるようだぜ。どうする?」

ナイフを手で弄びながら盗賊の一人が相方に話しかけます。

まあ「まだ息がある」っていうのは全力疾走して息が切れかかっているからだけなんですけどね。

「わかりきった質問をするな。侯爵さえ手に入ればいいんだ」

「そうだったな」

盗賊がナイフを片手に、私たちににじり寄ってきます。

「小僧ども、恨むならためえの運命を恨むんだぜ。」

「よ、寄らないでください! 撃ちますよ、ホントですよ!」

必死に木製のボウガンで私は牽制しますが、手はガタガタと震え、引き金を引くどころか狙いを定めることすらおぼつきません。

「へえ、嬢ちゃん。撃てるもんなら撃ってみなよ。そんな粗末なボウガンでオレを殺れるとは思えねえけどなあ」

ごもつとも。モンスターはともかく、人殺しをするのは躊躇してしまふ私の矛盾——というか大馬鹿垂れ。こんなときこそ勇気を出さなければいけないのに……

「……ん?」

「どうした?」

岩場の上に座っていた盗賊の一人が何かに気づき、咄嗟に立ち上がりました。

「しまった、北天騎士団のやつらだッ! ザコに時間をかけ過ぎだッ!」

私たちを標的にしていた盗賊団が一斉にそちらへと視線を集中させます。

マンダリア平原、アルガス君の窮地。もしかしてこれって……!

ガリランドの方角から現れる北天騎士団——いや騎士見習いの一団。その先頭に立つのは……！

「骸旅団の連中か？ 誰かが襲われているようだな……？」

「北天騎士団の名誉を傷つけてはならない！ 彼を助けるのが先決だ！」

キヤー、キヤー！ 来ました来ましたよ！

『ファイナルファンタジータクティクス』の我らが主人公、ラムザ君のご登場です！！

「……援軍か？ た、助かった」

そう思うならいい加減、私の後ろから出てきてくださいよアルガス君。男としてみつともないですよ。

side：キラ・シルベント

どうやら敵は骸旅団の下っ端のようだ。騎士とは程遠い、野盗の群れだ。これなら先のガリランド攻防戦の方が難関だったくらいだね。

しかし、あそこで追い詰められている二人。一人はアルガスとして、アイテム士の少女は何者だ？ ブレイブストーリーにあんなキラクターはいなかったはずだけど……

こそつと私はラムザに耳打ちした。

「ラムザ、彼らのことが心配だ。ここは速攻で敵を片そう。幸い敵の布陣は無造作に広がっているだけで伏兵の気配もない」

ラムザがコクリと頷く。

「大丈夫。意図しない遭遇戦の処し方もアカデミーで習得済みだ。ガリランドでの戦いと同じように動けば問題ない」

「それを聞いて安心したよ。さて、行こうか」

散開している敵に士官候補生たちが強襲をかける。常に二対一に持ち込んで、打ちのめす。ガリランドと同じ戦法であれよあれよと言う間に敵の数は減じていた。

特筆すべきはやはりラムザの武勇だ。彼一人で三人ほどの集団を片付けている。

「畜生ッ！ ガキどもはともかく、北天騎士団の連中なんか構っていられるか！ 撤収だ！ 撤収の合図を出せ!!」

盗賊団の大半が削られて、ようやく自軍の不利を悟ったのか、リーダー格らしき盗賊が撤退命令を出した。

ラムザが剣を納める。

「追わないのか、ラムザ？」

デイリータの言にラムザは首を横に振った。

「その必要はないさ。それより襲われていた二人が心配だ。彼らの元に急ごう」

賛成だ。私も二人の話を聞いてみたいしね。

side:アルガス・サダルファス

盗賊どもを撃退した小僧の集団がオレたちの前に近寄ってくる。

長い金髪を後ろで縛っているこの小僧。こいつが集団のリーダーらしい。

「大丈夫か？」

「なんとかな……。しかし、侯爵様が……」

グツと、ともすれば血が滲み出るほどに拳を握りしめる。逃げるこ
としか出来なかったオレの面目は丸つぶれだ。

「侯爵？ ランベリーの領主、エルムドア侯のことか？」

「ああ、そうだ。おまえらは……？」

「僕らはガリランド士官アカデミーの士官候補生だ」

道理で。

騎士団の連中にしてはガキどもが多いと思った。

「きみの力になれると思うよ。詳しく話を聞かせてくれ」

「オレはアルガス……。ランベリー近衛騎士団の騎士……。だ」

「騎士……。？」

オレは口の中でチツと舌打ちした。

「……いや、騎士見習いさ。なんだよ、おまえらだつて一緒じゃねえか」

精一杯の強がりと共に、オレはこいつらを揶揄する。

こんなボンボンどもにマウントを取られてたまるか。

「僕はラムザ・ベオルブ。この二人は親友のデイリータとキラだ」

「よろしく、アルガス」

オレは眼を見開いて、金髪の小僧を凝視した。女の方——キラが何か言っているがどうでもいい。

「ベオルブつて……。あの北天騎士団のベオルブ家か？ そいつはすごい！ なんてラッキーなんだ、オレは」

「え？」

言うや否や、オレはベオルブの少年、ラムザの手を握りしめた。

「お願いだ。侯爵様を助けるため北天騎士団の力を貸してくれ！」

「どういうことだ？」

どうやらラムザお付きのお目付けらしい茶髪の小僧——デイリータが理由を求めてくる。

「侯爵様はまだ生きています！ やつらに誘拐されたんだ！」

オレは冷静に、パニックを悟られないよう事情を話し始めた。

「早く手を打たないと侯爵様がやつらに殺されちまう！ そうなったら、オレはいい……。？」

オレはラムザの手を握りしめる両手に、さらに力を込めた。

「だから、頼む！ 手を貸してくれ！ お願いだ!!」

「まあ、落ちつけよ。死ぬと決まったわけじゃないだろ？」

デイリータがなだめるように、必死なオレを声で制する。

「骸旅団だって、誘拐したからには何か狙いがあるはずだ。何かの要求があつたかもな」

「それに僕らだけじゃどうしようもないよ」

もつともな定型通りの答えを返してくるラムザ。

「だいたい、エルムドア侯が誘拐されたんだ。イグーロスじゃ今頃、大騒ぎだよ。きつと」

「まずは、イグーロスへ行き報告するのが先決だ」

ラムザとデイリータの言葉で、多少頭が冷えた。渋々ながら、オレは二人に頷く。

「わかった。そうしよう」

「ところで」

話が終わった絶妙なタイミングで、キラとかいう女が話しかけてきた。

「まだそちらのお嬢さんの紹介を受けていないんだけど？ きみが上官なら彼女のことを紹介するのも務めだと思うんだけどね」

もう一度オレは心中でチツと音を立てた。

「コイツはクレスティア。サダルファス家の使用人だ……これでいいか？」

やたらキラキラした眼でラムザとデイリータを話の輪の外から眺めていたクレスティアが、慌ててラムザたちに敬礼する。

「お、お初にお目にかかります。ご紹介にあずかりましたアルガス様の使用人、クレスティア・アルヴァンと申します」

side:クレスティア・アルヴァン

「……ゆかり？」

「はい？」

って、思わず流れで返事しちゃいました。誰だっけこの、キラって

女の人。

「やつぱり、面影がある……！ ゆかり！ 私だよ、美月だよ！」

「つて、え？ ええ!？」

ホントだ！ 金髪ロングで誰だか分からなかったけど、確かに美月ちゃんだ！

「ゆかり！ もう会えないかと思ってた！ 嬉しいよ！」

喜色満面にしながら、私を抱きすくめる美月ちゃん。

「ちよ、ちよつと待って、落ち着いて！ く、苦しいよ」

「あつ、ゴ、ゴメン！」

そう言つてパツと私から離れる美月ちゃん。

改めて周りを見回すと。

アルガス君やラムザ君たち、士官候補生の皆さんが呆気に取られた表情で私たちを見ていました。

慌てて美月ちゃんを取り繕います。

「え、えーと。この子、私の友達なんだ」

「友達？ ガリオン又領とランベリー領の離れた地方同士のか？」

デイリータ君が即座に胡散臭そうな眼で見えます。

「そ、そうなんだ。元々私たちはガリオン又領に住んでね。でも小

さい頃、クレスティアがランベリーの方に引越しちゃって」

「ミツキ、とかユカリとかは？」

「あ、あだ名だよ。そう、あだ名」

「ふーん」

デイリータ君、最初に胡散臭いものを見るような眼は変わりませんでした。あんまり興味はなかったようです。

「ケツ、貴族と平民の友情話かよ。くだらねえ」

「アルガス」

ラムザ君が一言、アルガス君の言葉をたしなめました。

「どうやら二人とも、気心の知れた友人同士のようだね。水を差すよ
うだけれど、僕たちはイグーロスへ急がなければならぬ。二人と
も、付いてきてくれるよね？」

「はい。……あつ！」

私は忘れていました。とつても大事なことを。人としてやっておかなければいけないことを。

「すみません、皆さん。お先にイグーロスへお向かいください。私はまだ、やり残したことがあるので——」

パシン！

唐突に私の頬が張り飛ばされました。アルガス君です。

「テメエ、使用人の分際で何抜かしてやがる！　これ以上オレたち貴族の邪魔をする気か？　ああ？」

「申し訳ありません……ですが何卒よしなに」

「まだ折檻が足りないってのか!？」

「そこまでだ、アルガス」

デイリータ君がアルガス君の肩に手を置き、それ以上の乱暴は許さないとばかりに力を込めていました。

「オレが彼女について行ってやるよ。平民は平民同士、貴族は貴族で皆、先に行ってくれよ」

「デイリータ……おまえ……!」

「さあ行こうぜ」

言いながら、これ以上アルガス君の言及を逃れるように、私の肩を押しして平原の方へ歩いていきました。

マンダリア平原、その平地のとあるひらけた場所。

そこには未だ戦いの爪痕が深く、幾人もの死体が転がっていました。

こと切れたチョコボ、壊された馬車。

「ここか。エルムドア侯爵が誘拐された場所は」

さすがデイリータ君。何も言わずとも察せられる通り、ここがエルムドア侯爵が拉致され、配下の騎士や使用人が皆殺しにされた場所です。

「しかし読めないな。エルムドア侯爵は”銀の貴公子”と呼ばれるほどの有名な武人でもある。それがこうもあつさりと拉致されるなん

て」

「数です」

私は真顔で、一言だけそう言いました。

「奴らは数十人、下手をすれば百人近くで一気に強襲してきました。一息にケリをつける気だったのでしよう。真相を知る者はここで全員あえなく討ち死に。私を色々お世話してくれた女性の騎士様もここで倒れました」

言いながら、私は視界に入ったその女性の騎士の元に辿り着きます。

その遺骸の傍に屈み込んで、手を合わせました。

「デイリータ君も私に倣って、手を合わせます。」

「……戦争って嫌ですね。こんな血生臭い景色をまざまざと見せつけられるんですから。私ならもつと——」

そこまで口走って、黙りました。

「もつと？」

「いえ、忘れてください」

拝み終えた私は、その女性の騎士が持っていた剣を鞘に納めて両手に抱えます。

「死体漁りか？ あんまり褒められた行為じゃないぞ」

「いいんです。この剣は彼女が生きていた証……私と彼女の絆なんです。そうでも思っていないければ、逆にこの方に無礼でしょう」

「それだけの思いと覚悟があって、か」

デイリータ君も立ち上がり、私の背中を叩きました。

「そろそろ行こうぜ。いずれここも風化して、ただの大地に還るんだ。弔問はこれで終わりだ」

「ご迷惑をお掛けしました。デイリータ様」

「サマ、はむず痒いな。呼び捨てで構わないよ」

「ではデイリータさん、と。これからよろしくお願いしますね」

「ああ、よろしく。クレスティア」

後は私たちの間に言葉はなく、ただただ広く静かな平原を歩いていくのみでした。

ダイスダーグとの再会

side: クレスティア・アルヴァン

貴族の皆様方に追い付き、やってきましたイグーロス城。

私は先ほどのシツクなイベントを忘れたかのように舞い上がって
いました。

憧れの『ファイナルファンタジータクティクス』の世界を歩いてい
る！ それだけで私の喜びは有頂天です！

「ここが成都イグーロスか。さすがはガリオンの本拠地、活気があ
るね」

美月ちゃん——キラの感想にラムザ君が応えます。

「キラはイグーロスに来るのは初めてかい？」

「元々は名もなき地方貴族の出身だしね。ガリランドですら初めて来
たときは圧倒されたものさ」

さざりと答える彼女に、デイリータ君が続きます。

「地方貴族の出身なら、今後の栄達は間違いないな。キラほどの優秀
な人材を誰もが放っておくわけはないだろう」

「そいつは高望みしすぎかな。卒業したらまずはイヴァリースを漫遊
したいよ。勿論、骸旅団の件が片付いてからになるだろうけどね」

そんな世間話をしながら、居抜き通りを上って辿り着いたイグーロ
ス城。そびえ立つ幾つもの尖塔と城壁に囲まれた佇まいは見る者を
圧倒させます。

「それでは私はここで皆さんをお待ちしております。皆さんはダイス
ダーグ卿にご報告を——」

「何を言っているんだい？ きみも僕らに付いてきなよ」

って、ええ!?

「そんな、私はたかだか使用人風情の身分です。そんなお偉い方にお
会いするなど無礼も甚だしいことです」

「きみも侯爵誘拐事件の大切な生き証人なんだ。充分に同席する価値
はあるよ。そうだろう、アルガス？」

ラムザ君が絶妙なタイミングでアルガス君を牽制します。アルガ

ス君、チツと舌打ちして。

「他ならぬラムザのご指名だ。だが無礼はするなよ。ちよつとのハマでおまえの首なんかすぐ落ちるんだからな」

「はい、心得ておきます」

ふおおおお。ブレイブストーリーは私に味方している！　こんなちよつとしたイベントにまで参加できるなんて！

でもちよつとのハマで首チョンパなのは多分确实ですよ。平常心平常心。

side：ラムザ・ベオルブ

僕たち、イグーロス城へ入城したのはベオルブ家の末弟たる僕、その副官デイリータ。そしてキラと、侯爵誘拐の件を報告する役目のアルガスとクレスティアだ。

他の士官候補生は警護の名の下、城下町へ繰り出して皆様々に動いている。

僕やデイリータ、キラ、アルガスは堂々としていたものだが、クレスティアは見ていて可哀そうなほどにガチガチに固まっていた。そんなに肩肘張らなくてもいいと思うんだけどなあ。

応接室に通され、ダイスダーグ兄さんの到着を待つ。カチコチに固まっているクレスティアに僕は優しく声をかけた。

「ダイスダーグ兄さんは貴族の中でも温厚な方だから。もっと自然体でいても大丈夫だよ」

「はっ、はひっ！　あ、ありがとうございます！」

その隣でアルガスが隠しもせず溜息をついた。

しばらくして立派な身なりをしたダイスダーグ兄さんが応接室に入ってきた。立派な顎髭をたくわえた威厳を発する人だが、まだ40

にも満たないという若さ。

兄さんはまず最初に劳いの言葉をかけてくれた。

「……初陣を勝利で飾ったそうだな。兄として嬉しいぞ」

しかし兄さんを前にした僕は居ずまいを正しながら、その言葉を聞くだけだった。そこには感動も感激もない。

「他の重臣の方々もさすがベオルブ家の血を引く者と誉めておいでだったぞ」

「……ありがとうございます」

「なんだ、嬉しくないのか？」

「いえ、そんなことはございません。お褒めの言葉、有り難く存じます」

ダイスダーク兄さんは今は軍役を退かれているとはいえ、かつては北天騎士団の長であった古今無双の武人だ。

そんな兄さんと自分を自然と比べてしまい、つい自虐的な感傷を覚えてしまう。

「……報告があつたと思いますが、エルムドア侯の馬車が襲われ、誘拐されたとのこと。いかがなされますか？」

ダイスダーク兄さんは腕を組んで静かに口を開いた。

「うむ。ザルバッグに搜索隊を出すようすでに手を打つてある。また、いずれ、やつらから身代金の要求もあろう……」

寡黙な言葉に次いで、兄さんは仰つた。

「侯爵殿が生きておいでならばな」

その言葉に発奮したのか、アルガスが突然席を立ち上がり、ダイスダーク兄さんに向かって頭を下げた。皆の視線が彼に集中する。

「お願いします、ベオルブ閣下。何卒、私に百の兵をお与えください！」

「よせ、アルガス」

キラの控えめな声が届かなかったか、初めから無視していたのか、アルガスは興奮のままに続ける。

「何卒、お願い申し上げます。やつらに殺された仲間の仇を私にツ！」

「手を打ったと申しておる。それがわからぬわけではあるまい」

今のはアルガスに非がある。鈍い僕にも理解できたが、アルガス本人は頭に血が昇っていて自分が礼儀を失っているのを忘れている。

一介の騎士見習いに、百の北天騎士団の兵を寄越せと言うのだ。これが非礼でなくて何だというのか。

「ここは貴公が暮らす土地ではない。ガリオンヌのことは我らに任せしておくことだ」

「し、しかし！」

「身分をわきまえぬか、アルガス殿！」

ダイスダーク兄さんの雷が落ちた。兄さんが放つ威厳と同じ、オーラのような鋭い檄がアルガスを打つ。

正直なところ、激した兄さんの放つオーラに僕ら全員が息を呑んだ。

「貴公は、騎士の称号すら持たぬ一兵卒にすぎぬことを忘れておいでか？」

しかしアルガスが言いたいことも分からないでもない。骸旅団に仲間を皆殺しにされ、主人であるエルムドア侯爵が拉致されたのだ。何としても己の手で失態を返上したいのが人情というものだろう。

アルガスは悔し気に歯噛みしながら、席に座るしかなかった。

「おまえたちには、このイグーロス城の警護についてもらおう。なに、それほど難しくはない。”危険”が、この城にまで及ぶことなどなからうよ」

ダイスダーク兄さんとの会合はそれで手打ちとなった。アルガスは結局、己の失態を失態で塗り固めるだけで終わった。

side：キラ・シルベント

場所は変わって、イグーロス城の庭園にて。

「……オレの家も昔はベオルブ家みたいに皆から尊敬される家柄だったんだ」

アルガスがぼつりと呟いた。

「五十年戦争の時に、オレのじいさんが敵に捕まってなあ……。じいさん、自分だけ助かるために仲間を敵に売ったんだよ。そう、自分の命を救うためにね……。でも、敵の城を出たとたん背後から刺されて死にしまった……。オレみたいな騎士見習いにな」

他人事ながら、同情はするがしようもない話だと思った。

そういう例はきみだけじゃなく、もつとたくさんあるんだよ。五十年戦争のような戦乱の時期にはね。

「そんな話を、じいさんの仲間だった一人が命からがら脱出してきて方々に吹いてまわったんだ」

こうやって話を聞いていると、こいつの小憎らしさが幾分か和らいで見えた。ゲームでも同じ展開だったが、実際に見るところも雰囲気違って見えるものか。

「もちろん、オヤジは信じなかったよ。でもな、みんなその話を信じた。そして、みんな去っていった……」

アルガスは足元の小石を拾い、脇の池に投げ入れる。

「身分か……。たしかに、オレ一人じゃダイスダーグ卿には会えんよなあ……」

「兄さーん！」

風が透き通るような、澄みきった少女の声が聞こえた。

「テイーター！」

「アルマ、ザルバツグ兄さん！」

今、私の目の前では家族団らんのひと時が繰り広げられている。

戦勝を祝う聖騎士ザルバツグ、それに答えるラムザ。

デイリータとテイータの抱擁。

私はそれを見て、不意に隣のゆかり——クレスティアに話しかけた。

「いいよね、こういうの」

「ん、何が？」

「こう、戦時下にもかかわらず家族が安らかなひと時を過ごす景色っていうか、まあ何となくそんな感じ」

「そうかなあ」

クレスティアは人差し指を口元に当てて小首を傾げた。

「私はもつと勇猛果敢な方がいいな。剣や魔法で強敵をばったばった倒していくようなの」

言いながら、両手で剣を持つふりをしてブンブンと腕を振り回してみせるクレスティア。

「あはは、なんだかやっぱりその方がゆかり……いや、クレスティアらしいかな」

「あれ？ 美月ちゃん、もう私のこと”ゆかり”って呼んでくれないの？」

「今さらだね。私たちはここでは女子高生じゃなくて、騎士見習いのキラと使用人のクレスティアなんだ。住み分けは大事だよ」

彼女は再び「そうかなあ」と呟いて、けれど納得してくれたように頷いた。

私は改まって、クレスティアに顔を向けた。

「クレスティアが剣で、私が盾だ。この景色を守るために二人で頑張ろうじゃないか」

その言葉に、彼女はにこやかな愛嬌のある笑顔で応えた。

「そうだね、頑張ろう。”キラ”」

「デイリータ」

「……つと、なんだ。キラか」

私はイグーロスの、場末の酒場で座っていたデイリータに話しかける。

「こんなところでも情報収集だなんて、きみもよっぽど暇なんだね」

「おまえには敵わないな……まあ武器や道具の調達はラムザたちに任

せてあるから、オレは別方面からの貢献をしないとな」

「ザルバッグ將軍に何か吹き込まれたのかい？」

「デイリータがぎよつとして、私の眼を凝視した。」

「そこまでお見通しか。ますます才走ってて怖いくらいだぜ」

「じゃあ？」

「お察しの通りだ。ザルバッグ將軍の放ったスパイが貿易都市ドーターで消息を絶った。何か大事に巻き込まれたんじゃないか、つてね」

「で、きみはドーターについて情報収集つてわけだ」

「おまえも暇してるなら何か手伝えよ」

「そうだね、次ははす向かいの武器屋にでも顔を出そうかと思つて――」

「いい加減にしろ!! 使用人風情が!!」

そのはす向かいの武器屋から強烈な怒声が響いた。酒場の客もそれに驚いて入口に視線を集中させる。

「ここからは騎士の戦いが始まるんだ! 使用人風情が付いてこられるものか!!」

この声は……アルガスか。やっぱり私が付いていくべきだったかな。

「どうかよしなに。叶うなら、劍の錆にでも矢玉の盾にでもなります。どうかお許しを」

「ふぎけるな!! 今この場で劍の錆にしてやろうか!!」

「やれやれ、ちよつと行つて止めてくる」

私はデイリータにそれだけ言付けて、酒場から出てはす向かいの武器屋に入った。

「待つてくれアルガス」

「止めるな、キラ! コイツはここで無礼打ちにされねば気が済まん

らしいからな！」

「それこそ待ってくれ。彼女を焼き付けたのは私だ。彼女を斬るといふならまず最初に私を斬ってくれないか」

「なんだと!？」

アルガスは剣幕を鋭くして、私の顔を睨みつける。

「と、言っても私は抵抗するよ。ねえアルガス。ここは私の顔を立てて、クレスティアの好きにやらせてやってくれないか。もちろん私が眼を光らせておくから」

「足手まといが一人増えるだけじゃねえか！ それにおまえが面倒を見るだど？ 冗談じゃねえ、戦闘に使える駒をみすみす一つ逃してどうするってんだ!!」

口角泡を飛ばして抗議を続けるアルガス。

そこへ。

「いや、いいんじゃないか。アルガス」

「デイリータ!？」

不意の闖入者にアルガスがますます顔を上気させていく。

「このままじゃオレたちが置いていっても無理矢理ついてきそうだし、アイテム士は貴重な兵站線だろ?」

「そ、それはそうだが……」

おうおう、さすがデイリータ。人を丸め込む才能はますます開花しつつあるな。

「第一、もしここで彼女を放り出して北天騎士団に密告でもされたらその方が厄介だろ。そこのところはどうなんだ? ”命令違反”のアルガスとしては」

「ぐ、うぐぐ……」

勝負あつたな。

「くそ……おいキラ！ そいつの面倒を見るって言ったのはおまえだからな！ 撤回するなよ！」

「言われなくてもわかってるよ」

アルガスは不機嫌なままのしのと武具屋の中に戻っていった。恐らくラムザに口汚い言葉で今の話を聞かせるつもりだろう。

とはいえ。

「やっぱり独断専行するつもりだったんだねみんな」

「スコアを上げるためじゃないんだ。純粋にエルムドア侯爵を助けた
いのが全員の総意だ」

「それもそうだね……つと」

呆然と立ち尽くすクレステイアに、私は近寄った。

「アルガスの言う通り、ここからは危険な橋を渡ることになる。無理
して付いてこなくてもいいんだよ？」

私の言葉で、ハツと目を覚ました。ように見えた。

「何言ってるのさキラ。ここからがブレイブストーリーの始まりじゃ
ない。私だけ置いてけぼりなんて、そんなのないよ」

「ははっ、闘志は萎えていないようだね。安心したよ」

「そうだよ！ 私だって物語の先の先まで見たいんだから！」

「じゃあ一つだけ忠告してあげる」

私は笑顔を引っ込めて、真顔で告げた。

「死なないでね。クレステイア」

「！……当たったり前じゃない！」

こうして私たちはひと騒動を決着し、次なる目的地——貿易都市
ドーターに向かうのだった。

ドーターのスラム街

side：ラムザ・ベオルブ

スウィージの森。

ガリランドの東に位置し、ドーターの関門となっているモンスターが住まう森。

太古の昔には多くのモーグリが住んでいたと言われているが、今ではその面影を知ることさえできない。

要するに。

「チツ。こんなところでモンスターと遭遇するなんて、ツイてねえ」

アルガスが悪罵する通りの難所だということだ。

彼のぼやきにデイリータが軽口で返す。

「ぼやくなよ、アルガス。城の警護よりはマシさ」

「ケツ、命がかかっているのによくそんなこと言えるな……」

じりじりと迫るゴブリンたち。

「おしやべりはそこまでだ！ 来るぞツ!!」

僕は皆に檄を飛ばした。

side：クレスティア・アルヴァン

さーて、ようやく私の初陣が始まりましたよ。マンダリア平原は違うのかって？ あれは終始逃げてばかりでラムザ君たちに助けられるだけだったのでノーカンです。

今日のために新調したボウガンもきっちり役に立たせて見せますよ。『自動弓装備』のサポートアビリティなんて持つてるところが微妙に役に立たないんですけれども。

「クレスティア、私が前が出る。きみは後ろから援護してくれればいい」

言つて、キラはゴブリンたちの前に出ました。

ガリランド流戦法、敵を一つに千切つて二人でボコれ、は近接攻撃と遠距離攻撃のタッグに通用するところもあるみたいです。一人が囷になり、二人目が後ろから遊撃する。それだけでモンスターはあれよあれよという間に殲滅されていくではありませんか。数の暴力、万歳。

side：ラムザ・ベオルブ

突然の遭遇戦にもかかわらず、士官候補生の皆の動きは良い。これならモンスター退治に十分耐えられるだろう。

それに、きつといつかは骸旅団との戦闘になる。知能の低いモンスターと比べて知恵をフル動員してくる人間との戦いの前哨戦としては上々だろう。

「なあ、ラムザ」

「デイリータ？ どうしたんだ、こんな時に」

「いや……気のせいかもしれないんだが、なんだか妙じゃないか？」

僕はデイリータの言うことの意味が掴めず、小首を傾げた。

「クレスティアとキラだよ」

「あの二人がどうかしたのかい？」

「ああ、キラはともかくとして、クレスティアの動きが的確過ぎるとい
うか……」

「というと？」

「キラの戦いは軍人の訓練を受けたそれだが、クレスティアはそうでもない。ただ”巧い”んだ」

言われて、僕はクレスティアの動きを追った。

ぱつと見では見つからない位置に陣取つて、モンスターの攻撃範囲から絶妙に届かない位置から、キラの援護射撃に徹している。

自動弓なんて、通常の弓よりも直線的で遠距離からのコンビネーションに不向きな武器ながら、俄然巧くキラの背後からの確に敵を狙撃している。

ただし、僕はそんなデイリータの心情をあまり気にしてはいなかった。

「考えすぎだよ。もしそうだとしても、それだけ戦えるなら僕たちにも願ったりじゃないか」

デイリータは何やら難しい顔で。

「……かもな」

とだけ、呟いた。

最後のゴブリンを打ち倒し、士官候補生たちの歓声が湧き上がる。僕たちの士気のボルテージはうなぎ登りだ。

「この森を抜ければドーターまでもう少しだ」

モンスターたちを片付けた僕たちはドーターへの進撃を再開した。

side：ウィーグラフ・フォルズ

ドーターのスラム街。

折からの雨に打たれ、地面は泥まみれだ。それに汚れるのも構わず、私は目の前の剣士の胸倉を掴んだ。

剣士の男が抗議の意を示して、私の腕を剥がそうとする。

「……知らないって言ってるだろー」

私は腕に力を込めて男を壁に押し付ける。

「ウソを言うなッ！ おまえたちがやったことはわかっているんだ！」

私は気迫を込めて怒声を浴びせる。

「……ギユスタヴはどこだ？ どこにいる……？」

静かに怒りを燃やしながら、男に詰め寄った。

「し、知らない……」

気迫に気圧されてか、男は氣勢を失いながらも未だ抗議していた。
「侯爵はどこだ？ どこに隠したんだ……？ 言えッ!!」

強く胸倉を掴み上げる。

男がそれを振りほどき、私から逃げようとするが、泥に足を取られ無様に転倒して尻もちを突いた。

私はそいつに近付き、剣を抜き放つ。

「これが最後だ……。どこだ？」

最後詰蝶だった。これでまだ言い訳するようなら、もうこの男に用はない。

観念したのか、男は一言、口からこぼした。

「ぎ、砂漠だ……」

私は剣を鞘に納める。これで本当の意味で、この男に用はなくなつた。

「そうか、”砂ネズミの穴ぐら”か……」

「待てッ!!」

去ろうとした私に、年若い少年の鋭い声が響いた。

その兵装を見るに。

「チツ、北天騎士団か」

私は制止する声を無視してスラム街から抜け出した。

その途上で。

ドン。

と、誰かにぶつかる。

ぶつかったそいつは酒気で赤ら顔になった、装いの立派な騎士だった。

「どけ」

私は無理矢理そいつを横に退けてそのままスラム街から立ち去つた。

こんな真昼間から酒か。

本職の騎士はこんな奴ばかりなのか？ 庶民の貧窮を知らない奴に限ってこれだ。

side：クラウドス・マツケンロー

ひゅー、こええ。

あの装いはウィーグラフか？ いきなりとんだ修羅場に出くわしたもんだ。

で、あのウィーグラフがこのスラム街から立ち去ったということ
は。

ガタンガタンと粗末な扉が開き、弓使いやら魔道士が姿を現す。
こりやあオレも覚悟して初の単独任務に挑むしかないようだな。
士官候補生たちの声が遠くから聞こえてくる。

「どうやら、ドーターまで来た甲斐があったようだな」

「あの男は、たしか……？」

「知っているのか、デイリーター」

「五十年戦争の終わり際にイグーロスで見たことがある……？」

そこで、姿を現した敵たちの存在に気付いたようだ。

「戦わないわけにはいかないようだな。行くぞッ!!」

少年の声が耳朶を打った。

両軍、戦闘態勢に入ったところで。

「ちよおーっと待ったーッ!!」

オレはスラム街の辺り一面に響くような大声を上げた。両軍の視線がオレに集中する。

「士官候補生の諸君、きみたちの勇義に感動した！ 賊徒を誅するため、このクラウス・マツケンローが手助け仕る!!」

骸旅団は即座にオレを敵だと判断したらしく、一斉に矢だの魔法だのを浴びせかけてきた。

しかし士官候補生たちもそのわずかにできた間隙を縫って、すぐに陣形を整える。

敵たちの攻撃を掻い潜り、オレはリーダー格の剣士に強襲を仕掛けた。そんなオレに矢や魔法がかすっていく。なんだこりや、どつちも狙いが悪いのかあんまり痛くねえな。

剣士と剣を交わし合う。ザコは士官候補生たちに任せてオレは剣士に狙いを絞った。

剣の動きに鋭さが無い。ただ力任せに振り回しているだけだ。

雨で濡れた泥に足を取られつつも、踊るようにオレは敵の剣を躲し、打ち合い、剣戟を浴びせる。

なんだこいつ。てんで大したことがねえ。これで剣士張ってるならハツポコのオレでも務まるぞ。

そこまで考えて、オレは訓練の日々を思い出していた。そうか、敵が弱いんじゃない。アグリアスさんが強すぎるだけだ。

そう思うと急に相手を傷つけるのが気の毒になってきたな。

ドンと壁に敵剣士を追いやり、利き腕の肩に向けて剣を突き刺す。うへー、我ながら痛そうな一撃。

利き腕をやられて剣をガシャンと落とした剣士はその場にしゃがみ込んだ。どうやら負けを認めたらしい。

周囲を見やると、他の敵は士官候補生たちによって鎮圧されていた。どうやらオレの初陣は完勝だったと言つてもいいくらいだ。

これで少しは一皮？けたかね？

side：ラムザ・ベオルブ

突然の騎士の乱入に戸惑ったが、彼が敵のリーダーを一手に引き受けてくれたおかげで、スムーズに敵を片付けることが出来た。

士官候補生を率いる身として、挨拶しなければ。

side：クラウド・マツケンロー

「ありがとうございます。クラウド殿。おかげで思った以上に簡単に敵を退けることが出来ました」

そう言っただけでラムザが手を差し出して来る。

オレもその手を取り、握手した。

「きみたちが無事で何よりだ。オレも手を貸した甲斐があったよ。ラムザ」

「？ 僕のことをご存じなのですか？」

「ん、あーいや。まあなんていうか、風の噂でね」

「適当に誤魔化すより、さっさと別の話題に切り替えた方が早いなコレは。」

「敵のリーダーはあつちに縛って転がしてある。尋問するなら手伝うぜ」

「はい、わかりました。クラウド殿」

「どの」ってなんかむずかしいな。

「言っておくがオレはそこまで大した身分の者じゃない。気軽にクラウドとでも呼んでくれればいい」

「ありがとうございます。クラウドさん」

んで、場所は変わって無人の家。

オレが傷付けた捕虜の肩は適当にポーションと包帯で応急処置して、尋問を開始することにした。

「……おまえたちが骸旅団だったのはわかってるんだ」

アルガスが居丈高に捕虜に向けて尋問する。

「侯爵様はどこだ？ どこに監禁されているんだ？ 言えッ!!」

だが捕虜は無言を貫いた。黙秘権ってこの世界にもあるのかね？

「さつきまで、おまえたちのボス、ウィーグラフがいただろ？ ヤツはどこへ行ったんだッ!？」

これについても黙秘。とりあえず尋問の方法を変えた方が早いんじゃないかと思うんだが。

「こ、この野郎ッ！ なんとか言ったらどうだ!!」

叫びながら、捕虜の腹を蹴りつける。アルガスは屈んだ捕虜の髪を掴み上げ、無理矢理に顔を上向かせた。

「よせッ！ アルガス！」

ラムザの制止を聞き入れて、アルガスはチツと舌を鳴らした。

「……いいか、よく聞け。まもなく、おまえら骸旅団を皆殺しにするために、北天騎士団を中心とした大規模な作戦が実行される……」

アルガスが脅しをかけ始める。ちよいと尋問の仕方を変えただけでも立派な心意気だぞ。

「そうだ、おまえたちは死ぬんだ。一人残らず地獄へ落ちるのさ。盗賊にふさわしい末路だな」

まあ言葉は悪いが正論だ。しょうがないと言えましょうがない。

「だが、おまえは幸せだ。ウィーグラフの行く先を教えれば命だけは助かるぞ。どうだ？」

「……オレは知らん」

言った途端、捕虜の腹に強烈な蹴りをかますアルガス。また尋問から拷問に逆戻りだよ。

「言葉遣いに気をつけろよ、この野郎！ 盗賊が貴族にタメ口聞くんじゃねえ！」

アルガスの拷問をよそに、ちよいちよいとオレの腕をつつくやつが

いた。騎士見習いとアイテム士のお嬢さん二人だ。

オレの腕を取り、引きずって拷問部屋から連れ出そうとする。アルガスの拷問を見るに耐えかねたつてとこかね？

なされるがまま、オレは廃屋から外に出された。

「えーと、お嬢さん方？ オレに何か用？」

二人は顔を見合わせて小声で言葉を交わし合う。

「ねえキラ。多分この人って……」

「うん、間違いないだろうね」

二人してコクリと頷き合う。

なんだなんだ。

「私はキラ・シルベント。こっちはクレスティア・アルヴァン。少し聞きたいことがあるんだが、もし違ったら小娘の戯言だと思って聞き流してくれればいい」

「はあ」

すうつと一息ついて、キラというお嬢さんが口を開いた。

「もしかしてきみも現代日本からこの『ファイナルファンタジータクティクス』の世界に転生してきた人間じゃないか？」

それを聞いて、オレはぶほつと大きく息を噴き出した。

「まさか……きみたちもか!？」

「やっぱりね。どうもブレイブストーリーにそぐわない人だなと思っただよ」

「私たちは高校二年生の同級生で、私は榎宮ゆかり。こっちは加室美月ちゃんっていうんです」

「高二……オレと同年かよ」

「良かったらきみの本名を教えてくださいませんか？ ああ、こっちの世界じゃ別名で通してるから無理に聞くことでもないんだけど」

「オレは神崎タクマ……もとい今はクラウス・マツケンローだ」

「クラウス……クラウスと呼んでも？」

「ああ、構わないぜ」

「私はガリランドの士官候補生だ。クレスティアはアルガス専属の使

用人」

「アルガスのって……マジで？」

何となくあのアルガスが使用人に対してバカやってる姿を夢想して、なんていうか、吐き気を覚えた。虐げられてる悪役令嬢モノの方がまだマシなんじゃないか？

「いえいえ、アルガス君。いい子ですよ。ちよつと言動が過激なだけで、ちゃんと見ているところは見ていますし」

「……と、私にとつては寛大すぎる感想だと思っただけだね」

「オレもそう思っただわ」

今でも中で拷問に興じているアルガスの姿を思い浮かべて、とてもそんな感想は持てそうになかった。

「ま、同好の士同士、仲良くやっつていこうや」

オレは拳を握って、二人の前に突き出した。二人も併せて拳を出し、こつんとぶつけ合う。

「これからよろしく、クラウス」

「お願いしますね。クラウスさん」

「応よ、キラにクレスティア」

オレたちが話に花を咲かせている間に、どうやら尋問は終わったらしい。ラムザとデイリータ、アルガスが出てくる。

「三人とも、もう仲良くなったんですか？」

ラムザの問いにキラが答えた。

「ああ、御覧の通りさ。意外と気が合ってるね」

「ところで次はどこに行くんです？」

ゲームやったら分かるだろうに、いちいち聞くところがクレスティア流の処世術といったところか。

「ゼクラス砂漠だ。ウィーグラフもそこにいる。足手まといになるんじゃないぞ」

「勿論ですー！」

アルガスの棘のある言葉に笑顔で応えるクレスティア。やっぱマネできそうにないわ。

「ところでクラウドスさん」

「ん？」

ラムザがオレに向かってくちほし嘴を向けた。

「クラウドスさんはどういった目的でガリオンヌに來られたんですか？

見たところ、王家の騎士とお見受けするのですが」

うぐつと息が詰まる。旅をして一皮も二皮も剥けてこい。出来なければ帰ってくるな、なんて情けない理由はちと話せない。

「まあ諸国漫遊の旅ってとこかな。そのためならある程度の自由も保障されてる」

その答えを聞いて、さらに彼は提案してくる。

「もし許されるのであれば、僕らと同行していただけないでしょうか。誘拐されたエルムドア侯爵を助けるため、多くの力が必要なんです」
「オレでよければ構わないよ。士官候補生諸君らの勇義に応えるって言ったばかりだしな」

「ならこの部隊の指揮権は——」

そこまで口に仕掛けたところで、オレはラムザの前に片手を広げて制止した。

「そいつはダメだ。部隊の指揮権を預けるってことは責任も負うってこと。それは部外者のオレじゃなく、ベオルブ家のきみが負うべきだ」

「！　そう……ですね。すみません、騎士道に反する行いをするところでした」

ラムザが頭を下げて謝意を示した。

まあ上辺はそう言ったものの単に面倒ごとを引き受けたくなかつただけなんだけどね、オレは。

「そう固くなる必要はないぜ。オレにとってもこれは渡りに船の話だしな。きみたちが受け入れてくれる限り、力を尽くすことを約束するよ」

「ありがとうございます。クラウドスさん」

オレは手を差し出し、ラムザもまたその手を握った。

これでオレもブレイブストーリーの仲間入りだ。

ゲームじゃ味わえなかったモノホンの『ファイナルファンタジータクティクス』の世界を歩き回れるし、勲功を上げれば胸を張って王都に帰れる。

いいこと尽くめじゃね？　これ。

エルムドア侯爵救出

side：キラ・シルベント

ドーターから北上すると大きな砂漠がある。ゼクラス砂漠。昼間は50度を超え、夜間は氷点下まで下がる天然の文化財。恐らく保全価値はないだろうが。

その肌寒い夜空の下、私とクレステイアは黒い外套で寒さをしのぎながら元々は集落の一つだった小屋——現骸旅団のアジトである”砂ネズミの穴ぐら”を偵察していた。

「……いた」

盗賊がほとんど瓦礫がれきと化した廃屋の入口で寝ずの番に付いている。「ラムザ君やデイリータ君の言う通りだったね。夜中より夜明けの方が敵も眠たそうにしてる」

デイリータがラムザと検討して発案したのは”ふつぎようきしゆう 払暁奇襲”。読ん

で字のごとく、暁が払われる夜明け前に奇襲すること。そんな面倒なことせずに普通に夜中に攻めればいいだろう、とかアルガスなら言いそうだがそこはそれ。夜中の真っ只中というのは意外に堅牢なものなのだ。

だからこそ夜明け前。休んでいる連中が起き抜けに、夜間の寝ずの番が眠くなるタイミングこそが奇襲にもってこい、というわけだ。「クレステイア、きみはラムザの所に戻って知らせってきて。私はもう少し観察を続ける」

「わかった。気を付けてね、キラ」

言うが早いか丘の上を滑り落ちるようにラムザたちの本陣に向かって戻るクレステイア。

「ウィーグラフの潜入先か……果たして鬼が出るか蛇じゃが出るか……」

観察先では盗賊たちが入口で何やら話している。

「……おい、聞いたか？ 北天騎士団が本格的に動き出すらしいぜ」

「ああ、聞いたよ。……オレたちはいったいどうなるんだ？」

「殺される前に足を洗ってどこかへ逃げるしかないな」

「ウィーグラフに従っても死ぬだけだしな」

「ああ、そのとおりだ。ギユスタヴの計画どおりに侯爵の身代金さえ手に入ればこんな生活ともおさらばさ……」

強盗、殺人、要人誘拐を重ねておいて今さら足を洗ってもらっても困る。イヴァリースの法に照らし合わせて罰を受けるのが先だ。もつともその先は地獄への片道切符でしかないだろうが。

骸旅団のアジトを、クレスティアが呼んできたラムザたちが徐々に包囲を狭めていく。

「た、たいへんだッ!! 北天騎士団のヤツラだッ!!」

こちらの接近に気が付いたようだ。だがもう遅い。

「よし、他の奴らに悟られる前に見張りを倒せッ!!」

ラムザの檄が飛ぶ。士官候補生たちが一斉に『応ッ!』と氣勢を上げた。

敵は銃眼から弓矢やらボウガンでこちらを迎撃してくる。アジトなだけあって地の利は向こうにあるというところだが、逆に言えば戦力で勝る私たちにとっては袋の鼠だ。

クレスティアや魔道士の援護を受けつつ、私やラムザがアジトの中に突入する。

狭い入口で乱戦に持ち込めばこちらの勝ちはもはや明白だ。雑兵相手に負けるほど、士官アカデミーの訓練は生ぬるくはない。

最後に残った敵を打ち倒し、ラムザが呟く。

「予想外に手間取ったな……。気付かれてもよさそうだけど……?」

気付かれる余裕もなかったのか、実際、アジト内からの援軍すら来なかったしね。

side：ウィーグラフ・フォルズ

「どうだ、ギユスタヴ、いい加減に観念したらどうだ？」

勧告する。降伏するならまだ許してやる、そういう意味だ。

だが目の前に立つ騎士は威勢を上げて私を罵るだけだ。

「……貴様の革命などうまくいくものかッ!!」

騎士——ギユスタヴは声を荒げて非難する。

「オレたちに必要なのは思想じゃない。食いものや寝るところなんだッ！ それも今すぐになッ!!」

言いたいことは分かる。だがそれは理想ではない。

単なる食い詰めた盗賊の恨み言でしかない。

「おまえは目先のことしか見ていない。重要なのは根本を正すことだ！」

しかしもはやこれ以上言っても伝わることはないだろう。

私は理想を追い求める。食い詰めたギユスタヴ一派はもはや目先の食い扶持のことしか頭にない。

「……貴様にそれができるといえるのか？」

ギユスタヴの眼がキラリと光る。

「無理だよ、ウィーグラフ。貴様には絶対にできないッ！」

そう言い、ギユスタヴは剣を正眼に持ち、構えた。

「言いたいことはそれだけか？」

私は一歩、ギユスタヴへと近づく。ギユスタヴはそれに対し、怯んだように一歩、ゆつくりと下がった。

奴には私が首を落とす死神に見えたことだろう。

「ギユスタヴ、おわかれだ」

「……この野郎おーッ!!」

裂帛の気合と共にギユスタヴが私に斬りかかる。

鋭く、速い。最後の一撃としては相応しく、まさしく渾身の一撃だったろう。

だが、それだけだ。

私はスツと体を横に捻るだけでその一撃を造作もなく躲す。

そして無防備になったギユスタヴの胸板を貫き通した。

「うあ……う……」

剣を引き抜く。

体から力を失ったギユスタヴがその場に倒れ伏し、絶命した。

side：ラムザ・ベオルブ

アジトを奥へ奥へと進み、僕らは最奥の扉に辿り着いた。

木製の、蝶ちようつがい番すら緩んだ扉を蹴り開ける。

そこにいたのは。

「ウィーグラフ!!」

そして奥で倒れ伏している人物を見止めたアルガスが。

「侯爵様ツ!!」

エルムドア侯爵に近付こうと一歩前に出たその時。

「動くなッ!」

ウィーグラフが剣を侯爵に向けて突き付けた。

アルガスが憤激する。

「貴様ツ!!」

「待て、アルガス」

クラウスさんがアルガスを制した。

ウィーグラフの狙いに気付いたのかもしれない。

「侯爵殿は無事だ。イグーロスへ連れて帰るといい」

「……どういうことだ?」

僕は半信半疑ながらも、ウィーグラフが何を考えているかを直感していた。

今の彼は、敵ではないと。

「侯爵殿の誘拐は我々の本意ではない。我々は卑怯な手段は使わないのだ」

そこにキラが反発する。

「……だったら部下の手綱はしっかりと握っていて欲しいところだね。こっちのクレスティアはそいつらに殺されかけたんだ」

だがウィーグラフは首を横に振った。

「戦争なのだ。死ぬも生きるも天の定め。むしろ生き残っただけ運が良かったと感謝されてもいいくらいだ」

「貴様あ……!!」

アルガスが腹の底から唸り声を発したが、ウィーグラフは我関せずとした態度で続ける。

「……このまま私を行かせてくれたら侯爵殿をお返しするが、どうかね?」

「ふざけるなツ！ オレたちになうとでも思うのかツ！」

「落ち着け、アルガス！ 奴は本気だ！」

今にも飛び掛からんとするアルガスを、クラウドさんが再び手を出して制した。

じりじりと、僕らは壁伝いにエルムドア侯爵へと近づいていく。併せてウィーグラフもまた、壁伝いに部屋の出口へと向かう。

「う……うう……」

不意にエルムドア侯爵が苦し気な声を発した。僕らはそれに気を取られ、その一瞬の隙にウィーグラフが部屋から脱出する。

アルガスがそれを追おうとしたところを、クレスティアが目の前に出て阻む。

「行かせてください、アルガス様！」

「貴様ツ!! 何故止める!!」

「放っておいても骸旅団は壊滅します。今、危険を冒す必要はありません！」

ゴツ!!

アルガスの鉄拳がクレスティアの頬を打った。口の中を切ったのか、一筋の血が彼女の口から流れ落ちる。

「……チツ」

アルガスも昇った血が冷えたようで、扉から引き下がる。

僕はエルムドア侯爵に近付き、その様子を確認した。

「……大丈夫。弱っているだけで特に外傷はない」

デイリータは頷いて。

「イグーロスへ戻ろう……」

皆に向かって呟いた。

side：キラ・シルベント

「大丈夫？ クレスティア」

ドーターに戻った私たちは一時、宿で休憩をとっていた。

エルムドア侯爵をお休みさせることが主目的だが、おかげで私たちも少しのんびりすることが出来る。

私はクレスティアがアルガスに打たれた頬に氷囊ひょうのうを当てて冷やしてあげた。

「あたた……ちよつと染みるかな」

「あいつもいい加減下つ端虐めをやめてくれれば私も気をもまずに済むのに」

「敵から受けるダメージよりよっぽど痛いかもね。でもあれがアルガス君の平常運転だからそんなに気にすることもないよ」

「私は腹が立つよ」

「そうかなあ」

クレスティアは殴られたことにも理不尽を覚えていないらしく、暢気な表情でそう返した。

「なんていうか、このクレスティア・アルヴァンの体が馴染んでるのかな。アルガス君は怖いけど、同時に敬意を払ってる自分があるの」

「敬意？」

「あいつに？ あの”ゆかり”が？」

「そうなの。今はブレイブストーリーの端っこにいただけだけど、ア

ルガス君の折檻を受けるのも私の物語の一つなんだって、そう思うことが出来るの」

「真正のマゾかきみは……」

私は呆れて、ため息混じりにそう呟いた。

クレスティアが何か思い出したように「あつ」と口元に手を当てた。「たいへん！ 私、そろそろ侯爵様のお水換え当番だった。またね、キラ！」

言うなり、走り去っていくクレスティア。私は手をひらひらと振って彼女を見送った。

しかし。

「馴染む、か……」

私がラムザやデイリータに全幅の信頼を置くのも、アルガスを疎んじているのもまた、私”加室美月”が”キラ・シルベント”に馴染んでいるからだということだろうか。

それなら、私は……そしてクレスティアは……

私は脳内で会議を始めようとしている雑念を追い払うように、両の頬をピシヤリと張った。

私は、私だ。私の望むままにこのブレイブストーリーを追想してやるさ。

その過程で人殺しに堕することも、全て飲み込んで。

クレスティア……きみはこの世界でどんな夢を追うんだい？

私は宿の窓からドーターの街並みを眺めながら、そんなことを思っていた。

果たしてこれは心配事なのかどうなのか、私には区別がつかなかった。

ガリオンの領主

side：クレスティア・アルヴァン

時は経って私たちはイグロスへ戻りました。

応接室にて、ダイスダーグさんを目の前にして私たち6人が皆で立っています。なんだか学校での古い習慣「廊下で立ってなさい」というのを思い出させられる光景です。

まあ内容はもつと深刻なものなのですが。

「……いったい、どういうことだ？ 何故、ゼクラス砂漠へ行ったのだ？」

ダイスダーグさんが静かに、そして冷淡な口調で聞いていただきます。それに対してラムザ君は押し黙るだけでした。

「黙っていたのではわからん。説明しろと言っている……」

かくいう私もアルガス君も、こんな場で余計な発言をするほど豪胆でも空気を読めないでもありません。

ラムザ君が何か言わない限り、この状況は続くでしょう。しかし。

「自分がラムザを無理矢理、誘いました」

口火を切ったのはデイリータ君でした。

ダイスダーグさんはちらりとデイリータ君を一瞥いちべつした後、すぐにラムザ君に水を向けます。

「そうなのか、ラムザ？ デイリータのせいなのか？」

こんな状況で陳腐な友情劇を見せられてもますますダイスダーグさんのご機嫌は悪くなるばかりで。

ラムザ君がそれに答えます。

「……いえ、自分の意志です。デイリータのせいじゃありません」
しかしデイリータ君がさらに続きます。

「いいえ、ラムザはウソを言っています。悪いのは……」

「僕をかばわなくていい。命令違反をしたのは僕の意志だ！」

目の前の寸劇に怒りを通り越して呆れ果てたのか、ダイスダーグさんが重々しく口を開きました。

「……皆が勝手気ままに振る舞うとしたら何のために”法”が存在するのだ？ 我々ベオルブ家の人間は”法”を順守する尊さを騎士の規範として示さねばならぬ」

さすがダイスダーグさん、ベオルブ家の当主を務めるだけの威厳と器量の持ち主です。一言一句に嘴を挟む余裕がありません。

「ベオルブの名を汚すつもりかッ？」

「……すみません、兄さん」

ラムザ君は頭を下げるばかりでした。

「もう、よいではないか、ダイスダーグ」

声と共に、応接室の扉を開く音がしました。

身なりの良い男性が入ってきます。

「侯爵を救出した功績は大きい。そう目くじらを立てなくともよい」

私たちは慌てて膝を突き、最敬礼の姿勢をとりました。

ダイスダーグさんと違い、こちらの男性は私たちの労をねぎらってくださいます。

「功をあせる若い戦士たちの気持ちもわかるというもの。かつては、我らもそうであった」

ダイスダーグさん呼び捨てに出来るほどの格式高い男性。この男性こそが。

「……甘やかされては他の者たちに対してけじめがつきませぬぞ、ラーグ閣下」

ベストラルダ・ラーグ公。

ガリオンヌの領主にしてイヴァリースの現王妃ルーヴェリア様の兄君に当たる、それはそれはお偉いお方です。

「そなたがダイスダーグの弟か。……楽にしてよいぞ」

そう仰られたラーグ公。答えに応じ、ラムザ君が立ち上がります。「なるほど、亡きバルバネス将軍にそっくりだな……。よい、面構えだ」

「はっ……」

ラムザ君も恭しく応えます。

「そのありあまる若さと力は城の警護だけで補えるものでもあるまい……」

ラーグ公はダイスダーグさんに眼をやり、ダイスダーグさんもそれに答えて再度、重い口調で私たちに向けて口を開きました。

「……骸旅団せん滅作戦も大詰めだ。おまえたちの参加を許そう」

君命です。命令違反を犯した私たちに、戦線へと加わるよう便宜を取り計らってくださいました。

「いくつかの盗賊どものアジトを一斉に襲撃する。そのひとつをおまえたちに任そう」

「はい……」

ラムザ君が控えめな口調で承諾します。というかむしろそれ以外の選択はありません。

命令違反の上に独断専行。それを叱るダイスダーグさんと、逆にねぎらうラーグ公。

ベオルブ家末弟の違反行為への対応はこれにて手打ちとなりました。

「……ときに王家近衛騎士クラウス・マツケンロー殿」

お？

ダイスダーグさんがクラウスさんに水を向けます。

「そなたは自らの研鑽のためガリオンヌを旅しておられるとのこと。折れて頼まれない。ラムザたちにその力を貸してやってほしい」

言外に協力しろと要請しているのが見てよく分かりました。

「は、ははっ！」

しかしこれは予想外。クラウスさんもまたブレイブストーリーの底に足を突っ込んだようです。

「そしてその女史、確かクレスティアと申したか」

お、おおっ？

「は、はい。私がクレスティアです」

図らずも私にまでイベントが波及してきました。

「そんな騎士見習いアルガス殿の使用人と聞く。本来、この場に立ち入れる身分の者ではないのだが……」

それを聞いて、キラとクラウスさんが私にばつと顔を向けました。これは一大事。まさか私、ここで処断ですか？ 冗談じゃありませんよそんなこと。

「ここガリオン又領において、そなたには従騎士相当の位を与える。アルガス殿を上官とし、その任を全うするように」

「は、はい。かしこまりました」

「アルガス殿もよろしいか？」

アルガス君、立ち上がって。

「ははっ！ そのように取り計らいます。閣下！」

きつちり90度の角度でダイスダーグさんにお辞儀しました。

何ということでしょう。登場人物の端っこにいる私にまでこんなイベントが降って沸いて来るとは。今すぐにでも感嘆の涙を流したい気分です。ですが平常心、平常心。

「うむ、では下がるがよい……」

私たちは立ち上がり、お二人に一礼して応接室を退室しました。

やったー！ クラウスさんともかくとして、ただか使用人風情の私まで取り立ててくださるとは。ダイスダーグさん、なんてご慧眼をお持ちなのでしょう、と言ったら失礼でしょうか。

それはともかくとして、私は感謝と感動を胸に秘めながらイグース城を後にするのです。

side：ダイスダーグ・ベオルブ

「申し訳ありません」

私は単刀直入に、それだけをラーグ公に申し上げた。

「気にするな、ダイスダーグ」

ラーグ公もまた一言で、この件を取沙汰にされなかった。

そのまま言葉を繋ぐように続ける。

「所詮、ギユスタヴもその程度の男だったということだ」
それには私も同意する。

騎士崩れのギユスタヴにしてはまあよくやったということだろう。
「侯爵誘拐がガリオンヌ領で行われた時点で、計画変更は避けようが
なかったのだ……」

ラーグ公は続けた。

「それに侯爵の命を助けたのは事実。こちらの要求に対して侯爵側も
妥協しないわけにはいくまい。結果として、貴公の弟君の行動は我々
を有利な立場にしてくれた……」

私は手を組みながら独り言ちるように、しかしラーグ公にも聞こえ
る程度の声で答える。

「国王の命もあとわずか……。事を急がねば……」

ラーグ公が私から顔を背けたまま。

「ああ、期待しているとも。我が友よ……」

それだけ仰られた。

side:キラ・シルベント

「……これでクレスティアもクラウスも、ブレイブストーリーの仲間
入りだね」

「なんだ？ あんまり嬉しそうじゃねえな」

クラウスの言葉に私は俯うつむきながら、首を横に振った。

「きみには大した心配はしてないよ。ただ、クレスティアはね……」

「クレスティアがどうした？ おまえら、友達同士で長いんだろ？」

「あの子はあるで危なっかしいところがあるから……」

不意に後ろから「おくい」という元気な声が聞こえてきた。

「なにになに？ 何かの内緒話？ 私も入っていい？」

騎士見習い相当の身分が与えられたことにご満悦なのか、やたらと

活気にあふれた声を上げながら私たちに近寄ってきた。満足そうなのはその顔を見るだけでよく分かる。

「いつになくテンションが高いね、クレスティア」

「そりやそうだよ！　これで私もキラやクラウドさんたちと一緒に戦うことが出来るんだもの。興奮しない方がおかしいって！」

「うん……そうだね。でもあんまり無理しちゃダメだよ」

「なんだかキラはテンション低いね。どうしたの」

「おまえのことが心配なんだとさ」

クラウドが口を挟む。

「まあ、ね……」

私は妙に頭の中が冷え切っていて、ああでもないこうでもないとい二人の会話に適当に相槌を打っていた。

そこに。

「おい、クレスティア」

声の方に向くと、そこにはアルガスがそれはそれは偉そうな態度で立っていた。クレスティアに用がある時は大抵こんな感じだ。

「はい、どうされましたか？　アルガス様」

「おまえ、ちよつとついて来い」

「かしこまりました」

そのままアルガスはのっしのっしとそれはそれは偉そうな姿勢で歩いていった。

「ごめんね、キラ、クラウドさん」

「いや、いいよ。その代わり私もついていいかな」

「おう、オレもだ。なんかアルガスの態度が気にかかる」

「？　まあ別にいいんじゃないかな」

言いながら、アルガスの後に続いて歩いていく。

数分ほど歩いたところで、アルガスが建物の中に入ってしまった。表の看板には剣と盾が重なった模様が見える。武器屋のようだ。

アルガスが振り返る。クレスティアを見たのだろうが、私とクラウドが付いてきたことに今頃気付いてかどこか苦虫を噛み潰したように、眉間にしわを寄せる。失礼な。

それだけで、特に何も言わずに武具屋の中に入っていく。

中を覗いてみると、ちょうどアルガスが支払い所で荷物を受け取ったところだった。

クレスティアにその荷物を押し付けて。

「着ろ」

荷物を受け取ったクレスティアはポカンとした表情でアルガスを見つめ直した。

「これからおまえはオレの専属騎士となる。その小汚い使用人の格好を捨てて、これからはそれを身に付けろ」

クレスティアが満面の笑みを浮かべる。本気でアルガスに敬意を払っているのだろうか。この子は。

「早くしろ！」

せつつかれてクレスティアは急いで試着室に入ってしまった。

「ねえ、アルガス」

クレスティアが着替えている間、私はアルガスに話しかける。

「なんだ」

「クレスティアに前衛を任せても大丈夫だと思う？」

「何言ってるんだおまえは」

地面に唾を吐き捨てるように、私の言葉を否定した。

「ダイスターグ閣下の命令だぞ。あいつにはこれまで以上に働いてもらわなきゃならねえ。大丈夫もくそもあるか」

道理で。

アルガスにしては随分と準備が早いと思った。こいつも自分の専任騎士が出来て心の内では舞い上がっているんだろう。見習いだけど。

「おまえはやけに曇ってやがるな。そんなにオトモダチが前衛で戦うのが心配か？」

珍しくアルガスが水を差してくる。

「心配は心配だけど、戦うことの方じゃなくてね……なんか危なっかしいんだよ」

「クラウス殿もか？」

クラウドが私の同意派なのか見極めるためか、聞いてくる。

「オレはキラがなんでクレスティアを祝福しないかわからないんだが、こいつが言うからにはそうなんだろう」

「キラ、はつきり言えよ。一体何が心配なんだ」

「……やっぱり言葉にはならないな。忘れてくれていいよ」

それきり、アルガスは私から顔を背けて無言になった。

ちよūdō 武具の試着が終わったクレスティアが試着室から出てきたところだ。

簡素だが、騎士として見栄を張るには充分に似合って見えた。なめた革に薄い金属の胸当て、下半身も緩く鎖が巻いてある装飾で簡単に脱ぎ着出来るようになっていゝる。革のブーツもそれらに彩りを与えていた。

アルガスが満足気な様子で。

「まあいいだろう」

それだけ言って、さっさと武具屋を立ち去っていった。

クレスティアはキャツキャとはしゃいだ様子で、こちらはこちらで満足そうにしている。

「どう？ キラ。似合ってる？」

クルリと回って白いマントをたなびかせる。

「そうだね。一端の騎士に見えるよ。」みならい”の四文字が付くけど」

「えーっ、キラだってそうじゃない。酷いですよね？ クラウスさん」

「まあそうだな。オレはおまえらと違って正式な騎士だし」

胸を反らしてえぼるクラウドに。

「きみは見栄っ張りが過ぎてて見ていて痛々しいよ」

私は冷や水を浴びせてやった。

「うぐっ……言うねえお嬢さん」

クレスティアは口を尖らせて、クラウドが言い淀む様子よどを眺めながら、私は思った。

なんだかこれまでとは違っう。

私の嫌な予感よどは、特に理由もないのに頭の中で膨らんでいき胸をき

しませる。

明日からの骸旅団討伐任務はただでは終わらない。
そんな確信が膨らんでは消えていった。

骸旅団の女剣士

side：ミルウーダ・フォルズ

骸旅団のアジトの一つ。

マンダリア平原の南に位置する海岸際の小屋で、元は漁師が漁の折に拠点として開設したものだ。

増改築を繰り返したものの、増え出したモンスターや野盗に脅かされ、五十年戦争の際に放棄された。

そうして残されたのは、わずかに雨を凌げる屋根と海水に晒された板っ切れの床。

そこが、私たちミルウーダ率いる骸旅団の基地だった。

何故こうなったのだろう。

私たちは兄さんに付いて貴族と戦うことを選んだ義士だ。五十年戦争の末期にも”骸騎士団”という名で勇名を馳せた勇士だった。

そんな、国を守るために戦った私たちを貴族たちは褒賞も働き口も与えず、着の身着のまま社会へと放逐した。それに対し、剣を取って貴族と戦う道を選んだのが私たち骸旅団。

しかし平民から成った私たち骸騎士団と、練度が高く数も勝る貴族とでは戦いにすらならなかった。時折暴走した団員が盗賊として始末されるだけだ。

本当に、どうしてこうなったのだろう。

「そう、本隊との連絡も途切れたのね。私たちも、もうおしまいのよね……」

士気は落ちに落ち、届けられる報せも悪いものばかり。

死ぬと分かって奮闘しろというのは一矢報いて一人でも多く敵を道連れにしろと言われているに等しい。

だが、それを分かかってかないか、発奮している団員もいる。

「なに言っているんですか！ 戦いはまだ終わってないじゃないですかッ！」

「そうですよ。やつら、貴族どもが我々に謝罪するまで続くんですッ

！」
二人の魔道士の子たちが、それでも貴族と戦おうと私を叱咤激励する。

この子たちの氣勢に伝えてあげたい。しかし無理なものは無理だ。まず私たち、骸騎士団に必要なのはスポンサーだった。

腹いっぱい食べられるもの、安心して寝る所、そして私たちに物資を供給する者。これらがあつて初めて私たちの活動は盤石になるのだつた。

だけど兄さんはそれを無視した。己の力で革命を成すのだ、と。生憎、理想だけでは私たち平民が貴族に立ち向かうのが無理だった。実行して、初めてそれを実感した。

それでも兄さんはそれすら無視した。

理想を追い求めるだけで、最後の一兵になるまで骸騎士団を使い潰す気なのかと、本気で疑うほどになるまで、骸騎士団は思想も理念も失われていった。

「兄さんの……、兄さんのやり方が甘いから……」

それでも私はまだ抗う気力が残っている。

まだ兄さんを信じるだけの、貴族に対して憤るだけの義憤は残っていたのだ。

だから、まだ戦える。

「て、敵襲ッ!!」

見張りが敵の襲来を叫んだ。

ついに来たか。私は剣を手に立ち上がる。

「来たわね……」

私は残った戦意を胸に、皆に指示を出す。

「援軍なき籠城戦よ。勝利することはまず不可能。私が前衛に出て殿になる。負傷者を中心に動ける者はそれを助けてただちに撤退すること。戦える者はその時間稼ぎをする。いいわね、生き残ることこそ私たちの勝利よ!!」

無謀な戦いだ。

しかし私の鼓舞を受けて、砦の中にいる旅団員は「応ッ！」と氣勢を上げた。

side：ラムザ・ベオルブ

敵の戦意は高くない。豪雨の中の強行軍による強襲で敵の戦意を挫くことが僕やアルガスの狙いだった。

だが斥候が遠目に見たのは、敵は戦意高揚しているという報告だった。援軍のあても勝ち目もない籠城戦だというのに、この士気はいったいどういふことだ。

デイリータだけはこの作戦に反対の異を唱えていた。「窮鼠猫を噛む。油断も慢心もせず、隊の準備を万全にして正面決戦を仕掛けるべきだ」と。

しかし悲しいかな。最終的に僕とアルガスの意見を取り入れたのも彼だった。ベオルブ家末弟の副官という地位が邪魔をした。本当なら、僕がデイリータを信じるべきだったのに。

「侯爵様を救出できたのもラムザたちのおかげだ。この作戦が終了するまでは手伝うぜ！」

しかし、自分の作戦が採用されたのが嬉しかったのか、アルガスだけは意気軒昂としていた。

戦闘が始まった。

骸旅団の正騎士だ。それも士気が高いとあらば決して油断できる相手ではない。

僕らは強行軍の疲れを押し、数の差を以て敵を押し潰すことで敵勢を挫くことになった。凶らずもデイリータの疑念通りの結果だ。

敵勢はやけに少ない。無論、後ろに残された骸旅団が待機しているだろうが、先陣を切ってきたのは少数の兵と、リーダーらしい女騎士

だけだ。

「どうやら相手は持久戦に持ち込む腹積もりのようだ。すでに敗北を悟っているのか、リーダー自ら前衛に出て残りの敵を一人でも多く戦場から逃すのが目的らしい。」

「僕が女剣士と斬り結ぶ。周囲ではデイリータたちが散開した敵兵の駆逐に当たっていた。」

「女剣士が予想以上に強い。彼女自身だけでなくそれをサポートする魔道士たちとの連携で、女剣士が一人で押しまくってくる。このままでは彼女一人のために砦攻略を諦めざるを得ないかもしれない。」

「だがそれは無理な相談だ。」

「ダイスダーク兄さんに任せられたのだ。決して朗報以外の報告を伝えることは出来ない。」

「結局、女剣士一人を相手にしているだけで、他の傷ついた敵兵が間隙を縫って砦を撤退していく。一兵でも生き残らせるのがこの女剣士の役目か。敵ながらあつぱれだと僕の眼に映った。」

「やおら、そのリーダー格の女剣士が声を張り上げた。」

「貴族がなんだというんだ！ 私たちは貴族の家畜じゃない！」

「渾身の叫びだった。女剣士は僕と剣を結びながらも叫び続ける。」

「私たちは人間だわ！ 貴方たちと同じ人間よッ！ 私たちと貴方たちの間にどんな差があるっていうの！？」 生まれた家が違うだけじゃないの！」

「そうだ。生まれた家が違うだけだ。だがそれが僕らとの戦いの、何の理由になる？」

「ひもじい思いをしたことがある？ 数ヶ月間も豆だけのスープで暮らしたことがあるの？ なぜ私たちが飢えなければならぬ？ それは貴方たち貴族が奪うからだ！ 生きる権利のすべてを奪うからだッ！」

「なぜだって？ 盗賊に墮落することを選び、真面目に働くことを放棄したきみたちに非があるんじゃないのか？ それがどうして、僕ら貴族のせいになるんだ？」

「同じ人間だとう？ フン、汚らわしいッ！」

斬り結んでいる僕らの横から、アルガスが叫び返す。

「生まれた瞬間からおまえたちはオレたち貴族に尽くさねばならない！ 生まれた瞬間からおまえたちはオレたち貴族の家畜なんだッ!!」
捲まくし立てるアルガスに不快感を覚えながらも、彼の理屈はそれなりに通っているように思えた。

僕ら貴族と平民の間に、貴賤の差があるのは純然たる事実だ。だからこそ、貴族は平民を守らねばならないし、平民は貴族に仕えねばならない。

少なくとも我がベオルブ家はその規範となるべく、民草を統率している。

女剣士がアルガスに叫び返す。

「誰が決めたッ!? そんな理不尽なこと、誰が決めたッ！」

「それは天の意志だ！」

天の意志？ 僕はアルガスの答えに首を傾げざるを得なかった。この社会体制はあくまで人間が作ったものであり、その”法”を守ることで成り立つもの。

アルガスの言う”天の意志”とはいささかの外的な印象を受けるしかなかった。

「天の意志？ 神がそのようなことを宣うものか！」

女剣士は当然のごとく反論した。

「神の前では何人たりとも平等のはず！ 神はそのようなことをお許しにはならない！ なるはずがないッ！」

その言葉を、アルガスはばつさり切り捨てた。

「家畜に神はいないッ!!」

アルガスの傍若無人なそのセリフに、女剣士が絶句する。

「ラムザ、彼女は本当に僕らの敵なのか……?」

豪雨の中、デイリータの小さな呟きが、何故か深く耳に残った。

女剣士と斬り結んでいる間に、敵兵はほとんど撤退してしまい、討ち取れたのはほんの数名だけだった。

しかし勝利は勝利だ。

僕らはこの砦から、骸旅団を退けたのだから。

孤軍奮闘していた女剣士は、戦闘の疲れと緊張感に圧されてついに膝を突いた。僕は剣先を彼女に向けて勧告する。

「おとなしく剣を棄てるんだ。抵抗しなければ命だけは助けよう」

女剣士は僕らに生殺与奪の権利を奪われ、傷付いた体を圧して叫ぶ。

「殺せ、殺すがいい。我々はどうせ家畜なんだ……、殺せッ！」

僕にはもう、彼女を殺すだけの理由がないように思っていた。

「それほどまでに僕らが憎いのか……？」

躊躇する僕の横から、アルガスが叫ぶ。

「ラムザッ！ やれ！ 殺すんだッ!!」

僕には彼の叫びが空回って、中空を飛び回る虫の羽音のように聞こえる。

「こいつはおまえの敵だ！ ベオルブ家の敵だ！ わかるか？ おまえの敵なんだよ！」

敵。それは分かる。

だけど僕の感情が、彼女は本当の敵ではないのではと躊躇させる。

「こいつは敗者だ。人生の敗者だ！ 敗者を生かしておく余裕はどこにもない！」

骸旅団の女剣士。字面通り彼女は生き残る価値のない、人生の敗者。骸旅団に属した時点でそうなるのは明白だった。

「殺せッ、ラムザッ！ おまえがその手でやるんだッ!!」
だが。

「ラムザ、僕には彼女が敵とは思えない……」

横合いからデイリータが僕に向かって呟いた。

「なんだと？ 気でも狂ったのか、デイリータ？」

アルガスが劍幕を鋭くし、デイリータに牙を向ける。

それを無視してか、デイリータは続けた。

「彼女は家畜じゃない……。そうさ、僕らと同じ人間だ……」

「裏切るのか、デイリータ!? やはり、おまえは……!!」

やはり、何だというのか。

そんな一幕をよそに、女剣士が立ち上がる。

「情けをかけるのか。なめられたものね……」

僕は思った以上に彼女に感情移入してしまっていたらしい。もう僕には彼女を殺すだけの選択も理由も存在していなかった。

「あなたが、あのベオルブ家の一員である以上、あなたは私の敵よ。それを覚えておくといいわ……」

「情け?」

不意に聞こえた声は、いつの間にか僕の隣に立っていたクレスティアのものだった。

「かけませんよ、そんなもの」

彼女が女剣士の首筋に剣を当て、大きく上段に振りかぶる。

「! よせ! クレスティア!!」

言うが早いのか、キラがクレスティアを羽交い絞めにした。

「キラ!? 離してッ!!」

クラウスさんもクレスティアの前に立ち塞がる。

「行けッ! さっさと逃げろ! ミルウーダ!!」

ミルウーダと呼ばれた女剣士は一瞬だけポカンとクレスティアの剣を眺めたが、すぐに傷を圧して砦からゆっくりと去っていった。

「デイリータ、僕らは……?」

何気ない呟き。僕は彼女たち骸旅団にどう対していいか本気で分からなくなってきた。

デイリータは僕の呟きを聞いて同じ思いに囚われたのか、無言で眼をつむり、首を横に振った。

「キラ……どうして……?」

クレスティアが呆然と呟く。

「チツ、どいつもこいつも……」

アルガスが地面に唾を吐いた。
終わってみればなんとも呆気なく、ただ後味の悪い感覚が残っただけだった。

side：アルマ・ベオルブ

ラムザ兄さんが盗賊の砦を攻略中。ベオルブ邸にて。
私たちは突然の盗賊団の強襲を受けた。

ティータがチョコボに乗った盗賊に抱えられ、拉致されてしまう。

「イヤッ！ やめてッ、離してッ!!」

彼女の悲痛な声だけが風に乗って私の耳に届いた。

「早くしろッ!」

チョコボに乗った骸旅団の盗賊が叫ぶ。私もまた、盗賊の一人に腕を引つ張られ、連れ去られようとしていた。

「痛いッ! 手を離してッ! 兄さんッ!!」

その時、ザルバッグ兄さんがベオルブ邸から走り寄り、私の腕を掴んでいた盗賊を斬り倒す。

「チッ、ここまでかッ!!」

盗賊が叫び、チョコボを走らせて撤収した。

「大丈夫か、アルマ?」

ザルバッグ兄さんが私の無事を確かめた。

「ええ、私は大丈夫。それよりティータが……」

「ああ、わかつている」

そう言った直後、邸から負傷したダイスダーグ兄さんが姿を現した。

「兄上ッ!!」

ザルバッグ兄さんと私がダイスダーグ兄さんに近寄る。

重傷だ。本当ならもう立っているのも辛いだろうに。

「わ、私は大丈夫だ……。アルマは……。無事か……?」

「はい、なんともありません。ひどい怪我……」

苦しげに、ダイスダーグ兄さんが独り言ちる。

「ま、まさか、ここを襲撃するとは……。私を狙ってきたか……」

「5人程やられました……。ティータもさらわれてしまいました」

ザルバツグ兄さんが現況を伝える。

「やつらを追え……。草の根を分けても捜し出せ……」

「兄さん、もうそれ以上、しゃべらないで!」

ぜえぜえと荒く息をつきながら、ダイスダーグ兄さんは憎々し気に
呟いた。

「骸旅団め……」

それだけ言っつて、ダイスダーグ兄さんはその場に倒れ伏す。

「兄さん、兄さんツ、しっかりしてツ!」

「誰かツ! 誰かいないのかツ!!」

ザルバツグ兄さんが邸に向かって大声で呼ばわった。

この時点では私は知らなかった。

今、起こった誘拐劇が歴史を左右する転換点にまで発展すること
に。

怒りのデイリータ

side：ラムザ・ベオルブ

砦攻略の朗報を持ち帰った僕らを待ち受けていたのは、ダイスダグ卿暗殺未遂という前代未聞の凶報だった。

「敵のアジトを落としたそうだな……。よくやった……」

ダイスダグ兄さんがベッドに体を横たえながら僕らをねぎらう。

「あとは、ザルバツグに任せてゆつくりと休むがいい……。ご苦労だったな……」

心配する僕の眼を見て、ダイスダグ兄さんが呟く。

「心配するな……。たいした傷ではない……」

実際ダイスダグ兄さんの傷は塞がりつつあり、起き上がることが出来るのも間もないように思えた。

しかし。

「兄さん、ティータは……。ティータはどうなるんですか……?」

傷が癒えていくダイスダグ兄さんより、僕の心配はそこに向かっていた。

「……やつらの本拠地を発見次第、ザルバツグが総攻撃をかける」

デイリータが思わず一步踏み出そうとした。それをキラが手で制する。

「そ、そんな……!!」

僕は思わず叫び出しそうになった。自制できたのはダイスダグ兄さんと、仲間たちの眼があつたからだろう。

「骸旅団はもうガタガタだ。逃がっている者も数十人しかいない」

北天騎士団の強襲を受けた骸旅団はもはや隊の体ていを成いしていないなかつた。実際、壊滅するのも今にも見えていた。

「頭目のウィーグラフは未だに捕らえていないが、それも時間の問題だろう……」

僕はそんなダイスダグ兄さんに疑念を呈した。

「ティータを……。ティータを見殺しにするんですか?」

しかしダイスダグ兄さんは僕やデイリータを安心させるように

語って聞かせた。

「心配するな。手は打ってある」

　　ダイスダーグ兄さんが呟く。

「ティータの身柄を取り戻すまでは総攻撃などはせん。絶対にな……」

　　僕はほっと胸を撫で下ろした。

「実の妹のように想っているティータを見殺しになどするものか……」

　　そう結んで、ダイスダーグ兄さんは眼を閉じた。

side：キラ・シルベント

　　ダイスダーグ卿との謁見が終わり、ベオルブ邸内を歩く私たち。

「私たちが盗賊の砦の攻略中に、ティータがさらわれた、か……」

「ホント、ゲーム通りになっちまったな」

　　クラウドの軽口に、私は彼の眼を睨みつけた。

「そんな言い方はないだろう。少なくともティータの前でそんなことは口にするなよ」

「わかってるっての」

　　対してクレスティアはどこか満足気な面持ちで呟く。

「でもこれでブレイブストーリー通りになったよね。ミルウーダさんもきつとレナリア台地で遭遇するだろうし」

「……何が言いたい？」

「だってここからティリータ君の暴走が始まるわけでしょ。みんなと一緒に見に行けたらなあ」

「きみは!!」

　　思わずクレスティアに向かって壁ドンする。キョトンとした表情で見つめ返してくるクレスティア。

「え、なに、なに？ 私、おかしいこと言った？」

「おかしくないはずがないだろう！ このままだとジークデン砦でテイータが犠牲になるんだぞ!!」

「だって、それがブレイブストーリーの新たな始まりでしょ？」

テイータさんがその礎になるのは仕方がないことなんだよ」

「きみは盗賊の砦の一件からおかしいぞ！ そんな無駄な犠牲があつてたまるものか!!」

「そうかなあ」

暢気に呟くクレスティアに、私は怒りを覚えた。

絶対にテイータを見捨てたりしない。私はブレイブストーリーに背こうと、決意を固めていた。

「おい、見ろよ」

クラウドが窓の外に視線をやる。玄関から出た先で、ラムザとテイータが言い合いをしていた。

side：ラムザ・ベオルブ

「待てよ、テイータ。どこへ行くこうっていうんだ。とにかく、落ちつけよー!」

僕の言葉に、テイータが反駁する。

「落ちつけだど？ 落ちついていられるものかッ!」

テイータが怒りの表情で僕を睨む。

一步を踏み出そうとする彼を僕は制した。

「どこにいるかもわからないんだ！ あてもなく捜したって意味がないよー!」

その言葉に憤激してか、唐突に僕の胸ぐらを掴み取る。

「意味がないだど!? たった一人の妹なんだぞ!!」

怒れるテイータを説得するように、僕は必死に抗弁した。

「に、兄さんも……言っていたじゃないか……。テイータを見殺しには……しないって……と……に……かく……今……動いても……く、苦しいよ……」

ハツとしたデイリータは頭が冷えたのか、怒りを抑えて僕の胸ぐらから手を離す。

「すまない、ラムザ。大丈夫か……？」

「あ、ああ……。ゴホツ、ゴホツ……」

ガタンと音を立てて、ベオルブ邸の玄関が開いた。

アルガスを先頭に、キラたちが邸の外に出てくる。

「オレは、絶対”なんて言葉を”絶対”に信じないけどな」

アルガスの不遜な物言いに、僕は尋ね返した。

「兄さんが嘘をついているとでも？」

「ああ、オレだったら、平民の娘を助けるなんてことはしないな」

「なんだと……！」

アルガスの言葉に再び憤慨するデイリータ。

「おまえたち平民のために兵など動かさんとやっているんだ!!」

「き、貴様ツ!!」

ゴツ!!

血が頭に昇ったデイリータがアルガスを殴り飛ばす。

「よせツ！ デイリーター！」

僕は思わず、デイリータを羽交い絞めにしていた。

「離せツ！ 畜生、離せツ!!」

殴られた口元を拭い、アルガスは続ける。

「フン、やっぱり平民は所詮、平民だ。貴族になれやしないツ！」

アルガスが立ち上がる。

「デイリータ、おまえはここにいちやいけないヤツなんだよ！ わか

るか、この野郎ツ！」

「言わせておけばツ!!」

僕を引き剥がそうと、再度もがくデイリータ。僕は必死にそれを引き留めながら二人に向かって叫んだ。

「やめろツ！ デイリーター！ アルガスもいい加減にしろツ!!」

アルガスは両手を広げ、滔々^{とうとう}と語り始める。

「ラムザ、目を覚ませ。そいつはオレたちとは違う」

その一言一言が癩^{かん}に障る。アルガスが何を言おうとしているのか、何を言わんとしているのか。痛いくらいに分かってしまっている自分がどこかにいる。

「わかるだろ、ラムザ。オレたち貴族とコイツは一緒に暮らしてはいけないんだ」

「ばかな！ デイリータは親友だ。兄弟みたいにして暮らしてきたんだ！」

頭に湧いた戯言を封じ込めるように、僕は叫んだ。

「だからこそ、目を覚ませ。友だちごっこはもうおしまいだ」

ごっこ呼ばわりされて僕の頭にも怒りが沸いてくる。

「きみは名高きベオルブ家の御曹司だ。貴族の中の貴族だ。コイツと一緒にいちゃいけない。少なくとも、きみの兄キたちはそう思っているはずだぜ！」

デイリータが僕を突き放し、叫び返した。

「おまえみたいな貴族ばかりじゃない！ オレはラムザを信じる！」

そのまま邸を後にする。

僕はアルガスに向かって怒声を上げた。

「僕の前から消えろ！ 二度と現れるなッ!!」

アルガスは平然と首を横に振って。

「つれない言葉だな。仲間じゃないか」

僕は一步、アルガスに詰め寄った。

「二度は言わないぞ！ さっさと行けッ!!」

やれやれといった風情で、アルガスが僕を横目に歩き出す。立ち去りかけて、奴は僕に向けてメッセージを残していく。

「やつらの本拠地はジークデン砦だ。きみの兄キに聞いたよ」

ジークデン砦。年中、吹雪が吹き荒れる極寒の地形か。

「もつとも、正面からは近づけないぜ。幾重もの警戒線が引かれているとき。裏から攻めるしかないな」

コイツは僕の反応を楽しんでいる。こんなセリフを残していけば

きつと僕らは動くだろう。そう思い込んで。

いや、もうこの時点で僕がどう動くかはお見通しのようだった。

「ま、せいぜい、頑張ってくれよ。甘ったれた御曹司さん」

「失せろッ!!」

憤慨する僕に、奴は肩をすくめて立ち去っていった。

「……醜いものを見せたね、三人とも」

「気にすることはないさ。今のは圧倒的にアルガスが悪い」

キラが僕を慰めるように言いなだめる。

「で、どうするんだい？ もう答えは決まっているんだろうけど」

「ああ……」

「手伝うよ」

「すまない、キラ」

キラに続いてクラウスさんも口を開いた。

「オレも行くぜ。きみたちを放ってはおけないからな」

「クラウスさん……」

僕は本当に仲間にも恵まれているな。そう信じて、クレスティアに眼を向けた。

が。

「私は行けません」

きつぱりと拒絶の意思を見せた。

「皆さんの心情には同情しますが、私にはアルガス様の副官という立場があります。お許しを」

クレスティアの言に、キラは少し戸惑いながらも言い繕った。

「そうだね……後方支援に回ってもらった方が、私も安心できる」

「武運を」

それだけ告げて、クレスティアもまた邸を後にした。彼女の最後の言葉には、僕たちを激励するような意思は見られなかった。

「んで、これからどうする?」

クラウスさんが僕に向けて口を開く。

「アルガスが言っていました。骸旅団の本拠地はジークデン砦。そこに辿り着くには砦の裏側から攻めるしかない」と

「先回りしよう。デイリータもいずれその答えに辿り着くはず。イグーロスの入口で彼を待とう」

キラの言葉に、僕は頷いた。

side: クラウス・マツケンロー

オレは懐から懐中時計を取り出し、刻まれる時間を幾度となく眺めていた。

おせえ……

実はもう先にこのイグーロスを後にしてるんじゃないだろうな。

あのデイリータならあり得る話だったとしても、別にオレは驚きやしないぞ。

「来た」

オレの心配も束の間、デイリータが城門に向かって早足で駆けてきた。

キラが手を振ってオレたちの存在を見止めさせる。

「おまえたち、どうしてここに……」

「デイリータを探しに行くんだろう？ 手伝うよ」

ラムザが朗らかな口調で、どこか安心させるような声音で声掛けた。

「スマン、だがデイリータをさらった賊がイグーロスからどこへ消えたのか、それ以上の情報がないんだ」

「ああ、それなら……」

言って、キラはアルガスの残したメッセージを伝える。

「この後を追っていけばきっとデイリータにも追い付けるさ」

「何から何まですまない。キラ、ラムザ。クラウドス殿も一緒に?」

「オレだけ仲間外れつてのもなんか落ち着かなくてな。王都の騎士としてきみを手助けするさ」

「ありがとうございます。クラウドス殿」

そうしてオレたちは最精鋭の4人として、一路ジークデン砦を指すこととなった。

side：デイリータ・ハイラル

時は夕刻。オレとラムザはマンダリア平原の岩肌を背に、空を眺めていた。

「きれいだな。ティータもどこかでこの夕日を見ているのかな……」

「……大丈夫だよ、デイリータ。ティータは無事さ」

風がさあつと通り抜け、平原の草を撫でていく。

「……違和感は感じていたさ。ずっと前から」

ラムザがオレの方を見やる。

「アルガスの言ったことを気にしているのか?」

「どんなに頑張ってもくつがえせないものがあるんだな……」

「そんなこと言うなよ。努力すれば……」

そこまで言っつて、視線を外して黙り込んでしまう。

「努力すれば將軍になれる?」

オレは純粹に、疑問としてラムザに投げかけた。

「この手でティータを助けたいのに何もできやしない……。僕は……」

——”持たざる者”なんだ。

ラムザは何も答えない。それが雄弁に、オレの言ったことが正しいんじゃないかと暗に肯定しているかのように思えた。

オレは地面の草をむしり取った。

「おぼえてるか？ 親父さんに教えてもらった草笛を……」

草を口元に当てる。オレの草笛が、鮮やかな音色を立てて鳴り響いた。

ラムザを見やる。彼もまた同じように草をむしり取り、口に当ててみせる。

平原に、オレとラムザの草笛の音が響き渡った。

side：キラ・シルベント

私は平原の斥候役を買って出て周囲を探索していた。モンスターに襲われたら厄介だからね。

すると唐突に笛を吹くかのような甲高い音が平原に響いた。

ラムザとデイリータの草笛か。

二人の草笛が共に響くこのリリックなシーンは、されど二人の別れの時を告げる鐘の音に聞こえてしまう。

いや。

私は首を横に振った。

ゲーム通りにさせはしない。ゲームでは達成できないティータ救出を、今回は私が物語の一部として成し遂げてみせるんだ。

たとえばブレイブストーリーに傷が付こうとも。

私は再び決意を胸に、ティータ救出を誓った。ラムザもデイリータも、ティータも救い出し、そしてオヴェリアたち利用される者を助けられるように。

side : クラウス・マツケンロー

オレは二人の視界から避けるように、岩肌に隠れそこに背を預けて二人の草笛の音を聞いていた。

暢気なもんだねーと表面的には思いながらも、心中では二人の将来を先んじて気をもんでいた。

貴族と平民の差。それはいわゆる貴賤の差。

オレなんかのアンポンタンでも貴族として生まれれば貴族として扱ってもらえるし、もし平民だとしたら一生平民だろう。

貴族と平民とは違う。

そんなことはこの世界に来てから存分に味わってきた。

オレみたいなやつが貴族でいいのか？ 仮にそうだとしても、オレは何をすればいい？

アルガスの罵声が頭の中でこだまする。

アルガスとミルウーダ。二人はまさに対照的な存在だ。

平民を蔑視するやつ、貴族を憎悪するやつ。

そんな構造、いつそのことぶつ壊れちまえばいい。

オレみたいなポンコツには、貴族なんて地位、荷が勝ちすぎる。

こんなオレに出来ることは、多分、誰かの盾になつてその誰かのために死んでやることくらいしかない。

デイリータ。

ティータはオレが助けてやる。それが出来ないのなら、おまえはオレを踏み台にして助けてやってくれ。

そのためならこんな物語、いくらぶつ壊れても構いやしねえ。

だからせめて、おまえは道を違たがえてくれるなよ。

オレがおまえらに求めるのは、そういう都合のいい奇麗な物語だけなんだからよ。

暗躍

side：クレスティア・アルヴァン

私は城下町にくり出し、城下を散策していました。別にお仕事サボっているわけじゃないですよ？

むしろ任務の手すきの間にやらねばならないことがたくさんあるのですから。

夕方です。

オレンジ色が辺り一面の空と大地を照らしているそんな時刻。

ラムザ君たちはそろそろ草笛でも吹いてる頃でしょうか。

さてさて、時間も押していることですからさっさと捜さないで。あんまり遅くなっても先方に迷惑でしょうしね。

あちこち見て回って思いましたが、やっぱりイグーロスって広いです。すね。

お目当ての人物はさてどこへやら、と。

見つけました。

「アルガス様」

私が呼び止めたのと同時に目の前を歩いていたアルガス君が振り返ります。その顔は実に面倒くさそうな奴に引き留められたな、と不満たらたらかな表情をしていました。

こんな可愛い女の子にそんな眼を向けられるなんて、ちよつとプリンです。

「なんだ」

「折り入ってお話がございました、どうかお聞き願えませんか？」

「おまえが？ オレに？」

面倒臭そうな表情から胡散臭いものを見るような表情に変わります。プリン度がさらに増しました。

「悪い話ではありません。ちよつと小耳にはさんでいただければ、良いように取り計らいますよ」

あ、胡散臭い話だ。これ。ちよつと反省。

「いかがですか？」

アルガス君、一喝してくるかと思いましたが、どうやらどうするか考えている模様。アルガス君の専属騎士、副官という立場が効いているみたいですよ。使用人クレスティアではグーパンで終わってたでしょう。

「まあいいだろう。たまにはおまえのような奴の話聞いてやらんでもないしな」

さすがアルガス君。部下には寛大なその気質、嫌いじゃないですよ。

「ありがとうございます。それではそろそろお食事時ですし」

周囲を適当に見回し、それなりの食事処を探します。

ちようどいい所にそれはありました。

「あの店でなんていかがです?」

いかにも一見様お断りのフルコース料理店です。

食後のワインを呷りながら、アルガス君が赤ら顔で尋ねてきました。

「で、何の話だ」

もう酔っているのでしょうか。少しですがアルガス君の態度も気持ち柔らかめになっていっているような気がします。お酒って怖い。

「アルガス様、もうこのイグーロスでお顔見知りの方はいないでしょうか? ならここで一度改めて、栄達の道を当たってみてはいかがですか?」

「栄達、ねえ……」

私ではうまいことアルガス君を操作できているのか分からないのでちよつと緊張気味ですが、ここは乗ってもらわないと困ります。

「ラムザたちはオレと袂を分かったのは貴様も知っているだろうが。もつとも平民の娘を助けようなんて軟弱な連中、オレの方からお断りだけどな。それで?」

「ええ、なのでここは誰かに引いてもらうのではなく押ししていく方がいいと思います」

「押す、だと?」

「アルガス様には盗賊の砦を落とした武功があります。これを武器にしない手はありません」

「何が言いたい?」

胡乱気な視線で対面の私を見やります。

「要は顔見知り程度の方ではなく、戦功を評価してくれる人物に当たればいいのです。正当な評価をしてくれる人物に自分を売り出すのです」

「そんな便利な奴がいるか。第一、ダイスダーグ卿が仰っていただろう。ガリオンヌのことはガリオンヌの連中に任せておけばいいんだ」
心の中で私はふっふっふー、と悪い笑みを浮かべました。

「います。それはザルバッグ將軍です」

「ザルバッグ將軍、だと?」

「はい」

ここからが本番です。うまいこと誘導しないと。

「ザルバッグ將軍は北天騎士団の団長です。しかし今、北天騎士団は骸旅団討伐のため、各地に派遣されて今は將軍の周囲は手すきになっています。要するに、ザルバッグ將軍を補佐する役目の者がいないのです。この点について、將軍の与力の座を頂ければ、と考えまして」
ガタン。

「貴様、一体何を企んでいる?」

アルガス君が立ち上がり、椅子をこかして私を睨みつけました。
ちよーつとヤバい展開ですかね。これ。

「言え。場合によってはこの場で無礼打ちにするぞ」

店内が一時、ざわめき始めます。

さすがにこんな所で朽ち果てるのはイヤですし、何よりもお店の人に迷惑が掛かってしまいますしねえ。うまい言い訳は、と。

「簡単なことです。私、美味しいご飯が食べただけです」

「はあ?」

もういつそのことぶっちゃけて正直に話すことにしました。

「ザルバッグ將軍配下となれば外様といえど充分に高い地位になります。アルガス様がそうなれば、芋づる式に私もその恩恵を受けること

が出来ます。結果として、アルガス様はこのガリオンヌで栄達し、人材不足のザルバツグ將軍も強力な与力を得ることが出来る。私もこの地方で安定した衣食住を得られる。誰も損をしない素敵な計画だと思いませんか？」

「はっ、平民らしい泥臭い考えだな」

アルガス君はこかした椅子を元に戻し、ドカツと腰を下ろします。

泥臭いというより、地道な計画だと言ってほしいですね。

「だが面白い。いいだろう、おまえの計画に乗ってやる」

……ふうく。

なんとか第一段階はクリアです。

「善は急げだ。さっさと支度をしろクレステイア。イグーロス城へ向かうぞ」

「もう、ですか？」

「もう夕刻だ。今日中に済ませるなら今を置いて他にないだろうが」

さつと席を立ち出口に向かうアルガス君。あ、やっぱ支払いは私持ちなんですね。

支払いを済ませて急ぎアルガス君に走り寄る私。

「アルガス様」

「なんだ」

「私のような小物の話を聞いていただきありがとうございます。より一層、お家のために奮起する所存です」

「当然だ！」

そうして私たちはイグーロス城へ向かいました。まだお日様は落ち切っていない。今がチャンスですよクレステイア！

イグーロス城。

いきなり地方の騎士見習いがザルバツグ將軍に謁見できるはずもないので、私は衛兵の騎士さんを適当に丸め込んで、なんとか將軍の部屋に入ろうと画策します。

ここで使えるのが、いきなり姿を消したラムザ君たちの近況報告で

す。これにはザルバグさんも無視できないでしょう。

その旨を衛兵さんに伝えて、ザルバグさんとの謁見に臨みます。そして辿り着いたザルバグさんのお部屋。本来はダイスダークさんがこの部屋で執務に励んでいるのですが、未だ傷が全快していないため、代わりにザルバグさんが詰めているところです。

執務室の扉を、衛兵さんがコンコンとノックします。

「……何用だ。騎士団内部の乱れなら要項通りに済ませておけと言っただであらう」

いきなり拒絶的な返事を受けて、衛兵さんもたじたじです。

「いえ、それがランベリー領の騎士見習いが是非とも、將軍にお伝えしたいことがあるとのこと……」

「……入らせろ」

よつし、第二段階突破。後は最終段階をクリアするのみです。

が、果たしてうまくいくかどうか。じゃなかった。うまくやらねばなりません。私たちの明るい前途はここに集約されているのですから。

「失礼致します」

アルガス君と私は執務室に入り、ザルバグさんの前で跪き、敬礼の姿勢を取ります。

ザルバグさんは執務の手を止めることなく私たちと眼も合わせません。あ、ザルバグさん左利きだったんですね。まあそこはどうでもいいですけど。

「用件は何だ？」

「はっ、ラムザとデイリータのことなのですが」

アルガス君が口火を切ります。

「あいつらがどうかしたのか」

「デイリータの妹がさらわれたと知り、デイリータが独断専行に走りました。私とラムザがそれを咎めて説得を試みましたが、遺憾ながら失敗。ラムザもまたデイリータに唆そそかれて、彼についていった模様です」

「ここで一つ嘘を交えます。デイリータ君が単独で動こうとしたの

に対し、ラムザ君がそれを止めようとしたのは事実ですが、行けと言わんばかりにジークデン砦の情報を伝えたのは他ならぬアルガス君です。

ザルバッグさんがしきりに動かしていたペンを止めました。

「あの冷静なデイリータが？ ……いや、だからこそか」

ザルバッグさんが「楽にしてよいぞ」とお声をかけてくださったので、私たち二人はその場で立ち上がります。

「デイリータとティータは元は農家の出身だ。家族を黒死病で亡くしたところを我が父バルバネスが引き取ったのだ。その縁からラムザとデイリータは親友同士、兄弟同然のように育ち、デイリータもまたティータを目に入れても痛くないほどに可愛がっていた」

ガタ、と音を立てて立ち上がったザルバッグさんが窓から夕焼け空を眺めます。

「父は高潔な武人だな。兄ダイスダークはその武略と才覚を受け継がれた。対して私に与えられたのは戦いの術だけ。ならばとベオルブの正義の剣となることを志して今まで戦ってきた」

アルガス君に代わり、ここで私が答えます。

「天騎士バルバネス様のご活躍もザルバッグ將軍のご高名も、今ではイヴァリース全土に伝わっております」

「……だといいのだがな」

「やはりラムザ様も目の前の不正を許せない、正義の人なのでしょうか」

「よく見ているな。仮にラムザではなく、我が父だったとしても同じ行動を取ったに違いない」

「將軍はこの度の^{たび}のこと、いかがお考えでしょう」

「……骸旅団は王家に仇成す不忠の者ども、甘い顔はできん。たとえばアルマやティータが人質にされたとしても」

ここでザルバッグさんの本音が出ました。人質がいたとしてもせん滅作戦に私情を交えることはない、それでも、という葛藤。

私は事前に決めた合図をアルガス君に送ります。アルガス君がそれを受け取り、声を張り上げました。

「恐れながら將軍閣下！ 私を將軍の与力にお加えいただけないで
しょうか！ されば私が閣下の手足となり、不忠の輩を滅ぼしてみせ
ます！ それこそがラムザたちを支援する一助となると私は信じま
す!!」

ピタリとザルバッグさんの所作が止まりました。アルガス君の提
案にどう反応すればいいかお困りのご様子。

「ランベリーの騎士見習いの貴公が、か？」

やっぱそう来ますよねえ。ですがこの先の展開は読めています。

「いや、貴公には盗賊の砦を攻略したという戦功があつたのであつた
な。実力は既に裏打ちされているというところか……」

「ではー」

ザルバッグさんは頷いて。

「アルガス殿、貴公には私の権限で、このガリオンヌ領においては正騎
士相当の身分を与える。我が与力としてその辣腕を振るってもらい
たい」

「ありがとうございます！ 閣下！」

アルガス君、90度のお辞儀をして感謝の意を示しました。

「ふふっ、私も久しぶりに気持ちの良い若者と話すことが出来た。諸
君らの要件とはこのことかな？」

私は再び跪き、ザルバッグさんに応えます。

「將軍のご慧眼、痛み入ります。しかし上官アルガスと私は將軍の手
足。いかなご命令でも全うしてみせましょう」

「うむ、期待しているぞ。下がるがよい」

期待！ している！ さすがザルバッグさん！ ラムザ君には劣
りますがその高潔さに私は涙がちよちよ切れそうになります。おっ
と平常心平常心。

イグーロス城を出て数分歩いたところで、私は先の謁見を思い出し
ていました。

最終段階もクリアして、まさかここまで順当に事が進むとは私自

身、信じられない思いです。
と。

アルガス君が場末の酒場に何の躊躇もなく入っていききました。アルガス君にしてはあんまり似つかわしくないチョイスです。まあチーマー然とした態度にはお似合いのお店ではあるのですが。

「おいオヤジ！ エールを大ジョッキで二人分だ！」

言いながら、空いてる席にドカツと座ります。私も失礼して、その対面の席に腰掛けました。

「やったじゃねえか！ これでオレもここじゃ一端の騎士だ！ もう惨めな思いをすることはねえ！ 今日からはランベリーじゃなく、ガリオンヌの人間になってもいいくらいだぜ！」

「私も進言した甲斐があつたというものです。改めておめでとうございます。アルガス様」

「今夜ばかりはこんな店の安酒でもうまく飲めそうだ！ クレステイア、おまえも飲め！ うまい飯が食いたいんだろ!?!」

アルガス君、めちやめちや上機嫌ですね。まったくもって私も頑張った甲斐がありました。

ここまではゲーム通り。

これでアルガス君がジークデン砦へ向かう口実が出来ました。

あのジークデン砦での戦いを見逃す手はないですからね……

私は胸の奥底で含み笑いをこさえていました。

クスクスクス……

レナリア台地

side：ラムザ・ベオルブ

ガリランドの町を北に抜けると広大な台地が広がる。

行く者を拒み、去る者も閉じ込める不毛な大地。そこはレナリア台地と呼ばれている。

かつて悪魔が降臨し、イヴァリースを蹂躪したなどという過去のおとぎ話に代表されるように、ここは荒れ果てた土地だ。

だが人の心は強い。

過去、大勢の人たちが渡り、踏みしめ、そして一本の道が出来上がった。先人のたゆまぬ努力が自然の脅威を凌駕したのだ。

その一本の道を進めばジークデン砦の裏側に続く大きな平野が広がっている。

そして。

この一本道の先に進もうとする僕らの前に彼らは現れた。

骸旅団。

先の盗賊の砦で剣を結び合った女剣士——ミルウーダがそこにいた。

「ここも、封鎖されているのか……。我々に逃げ道はないということね」

傍らに立つ配下の女剣士が、絶望的な表情でミルウーダに提言する。

「もうあきらめましょう。おとなしく投降したほうが……」

しかしミルウーダは頑として聞かなかった。逆に喝を入れる。

「やつらに捕まるぐらいならここで死んだほうがマシよ!! だいたい捕まればそのまま処刑台行きなのよ! 戦うしか活路はないのよツ!

彼女らは剣を抜き、臨戦態勢に入った。

僕らも併せて剣を抜く。

今また不毛な戦いがここに始まった。

side: テイリータ・ハイラル

「ウィーグラフはどこだッ！ テイリータをどこへやった!!」

オレは決死の声で叫ぶ。こんな三下に用はない。どうあつても
テイリータの行方を知らねばならない。

「テイリータ？ ゴラグロスが人質にしたベオルブ家の娘のこと？」

剣士ミルウーダは他人事のようにそう言った。

「テイリータはオレの妹だッ！ ベオルブとは関係ないッ!!」

果たして話を通じるのかも分からない。ただ一言、”ゴラグロス”
という人物の名前だけはオレに残った冷静さが記憶していた。

「おまえたちがテイリータを人質にしても何の意味もない！ お願い
だ、妹を返してくれッ!!」

必死に嘆願する。そんなオレの姿は滑稽こっけいだったに違いない。ミル
ウーダが問い返してくる。

「貴方たちは返してくれるの？」

その声は非常に怜悧で、淡白なものだった。

「貴方たち貴族が、私たちから奪ったすべてのものを貴方たちは返し
てくれるの？」

嘲笑するように彼女は続けた。

「最初に奪ったのは貴方たち。私たちはそれを返してくれと願ってい
るにすぎない。だが、貴方たちは返してくれない。ただ、ひたすら奪
い続けるだけだ！ だから、私たちは力を行使する！」

オレは泣き言の中に怒りが沸いてくるのを感じた。

おまえたちが奪われたものが何だというんだ。それはオレの
テイリータと等価なものなのか。

「あきらめなさい！ 貴方の妹を返さねばならない理由はどこにもな

いのよッ!!」

脳裏にアルガスを殴ったあの感触を思い出した。

こいつもアルガスと同じだ。ただその方向が、貴族か平民かの違いだけで。

「貴様ッ……!!」

「落ち着け、デイリータッ!!」

飛び出そうとするオレを止めたのはキラだった。オレの眼前に腕を差し出し、制止させる。

「今は戦う時だ! 双方が剣を収めれば話し合いの機会は生まれる!

今は我慢するんだ!」

「ぐ……畜生ッ!!」

side:キラ・シルベント

戦いは大詰めに入った。

周囲には骸旅団の死体が転がり、私たちは一人も欠けていない。今までの戦いが私たちを錬磨したのか、単に骸旅団が比較して弱体化したのかは測りかねたが。

「ここで、私は死ぬわけにはいかない! 革命の途中で死ぬわけにはいかない!」

獣のごとき咆哮をミルウーダが放つ。

それに対して、ラムザが静かに語りかけた。

「革命といったな……。革命を起こす必要があるのか……?」

きみにはなくても骸旅団にはあるんだよ。彼らの言う革命が、果たして形を持った理想なのか、ただの悪事の詭弁に過ぎないのかはさておいて。

「僕らが悪いのか? 僕らがきみたちをを苦しめているのか? 何がいけないんだ……?」

「知らないということとはそれだけで罪だわ！ あなたが当然と思う世界はあなたに見える範囲だけ。でも、それだけが世界じゃない」

それならきみたちもラムザたち貴族に分かるように説明すべきだ。ただ剣を取り、貴族を弾劾するだけが方法じゃない。

「あなたが悪いわけじゃない。でも、現状が変わらない限り、私はあなたを憎む！」

きみたちの現状とはなんだ。

私には分かる。騎士として国を守ったことに対し、王家が苛烈な態度できみたちを迫害したことがきみたちの行動原理だろう。

だが、憎めば憎むほど理性は腐り果て、理想も朽ち、後に残るのは生存のためだけに他者を犠牲にする悪循環だけ。

「あなたがベオルブの名を継ぐ者である限り、あなたの存在そのものが私の敵ッ！」

ベオルブ家が敵だというのなら、そこにはどんなビジョンがあるんだ？ それでは所詮、貴族社会という大海に小石を投げ込むようなもの。きみたちは既に、肝心なものを見失っているんじゃないか？

傷つき、倒れ、それでも戦いは収まらない。

「私だつて骸旅団の戦士ツ!! 逃げたりするものかッ!!」

野獣のごとき気迫でミルウーダはただ一人、私たちを押しまくる。

「剣を棄てる、ミルウーダ！ これ以上の戦いは無意味だッ！」

そう、こんな戦いは無意味だ。

貴族は騎士団を率いて無情に骸旅団を抹殺するだろう。ここで局地的な勝利を得たとしても、そんなものはかすり傷に過ぎない。

ウィーグラフもそれは分かっているはずだ。

「剣を棄て、戦いをやめ、話し合おう！ どこかに解決策があるはずだ！ それを見つけよう！」

ダメだラムザ。解決策なんてどこにもない。

貴族が貴族である限り、平民が平民である限り。そして騎士が盗賊に墮したとき、社会はその処理機能を既に発揮している。それはただ無惨に害悪をすり潰すだけの単なる作業だ。

でもね、ラムザ。

「僕が兄さんに言おう！ いや、ラーグ公に言おう！ 僕を信用してくれッ!!」

私はそんなきみの青臭さ、嫌いじゃないよ。

side：ラムザ・ベオルブ

ミルウーダの剣が僕の剣に絡み合う。

一瞬でも気を抜けば、飛んでいるのは僕の首だろう。

何か、何か解決策は無いのか。

こんな戦いに何の意味があるんだ。

僕は必死に剣を重ねながら、それでも彼女を説得しようとする。だが。

「そんな甘言につられるものかッ!! おまえたちの嘘は聞きあきたッ!!」

「僕は嘘なんて言っていないッ!!」

再び双方の剣が噛み合う。鏝迫り合いとなった僕とミルウーダの剣戟の間に、一つの影が舞い降りた。

その影の剣閃が、僕らの剣に落ちて。

パキーン!!

ミルウーダの刃の根元が砕け散った。

「あッ……」

そこでミルウーダは覚悟した。多分、己の死を。

僕の剣が勢いのまま、彼女の首筋に滑り込む。

しまっ——!

キーンッ!

それと同時に、剣閃が再びきらめき、僕の剣をしたたかに打った。剣がヒュンヒュンと舞い、遠くの大地に突き立つ。

無手となった僕とミルウーダは、互いに凝視するだけだった。

「これで双方、剣はお収めだよ」

キン、と、キラが剣を鞘に納める音が響いた。

僕ら4人はミルウーダを取り囲み、剣を突き付ける。僕らの、勝利だ。

「これで私の戦いは終わったのね……さあ、殺せッ!!」

傷を負い、膝を突いたミルウーダは先の砦での戦いと同じく、殺せとだけ吼える。

そんな彼女を見て、僕は何も分からず、考えることも出来なかった。

「何故だ……どうして僕らはきみたちと戦っているんだ……?」

「言ったでしょう。貴方がベオルブ家の人間である限り、私の敵だ」ともはや彼女の野獣のような氣勢は失われていた。今ここにいるのはただ一人、力尽きた女剣士だけだ。

「ベオルブ家の者である限り、私の敵だと、きみはそう言ったね」

キラがミルウーダに聞いたです。

「ならきみは一体誰の命が欲しいんだ? ラムザかデイリータか。それともダイスダーグ卿かザルバツグ將軍。アルマか? ティータか?」

ミルウーダが俯きぽつぽつと語る。

「私は誰の命も欲しくはない。ただ貴族が貴族である限り、私たちは迫害され続けるだけ。私たちはそれを正したくて、剣を取った。この腐った世界を変えるために、ね……」

「馬鹿げてる……!」

デイリータが不意に声を荒げた。

「そんなもの戦いですらない。そんなことを実現するなら、それこそ貴族全てを皆殺しにでもするしかないじゃないか!」

「そうね……確かに、私たちがやろうとしていたことは馬鹿げてるよ

うに見えるでしょうね」

ミルウーダがハツと一つ空笑いを上げた。

「こんな戦いに意味なんか無いって、私も分かった。でもただ、貴族に謝罪をしてほしかった。無理を強いてごめんなさい、ってね」

「……僕がウィーグラフに謝罪すれば、彼は剣を収めるのか？」

僕の提案に対して、彼女は首を横に振った。

「きつと無駄でしょうね。兄さんはただ愚直に戦ってさえいれば理想は実現できると思っていた人だもの。兄さんもきつと、この戦いで骸旅団が壊滅することくらい分かっているはず」

「なら、どうして……!」

「私にももう分からない……ただ一人でも貴族を道連れにして玉碎しようとしても考えてるんじゃないかしら。ふふっ、我ながら滑稽ね」

彼女が自虐的に笑う。ならこの戦いの帰結はもう決まってしまうているんじゃないだろうか。骸旅団の壊滅、そして再び始まる貴族の支配による民衆の統制。

「結局、私たちはやり方を間違えた。間違えていなければ、私たちは勝っていたもの。だから」

彼女の眼がうるんだ。一筋の涙が零れ落ちる。

「もう嫌なのよ! 敵を殺すのも、仲間が殺されるのも! だから誰か教えてよ! 私たちはどうすれば良かったの!?! 何をすれば私たちは何を変えられたの!?! ねえ、誰か教えてよ!!」

両の手で顔を覆い隠し、彼女は堰を切ったように泣き散らし始めた。

わあわあと恥も外聞も捨てて泣き続けるその姿は、救国の義士でも王家に逆らう逆賊でもない、ただ一人の女性だった。

そんな彼女にキラが近付き、胸ぐらを掴み上げて。

パシン!

鋭く頬を打った。

「それだけ喚き散らして、少しは頭が冷えた？」

キラがハンカチを取り出し、ミルウーダに差し出す。受け取った彼女はそれで零れ落ちる涙を拭った。

「ミルウーダ、世界は残酷だよ。貴族は貴族である限り平民から搾取するし、食い詰めた民は盗賊に墮するしかない。それでも」

キラは決然と、彼女に言葉を尽くした。

「私たちは貴女に居場所を作ってあげられる。まずはそこから始められない。貴女の言葉はダイスダーグ卿にもラーグ公にも届かないかもしれないけれど、盗賊に墮した骸旅団に殉ずるよりはよっぽどいい」

キラの言葉に、彼女は涙ながらに口を開く。

「それを信用すると、本当に思っているの?」

キラはその言葉に堂々と言い放つ。

「ここにはベオルブ家の末弟とその貴族仲間、それに王都の近衛騎士もいる。貴女が私たちを信用できないと思ったなら、後ろから斬ってくればいい。それだけで貴族社会は大きな波に晒されるだろう。骸旅団に従わなければ、こいつらのようになるってね」

ミルウーダは涙を拭いながら、キラの言葉の一言一句に頷いていた。

「貴女、名前は?」

「キラ・シルベント。しがない地方貴族のお嬢ちゃんだよ」

「貴女の元でなら、私は生きていてもいいの?」

「それを決めるのは私じゃない。貴女自身だ」

ミルウーダがぐしぐしと腕で眼をこすった。もうそこから涙は流れていかなかった。

彼女はディリータに向かって、凜とした声音で口を開く。

「ついてきて。ゴラグロスがさらった貴方の妹の所に案内してあげる」

「本当か!？」

ディリータが驚きつつも喜色満面の複雑な表情で問い返した。

「今さら嘘を言っても仕方ないでしょう。でも、今度貴方たちが嘘をついたら」

キツと僕の眼に鋭い視線を投げかける。

「僕らの首を獲る、だろう? 今はそれで充分だ」

「ええ、だから」

ミルウーダが僕に手を差し出す。

「少しの間だけど、よろしくね。ベオルブの末弟」

「ラムザ・ベオルブだ。よろしく、ミルウーダ」

僕は彼女の手を強く握り返した。

side：クラウドス・マッケンロー

おいおいキラのやつ、本当にミルウーダを説得しやがったよ。

なんて考えてたら、へなへなとキラが地面に座り込んだ。

「なんつーか、マジですごいやつだったんだな。おまえって」

オレは素直にキラの説得に感じ入っていた。だが当のキラは殊勝なもので。

「これでもいっばいっばいだったんだよ。それにきみたちの命を勝手に担保にかけてしまった」

「だけどミルウーダは生き残って、オレたちの味方になった。これはひよつとして、ひよつとするかもな」

「ティータの事だね」

「おう、ゴラグロスの野郎を逃がさずに捕らえたら、晴れてハッピーエンドだ」

「その後にはまだまだ助けなければいけない人たちが大勢いる」

オレはコクリと頷いた。脳裏に鋭く険しい顔をしたアグリアスさんがよぎる。

「アルガスの野郎に目にももの見せてやろうぜ。相棒」

「誰がいつきみの相棒になったんだか……」

「違いねえ」

そうしてオレとキラは二人で笑い合い、先の明るい未来を想像していた。

ブレイブストーリーは過酷な物語。でもこんな都合のいい展開で
もいいんじゃないか？

次に待つのはウィーグラフだ。

奴に説得が効くとは到底思えねえ。

なら裏手を使うしかないよな。

「さて、あんまりラムザたちを待たせるわけにもいかない」

キラは立ち上がって、パンパンと砂ぼこりを払った。

オレもやってやる。

奇跡ってやつを起こしてみせようじゃないか。

風車小屋

side：ウィーグラフ・フォルズ

とある風車小屋の中。

風に舞わされる風車が中の石挽きに繋がり、粉を引いている。

私は目の前に立つ騎士——ゴラグロスに詰問した。

「何故、娘を誘拐した？」

ゴラグロスが是も非もなく答える。

「我々が逃げるためには人質を取らざるをえなかったんだ」

その言い訳染みた言葉に、私は反論した。

「逃げるだけならば途中で解放することもできたはず」

唐突に脳裏に、卑劣漢に墮したギユスタヴの顔を思い出す。

「ゴラグロス、まさか、おまえまで……！」

ゴラグロスは両手を広げて必死に抗弁する。

「ギユスタヴと一緒にするのか！」

思わず大声を出すゴラグロス。心情は分からないでもないが、それではこの無辜の娘があまりにも哀れではないか。

「よく考えてみる、ウィーグラフ。我々骸騎士団は仲間の大半を失い今も北天騎士団に包囲されている」

仲間を失い、今またそれが明日の我が身として恐怖におびえるのは分かる。だが、それでは。

「この窮地を乗り切るためにはまたとない切り札となるぞ。この娘はベオルブ家の令嬢だからな！」

私たちは一斉に、手を縛られてまた悪漢に囲まれている娘を見た。

「逃げてどうする？ いや、どこへ逃げようというのだ？」

ゴラグロスの撤退案には同調せず、私は詰問を続けた。

「この場から逃れようとも我々は奪われる側……。いいように利用されるだけだ！」

私はそのために骸旅団を結成した。

貴族に奪われる側である平民が平等に暮らせるよう、そんな社会をつくるために我々は武器を取ったのだ。

「我々は我々の子供たちのために未来を築かねばならない。同じ苦しみを与えぬためにも！ 我々の投じた小石は小さな波紋しか起こせぬかもしれないがそれは確実に大きな波となろう」

我々の活動が貴族の慣習に一片の傷跡でも残せばそれでよい。

骸旅団は貴族に許されてはならない。だがしかし、国は骸旅団のごときアナーキストの存在を忘れてはいけけない。

だから。

「たとえば、ここで朽ち果てようともない！」

私はそう結んでゴラグロスに迫った。

「我々に”死ね”と命ずるのか？」

「ただでは死なぬ。一人でも多くの貴族を道連れに！」

「バカな！ 犬死にするだけだ!!」

ゴラグロスの叫びに、私は首を横に振った。

「いや、ジークデン砦には生き残った仲間がまだいるはずだ。合流すれば一矢報いることはできよう！」

だがそれを聞いてもゴラグロスの表情は悲観に歪んでいた。

「すでに、殺られているかも……」
と。

唐突に風車小屋の扉が開いた。女戦士が入り、私に事態の推移を報告する。

「なんだとッ！ ミルウーダが離反したというのか！」

馬鹿な……何故ここに至って我々を裏切る？

ミルウーダこそ分かっていたはずだ。この戦いが、貴族に対してどんな意味を持っているかも理解していたはずなのに。

それもまた、私の甘えだったというのか？

「見ろ！ ウィーグラフ！ これが現実だ！ 勝つ方に付く。骸旅団はもうおしまいなんだよ!!」

「黙れッ!!」

ゴラグロスのみっともない狼狽に、私は一言で喝を入れる。

女戦士が私に作戦を求めてきた。

「ミルウーダを籠絡ろうろうくした小隊がここへ来るのも時間の問題です。

ウィーグラフ様、ご指示を！」

「わかった。ここを撤退する!! 聞いてのとおりだ、ゴラグロス。ジークデン砦へ向かうぞ。娘はここへ置いていけ！」

ウィーグラフの指示にゴラグロスが頷く。

「分かった。だがおまえはどうする？」

「なぜミルウーダが我々を裏切ったのか、その真意を確かめねばならん。後からおまえたちを追う。おまえたちは直ちに撤退しろ！」

それだけを言い残して、私は風車小屋を後にした。

side:ラムザ・ベオルブ

レナリア台地を抜けて、そこから先に広がる平野はフォボハム平原と呼ばれる平地だ。

いくつもの風車が建ちそれが風に吹かれて回り、中で小麦を挽いている。

フォボハム平原はイヴァリース一の小麦の生産地でもあるのだ。

「こつちよ」

ミルウーダに先導され、僕らは風車小屋の一つを目指す。

窪地に建つ風車小屋の群れの一つ。そこにティータがいるに違いない。

そこから姿を現すのはまたしても骸旅団……いや、しかしあの兵装は……!!

「兄さん！」

ミルウーダが叫んだ。

「おまえたちは、あの時の……。まさか、おまえたちがミルウーダを？」

「ああ、見ての通りだ」

僕は闘志を隠し、ウィーグラフに向かって声掛ける。

「おまえたち士官候補生たちが我が妹、ミルウーダをかどわかしたと
いうのか……」

「あきらめろ！ ウィーグラフ！ 骸旅団の活動はもう根腐れしてい
る！ おまえ一人が戦ったところでもうどうしようもない！」

「そんな言葉で私が諦めると思うか？」

スラリと剣を抜く。僕は胸に秘めた闘志を解き放ち、同じく剣を抜
いた。

「ならばここでミルウーダの真意を確かめねばな。行くぞ!!」

side: テイリータ・ハイラル

「テイータを、オレの妹のテイータを返してくれッ!!」

「テイータ？ あの娘のことか？ ならば、おまえがベオルブ家の？」

その言葉を聞いて、ラムザが一步前に出た。

「彼はベオルブ家と関係ない！ 僕がベオルブの名を継ぐ者だッ!!」

「なるほど、ゴラグロスが間違えたか。だが、まったく無関係ではある
まい？」

不敵なウィーグラフの言葉に、ラムザが返す。

「ベオルブ家に関わるものならば皆一緒と言いたいのか？」

「違うとでも？ どちらにしてもあの娘は解放するつもりだった。人
質に取るつもりはない」

そう言つて、ウィーグラフが剣先を僕らに突き付ける。

「だが、その前に、決着をつけよう！ あの娘を返して欲しくば私を倒
してからにするがいいッ!!」

side：クラウド・マツケンロー

「悪い、ラムザ。ここはきみたちに任せる」

「クラウドさん？」

「オレは裏から回って先にあの風車小屋を目指す。ウィーグラフの相手はきみに任せた」

クラウドさんの提案に、僕は少し動揺した。

「しかしクラウドさん、ウィーグラフはテイータを人質にするつもりはないと言っています。ここは全員でウィーグラフたちを相手にするのが得策では？」

「完璧を目指してちゃ、そのうち無防備な足をすくわれちゃうぜ」

そう言って、クラウドさんはテイータに視線を向ける。

「テイータ、きみはどうする？」

「……お供します。ラムザ、すまない」

逡巡しながらも、テイータもまたクラウドさんの案に賛成したようだ。こうなったら僕に彼らを止める術はない。

「わかった。気を付けろよテイータ」

「おまえこそ、ここは頼む。ラムザ」

そう言ってテイータとクラウドさんは脇の梢に姿を消した。

side：ミルウーダ・フォルズ

「兄さん！」

「久しいな、ミルウーダ。単刀直入に問うぞ。なぜおまえは骸旅団の理念に背いた？」

「私だって骸旅団の意志を忘れてはいない！ただ、こんなやり方は無意味よ！」

私の必死の叫びに、兄は答えてくれるだろうか。いや、多分無理だ

ろう。

でも無理は承知の上。何としても兄さんを説得してみせる！

「今の骸旅団を見て！ 今にも私たちは北天騎士団に圧され、団員は討ち取られるか、盗賊に身をやつした者ばかり。誰も彼もが兄さんのように命を捨てて革命を成し遂げようと出来るわけじゃない！」

「なら今のおまえはどうだ。命惜しさに革命を諦めたのではないのか？」

「この戦いの無意味さを知ったからこそ、私は今ここにいるの！ もう一度言うわ。兄さん、骸旅団の意志を私は忘れない！ ただこんなやり方は間違っている！」

「結局は命を惜しむゆえに我ら骸旅団に反旗を翻したのだろう。愚かな妹め！」

「兄さん！」

やはり、ダメだ……

兄さんは周りを見ていない。視野が狭すぎる。

正義なき力はただの暴力だけど、力なき正義は何の影響力も持たない。骸旅団には正義も力もないと、兄さんは未だ気付いていない。いや、信じていない。

side：キラ・シルベント

私は突撃してくるウィーグラフに剣を合わせた。重い。骸騎士団の団長として勇名を馳せた騎士としての実力は伊達^{だて}ではない。

「ウィーグラフ！ おまえも気付いているはずだ！ もはや骸旅団は志を失い、盗賊を生み出す温床となっていることを！ おまえ一人では何一つ達成することは出来ない!!」

「あの時の士官候補生か。よくぞここまでミルウーダを誑^{たぶらか}したものだ」

「ミルウーダはおまえよりもよほど現実が見えている！ 私たちはそれをほんの少し後押ししただけに過ぎない！ 死ぬつもりならおまえ一人で革命を志してみせろ！ 出来はしまい！」

ギヤリン、と鋭い音を立てて剣が跳ね返る。

「おまえごとくに言われなくても分かっている！ 私は最後の一兵になろうと、貴族どもにこの志を見せつけてみせる！」

「おまえが死んでもその志は確実に貴族たちに刻み込まれる。ただそれを周囲に押し付けるのはやめろ！」

「ギユスタヴもミルウーダも、目先のことしか考えていない！ 私はその先を見る！ そのためになら誰にでもこの剣を向ける！ たとえそれが実の妹でもな!!」

あまりの言葉に、私はガツンと頭を殴られたような衝撃を感じた。

「……おまえのそんな身勝手な志、私は好きじゃないね！」

side：ラムザ・ベオルブ

キラに加勢して僕は側面からウィーグラフに剣を突き出す。それをウィーグラフは少し後ろに跳んだだけで躲してみせた。

速く、強い。彼の動きを見ればそれが実感として分かる。

さすが骸旅団のリーダー。最強の騎士。

「剣を捨てろ、ウィーグラフ！ これ以上の命の奪い合いは無駄だツ！」

僕はミルウーダに勧告したように、ウィーグラフへもそれを伝えようとする。

しかし。

「やはり、おまえはわかっていない。我々が剣を棄てない理由を！」

この男にはそれなりの理念がある。剣を棄てられない理由が。それはおぼろげにも僕にも理解できてきた。

「話し合いに何が期待できる？ おまえがそれを願ったとして、それを実現できるのかツ？ できはしまい？ よしんば、おまえがそうしたとしてもおまえの兄たちは認めんよ!!」

「兄さんたちだって争いをしたいわけじゃないツ!!」
そうだ。

北天騎士団はザルバツグ兄さんが、それを総括しているダイスダーグ兄さんがいる。あの二人なら戦い以外の道を選んでくれるはず。

「ウイーグラフ、貴方さえ剣を棄ててくれれば兄さんたちだって話し合いに応じてくれるはずだツ！」

「ハツハツハツ！ これは傑作だツ！ おまえの兄たちが争いを起こしたくないだと？ おまえはどこまで幸せなヤツなんだ！」

ウイーグラフが僕を嘲笑する。

「兄さんたちが好んで戦いをしかけていると言いたいのかツ!!」

「青いな！ 執政者の手なんぞ黒い血で汚れているもの！ ダイスダーグに正義があるとでも？ 正義とはそれを語る者によってころと変わるものだ！」

「兄さんたちを愚弄するのかツ!!」

闘志が怒りに形を変える。

斬り結んでいた剣がいったん離れ、一瞬の交錯でもって僕の剣がウイーグラフの肩に突き立った。

「クツ、手強いツ!!」

ウイーグラフが傷口を抑えながら、後ろへ後ろへと退いていく。

「待てツ、ウイーグラフ！ 逃げるのかツ!!」

退きざま、ウイーグラフが僕に向かって言い放つ。

「エルムドア侯爵をギユスタヴに誘拐させたのは誰だと思う？」

何の問答だ？ 答え合わせをするかのようにウイーグラフは続けた。

「それはおまえの兄、ダイスダーグだ！ もちろん、聖騎士ザルバツグ殿もそれを知っているだろうツ!!」

「ばかなツ！ 何故、兄さんがそんなことをしなければならぬッ！」

僕にとって、まさにそれは信じられない戯言だと断じた。

「国王亡き後の覇権をめぐり二人の獅子が争おうとしている！」
しかしウィーグラフは滔々と続ける。

「一人は白獅子ラーグ公、もう一人は黒獅子ゴルターナ公。二人は誰が味方で誰が敵なのかを見極めようとしている。しかし、他人の頭の中を覗くのは難しい」

「どういうことだ？ それが侯爵誘拐と何の関係がある？」

「ならば、いつそ亡き者にしその領地に息のかかった者を送り込めばいい！」

エルムドア侯爵は非公式な訪問の最初から誰かに、ウィーグラフが言わんとすることが真実ならラーグ公が侯爵を亡き者にしようと企んだとでも言うのか？

「革命に疲れた愚かなギユスタヴはおまえの兄、ダイスターグの甘言につられて侯爵を誘拐した……！」

「ウソだツ!! 誇り高きベオルブ家の人間がそんな卑怯なことをするものか！」

ウィーグラフの語る、偽りの真実に対して僕は反論した。

「自分の目と耳で確かめるがいい！ さらばだ、ベオルブの名を継ぐ者よ！」

ヒュつとウィーグラフが指笛を吹く。

走ってきたチョコボに駆け乗って戦場を離脱していく。

「待てツ、ウィーグラフツ!! その言葉を訂正しろツ!!」

僕は不信と不審の間に苛さいなまれながら、去り行くウィーグラフに向かって叫んでいた。

side: クラウス・マツケンロー

時は遡って。

オレとデイリータは風車小屋の裏から中へと侵入しようとしてい

た。ちょうどラムザたちがウィーグラフとやり合っているところだな。

内開きの風車小屋の扉をガンと蹴り開ける。

「！ 何者だ!!」

「正義の味方だよ」

オレは余裕綽々の態度で剣を抜いた。

突然の奇襲を受けた骸旅団はボウガンを取り出すすが、油断からか矢の装填すらままならない様子。

そいつらをオレは躊躇なく斬り捨てる。

ゴラグロスだけは仕留め損なつた。ティータに一番近く、彼女を盾にした位置にいるせいで迂闊に手が出せない。

デイリータが遅れて風車小屋へと入ってきて。

「ティータツ!!」

中に囚われていた妹の名を呼んだ。

「兄さんツ!!」

ティータもまた、デイリータに向けて安堵の表情で呼びかける。

「動くなツ!!」

ゴラグロスが小癩こしやくにも声を荒らげる。が。

どこからか取り出した短剣をティータの喉元に当て、オレたちを牽制する。

「てめえツ!!」

ゴラグロスがニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「やはりコイツは貴様らにとって大事な娘のようだな……!」

「その子はオレの妹だ! ベオルブとは関係ない!」

デイリータが必死にゴラグロスに向けて叫ぶ。

「ティータを人質にとってもおまえたちには何の意味もない! お願

いだ! 妹を解放してやってくれ!!」

「ふん、出来ない相談だな。道を空ける!!」

どうすればいい。今ここにラムザか、もしくはウィーグラフでも現れてくれれば事態は簡単に解決するのに。

結局オレはどこまでもヘツポコかよ!

じりじりと、ゴラグロスがオレたちを牽制しながら風車小屋の入り口へと、ゆつくりと向かっていく。

「いやッ！ 兄さん！ 助けてッ!!」

「ティータッ!!」

デイリータの悲痛な叫びは勿論、オレたちは手も足も出ない。

「オレは逃げてやる……。死んでたまるか!」

入り口から出たところで、クエーツというチョコボの鳴き声が聞こえた。

まずい、自分の足しかないオレたちと違って、チョコボで逃げられたら追い付くことすら出来なくなる!

「ティータ！ ティータッ!!」

風車小屋を出たデイリータが涙混じりの声でティータの名前を呼ぶ。もうその声は届かない。

がくりと膝を落とし、両手を地面に付けてうずくまる。

「どうしてだ？ どうして、こんなことになった？ なあ、教えてくれ。どうして、ティータがこんな目に……」

一人悲嘆に暮れるデイリータの肩をオレは掴み取り、無理矢理引き上げた。

「言ってる場合か！ 嘆けばティータが戻ってくるのか!? ジークデ ン砦へ向かうぞ!」

オレはデイリータを引っ張り上げてジークデ ン砦への道を走り出した。

side：ラムザ・ベオルブ

風車小屋の扉を蹴り開ける。だがそこには骸旅団の死体が転がっているだけで、他には誰もいない。

「いない、どこにもいない！ クラウスは何をやっていたんだ!」

キラがこの場を見渡して憤る。

「キラ、ジークデン砦へ急ごう！ きつとみんなはそこにいるはずだ！！」

しかし、彼女はその場で俯いて独り言ちた。

「なんでだ……どうしてこんな事になる。クラウス、奇跡を起こすんじゃないかったのか……どうして……」

「キラ……？」

僕は悄然とするキラを、呆然と眺めるだけだった。

ジークデン砦。全てはそこに集約する。

僕らの信じてきたもの、疑念が湧いたこと。そしてきつと、僕らの運命も。

ジークデン砦

side：クラウド・マツケンロー

デイリータを引き連れてジークデン砦を目指すオレたち。

先行したオレがその目前に到達したときには、既に北天騎士団が砦を包囲していた。

騎士団を前にして、ゴラグロスがただ一人、叫び散らす。

「さつさと、ここを立ち去るんだッ！ この娘がどうなってもいいのかッ！」

よくねえよ！ 何のために騎士団やオレたちがためえを追っかけて来てると思ってるんだ！

「おかしなマネはするなよ！ この砦の中には火薬がごまんと積まれているんだ！」

そんなモン、一体どうやって使う気だ！ 自分が巻き添えになるのは目に見えてるだろうが！ そんな陳腐な脅し文句が通用すると思わないよ！

「おまえたち全員を吹き飛ばすだけの量はたっぷりあるんだぞッ！ わかったら、さつさと行けッ！」

ゴラグロスの恫喝に、砦を包囲する北天騎士団の長、ザルバグが通告する。

「我々北天騎士団は貴様たちの脅しなどに屈したりはしないッ!!」

オレは一足にザルバグの元へ走った。

「ザルバグ將軍！ ご注進申し上げます!!」

すぐさま跪き、最敬礼の姿勢を取って。

「何者だ、貴公は!?!」

「王都ルザリア近衛騎士団が騎士、クラウド・マツケンローと申します！ 將軍、人質の安全が最優先です！」

「突然現れて何を言うか！」

ザルバグの叱責には答えず、オレは必死の思いで喋り続ける。

「相手は骸旅団の木っ端剣士です！ むぎむぎと人質を犠牲にする必

要はありません！ 大局を見るに、人質を見捨てることこそ北天騎士団の名に傷を付ける行為であると考えます！」

「これだけの騎士団を動かしたのだ！ 成果無しではそれこそ北天騎士団の名誉にかかわる！」

「お願いです！ きつと方法はあるはずです！ 人質を助け出し、骸旅団を壊滅させる方法が！ 何卒お考え直しを!!」

そこまでオレの注進を聞き届けたところで、ザルバツグの顔に暗いものが差した気がした。

「……クレスティア」

「はっ！」

気付いていなかった。クレスティアがここにいることに。

そして。

オレの前に立ち、彼女はオレの鼻先に剣を突き付けた。

「クレスティア!? てめえ!!」

「無礼でしょう、クラウス殿。恐れ多くもこの方は北天騎士団を束ねるザルバツグ將軍。それ以上の上申は越権行為と見なします。場合によっては極刑も覚悟してください」

いつも見せていた暢気な表情を棄て、きわめて冷淡な顔つきでオレに勧告してきた。

オレの知らない顔だった。

そこに憔悴していたデイリータが、そして追い付いてきたラムザたち姿を現す。

「デイリータッ!!」

デイリータが叫ぶ。

デイリータが身をよじり、デイリータに向けて悲鳴を上げる。

「兄さんッ!!」

ザルバツグを見止めたラムザが叫ぶ。

「兄さんッ！ アルガスッ!!」

「クレスティア!?!」

オレに剣を突き付けるクレスティアを見て、キラが悲痛な声を上げ

る。

「早く退けッ！ さあッ!!」

ゴラグロスが再度、北天騎士団を恫喝する。

その間隙を縫うかのように、ザルバッグが命を下した。

「構わん、やれ！」

「ハッ！」

アルガスの持つ自動弓が動く。

そこからはスローモーションのような動画映像のごとく、景色が流れていった。

弓から矢が放たれる。

矢は狙い違わず。

吸い込まれるようにティータの胸を貫いた。

彼女の体が横たわる。

「な、なんのつもりだ……う？」

ゴラグロスが信じがたいものを見たように宣う。

再度、弓から矢が放たれて。

それはゴラグロスを貫いた。

「デイリータ……兄さ……ん……」

ティータの小さな声が、兄の名を呼ぶ。

「ティータッ!!」

デイリータの叫びが砦にこだました。

北天騎士団の騎士が、ザルバッグの後ろから状況報告に現れる。

「ザルバッグ將軍閣下、山道に新たな敵兵が出現しました！ 人数は約50名ほど。中にウィーグラフらしき顔を見かけたとの報告です！」

この場はそれで終わりと言わんばかりに、ザルバッグが返答した。

「わかった、すぐに行く。……あとは任せたぞ、アルガス」

ザルバッグは騎士を伴い、砦から去っていった。

「ク……、クソツ……!!」

ずりずりと背後の砦に這い入るゴラグロス。

「ティータツ！」

デイリータがティータの元へと踏み出し。

アルガスが一步前へ出た。

「どこへ行くこうっていうんだ？」

「アルガスツ！ 貴様ーツ!!」

怒りのままに叫ぶデイリータ。

「なんだ、やろうツっていうのか？ いいだろう、相手になるぜ！」

一連の流れを見ていたラムザが、小さな声で呟く。

「兄さん……、どうして……？ どうして、ティータを……？」

そんなラムザをよそに、アルガスは居丈高に叫んだ。

「さあ、かかってこいよ！ 家畜は所詮家畜だつてことを教えてやるツ!!」

side：ラムザ・ベオルブ

「何故だ、何故、こんなことをするツ！ アルガス、何故だツ!!」

ティータを撃ったアルガスは、それも当然といった風情で軽口で応える。

「ラムザ、おまえの兄キの命令だぜ。何故はないだろ？」

トントンと肩をボウガンの頭で叩きながら、気迫に欠けた表情で続けた。

「それに、たかが平民の小娘のためにおまえは騎士団の誇りを捨ててあいつらの要求を飲むというのか!？」

たかが平民、コイツはいつもそうだ。コイツの中では平民は人間ではない。

「ティータは……、ティータはデイリータの妹なんだぞッ!!」

「いい加減に気付いたらどうだ! 『違う』ってことにな!」

「貴も賤も、僕の中にはない。平民だから、貴族だからなんだと言うんだ。」

「生まれも違うなら、これからの人生もまったく違う! 宿命って言ってもいい!」

「これからの人生が違う、だって? 僕らと一緒に仲睦まじく暮らすことがそんなに『違う』ということだったのか?」

馬鹿な。『違う』というなら彼らと僕らが手を取り合うことさえ許されないとも言えるのか?」

「ヤツとヤツの妹はここにはいはいけなかった! 花でも売って暮らしていればよかったんだよッ!」

平民が貴族と一緒にいることはそんなに悪いことなのか? 平民だから、そんな扱いを受けなくてはならなかったのか? 特別であることはそんなにも蔑視されるべきことなのか?」

「ラムザ、おまえはどうなんだ? 何故、オレと戦うツ? オレに剣を向けるということは、北天騎士団を裏切るということだぞ!」

「クツ……。しかし……、しかし、こんなことが、許されるっていうのか!」

僕の言葉を、アルガスはハッと一つ空笑いを上げて退ける。

「筋金入りの甘ちゃんだぜツ! 何故、おまえなんかベオルブ家にか?」

「僕だって、好きで生まれたわけじゃないツ!!」

アルガスが僕にボウガンを向ける。

「それが甘いって言うんだよツ! 自分に甘えるなツ!!」

アルガスの口調が変わった。罵ることしかしない奴の言葉が諭すような怒りに変わる。

「ベオルブ家は武門の棟梁だ! トップとして果たさねばならない役割や責任があるツ!」

トップだって? それが……ザルバツグ兄さんのように、ティータのような無辜の民を平然と撃ち殺すのを命じることだということなのか?」

「おまえでなければできないことがたくさんあるんだ！　それができないヤツの代わりに果たさねばならない！」

アルガスの弁に対し、僕は傲然ごうぜんと言い放つ。

「利用されるだけの人生なんてまっぴらだッ!!」

僕の言葉に、アルガスの眉がピクリと動く。

「利用されるだけだど？　ふざけるなッ!!」

アルガスが青筋を立てて続けた。

「ベオルブ家がベオルブ家として存在するために、オレたちは利用されてきた！」

ベオルブ家がみんなを利用してきただど？

「いや、もちろん、オレたちだどってベオルブ家を盾として、その庇護の下生き続けることができた！」

認めたくない。

だがコイツも僕と同じだ。認められない事実を認めるために、あえて大きな声で自分に言い聞かせようとしている。

しかし。

「そうさ、持ちつ持たれつ関係を築いてきたんだッ！　そうやっておまえは生きてきたッ！」

だから僕は僕にしかやれないことをやれと言うのか。この手で、テীরタのような弱者を撃ち殺したように。

「利用されるだけだど？　おまえは、”親友”と称するテীরタでさえ利用してきたんだ！」

ガンと、頭を殴られたような衝撃を感じた。

「僕がテীরタを利用してきた……？」

僕は呆然と、アルガスの言うことを噛み締めることしか出来なかった。

さらに続ける。

「おまえだどってオレを利用するためにマンダリア平原で助けたんだらう？」

「ばかなことをッ！　目の前で困っている人間を放っておけるかッ！」

「だったら、次からは捨てておけ！ 友好的な人間だけとは限らんからな！」

そんなことが出来るものか！

それは今のおまえがやっていることに対する言い訳、詭弁じゃないか！

side: デイリータ・ハイラル

目の前に起きた事実を前に、オレは我を忘れて叫ぶ。

「アルガスッ！ よくもティータをッ！ 殺してやるぞ、殺してやるーッ!!」

そんなオレに対し、アルガスはボウガンをおレに向けて発射した。かろうじて盾で防ぎながら、オレはアルガスに肉薄していく。

「悔しいか、デイリータ！ 自分の無力さが悔しいだろッ？」

アルガスが嘲笑した。

舐めるなよアルガス。オレは無力なんかじゃない！

「だが、それがおまえの限界だ！ 平民出のおまえには事態を変えるだけの力はない！」

平民も貴族も関係あるか！ オレはお前のしたことを絶対に許さない！ それが限界だと言うならオレはおまえを殺す！

「そうだ、そうやって、嘆き悔しがることしかできないんだ！ はっはっはっ、いい気味だぜ!!」

「言いたいことはそれだけか……？ それだけかッ、アルガスッ!!」

「そういきりたつな、デイリータ！ すぐに妹の後を追わせてやるッ！」

「オレはおまえのいいなりにはならん！ 誰にも利用されんッ!!」

side：ミルウーダ・フォルズ

目の前の男——アルガスが引き連れる北天騎士団の騎士をなぎ倒しながら迫る。

そして私の刃がアルガスに届いたとき、そいつは初めてこちらに氣付いたようだった。

ボウガン捨てて、ロングソードを取り出し、私の一撃を噛み付いて止める。

「なんだ？ 誰かと思えばいつかの家畜じゃねえか。いつの間にラムザにおもねったんだ!？」

無様な生き恥を晒している自覚はある。だがコイツだけは絶対に許してはおけない。

「今わかった！ いえ、実感した！ 私が本当に倒すべき敵はおまえのような奴だ！ 貴族という言葉で盾に平民を平然と害する、腐った貴族そのものだ!!」

「ふん、くだらねえ。おまえら賊がどれだけ社会を貧窮させているかわかるか!? それともそんなことすら頭のないほど、貴族と戦うことが楽しかったか!？」

コイツの言い分は理解できる。私たちの活動がどれだけ平民を圧迫し、貴族に負担を強いているかなんてことは。
だが。

「私の活動がどれだけ貴族の資産を食い潰し、その負担が平民へ届いていることくらい、私にも分かる！ しかしそれでも、私は平民として貴族の圧政者たるおまえのような豚どもを許しておくわけにはいかない!!」

「よく分かってるじゃねえか！ だがオレたち貴族はおまえらのような賊どもから平民を守ってやってるんだ！ 感謝されこそすれ、罵倒される謂れはない!!」

「論点をすり替えるな！ おまえが守っているのは民じゃない！ た

だの貴族の誇り、言うなればおまえたちの拠り所でしかない貴族という名の我が俣まそのものだ！ そんなもののために私たち平民は生きているわけじゃない!!」

「吠えている家畜が!! おまえらのような害虫はオレたち騎士団が駆逐してやる！ 逆賊を始末すればオレたち貴族による平民への支配はまた戻るんだ！ 安心して朽ち果てろ下衆が!!」

「本音が出たわね！ おまえのような奴がいる限り、骸旅団の意志は挫けない！ 朽ち果てるのはおまえの方だ!!」

私は気迫を増し、目の前に立つアルガスへと殺気を剥き出しにした。

side：キラ・シルベント

「クレスティア！ 今ならまだ間に合う、クラウドを離せ!!」

「離すも何も、クラウドさんが勝手に出てきて私がそれを止めただけだよ」

戦場のさなか、未だクラウドに剣を突き付けるクレスティアに勧告したが、彼女はいつもの暢気な表情で言いつくろった。

「キラが悔しがるのもわかるよ。ティータさんを助けたかったんでしょ？ でも残念でした。やっぱりティータさんはここで死ぬ定めだったんだよ」

「ふぎけるな！ 犠牲になっていい者などいるものか！ あつてたまるか！ 気付いていないのか？ きみはきみの享樂のためにそんな人殺しを続けるつもりか!?!」

「だって私が見たいのはブレイブストーリーだもの。ティータさんには死んでくれなきや始まらないじゃない?」

「きみっていうやつはッ……!!」

不意に彼女は剣をだらりと下げた。その剣をゆっくりと鞘にしま

う。

「キラとももうちよつと遊んでいたかったけど、私にもやりたいことがあるの。いずれまた、会おうね」

そう言つて、彼女は私とクラウスからくると背を向けて走り去つた。

もはや彼女の何を信じればいいのか、私にも分からない。

「クレスティア……！」

私の呪詛めいた呼ばわりはジークデン砦に吹きすさぶ寒風と共に小さく消え去つていった。

side:アルガス・サダルファス

舌戦はオレの大勝利だったが、戦況はよくない。北天騎士団の騎士も魔道士も、たかが見習いでしかない士官候補生に苦戦していやがる。使えない奴らだ。

大甘ちゃんのラムザは悄然としたままだったが、デイリータと家畜の女がオレの邪魔立てをする。悔しいところだが、オレ一人じゃ荷が勝ちすぎる。

二人を前に大立回りおわたちまわを演じるが、いかんともしがたい。

「チツ、こんな時にクレスティアは何をしていやがる……！」

そう思うが早いのか、オレの背後から誰かが走ってくる気配を感じた。直感に任せてそちらに視線をやる。

ちようどいい、クレスティアだ。

「遅い！ 貴様、今まで何をしていた?！」

彼女は何故か満面の笑みを浮かべたまま、剣を片手に走り寄ってくる。

「だがちようどいい、貴様、コイツら二人を——」

ドシユツ!!

「……………あツ?」

オレの胸から刃が生えた。

「さようなら、アルガス様」

見た者が凍り付くような笑みを浮かべたまま、クレステイアはそう宣った。

膝を突き、前のめりに倒れる。

「き……………さま……………、なん……………で……………?」

「貴方との旅路、楽しかったですよ」

デイリータと家畜が目の中の展開についてこれないまま、呆然と成り行きを見つめていた。

砦の床にオレの血が広がっていく。

なんでだ……………? オレは何を間違えた……………? オレはザルバツグ
將軍の配下、アルガス・サダルファスだぞ……………!

訳が分からないまま、オレは流れる血と共に意識を失っていった。

そして僕は逃げ出した……

side：ラムザ・ベオルブ

「……デイリータ」

ジークデン砦の入り口で、倒れ、力尽き果てたティータをデイリータがかき抱く。

彼の眼には、もう僕の姿など映ってはいないのだろうか。

その時。

ドンツ!!

砦の中から爆音が響いた。

続いて、砦の窓から煙と炎が炸裂する。

「なんだ!? 爆発……?」

連鎖的に爆音が響き、砦の窓という窓から爆炎と爆風が吹き出し始める。

「デイリータ、ここは危険だ! 早くこっちへツ!!」

僕はデイリータに向かって叫んだ。

瞬間。

砦の壁を吹き飛ばした爆風が、僕もろとも砦の外へと弾き飛ばす。

刹那の間だったろう、意識を失い、眼が覚めた僕の眼に映ったのは、炎の向こうで息絶えたティータを抱きしめるデイリータの姿だった。

「デイリータツ!!」

巨大な砦を火山のような爆発で吹き飛ばし、デイリータとティータは爆炎の中へと飲み込まれていった。

(僕は今まで当然のように生きてきた)

雪原を歩く。

(その”当然”が崩れたとき)

寒風が僕の向かい風となって吹きすさぶ。

(僕はすべてを棄てて逃げ出した……)

あてどもなく、どこへともなく、歩いていく。

side：クレスティア・アルヴァン

「ラムザさん♪」

私は雪原を歩くラムザ君を見つけました。

最初、「お〜い」と呼んではみたのですがどうにも耳が遠いご様子。走り寄って声をかけた次第です。

「……クレスティア。生きていたのか」

生きていたかとは失礼な。けど、しよげてますねえ。まあ先のイベントを見れば当事者のラムザ君からしたらたまたまっただもんじゃなかったでしょうけれど。

「……きみはどうして、アルガスを殺したんだ？」

うーん、と腕を組んで考えてみます。なんで殺しちゃったんでしょう。別に私じゃなくてもデイリータ君が殺っちゃってもよかったですけどねえ。

でもアルガス君関連のイベントは大体見終わっちゃいましたし、まあ言うなれば。

「気分、ですかね」

最低な言い訳をしました。

「気分、気分……か……」

ラムザ君は立ち止まり、虚空に眼を這わせます。

「僕も気分に合わせて、生きてみようかな……」

憔悴した様子で、彼はポツリと呟きました。

私はそんなラムザ君に「はいはい」と手を挙げて提案します。

「私もついていっていいですか？ 見たいものはあらかた見ちゃいま
したし」

「……好きにしたらいい」

「はい♪ お供いたしますよ、気が済むまで」

そう言っつて、彼と私は再び雪原を歩き始めました。

side：キラ・シルベント

ん……うーん。

呻き声を上げて私は何がどうなったのか、おぼろげな頭で回想し始
めた。

ジークデン砦での爆発。爆炎の中に消えたデイリータとティータ。

そして、私は。

「気が付いた？」

誰かに背負われているのに気が付いた。ミルウーダだ。

「ツ！ ラムザは……、デイリータはどうしたんだ？」

私を背負っているミルウーダがそれに答える。

「分からないわ。ついでに言うなら、クレスティアやクラウスも」

「……そうか」

ザツザツと道なき道を歩く。

「ねえ」

不意にミルウーダが私に声をかけた。

「私、これからどうすればいいのかしら」

そうだ。彼女もまた失ったのだ。彼女の居場所、骸旅団は壊滅。私
たちという居場所も、皆なくなってしまった。

できるだけ悲観的にならない軽口のような声音で応える。

「そうだね。まずはイグーロスにでも身を寄せようか」

「……正気？ 私を北天騎士団に売り渡す気？」

「その辺のことはうまく誤魔化すよ。現地徴用兵とでも言ってさ」
「そう」

それきり、無言で歩く。

爆発の熱で焼けたのだろうか、体中が引きつった痛みを訴えてくる。

私はポツリと呟く。

「クレスティア……」

私の親友。”榎宮ゆかり”。一緒に『ファイナルファンタジータクティクス』を楽しんでいた友達。

どうしてこんなことになったのだろうか。

アルガスに付き従っていた彼女。ザルバッグの命に従ってクラウドを足止めした彼女。アルガスを裏切り、その胸板を貫いた彼女。そのいずれも、彼女が浮かべていた笑みは私が知っているものだった。

彼女は、何者なのか。

考えれば考えるほど、親友のブレイブストーリーの楽しみ方が分からなくなっていく。ドツボに嵌はまっていく。

答えは出ない。

今はミルウーダの背中で、しばらく思考を放り出すことにした。

side：クラウドス・マッケンロー

情けねえ。

不甲斐ねえ。

結局オレたちはティータという一人の無辜の少女を助けることが出来なかった。

奇跡を起こすんじゃないかったのか？ オレは。
キラがミルウーダを説得して、その光明が見えたことに舞い上がっていた。

オレは爆発の熱で痛めつけられた体を圧しながら告解する。

アグリアスさん、オレは一癖も二癖もある問題児だったに違いない。だからこそガリオンヌ地方の漫遊に出掛けさせたのだろう。一皮も二皮も剥けることを願って。

期待を裏切るな、と言われた。

しかし結果はこんなもんです。平民の少女一人助けることも出来なかった、アンポンタンのままでした。

こんな顔で貴女の所に戻るなんて、恥知らずもいいところです。

でも、今は貴女の顔を見たい。そしてオレを見て、今のオレを評価してほしい。

悪罵あくばでも構わない。だが悲しみを背負ったオレをどう見てくれるか確かめてほしい。

結果として、もうこのオレに愛想を尽かしても仕方ない。
去れ、というなら去ります。

もうオレにはどうしたらいいか分からないのだから。

ティータ、なんでおまえなんだ？

なんであそこで死んだんだ？

なんで、オレじゃないんだ？

彼女には未来があったのに。

代わりに死ぬのはオレでよかったのに。

一体何を間違えたんだ？

オレは再度自分に問う。

奇跡を起こすんじゃないかったのか？

ふたを開けてみれば結局オレがやってたのは見るだけ。

あの時、なんでアルガスの前に出てオレはその目の前に走り寄って、代わりに奴の矢を受けてやれなかったんだ？

クレスティア、なんであそこで邪魔をした。

オレと同好の士だと思ってた。だがオレは今、おまえに憎しみを感じ

じている。

何故オレを止めた？

いや、そんなのただの言い訳に過ぎないことは分かっている。おまえにも、どうしようもない事情があったんだろう。

結局オレは逃げ出した。爆発した砦からというよりも、テータを助けられなかったオレの情けなさから。

オレは一路、ガリオンヌ領を抜けて、王都ルザリアを目指していた。胸の内に大きな胸くそ悪さを抱え込んだまま。

幕間 それぞれの一年間
幕間 《クレスティア・アルヴァン》

side：クレスティア・アルヴァン
さてさて。

ジークデン砦のイベントから一ヶ月も経とうとしていました。時の流れとは早いものですね。

憔悴していたラムザ君も少しずつですが、心の痛みから回復してきているように思えます。

しかしまだ、日がな一日何もせずにごろごしたり、眠っているときも悪夢でも見ているのか時折ときおりうなされていたりします。

私は彼の介添え人みたいなマネをしながら、あちこちを放浪していました。今は貿易都市ドーターの宿を拠点にしています。

これじゃ私が気分に従って行動しているのではなく、ラムザ君の気分に合わせて行動しているような感じですね。あべこべですね。

今日も今日とて日帰りの出稼ぎに出掛けて、今晚することを列挙していきます。

宿のベッドメイクや清掃は昼間、宿泊の世話人さんが勝手にやってくれるので、ラムザ君もその間は大人しく階下の食堂でエールでも呷っているでしょう。昼間から酒杯片手にとはあんまり褒められた行為ではないと思う私です。

私が帰ってきて、ラムザ君と一緒に食堂で食事。

それからはお洗濯。こんな時、洗濯機が無いのが少し悔やまれます。私はともかく、とりわけラムザ君の下着！ 洗っていると彼のお嫁さんになった気になります。

お風呂は宿の階下に男女別の湯船があるのでそこを使います。

その後はもう寝るだけです。

ちなみに、宿泊代をケチって私たちの部屋は同室！ まあ今のラムザ君どころか、素のままでも私を押し倒したりする度胸や倫理に反す

る行為は絶対しないと約束できます。

そんなふうには、私たちは傍^{はた}から見れば駆け落ちした恋人同士みたいな生活を続けておりましたとき。ブレイブストーリー万歳！

その折、私たち宛に手紙が届きました。

送り主は、ガフ・ガフガリオン。

来たな。このお邪魔虫。

いや、ブレイブストーリーを先へと進める演者が。

元東天騎士団出身のベテラン騎士で、非道で残虐な戦い方が咎められ、騎士団を追放。その後に傭兵として活動している戦士の中の戦士。

どうやらダイスダグさんが手を回してくれたようです。

ラムザ君のこと、なんだかんだで気にしてくれてたんですね。

まあ、先のことを知っている身としてはあまり麗しいとは思えない兄弟愛ですが。

これからガフガリオンさんと出会って、それからどうしましょうかね。

ラムザ君は傭兵になり、ガフガリオンさんの薫陶を受けて成長するでしょう。

ならば私もラムザ君に続いて、ガフガリオンさんに師事するしかない。これつきやない！

手紙は私が最初に封を開けました。

本来ならラムザ君が先に見るべきだったんでしようけど、あまり刺激を与えない方がいいかと思ひまして。

手紙にはラムザ君と面会したいということ。その場所、時間帯。

場所はドーターのスラム街に夜中ですね。きな臭い匂いがプンプンします。

私はラムザ君に手紙を渡します。先に開いた無礼を一応、詫びておきます。

ガフガリオンさんにはまず私が会うことにしました。

その後、続いてラムザ君が会うということ。

手紙を見たラムザ君は、相変わらぬ無表情でした。

そして今日の夜中のスラム街。

私はラムザ君の手を握って目的の場所へ向かいます。こうでもないかと彼、動かないもんですから。役得役得。

スラム街の真ん中に立っていたのは、全身黒い甲冑に身を包んだ騎士——ガフガリオンさんでした。

「おせえぞ」

開口一番、彼はこちらに背を向けて、見向きもせず言い放ちました。私が牽制します。

「ガフガリオン殿とやら、無礼でしょう。こちらはベオルブ家の末弟にあらせられるラムザ・ベオルブ様です。それを手紙一枚で呼び出した挙句、その態度、不敬だとは思わないのですか」

「はっ、知ったことか」

言いながら彼はこちらに向き直りました。

「おまえは北天騎士団の騎士か？ わざわざラムザ・ベオルブの子守りとは、かのベオルブ家の末弟も落ちたもんだな」

「無礼な発言は慎みなさい、ガフガリオン殿。用件を——」

「いや、いいんだ。クレステイア」

そう言って、ラムザ君が私から手を離します。

彼は私の前に出ると。

「ガフガリオン殿と言いましたね。ご存じの通り、僕がラムザ・ベオルブです。ご用件をお伺いしたい」

ガフガリオンさんはじろりとラムザ君を眺めて、口を開きます。

「死んだ魚みたいな眼をしてるな。ジークデン砦の件はそんなに堪えたか？」

「なッ……!」

ラムザ君が驚きに眼を見開きます。

動揺しながらも、彼は聞き返しました。

「どうしてそのことを……?」

「雇い主からの情報提供だ。悪いがこれ以上は話せねえ」

ガフガリオンさんのセリフに、ラムザ君が俯きながらポツリと呟きます。

「兄さん……」

そんな彼をよそに、ガフガリオンさんが用件を話し始めました。

「よく聞け小僧。おまえは今日からオレ預かりの傭兵となる。現実の厳しさってのをみっちり教えてやれつてな。感謝しろ。オレは普段はこんな依頼受けたりはしないんだからな。存分に働け」

私が型通りの言葉でガフガリオンさんを制します。無論、それに領かれてもこっちが困りますが。

「非礼も大概になさい。ラムザ様がそんな用件にお付き合いくださると本気でお思いですか?」

「本気も何もこれがオレの用件だ。首を縦に振ってもらわなきゃこっちが困る。既に前金も貰ってるンでな」

ほら来た。

「僕を庇い立てする必要はない、クレステイア」

「しかし……」

ラムザ君、ガフガリオンさんに頷き返します。

「わかりました。貴方と一緒に行きましょう」

「ラムザ様!」

私は驚いたフリをして、次の言葉を待ちます。満足そうにガフガリオンさんが頷いて。

「契約は成立だな。おい、北天騎士団の女。おまえはどうする?」

「……私はラムザ様の従者です。ラムザ様が是と仰るのであればそれに従うだけです」

「よし、決まりだな」

私が嘴を挟む余裕がなくなったのを見て、俄然満足そうなガフガリ

オンさん。

「今から出発するぞ。宿の荷物を引き払って準備をしてこい。あと、だ」

ガフガリオンさんがいいオヤジさんのようなくしゃつとした表情で。

「堅苦しいのはナシだ。オレはおまえをラムザと呼ぶ。ラムザ、おまえもオレをガフガリオン”殿”なんて呼ぶ必要はねえ。あと後ろの女。おまえもこまつしやくれた敬語は禁止だ」

「それはお断り願います。私の敬語は性分ですから」

「……それならそれでいいがね」

そう結びました。

かくして私たち二人はガフガリオンさんの傭兵として働くことになりました。

さすがはブレイブストーリー。歩いてなくても勝手に私たちに寄ってきてくれます。

そして私たちの物語は一旦終了。

次なる物語の始まりは、約一年の後となります。

幕間《キラ・シルベント》

side：キラ・シルベント

イグーロス城の執務室。

「キラ殿、こちらの書類にサインを」

「わかりました」

サラサラ。

「こちらは今月の税込です。税務課にお届けください」

「後で届けます」

ペラリ。

「農業の収支です。ご確認ください」

「判を押しておきます。30分後に取りに来てください」

ガサツ。

……忙しい。

事務仕事がここまで退屈で暇なしなんて聞いていなかった。

騎士の仕事とはなんと地味なことだ。

これならラムザたちと一緒に戦っていた方がよっぽど気が楽だ。

まあ争いごとがそこまで好きなわけじゃないけどね。

私は正式に王立士官アカデミーを中退して、実力一本で北天騎士団の入団試験に臨み、一発合格した。

有事の際には騎士としてモンスター討伐や野盗の鎮圧に向かったりするのだが、平時はこんな事務仕事も押し付けられる。

しかしこれも大事な仕事だし、何より民のために必要な労働だ。泣き言は言っていられない。

最後の書類に判を押し、それを生活課に届けて今日の仕事は終わりを迎えた。

なんとか定時に帰ることが出来そうだ。

私は更衣室に立てかけた剣と鎧を身に付けて帰宅の準備に入る。いちいち武装して出勤しなければならないなんて、騎士の仕事は面倒

なことばかりだ。だがこれもまた有事の際に必要なこと。
泣き言なんて言っていられない。グスン。

帰り道、立ち寄った八百屋さんで得安セールをやっていた。トマトとパプリカが馬鹿みたいに安かったので、帰ったらミルウーダに渡そう。今日のメニューはナポリタンド。

そう考えると今度はベーコンが欲しくなった。在庫にあったかどうか定かじやない。ええい、買いに行つてしまえ。

安い店を選んでいたら結構な時間を浪費してしまった。
さすがにそろそろ帰らないとまずい。怒ったミルウーダの怖さは先の骸旅団との戦いで身に染みている。

イグーロス城へ続く繁華街の居抜き通りを横に反れて住宅街に入る。ここまで来れば繁華街の喧騒もどこへやら、閑散とした一軒家やアパートが眼に入ってくる。

その中にあるアパートの一室が私たちの家だ。私が貯め込んだ財を使い込んで格安で借りた。お化けでも出ないかと心配したが、街中にアンデッドモンスターは出没しないようでホツとした。

ドアを開けるとチリンチリンと軽い鈴の音が響く。

「お帰りなさい、旦那様」

「ただいまミルウーダ」

出迎えてくれたミルウーダとハイタッチする。イグーロスに移住して数ヶ月。この生活にも慣れたものだ。

ロングの金髪を頭の上で結び、三角巾を付けてエプロン姿をしたミルウーダはそれはそれは大層美人なものだ。それにこんな格好をしていてたおやかな表情をしていればよもや高額の賞金首などは及びもつくまい。

私が働いて、彼女が生活を支える。

というか、私はこの世界で家事全般がまったく出来ないことを士官候補生時代に思い知ったからだ。

キッチンが爆発させるわ、洗濯物は紐ごと飛ばされるわ、掃除をすれば埃が舞い飛ぶわで、てんで話にならなかった。

いや、別に家事ができないわけじゃないよ？ ただこの世界には電子レンジも無ければ洗濯機も乾燥機もなく掃除機もない。ないない尽くしのこの世界がよろしくないのだ。

ミルウーダの「骸旅団時代はひとりでもできないとやっていけなかったのよ」という言葉に甘えて家事全般をお任せしている次第、というわけである。

とりま、賞金首に見えない格好の彼女だがあまり外に出すわけにもいかず、買い物なんかは私がやってきてるのだが「またナポリタン？ たまには小麦以外のものも食べなきゃダメよ」とダメ押しされる始末。うーん、たまにはジャガイモなんかも食べなきゃダメか。と思いつつも、あれはお腹膨れないしなあと葛藤する私であった。

「で、首尾はどう？」

私とミルウーダがテーブルを挟んで、ナポリタンをすすりながら今後の相談をする。今後の相談というのは、要するに獅子戦争勃発に端を発する”運命の日”のことだ。

当然、ミルウーダがそれを知る由もなく、私も曖昧に濁しながらそれに答える。バレたら後ろから斬られるかもしれないので、なんとかこの信頼関係は保っておきたいのだが。

「ダイスターグ卿が尻尾を見せないからね。この調子だともう数ヶ月は現状維持かもしれない」

「……ダイスターグは何を企んでいるの？」

「これを見て欲しい」

言いながら、私はイグーロス城からチョツパってきた書類を彼女に手渡した。勿論、守秘義務のあるイグーロス御用達の情報冊子だ。

『オヴェリア王女、王都の近衛騎士と共にイグーロスへ避難』……これがどうかしたの？」

「妙だとは思わないか？」

「何が？」

「オヴェリア王女がイグーロスへ避難っていうところさ。そんなこと今さらイグーロスで守秘義務込みで残しておく必要はないだろう？

なら必要性があるっていうことさ」

「どういうこと？」

「いちいち守秘義務のある書類にそんな情報を残すってことは、そのうち大々的に市井しせいに知らせる予定だったこと。ラーグ公がそんな計画を画策していること自体が何らかの罠に嵌めようとしている」

「嵌められるってのは、オヴェリア王女を？」

私は口回りのトマトソースをナプキンで拭いながら頷く。

「単にラーグ公の名声を高めるためだっていうならあり得ないことでもないけど、根拠としては薄弱すぎる。そんな情報が市井に流れたとしたら、必ず邪魔者が現れるに決まっている」

「邪魔者、ねえ……」

ミルウーダも同じく口回りのソースを拭って呟いた。続ける。

「貴女はしきりに王女オヴェリアのことを気にしてるけど、それに何の意味があるの？ わざわざ危険を冒してまで構う必要がある？」

「その辺りはダイスターグ卿の出方次第だね。ただ、彼女を見ているとティータを思い出すんだ」

「……骸旅団としては悪いことをしたと思ってるわ。そのせいで、ラムザもデイリータも行方不明のままだし……」

「きみが気にすることじゃない。だけど、あの時のような悲劇を繰り返すことは許すつもりもない」

私はグラスのコップに注がれた水に口をつけ、一息に飲み込んだ。

「イグーロスにいるからこそ分かることもある。オヴェリア王女は何かに嵌められつつある。それを私は許すつもりはない。私が考えているのはそういうこと」

「まあ他ならぬ貴女の言うことなら信じていない訳じゃないけれど」

言って、ミルウーダは書類を私に投げ渡した。

「貴女って隠し事が多すぎるのよ。少しは私のこと、信用してくれてもいいんじゃない？」

「手厳しいな。ミルウーダは」

私は立ち上がり、部屋の窓から外を眺めた。夕日も半ばまで地平線に沈み、夜が降りてくる時間帯だ。

「イヴァリースの覇権をめぐる二人の獅子が争おうとしている。一

人は白獅子ラーグ公、もう一人は黒獅子ゴルターナ公」

「いつか言っていた、兄さんの言葉ね」

私は顔だけミルウーダに向け、頷く。

「オヴェリア王女はその争いの贄にえとなる。だからこそ、助けなくちゃいけないんだ」

私はそう結んで、決然とした表情を見せた。

”運命の日”まであと数ヶ月。

これ以上、オヴェリアを貴族の道具になんかせはしない。

ミルウーダにはチンパンカンパンだろうが、どうか今は納得してほしい。そう思う私だった。

幕間《クラウド・マツケンロー》

side：クラウド・マツケンロー

王都ルザリア王宮、その隅の訓練場にて。

オレはまたも無様に転ばされていた。

だがオレは立ち上がり、不屈の闘志を燃やして叫ぶ。

「もう一本！ もう一本お願いします!!」

目の前に立つアグリアスさんが顔を手で覆い、「はあ」と溜め息をつく。

「よせ。見ていて痛々しい。少しは休め」

「ですが！」

「クラウド・マツケンロー！」

「はっ！」

アグリアスさんの一喝に、オレは跪いて敬礼した。

「おまえは充分に心構えを育んできた。その姿勢を忘れなければもはや王都もマツケンローも敷居を跨ぐなどとは言うまい。しかし」

しかし。何を言うんだろう。

「おまえの剣には決定的に欠けているものがある。殺意と覚悟だ。おまえがガリオンヌで学んできたのは気迫だけだ。残っているのは自分より強い者への敵意がない。そんな剣はただの暴力であり、民を守ることを疎かにしているだけの凶器だ」

「では……では他に何を学べと言うんですか!? オレが欲しいのは力だけです！ 今度こそ、奇跡を起こすだけの力を！」

「それでは聞くぞ。おまえの言う奇跡とやらは暴力の剣で叶うものなのか？ そんな剣で民を守るのか？ 救えなかった少女を、そんな剣を振り回すだけで救えたのか？」

「ぐッ……」

オレはぐうの音も出なかった。オレの失敗は彼女の盾になれなかったことだ。

敵を倒すだけの剣は、権力の前には何の意味もないと悟ったんじゃないのか？

「答えろクラウドス。おまえの剣はただの暴力か、それとも愛する人を守るための剣か。それはおまえ自身の中に答えがあるはずだ。その選択を間違えれば……、いや、正しい選択をしたとしてもおまえは破壊するだろう」

「ならオレが習っている剣は何のためにあるのですか!? ただ貴族が言うがままに振るう剣ならオレはいりません! どんな剣がオレを無辜の民を助ける剣になるのですか!」

「そこまでだ」

アグリアスさんが木剣をオレの鼻先に突き付けた。

「しばらく頭を冷やせ。己の剣に疑問を持つのは悪いことではない。だが浅い考えではおまえの剣はただの暴力に成り下がる。疑問を糧とせよ。己の剣に枷をかける。後は自分で考えてみるのだな」

そう言つて、アグリアスさんはオレを放つてそのまま王宮内に入つていった。

「喝を入れられましたね、クラウドスさん」

アリシアさんがタオルを差し出してくれた。それを受け取り、汗で濡れた顔面を拭う。

血が付いていた。度重なるアグリアスさんとの手合わせで傷を負ったのかもしれない。そんなことを意に介するほど甘い人ではないだろうけど。

「けどお、アグリアス様があそこまで言つてくださるのは珍しいことなんですよ。クラウドスさん、なんだかんだ言われながら結構気にされてるんじゃないですか?」

ラヴィアンさんが水筒を渡してくれる。ホント、オレつてこの二人に助けられてばかりだな……

「オレはもつと強くなりたいんだ。でもオレの剣はただの暴力……。そこまで言われちゃオレ自身が疑問に思えて仕方がない。結局、オレの剣は誰も助けることも出来ないただの刃物なんじゃないかって」

「字面通りに受け止め過ぎなんですよクラウドスさんは」

「そうそう、もうちよつとゆるく考えてみましょうよ。三人寄れば

文殊の知恵って言いますし、クラウスさんが困っていたら私たちもちよつとだけ助けになりますから」

「ちよつとだけ……ね」

ハハつと空笑いする。

オレの剣には何が足りない？ いや、足りたとしてもそれで何が出来る？ 何も出来ない剣に何の価値がある？ オレには……何の価値がある？

答えは未だに出てこない。脳裏によぎるのは、アルガスの矢に貫かれた一人の女の子だけだ。

復讐？ 違う。それじゃあただの暴力だ。

救済？ それが足りていたらオレはティータを救えたのか？ それも何か違う気がする。

いかん。頭の中で堂々巡りが始まった。こうなるとオレのヘツポコな頭が茹で上がる。

一体、オレの中に足りないものって何なんだ。

訓練の中ではオレにそれを教えてくれるのが誰もいないんじゃないか。

オレの行動の指針。

いわば『ファイナルファンタジータクティクス』の最終目的。

ラムザは妹を救ってみせた。オレには何も救うものがない。そういうことなのか？

本格的に頭から熱が出始めてきた。いかん。これ以上は考えても埒が明かない。

「……休もう」

「え？」

ちよつと休んで頭を切り替えよう。オレの体はともかく、頭には休息が必要だ。

「あの、そのタオル」

「その水筒、私の……」

オレは頭をこげさせた。

side：アグリアス・オークス

私は執務室で書類仕事に忙殺されていた。

訓練は良い。未だ芽の出ない若い騎士たちの成長を見ることが出来るのが嬉しい。

中でも、今はクラウス・マツケンローの成長が私の心の奥底をつつかせる。未だ芽が出ず、成長も頭打ちになっているようだが、あと一皮むければ一端の騎士になれると予測している。

などと考えていると、不意にドアがノックされる音が聞こえた。

「どうぞ」

私は執務の手を止めることなく、ドアノックに応えた。

ドアを開き入ってきたのは一人の騎士だった。その胸元に付けている紋章は――

「！…これは騎士団長殿！」

私はすぐさま立ち上がり、頭を下げた。

王妃ルーヴェリア殿下直属の近衛騎士団、その団長殿だった。

私たち王家を守る近衛騎士団とは属性が違うが、体面的には私の上司にあたる。

「ルーヴェリア王妃殿下がお呼びです。直ちに出頭いただきますよう」

「はっ！」

私は執務仕事もほどほどに、ルーヴェリア王妃の元へ向かった。

王妃という身分にありながら、王に代わって執政を行う王妃殿下。

謁見の間にて、ルーヴェリア王妃殿下から勅命を頂く。

曰く。

「王女オヴェリアをオーボンヌ修道院からガリオンヌのラーグ公の元へ無事に送り届けよ」という任務を拝命した。

大役だ。

「すぐさま精鋭の騎士団を率いてお迎えに上がります」。そう言った私に、王妃殿下は「それには及ばず、少数の騎士を連れて役目を果

たせ。大事には出来ない任務であるため、細心の注意を払うこと」とのことだった。

そうか。オヴェリア様は密かに修道院で過ごされている身。大勢の騎士を率いての移送となれば耳目に晒され、結果として余計な横やりが入るかもしれない。

なればこそ、少数精鋭にて密かに護衛することこそが肝要。その認識は的を得ていると言えた。

慎重に選抜せねばなるまい。

目端の利くアリシア。直感に優れたラヴィアン。そして……数多の戦場をくぐり抜けてさらに未だ発展途上のクラウス。

そして、その3人を率いるのが私、アグリアス。

一ヶ月後に実行される大命。

私は緊張に身を引き締め、心に強い枷をかけて、その時を待つ。

この時、私は気付いていなかった。

気付く由もなかった。

オヴェリア様の護衛任務。それがこのイヴァリース全土を巻き込む大乱の端緒となることを。

Chapter 2 利用する者さされる者 オヴェリア追跡

side：ラムザ・ベオルブ
ジークデン砦での悲劇から一年……

オヴェリア王女の護衛任務を請け負った僕らは、彼女の誘拐犯である南天騎士団と矛を交えた。

戦いは僕らの勝利で終わったが、肝心のオヴェリア様は一人の騎士によって連れ去られてしまう。

そこで、僕が見たものは……

「なんだ、ラムザ、さらっていった奴を知っているのか？」

ガフガリオンが僕に問うた。

僕はそれに俯くだけだった。

僕の心には、あの悲劇から虚ろになった心が再来していた。

礼拝堂からアグリアスさんが出てくる。

「オヴェリア様を連れているのだ、そう遠くへは行けないだろう」

「追いかけるつもりか？」

ガフガリオンの言葉に、アグリアスさんが激昂する。

「当然だ！ このままでは王家に対して顔向けができません！」

その言葉に、ガフガリオンがさも当然といったように。

「オレたちは手伝わんぞ。契約外だからな！」

そう答えた。

「正式な騎士でもない輩の手助けなどこちらから断る！」

アグリアスさんはガフガリオンに対して憤慨するばかりだ。

「自分の失敗は自分の力で補うのが騎士というもの。これは我々護衛隊の役目だ！」

そう言つて、率いる護衛隊の騎士たちに命じる。

「行くぞ、ラヴィアン、アリシア、クラウス！」

号令をかけると同時、礼拝堂の扉が開く。

そこからよろりと、シモン先生が姿を現した。

すぐさまアグリアスさんが彼に駆け寄る。

「大丈夫ですか、シモン殿！」

「……姫は、姫はどうなされた？」

アグリアスさんが首を横に振った。

「申し訳ございませぬ。オヴェリア様は必ず私が……！」

「い、いかん……、それでは……アグリアス殿が……」

「心配召されるな。騎士の名誉にかけてお助けすることを誓いますッ
！」

アグリアスさんの言葉に発奮したのか、思わず僕は大声で彼女に向けて。
けて。

「僕も、僕も行きます！ 足手まといにはなりません！」

そう叫んでいた。

ガフガリオンがそれに異を唱える。

「何を言ってるんだ！ オレたちには関係ねえことなんだぞ！」

その声に負けじと、僕はガフガリオンに向けて叫んだ。

「確かめなきゃいけないんだ！ この目で確かめなきゃいけないんだ
！」

「……さっきの小僧か？」

ガフガリオンが訝し気に問うてくる。

僕はそれに、力なく頷いた。

ガフガリオンは腕を組んで。

「チッ、仕方ねえなあ。どうなっても知らんぞ、オレは……！」
そう毒づいた。

side: クレステイア・アルヴァン

「クラウドさん、かすり傷で良かったですね」

いつものニコニコ顔を自然に保ちながら、私は矢傷を受けたクラウド

スさんに声をかけました。

「クレスティア……てめえ、一年前のジークデン砦での恨みは忘れてねえぞ」

クラウスさんは剣幕を鋭くして私にドスの利いた声音で返します。

「あれは仕方なかったことなんですよ。あの場でザルバツグさんに逆らえる人間は誰もいませんでしたし、その命令とあらば誰かが履行するのが自然な流れだったんです」

「仕方なかった？ 自然な流れ？ ざけんなよ。ティータは未来のあ
る子だったんだ。それを奪った北天騎士団はオレにとつちや不倶戴
天の敵だ」

これだから平民寄りのお貴族様は。私は「はあ」と溜め息をつくし
かありませんでした。

「だったらクラウスさんにとって、あの場の最善は何だったんですか
？ ザルバツグさんを突き殺して、アルガス君を斬り倒してしまえば
ティータさんは助かったと、正真正銘そうお思いですか？」

「……それが分かってたら今頃オレはここにはいねえよ」

「ならそれが全てです。ティータさんの一件も含めて、ね。ザルバツ
グさんに上申したクラウスさん、格好良かったですよ。自然、私も演
技に熱が入ってしまったくらいです」

「オレを止めたアレが演技だったって言うのか」

「そうです。どうしたってティータさんはあそこで息絶える運命だっ
たんですから。私は演技でクラウスさんを足止めしたに過ぎません」
ケツと口汚く舌打ちしながら、クラウスさんは抗弁します。

「今さらてめえが何をどうしたって言い込めるつもりはねえよ。ただ
オレはてめえを絶対に許さねえ。それだけは覚えとけ」

「おお、怖い怖い」

内心おどけた調子で、私はクラウスさんに返答しました。

side：ラムザ・ベオルブ

「クラウスさん、お久しぶりです」

「おう、ラムザ。きみも逞たくましくなった……って言ったら皮肉かね？」

僕は小さく頷く。

「この一年、ガフガリオンと一緒に様々な経験を積んできました。けれど、ジークデン砦の炎に消えたデイリータとティータの姿を忘れたことは一度もありません。今でも夜中、悪夢に出て……いや、悪夢だったらどんなに良かったとか、そんな心境です」

「オレだって悩んださ。悩んで悩んで、それでも答えは出なかった。オレは一体何をすべきだったのかわかってな。きみだけが都合良く答えを得ているなんてありつこないさ」

「……僕らだけが置いてけぼりなんですな」

僕の迷いの混じった言葉に、クラウスさんは首を横に振った。

「いや、それは違う」

決然と、続ける。

「きみもオレも、クレスティアだって見ただろう。炎に消えたはずのデイリータを。彼はオレたちにはない答えを得た。だからこそ知らなかりやならない。デイリータが何を得たのかを」

僕は一瞬、曇った表情をキョトンとさせた。

「クラウスさんはご存じなんですか。デイリータが何を得たのかを」

しかし、彼は首を横に振るばかりで。

「こればかりはきみが直じかに見て知るべきだ。オレなんかの言葉で迷うことも、何かを得る必要もない。自分の眼で確かめるんだ。年長者から言えるのはそれだけかな。卑怯な言い分だとは思うけどさ」

そう言い切った。

これ以上は何も言うことはない——いや、何も言う必要はないと、そう断じたのだろう。

そこにひよこつとクレスティアが脇から爛漫らんまんな表情をのぞかせた。

「男同士の内緒話ですか？ 私も交せてもらって構いません？」

「うっせえ。うぜえ寄るなあっち行け」

しつしつと手を振ってクラウドさんはクレストイアを追い払おうとした。

顔を合わせようもしない。

むう、と頬を膨らませてクレストイアが言い含めてくる。

「まあ内緒話もいいですけど、皆さんそろそろ出発するみたいですよ。ラムザさんもクラウドさんも、昔語りはそこまでにして追いかけないと」

「しつかり聞いてんじやねえかよ」

クラウドさんはそう毒づいた。

そうだ。さっき自分でも言ったじゃないか。確かめなければならぬんだ、と。

何故ゴルターナ軍の騎士としてオヴェリア様をさらったのか。

そして何故、生きていたのに僕らに何も伝えなかったのか。

彼の真意を確かめなければいけない。

それが僕に課された、ベオルブ家の正義に繋がるものだと思じて。

side: ヴオルマルフ・ティンジェル

「……首ひとつにつき500ギル出そう。それでどうだ?」

私は目の前の傭兵に報酬を約束する。が。

「ダメだ。話にならない。2000だ。首ひとつ2000だ」

傭兵は公然と4倍の額を要求してきた。こういう輩は権力で黙らせるのが一番だ。

「貴様たちを」異端者」にするのは簡単なことなんだぞ」

「オレたちを脅す気か? ……1000ギルでどうだ?」

私はゆっくりと首を横に振る。

「700だ。それ以上は出せん」

傭兵が黙りこくる。

考え込んだが、やれやれと手を横に広げた。

「わかったよ。それで手を打とう」

「よし。やつらはすぐにやってくる。一人残らず殺すんだ。いいな」

ちょうど往来の坂下から大勢が迫る気配を感じた。

「フン。噂をすればなんとやらか……」

私は顎をその方向に向けた。

「よし、やつらがターゲットだ。しっかりとやるんだぞ！」

それ以上の問答はせず、私はその場を立ち去る。

背後から傭兵の怒声が聞こえてきた。

「あいつはガフガリオンじゃねえか！ くそッ！ 700じゃ少なすぎだぜ！」

振り返ることなく、私はそのまま町の出口へと向かって歩いた。

side: クレステイア・アルヴァン

オーボンヌ修道院を出発した私たち、オヴェリア様護衛隊もとい救出隊はまず貿易都市ドーターに入りました。

しかしてそこに待ち受けていたのは、傭兵の集団です。

「チツ、待ち伏せか！ ご苦労なこつたぜ!!」

ガフガリオンさんが毒づきます。

金の当てもないのに面倒ごとが増えたって反射的に思っちゃったようですね。

「嫌なら帰ってもよいのだぞ」

アグリアスさんの横やりに、彼は動じることなく言い放ちます。

「金にならんことはしない主義なんだが ま、これはサービスだな！」

「恩着せがましいことを！」

今度はアグリアスさんが毒づきました。

敵の布陣は坂上に弓使い、魔道士というオーソドックスな面々。地の利は敵にあり、私たちは敵の攻撃を防ぎながら敵の喉元に喰らい付かねばなりません。

しかし練度の高さを見ればこっちの方が圧倒的有利。何せホーリーナイトとダークナイトの二本柱に護衛隊、傭兵団の皆さんが揃っているのですから！

王都の近衛騎士アグリアスさんの華麗な聖剣技とベテラン傭兵ガフガリオンさんの血を啜るかのような暗黒剣。

これ以上の見物はまず無いと言えるでしょう。

ま、すぐ離散することになるんですけどね。

とにかく美麗な連携が見られて大満足！

おっとよだれが垂れそうになりました。平常心平常心。

とりあえず、忠言だけはしときますか。

「ラムザさん、ラムザさん」

「どうした、クレスティアア？」

「こんな所で傭兵に待ち伏せられるなんておかしくありません？ 王女をさらったのは南天騎士団のはず。それがこんな無名の傭兵が待ち構えているなんてちよつと状況的に考えにくいですよ」

私の言を聞いて、ラムザ君、ふむと考え込んだようですが。

「しかし実際に敵はすぐそこにいるんだ。彼らを撃破しない限り進むことは出来ないことにならない。考える前にまずはこの状況を打開しないと」

「そうですかねえ」

もしもこれが何らかの計略なら、一歩引いて考えるのも大事だと思うんですけどね。

ゲーム的に言えばここはヴォルマルフさんの顔見せっていう割と重要な場面なんです。

まあラムザ君たちにとっては、下手な考え休むに似たり。今はオヴェリア様を追いかけないといけませんから、それが一番の優先事項

ですしね。

私だけはいつでも逃げられるように状況把握しておきますか。

アグリアスさんの剣の前に敵はおらず。あつという間に敵は残り一人。しかし果敢に攻めてきます。

「ちいつ！ 死ね、ガフガリオン!!」

「馬鹿め」

傭兵の鋭い一撃を軽く躲して、同時に敵に重い暗黒剣を食らわします。

「死ぬのはテメエの方だよ」

言葉通り、敵は血しぶきを噴きながら絶命しました。合掌。

「こんなところで時間を費やしている場合ではない……」

アグリアスさんが焦燥しながら唸り声を上げます。

「早くオヴェリア様をお助けせねば……」

「どこへ行こうっていうんだ。どこへ逃げたかわからんだろうが？」

水を差すようなガフガリオンさんの言葉に、アグリアスさんが返答します。

「奴らが逃げるところは1ヶ所だけだ。あそこに決まっている!」

要は南天騎士団の基地ですね。誘拐犯は防備が厚い所に逃走した可能性が高い、その分析は実に正しい。

「難攻不落の要塞……、ベスラ要塞だ」

ま、その前に私たちが追い付くんですけどね。

「ベスラ要塞……」

ラムザ君の呟きに、私は続くように皆さんに告げます。

「急ぎましょう。オヴェリア様がそこに拉致されたらもはや手の施しようが無くなります」

私のセリフに、皆さん頷きます。クラウドさんとガフガリオンさんを除いて。

せっかくの決めゼリフだっというのに乗ってくださいよ。

そんな私たちはベスラ要塞を目指して、その前に広がるアラグアイ

の森に向かいます。

モンスターが跋扈する難所ですが、アグリアスさんやガフガリオンさんがいる私たちに敵はいません。

私ももつと頑張らなきや。おー！

アラグアイの森

side：キラ・シルベント

少し時を遡って。

イグロス城での執務を終えて、いつものようにアパートに帰る……というわけでもなく、帰りの途上でチョコボを一頭買った。

”運命の日”が近付いている。私がそれに遅れるわけにはいかない。

家に帰るとミルウーダが完全武装して待っていた。

「どうしたんだ、ミルウーダ」

「どうしたもこうしたも無いでしょう」

腕を組んで、少し苛立たしげにミルウーダは毒づく。

「どれだけ貴女のことを見ていると思っっているの。行くんでしょ？」

私だけこんな所に置いていかれても路頭に迷うだけよ。いずれ骸旅団の残党だとバレるわ」

「すまない。でも今日が一瞬のチャンスなんだ。別に置いてけぼりにしようと思っただけじゃないよ」

「言い訳は道中で聞いわ。それで？ 貴女は何をしたいの？」

「最近、ラーグ公側のマスメディアが一斉に情報を流し始めた。『王女オヴェリア、ガリオンヌへ移送の事』ってね」

「それもこれもラーグ公の人気取りの情報じゃないの？」

「そこが妙なところで、私が調べてきたダイスダーク卿の尻尾さ。ラーグ公はオリナス王子をイヴァリースの王に据^すえてその後見人としてイヴァリースの覇権を握らんとしている。要はオヴェリア王女はラーグ公にとつてもダイスダーク卿にとつても邪魔な存在でしかない。彼女を放っておいたら方々から担ぎ出そうとする輩が出るからね」

ミルウーダに苛立ちが募り始める。

「それと市井に流れ始めた情報と何か関係があるの？」

「先に言った通り、オヴェリア王女はラーグ公にとつて邪魔なんだ。

なら誰かが担ぎ出す前に始末したいと思っただけ。そうなる前に、私は彼女を助けたい」

彼女が眉間にしわを寄せる。まずい、これ絶対怒っていますのサインだ。

「話が飛躍し過ぎていると思うんだけど」

「そのことについては道中で話すさ。じゃあ行こう」

私とミルウーダがチョコボに騎乗する。

場所は貿易都市ドーターのさらに東、アラグアイの森を越えた先にあるゼイレキレの滝だ。そこで王女は闇に葬られるだろう。……いや、『彼ら』がいる限りそれはないか。

side：クレスティア・アルヴァン

ドーターから東に進むと大きな森に出ます。ここがそのアラグアイの森です。

順調にベスラ要塞への道を進む私たちの前に、ゴブリンに囲まれるその子は現れました。

「ク、クエ〜ッ!!」

チョコボです。どこからどう見ても野生のチョコボです。実は違ったりするかも？

「こんなところにチョコボが！」

「ゴブリンの森に迷い込むとはマヌケなチョコボだぜ！」

アグリアスさんとガフガリオンさんが同時に評します。

「飼い慣らされたチョコボより野生のチョコボの方が強いって、以前、デイリータが言ってたっけ」

そのデイリータ君を追っかけている身としてはあんまりかかずにらっている余裕はないのでは……

「大事な戦力になるかも？」

ファイファイ。

「助けるつもりか、ラムザ？ 金にはならんぞ！」

ガフガリオンさんが忠告します。

「オヴェリア様をお救いするのに役立つかもしれないが……」

アグリアスさんはやる気です。オヴェリア様放つといて大丈夫なんでしょうかね、この人。妙なところでネジが緩んでいるような気はしますが。

まあそんなこんなで、チョコボをいじめるゴブリン軍団との戦闘です。

地面は平坦なもので、ときどき足元を浅い落とし穴が邪魔する程度。

ここは剣でなく弓で対処しましょう。直線状の地形なのでボウガンでも余裕で射線が通ります。

前衛系のアグリアスさんとガフガリオンさんは果敢に出て聖剣技と暗黒剣でゴブリンたちを圧倒します。この一網打尽のさまを見ているとお二人とも、人間やめてるような気がしてきました。

「ク……クエッ!!」

「無事なようだな」

ラムザ君が剣を収めます。

「よかったな、おまえ。ラムザに感謝しろよ」

意外と優しいガフガリオンさんの発言。動物好きなんでしょうか。と、まあ予期せぬ戦闘をしましたが、旅程には何の影響もありませんでしたとさ。

side:キラ・シルベント

夜闇に包まれた森。その一角で私たちは焚き火を焚いていた。温かいスープを口にする。

チヨコボで駆けに駆けて、このアラグアイの森に付く頃には既に夜も深くなっていたのだった。

「で、どうするの？」

「どうするもこうするもないさ。もう夜だし、今日はここで野営しよう」

「そうじゃなくて」

ミルウーダが青筋立てて怒っているさまが実によく見て取れた。これ以上は隠し立てしても彼女の批難を買うだけだ。

「言ったらう。オヴェリア王女がラーグ公の罠にかけられつつあるって。それが今まさにこの時なんだ」

「何故それが分かるの」

「きみも最近の新聞で一面記事を見たんじゃないか？ 『王女オヴェリア様、ラーグ公の庇護下に入るために護衛隊と共にガリオンヌ領に移送される』っていう記事を」

「見たわよ。でもそれってラーグ公の点数稼ぎじゃないの？」

「いい加減、きみだっておかしいと思うだろ。本当にその通りに事を進めるならわざわざ市井にそんな情報を流すべきじゃない。それを面白くないと思う輩が、王女をかすめ取って祭り上げる輩が現れるってことに」

「杞憂……じゃないのよね。貴女にとっては」

「ラーグ公にとって彼女は邪魔な存在なんだよ。オリナス王子擁するラーグ公がわざわざ王女を囲い込む必要性はほとんどない。そうすると他の誰かが王女の身柄を欲しがるんだ。ラーグ公でなければ、それは誰かとなると」

「待って。まさか南天騎士団が王女の身柄を奪って、ゴルターナ公が神輿に担ぎあげようとしてるって言いたいなの？」

「その通り。けどそうしたくない輩も当然いる」

「それがラーグ公……確かに、オヴェリア王女の存在は彼の喉元に突き付けられた刃となるわけね」

「そう、だから——ッ！」

焚き火の前に座り込んでいた私は、咄嗟に立ち上がった。人の気配。一人や二人ではない。何人かは分からないが、一方からだけではない。包囲陣を敷いてきている。

「火を焚いていたのは迂闊だったわね」

「ああ、でも気付かれたからにはもう関係ない」

ガサガサと、隠れる様子もなく人影が現れる。

周囲から5、6人ほど。

正面から現れた人物が焚き火の光に照らされた。

北天騎士団の正装だ。

「おまえたち、こんな所で何をしている？ おまえたちのような人間がここにいることなど、指示にはなかったぞ」

騎士がクンと鞘から刃を覗かせた。

「私は北天騎士団の騎士キラ・シルベント。この剣士は私が現地徴用した傭兵だ。きみたち北天騎士団こそ、何故こんな所にいる？」

ざわ、と周囲を取り囲んだ騎士たちが包囲を狭めてきた。

「ダイスターグ卿の命を知らないだど？ ならば、我々を見たおまえたちをここから生かして帰すわけにはいかんな」

言って、騎士たちが一斉に剣を抜き放つ。

私も剣を抜き放った。

対してミルウーダは。

「なるほど。これがラーグ公の命令で、王女が嵌められようとしている罠ってわけね」

すつくと立ち上がり、彼女もまた剣を抜いた。

「虎口に入ったのがどっちか私たちが教えてあげるわ」

無造作に、彼女は一步踏み出した。ざわめきが広がる。

「……殺れッ!!」

その騎士の一声に、騎士たちが一斉に突撃してくる。包囲を敷いての全軍突撃。古来よりこの戦術を切り抜けられた戦士はいない。戦いは数と、その包囲なのだ。

だが甘い。私とミルウーダが先んじて、同じ方向へと突っ切り、騎

士の一人を貫き、斬り伏せた。断末魔の叫びと共に、まず一人。

空いた穴から包囲を抜け出した私たちは互いに背を向け、残りの剣士を打ち払いに向かった。突撃を食い止められた騎士たちに動揺が走る。

間隙を縫って、二人目、三人目を私たちは屠った。

思えば私は戦いにおいて、必ず誰かの助けがあつた。今もそれは変わりない。しかし、背を預け合える仲間と共にお互いを助けながら戦えることのなんと快いことか。

一気に数を減じて氣勢を失った騎士たちを躊躇なく、私たちは斬り倒す。

最後に残った一人がようやく劣勢を悟ってか、私たちに背を向けて走り出した。

ミルウーダがそれを追う。

「殺すな！ ミルウーダ!!」

「上、等ツ！」

身がかがめ、彼女の剣が騎士の足の腱を斬りつける。

騎士は無様に転がり、尻もちを突いてじりじりと私たちから逃げようとする。が、もう遅い。

「さて、尋問タイムといこうか」

にいつと人の悪い笑みを浮かべて、私はそう告げた。

私たちは騎士の両手両足を縛り上げ、その場に適当に転がす。騎士の傍にはミルウーダが侍った。

「質問その1だ。何故、北天騎士団がこんな時間にここにいる？」

「……言うと思っているのか？」

私はミルウーダに目配せして。

「ミルウーダ、そいつの爪を一枚剥がせ」

一気に騎士の顔が青ざめる。なんだ、あんまり根性ないな。

「ま、待て！ ラーグ公の、いや、ダイスターグ卿の命令だ！ 今頃この周辺は北天騎士団が哨戒している！」

無言のまま、問答無用でミルウーダが騎士の人差し指の爪に短剣を

刺し込んだ。

野太い悲鳴を上げながら騎士が転げまわる。あんまり聞きたいもんじゃないな、男の悲鳴ってのは。

「質問その2だ。その北天騎士団の目的は何だ？」

「言う！ 言うからこれ以上の狼藉はやめろ!!」

「ミルウーダ、もう一枚剥がしてやれ」

中指に短剣を刺し込む。関係ないことを喋れば痛い目に遭うってことを直に教え込んでやらねばなるまい。

男の悲鳴がさらに周辺に響き渡った。

痛みを堪えるのと、絶叫の後の呼吸を荒らげて、男は続けた。

「目的は王女オヴェリアだ！ 南天騎士団に扮した我々北天騎士団が王女を誘拐する！ そして王女を始末し、それを南天騎士団の仕業に見せかけるのが我々に与えられた命令だ！」

「質問その3。その真意は？」

私はニヤニヤ笑いを崩さないまま、騎士の反応を待った。

「全てはラーグ公の計略だ！ イヴァリースの王位に就くのはオリナス王子一人でいい！ 王女は邪魔なんだ！ だから南天騎士団が誘拐したことにして、情報を知る連中の口封じと王女の抹殺のため、北天騎士団がこの各地で眼を光らせている！ 狂言誘拐だ！ 邪魔な王女の始末とゴルターナ公を失脚させるために立てられた計画だ!!」

「……ということだ。ミルウーダ」

ふう、と彼女は息をつき、ようやく納得がいったように私に話を振る。

「貴女の言う通りだったわけね。オヴェリア王女も災難ね、こんな連中の掌の上で踊らされた拳句、殺されかけるなんて」

「そうだ。だからこそ止めなければならぬ。ティータのような犠牲を出さないためにも」

「急がなくていいの？」

「勿論、急ぐさ。でも多分、まだ時間はある」

「どういうこと？」

「お姫さまにはナイトがつきものってことさ」

ミルウーダは頭に「？」を浮かべたまま、とりあえず納得はしたようだった。

「で、コイツはどうするっ?」

ミルウーダが縛られた騎士を蹴り転がしながら言う。

「そうだね、念のため武器を持ってないように腕を二本とも折っておこうか」

夜中の森に、男の絶叫が響いた。

side : クラウス・マツケンロー

「……ん?」

オレはふと聞こえた鳴き声に耳を澄ます。

「どうした? クラウス」

「いや、森のどこかで誰かの悲鳴みたいなものが聞こえてきました」

アグリアスさんの問いにオレは答えた。

そんなオレに彼女は。

「こんな夜中だ。鳥か蝙蝠こうもりの鳴き声と聞き間違えたんだろう」

「気になるなら見てきたらどうですか? クラウスさん」

癩しやくに障るが、クレスティアの言う通りだ。

「オレ、ちよつと見てきます。もしかしたらこの森のどこかでオヴエリア様が危難に遭っているのかもしれない」

「そうか……それもそうだな。クラウス、おまえに任せる。我々は先を急ぐ。それには遅れるな」

「はっ」

本当はそんなことはないとおれの知識は訴えているが、もしかしたらオレたちが介入したせいでどこか食い違いが生まれているかもしれない。気になるところはとことん調べるべきだ。

オレはアグリアスさんに頭を下げて、鳴き声の方へと向かって走っ

た。

「で……わざわざ来てたのはおまえらだったのね」

「やあ、久しぶりだねクラウス」

両腕があり得ない方向にひん曲がった騎士がぜえぜえと荒い息を立てていた。

それをゴミでも扱うかのように、キラとミルウーダが転がしている。

一年ぶりの再会だというのに、まるで昨日会った友人のように話しかけてきた。

「ミルウーダ、おまえもずっとキラと一緒にいたのか？」

「ええ、さすがにキッチンを爆発させたり洗濯物を紐ごと吹き飛ばされるのは勘弁してほしいかったから」

「それは言っただけじゃない私の弱み！」

いつも冷静なキラが発奮している。こいつもミルウーダと一緒にいることで少しは変わったってことか。

変わる。オレは何も変わってない。

「クラウス、きみは変わったね」

何も言わずとも、キラはオレの心を読んでくる。

「きみは何に対しても大雑把なくせに自信だけが無かった。それが今は勢いだけだけど、猪みたいに前へ前へ先に進もうと心掛けているように見える。それだけでもきみは大きく見えるよ」

キラの言葉に、オレは照れ臭くなつて指で頬を掻いた。

「オレには、オレの先の事がさっぱりわからねえ。おまえに褒められなくてもむず痒いだけだよ」

「きみは成長してるさ。誰にも分からないところで、ね。アグリアスにこかさされてばかりだろうけど、それだけ彼女もきみに期待してるんじゃないかな」

「アグリアスさんか……そいつはおためごかしで、案外オレの事なんざさつさと切り捨てたいんじゃないかって思う時の方が多いよ」

そう言うオレは、東の空がうつすらと白んでいるのが見えた。

「そろそろ戻らねえとアグリアスさんにどやされちまう。どうするキラ？ ミルウーダと一緒にオレたちと来ないか？ ラムザもクレスティアもいるぜ」

オレの提案に、キラは珍しく口ごもって。

「……王女の救出隊か……悪いけど遠慮しておくよ」
「どうして？」

「今、クレスティアとまともな顔で出られる気がしない。一年前、彼女がやったことを思えば至極当然だと思うけど」

「ああ、オレは今もアイツが許せねえ」

キラは首を横に振った。

「許す、許せないの問題じゃないんだ。ただ、彼女の事がほんの少しだけ、分からなくなったってだけの話さ」

そう言うキラの表情には少し、陰りが見えたような気がした。

「大丈夫。次はゼイレキレの滝だ。きみたちに遅れないように合流するさ」

もうアグリアスさんたちは出発した頃だろうか。

次の道程はゼイレキレの滝。

ラムザにとってもデイリータにとっても、あるいはキラやクレスティアにとっても運命を決める時が来たのかもしれない。

オレは……どうだ？

このまま流されるまま、ブレイブストーリーに関わっていくだけなんだろうか。

その事実が、オレに悔しさを与えてくれた。

デイリータとの再会

side：デイリータ・ハイラル

滝の間に掛けられた橋の真ん中に包囲されたオレとオヴェエリア。

だが北天騎士団自体は少数。

けして相手に出来ない数ではない。

「もう、あとがないぞー！ 観念するんだな！」

騎士の恫喝がオレの耳じ朶だを打つ。

「おとなしく王女を引き渡すんだ。そうすれば、おまえの命だけは助けてやろう！」

それに対し、オレは騎士に反論する。

「白々しいウソを！ おまえたちの目的は王女の生命だろ？」

オレは騎士の恫喝に含まれた嘘を看破する。

「王女を殺害したとき、その真相を知るオレを、このまま生かして帰したりはしないはず！」

「何をバカなことを！ 我々は王女を助けに来たのだ！ 何故、王女の生命を奪わねばならん？」

オレは王女を庇いつつ、騎士の恫喝を聞き流していた。

「貴様たちゴルターナ軍に王女を渡すわけにはいかんのだよ！」

まだオレのことをゴルターナ軍だと思っている程度には考えが浅い。

オレの後ろで、王女が後ずさるのを感じた。王女もまたこの騎士たちが信を置ける人間だと信用していない。

その時。

「オヴェエリア様ーッ!!」

王女の救出隊が追い付いたようだ。

「アグリアス!!」

王女が歓喜の声で叫んだ。

「チッ！ 余計な連中がやってきたか！」

——尻尾を出したな。

「ガフガリオーン！ そいつらを殺せッ!! 一気にカタをつけるぞッ

!!

騎士の一人が指示を飛ばす。

「どういふことか、よくわからんが、これも契約だ。仕方ないな！」

「ガフガリオン、貴様、裏切る気かッ!!」

傭兵ガフガリオンの唐突な裏切り宣言に騎士アグリアスが激昂する。

「裏切る？ とんでもない。こいつらはホンモノさ」

ガフガリオンが口を開いた。

「オレたちの仕事は、お姫さまが”無事に”誘拐されるようにすることだ」

滔々と続ける。

「そして、こいつらの任務は誘拐したやつらを口封じのためにここで始末することなのさ！」

「どういふことだ？ 誘拐が狂言だともいふのか？」

「邪魔なんだよ、そのお姫さまはな！」

ガフガリオンが己の役割を、答え合わせのように続ける。

「正統の後継者はオリナス王子だけでいいんだ。お姫さまが生きていと担ぎ出すヤツがあらわれるからな！」

オレはそれを聞きながら、ラムザたちに真相を話す。

「どうせ殺すことになるのなら役に立ってもらおう……」

この策が上手く動いたとなったとき、王女の運命が決まる。

「ゴルターナ軍に誘拐されたことにしてそのまま殺してしまえば、邪魔なライバルを失脚させることができ、邪魔なお姫さまも処分できる……。ラーグ公が書いたシナリオはそんなところだろう……いや、そのシナリオを書いたのはきつとダイスダーグだな」

オレはラムザに目配せしながら親友の答えを待った。

「ラムザ、おまえもそう思うだろ？」

ガフガリオンがラムザを見やって。

「そういうわけだ、ラムザ、クレスティア。こいつらを皆殺しにするぞ！」

だが、そんなガフガリオンの真実を、ラムザは拒絶する。

「また、力の弱い者を犠牲にしようというのか……」

ラムザの闘志に怒りが灯ったのをオレは察した。

「……そんなことを許しはしない！ これ以上、ティータのような犠牲者を出してはいけませんだッ!!」

こうして王女の護衛隊と、北天騎士団との戦闘が幕を開けた。

side：ラムザ・ベオルブ

一足飛びに滝つぼの血を蹴り上がり、北天騎士団の騎士を打ち倒して、僕は叫んだ。

「デイリータ！ 生きていたのか、デイリータ！」

「こんなところで再会するとはな！ あいかわらず兄キたちの言いなりか？」

「ばかな！ 僕は何も知らない！ こんな計画なんて知りもしない！」

僕もまた利用された側だ。ガフガリオン、ひいては北天騎士団に。

「それより、デイリータ、きみこそ兄さんたちの計画に荷担しているのか!?!」

「冗談を言うな！ オレはお姫さまを助けにきたのさ！ お姫さまを利用しようというやつらの手から、お姫さまを自由にするためにな!!」

デイリータの叫びに、ガフガリオンが反発する。

「ウソを言うンじゃねえ！ おまえも雇われたンだろ？ 金のために王女誘拐という仕事を請け負ったンだろ！ 今さらシラを切るンじゃねえツ!!」

ゴルターナ軍の所属としては、デイリータの目的が曖昧だ。ただ単純にオヴェリア様を庇い立てているわけじゃない。

「貴様と一緒にするな！ 金のためにやっているわけではない！」

「じゃ、誰だ？ オレの仕事を邪魔するヤツは？ 計画をかぎつけたガキが正義感に駆られて王女を救出に来たとしてもいうのかッ!？」

ガフガリオンはデイリータの狙いに気付いていない。ただ、僕もまた彼の真意を計りかねている。

「おまえは誰に雇われている？ 誰からこの計画を聞いた？ 言えッ!」

「それは貴様の知るところではない!」

side：オヴェリア・アトカーシヤ

「貴方は何者なの？ 味方、それとも敵?」

「あなたと同じ人間さ!」

白黒がはつきりしない。ただ、このデイリータという騎士はただの悪人じゃないことだけは知れた。

side：アグリアス・オークス

「オヴェリア様ッ! 今、お助けいたしますッ!!」

私は滝つぼから地面を這い上がり、オヴェリア様の元へ向かおうとする。

それを邪魔するのは、やはりガフガリオンだった。

「そうはさせるか!」

「自分が何をしようとしているのか貴様はわかっているのかッ!? オヴェリア様は養女といえども王家の血筋。そのような方を貴様は手にかけてようというのだぞッ!」

「ああ、わかっているさ！ よおく、わかっているともし！」

ガフガリオンが持論をぶちまける。

「王女といえども邪魔なら排除される！ それが頂点に立つ」王家の血筋” ってヤツなんだろう？」

憎たらしい表情で語るガフガリオンに私は敵意を剥き出しにする。

「貴様ツ、オヴェリア様を愚弄するか！」

「邪魔なら殺される……、オレたち平民と変わらんってことさ！ 違うのは、おまえのような頭の固いヤツらが何も考えずに忠誠を誓うってことぐらいか!!」

ガフガリオンの宣告に私は闘志を燃やす。

「生きていたって、頂点に立たない限り利用されるだけなんだ。だったら今、殺された方がマシだぜツ！」

「ならば、私が護ってみせる!!」

side：クレスティア・アルヴァン

私はボコ——さつき捕まえたチョコボに乗ってガフガリオンさんを強襲します。

「ガフガリオンさん、悪いですけど、ここはオヴェリア様にお味方させていただきますよ！」

「ラムザ同様、おまえもオレに逆らう口か！」

「オヴェリア様は生きていただけねばならない人物。私の宴に欠かせない人なんです！」

「宴だど？ おまえは何を言っている？」

「今少し待っていただければ、真相は分かりますよ！ ただし、それまで貴方が生きていければの話ですけどね！」

「ナマ言ってンじゃねえ！ 邪魔立てするなら容赦しねえぞ！」

side：ラムザ・ベオルブ

「あなたはこの計画を知っていたのか！ 何故、こんな汚い仕事をツ
!!」

「汚いだと!? 金を稼ぐのに綺麗もクソもあるか！ オレはプロの傭
兵なんだぞ！ 請け負った仕事はどんな内容でもやり遂げる、それが
プロつてもんだ！」

「何故、僕に話してくれなかった！ どうしてツ!!」

「話したらどうした？ オレを止めたか？ オレたちがやらなくても
誰かがこの仕事を請け負うんだ！ わかるか！」

ガフガリオンの論すような言葉に既視感を覚える。ジークデン砦
の、あの言葉を。

「おまえの知らないところで誰かが死ぬんだ！ それが現実だ！ お
まえは、おまえの知らないところで起きていることを止められるとで
もいうのか!？」

「しかし……、しかし、こんなこと、許されるっていうのか!？」

「"しかし" って言うんじゃないか!？」

脳裏によぎるジークデン砦のセリフ回し。ガフガリオンにとって、
彼は奴と、アルガスと同じだとでもいうのか。

「おまえは"現実" から 目を背け、逃げているだけの子供なんだよ
！ それがイヤなら自分の足で誰にも頼らずに歩けツ！ 独りで生
きてみせろツ!! それができないうちはオレにでかい口をきくん
じゃねえツ！」

「なら僕が貴方を止めてみせるツ！ 今、この場で!？」

「よくぞ言ったもんだぜ！ 行くぞ!？」

北天騎士団はデイリータやアグリアスさんの手でほぼ全て駆逐さ
れた。

残るはガフガリオンただ一人。

「くそッ！」

ひらりひらりと岩肌を舞いながら、姿を消すガフガリオン。
どうやら大勢は決したようだ。

side：キラ・シルベント

「ちよつと出遅れたようだね」

私はほんの少し気後れしながら呟く。

「気にすんな。アグリアスさんとデイリータが何とかしてくれた」

「ここで合流っていうのもなかなか図々しいわよね。どうする？」

「決まってるさ。彼らに会いに行こう」

そう、会わなければならない。あの無邪気な親友、クレスティアに。

side：クレスティア・アルヴァン

デイリータ君が開口一番ラムザ君に忠言します。

「オヴェリア王女をオレに預けるんだ。その方がお姫さまのためだぞ」

そこをアグリアスさんがオヴェリア様の前に手をかざして遮りま
す。

「デイリータ、きみはいったい何を企んでいるんだ……？」

ラムザ君の問いに、デイリータ君はさも当然といった口調で所見を
述べます。

「企む？ とんでもない。オレは真実を言っているだけさ」

まあデイリータ君の真実は大抵虚偽をはらんでいるのですけどね。

「そうだろ？ 北天騎士団を敵にまわしたおまえたちがお姫さまをどこへ連れて行くっていうんだ？ すぐにおまえたちを捕らえるために北天騎士団の精鋭たちがやってくることだろう。いったいどこへ逃げるつもりなんだ？」

まあ、結構派手にやっちゃいましたからねえ。その点は私もデイリータ君に同意です。

「そ、それは……」

ラムザ君が言い淀みます。さすがの実力者ラムザ君も政治力は高くない模様。

「よく考えてみろ」

デイリータ君が続けます。

「ラーグ公の計画ということは王妃も知っているってことだ。つまり、王家は味方じゃない」

近衛騎士団はここで殉職するために派遣された――いわば人身御供ひとみごころにされちゃったわけですね。何とか無事に済んで良かったです。

「なら、ゴルターナ公か？ いや、それも無理だ。自分の疑いを晴らすためにおまえたちを処刑するぜ」

そのところを上手いことやれるのがこのデイリータ君なんですよ。いやはや、一年で培つちかったものはデイリータ君が一番のようです。

「おまえならどうするとうんだ？」

アグリアスさんが問いますが、デイリータ君はにべもなく。

「おまえたちにはできないことをするだけさ」

そう告げました。

「どういう意味なんだ？」

「さあな……」

そこまで言って彼は私たちに背を向けます。

「おまえたちにお姫さまをもう少し預けておくことにしよう」

話は終わったわけですが、ラムザ君はデイリータ君を引き留めません。

「デイリータ……、また会うことができて嬉しいよ」

デイリータ君は立ち止まり、虚空へと眼を這わせて眩きました。

「ティータが助けてくれた……」

「え？」

「あのとき、ティータがオレを守ってくれたんだ……」

しばしの沈黙。あの時、邪魔立てしたクレスティア・アルヴァンはもはや彼の眼には「なんだおまえか」程度にしか映っていないのでしょうか。恨み言の一つでも言われるかと思っていたのに。

立ち去りかけるデイリータ君に。

「感謝いたします、デイリータさん」

オヴェリア様がデイリータ君に謝意を述べられました。

デイリータ君は立ち止まり。

「また会おう、ラムザ」

それだけ言って、彼はゼイレキレの滝から去っていきました。

彼の姿が見えなくなったところで。

「ラムザ、クレスティア。加勢してくれたことに感謝する」

おおっと。私にまでお声をおかけくださるとは。

「しかし、よいのか？ 北天騎士団を敵にまわしたのだぞ」

ラムザ君、ゆっくりと首を横に振って。

「気にしないでください。自分で選んだ道です」

ハッキリとそれだけは意思表示しました。

「それより、これからどうします？ デイリータの言ったとおり、僕らを助けてくれる人はいない……」

「グレバドス教会だ……」

「え？」

唐突にクラウスさんが口を開きました。

「北天騎士団も王家も当てにならない今、逃げ出せるのはライオネルのドラクロワ枢機卿しかいない。一旦、ほとぼりが冷めるまで枢機卿の厄介になるしか方法がない……」

「それ、いいですね！ 私たちにはもうそこしか行ける場所はないんですから、虎穴に入らずんば虎子を得ずってやつですよ！」

「クレスティア……何も狩りに行くわけじゃないんだから……」

僕はクレスティアの能天気な言葉に、思わずツツコミを入れた。
た。

「だがしかし、妙案だ」

アグリアスさんが拳を片手に置いてその案を採用しました。でも
クラウスさん、その後の顛末はお分かりなんですよね？

「たしかにライオネルなら北天騎士団もうかつに手を出せない……」

ラムザ君も採用のようです。

「行きましょう。僕らにはそこへ行くしかない」

side：ラムザ・ベオルブ

戦闘後に合流したキラたちに、僕は改めて向き直った。

「久しぶりだねキラ。ミルウーダも、また会えて嬉しいよ」

「その割には格好の悪い登場の仕方を見せてしまったけどね」

「まあお生憎様ね。ようやくダイスダーグの計略を知ること出来た
ことだし」

結局は兄さんの掌の上か……再会を喜んでいる場合じゃないな。

「だけど、一年前の旧友が一堂に会かいしたんだ。少しは安心も出来たん
じゃないかな」

「まあね」

キラが答える。

「だけどここからが鬼門だよ。ライオネル城までの道は遠く険しい。
それに……」

「それに？」

「……いや、いいんだ。忘れてくれ」

「そういえば、キラはもうクレスティアに挨拶したのか？」

「まだだし、今さらする気もないよ」

「ふん……」

それきり、僕は興味を失った。

それよりも、早くアグリアスさんたちを追わないと。
置いてけぼりになってしまう。

side：キラ・シルベント

「クレステイア……か」

「おまえもアイツを許せない口か？」

「言っただろう。許す、許せないの問題じゃないって。ただどうやって接したらいいのか計りかねているだけさ」

クレステイア・アルヴァン。”ゆかり”のブレイブストーリーへの
入れ込み方は半端じゃない。私たちだけがブレイブストーリーに引
きずられているようだけど、彼女は違う。

その点は、奸雄ディリータですら利用しようとしている。

そんな寒気を覚える自分がいた。

機工士

side：ムスタディオ・ブナンザ

周囲を見回し、追っ手の数を数える——そんな暇もない。連中は確実にオレを壁際に包囲してきている。

剣士と魔道士がオレの行く手を阻んだ時点で、剣士がオレに勧告する。

「どこへも逃げられんぞ！ 命が惜しければおとなしく渡すんだ！」

「何を渡せっていうんだ？ オレには何のことだかさっぱり……」

すつとぼけるが頭に血の昇った連中は聞く耳持たずと言ったところだ。

「しらばつくれるんじゃない！ ムスタディオ！ 自分の親父がどうなってもいいのか？ 素直に『聖石』を渡すんだ。渡せば親父を解放してやろう」

剣士の言葉に圧されるようにしてオレを取り囲む悪漢たち。

「……よし、捕らえるんだ！」

詰めてきたところを城壁に手をかけてひらりとその上に逃れる。

「ルードヴィツヒのヤローに言っておけ！ 親父に指一本でも触れてみる！ 『聖石』は二度と手に入らないことになるってなツ!!」

side：ラムザ・ベオルブ

城塞都市ザランダ。ライオネルの玄関口にして小高い丘の上に建つ空中都市としての機能を持つ都市。入口にまで続くつづら折りになった地形は来る者を拒み、攻め落としにくい防御力を持っている。

その年の城壁の上に、一人の若者が姿を現した。

「もめ事か？ あの若者が誰かに追われているようだが……？」

「このままでは彼はやられてしまう！ 放つてはおけないな！ 彼を

助けよう！」

しかし先に述べた通り、ザランダは上りにくい地形をしている。このまま素直に道を辿っていくと相当の時間がかかりそうだ。その間に彼がやられてしまうかもしれない。

などと悩んでいると、ミルウーダが一足跳びに地形を無視して崖に手をかけて一気に入り口にまで辿り着いた。

あつという間に戦闘態勢に入り、都市内に突撃する。

「骸旅団の戦士に木っ端のごろつきが勝てると思わないこと、ね!!」

叫びつつ、ミルウーダは内部で孤軍奮闘し始めたようだ。

僕は素直につづら折りの坂道を辿って都市の入り口を目指す。

都市に辿り着いたときには既に大勢は決していたようだ。ミルウーダの働きと、若者の持つ武器？でごろつきはあつさりと壊滅していた。

遠方でキラリと金属が光を放った。弓矢だ。ミルウーダを狙撃しようとしている。

「あぶねえッ!!」

若者の武器が遠方にいた弓使いを打ち倒した。なんだあの武器は。

「大丈夫？」

ミルウーダが若者の無事を確認した。

「ああ、なんとかな。ありがとう。助かったよ」

「またごろつきが襲ってくるかもしれない。どこか安全な場所に避難しましょう」

side：ミルウーダ・フォルズ

私たちは若者——ムスタディオに先導され、無人の家屋に姿を隠した。そこで改めて彼の事情を聞く。

「……やつらはバート商会に雇われたごろつきどもさ」

「バート商会？ 貿易商として有名なあのバート商会？」

アグリアスがオウム返しに聞き返す。

「知っているのか？ だが、ただの貿易商じゃないぜ」

ムスタディオは開いた片手にパンと拳をぶつけて。

「裏では阿片の密輸から奴隷の売買まで悪どいことを手広くやっている犯罪組織なのさ、バート商会は」

「そんな奴らに何故、追われていたんだい？」

ラムザの問いに、しかし彼は答えなかった。

「……オレたちがなんで機工士と呼ばれてるか知っているかい？」

ラムザは首を横に振った。

「機工都市ゴークの地下には、失われた文明”が遺されているそうね……」

私は壁に背をもたれさせながら口火を切った。

「聖アジヨラがまだこの世にいた時代、空には無数の飛空艇が浮かび、街には機械仕掛けの人間がいたって。でも、時代の流れと共にそうした技術は失われ、今では本当にそんな技術があったのかどうかすら不明」

「よく知っているね、ミルウーダ」

感嘆とした声でキラが私を見る。

「兄さんからの受け売りよ」

「でも、そうした文明があったのは確かなんだよ」

ムスタディオが反論する。

「ゴークの地下には飛空艇の残骸や得体の知れない機械の破片がたくさん埋まっているんだ」

彼は先ほどの戦いで使っていた武器を手で弄びながら続けた。

「オレたち機工士はそうした”過去の遺産”を復元しようとしている技術者なのさ」

「さっきの戦いで、きみが使ったそのヘンなモノが機械なのか？」

ラムザの問いに、ムスタディオが武器を構えてみせる。

「ああ、これかい？ これは『銃』と呼ばれているモノで、火薬を使って金属の『弾』を飛ばし相手をやっつける武器なんだ」

チャキ、チャキと『銃』をいじくり回して彼は続ける。

「こんなのは一番シンプルなもので昔は『魔法』をつめて打ち出すこともできたらしい……」

「ふん……」

それきりラムザは興味を失ったようだ。この武器があれば、骸旅団ももう少し上手く立ち回れたものだったけど。

「おまえがバート商会に追われている理由はなんだ？」

アグリアスが詰問した。

それを無視するかのようには、ムスタディオが語り始める。

「……あんたたちはドラクロワ枢機卿に会いに行くと言っていたな」

ドラクロワ枢機卿。グレバドス教会の所割領であるライオネル地方を治める人物で、実質教会のナンバー2だと言われている。

「枢機卿は五十年戦争で戦った英雄だ。ライオネルの人間は今でも枢機卿を英雄として尊敬している……オレの親父も同じだ。この混乱した畏国をまとめられるのは枢機卿だけだって話している」

ムスタディオは両手を広げて続けた。

「枢機卿だったらあんたたちの頼みを聞き届けてくださることだろう。お姫さまはもう安心さ」

「……何が言いたい？」

アグリアスの詰問口調がだんだんと厳しくなっていく。

「一緒に連れていってくれないか？ オレも枢機卿に会いたいんだ」

「何故だ？」

アグリアスの詰問に匹敵するように、語気を荒げてムスタディオが叫ぶ。

「親父を助けるためだ！ バート商会に囚われた親父を助けるには枢機卿のお力を借りるしかないんだ！」

強い口調を改めることなく、彼は続ける。

「でも、ただの機工士のオレなんかには枢機卿は会ってくれないだろ？」

「お願いだ。連れていってくれ！」

「だから、おまえが追われている理由はなんだと聞いている！」

アグリアスが一喝した。それに対し、ムスタディオは俯いて。

「……今は話すことができない」

「では、ダメだ。おまえを連れていくことはできない」

「お願いだ！ オレを信用してくれ！ 枢機卿に会わなきゃいけないんだ！」

不意に家の扉が開いた。そこから王女オヴェリアが入ってくる。

その姿を見て、ラムザとアグリアス、キラにクラウドスにクレステイアも。要するに私とムスタディオ以外の皆がその場に跪いた。

「わかりました。一緒に参りましょう」

「ホントかい？ ありがとう、お姫さま！」

ムスタディオが喜色満面の笑顔になって応えた。即座にアグリアスの叱責が飛ぶ。

「王女の御前ぞ！」

慌ててムスタディオが膝を突いた。

「よいのです。さあ、面を上げてください」

アグリアスは立ち上がり、ムスタディオに向かって。

「わかった。おまえを信用しよう」

そう結んだ。

貴族のお偉いさんは態度の変化も素早いものね。

私はその成り行きを、壁にもたれて腕を組みながら眺めていた。

王女を先頭に、家屋の外に皆、出始める。

私も出ようと壁から背を離そうとしたところ。

「貴様、ミルウーダとかいったな」

アグリアスが今にも噛み付かんと言わんばかりの表情で迫ってきた。鬱陶しい。

「王女の御前でなんだあの態度は。不敬にも程があるぞ」

「私はその王家に見捨てられた人間よ。貴族におもねるつもりはないわ」

「同情はする。だがだからといって平民が恐れ多くも王家の者に対する礼儀というものがあるだろう」

「どこぞの誰かみたいなのを言うのね。まあそいつは呆気なく死ん

「だんだんだけど」

「オヴェリア様も同列に扱うのか？」

「違うとでも？」

「貴様……」

胸ぐらを掴まれる。やれやれ、厄介なやつに絡まれたものね。

「王女も頼もしいでしょうね。能力があつて、忠誠心もあつて、まるで番犬みたいよ、貴女」

「私を悪く言うのは構わん。だがオヴェリア様への不敬は許さんぞ」

「ただ頑固なのが玉に瑕きずかしら。王家もこんな石頭を抱えて大変でしようね」

「貴様ツ！」

私は胸ぐらを掴んでいる彼女の腕をパシんと打ち払い、壁から背を離した。

「まあ王女様の不興を買わないよう精々頑張ることね、王家の騎士様」
「失せろツ!!」

ひらひらと手を振りながら、振り返ることもなく私は家屋から出ていった。

城塞都市の頂上。そこは石造りの櫓やぐらであり都市全体を一望できる場所にあつた。

私はそこで何をすることもなく、ボーっと山間の景色を眺めていた。

「やあ、ミルウーダ」

「キラ……」

「アグリアスと喧嘩したんだってね。何かあつたの？」

「平民と貴族の食い違いを改めて感じただけよ。そんなことより」

取り留めのない話から、私は話題を切り替える。

「キラ、貴女クレスティアとはまだ話してないの？」

「クレスティアか……」

彼女は私の隣に立ち、石造りの城壁に手をかけて語った。

「正直、何を話したらいいのか分からない。クレステイアのことを嫌っているわけじゃないんだけど、クレステイアにとって私が何かと言われると、確かめるのが何だか怖いんだ」

「貴女のメンタルにもそんな弱点があったのね。堂々と構えていればいいのよ。あの子にとって、一体私は何なのかって」

彼女はそれを聞いて、私に視線を向ける。

「ミルウーダは強いね」

「そんなことはないわよ。私にだって怖いものはあるし、関わりたくないものもあるもの。ただ我慢と忍耐を積み重ねているだけよ。それこそ、いつ爆発してもおかしくなくらいにね」

「そっか」

しばしの沈黙。

口火を切ったのは私だった。

「キラ、ひよつとするとだけど、貴女はクレステイアのこと、大事に思い過ぎているんじゃないの？」

「そう……なのかな」

「大事だからこそどこか触りにくくて、だから自分の中に閉じ込めようとして、それが堂々巡りになってるからギクシヤクしてるんじゃないかしら」

「でも、クレステイアは」

彼女が続けるのを遮るように、私は続ける。

「クレステイアが自分をどう考えているのか、それを知るのが怖い？

言っておくけど、友情ってのはそんな簡単なものじゃないのよ。相手を信用して信頼されて、それが出来てようやく半分。知らないことの方が多いなんて、いくらでもある」

キラは黙って私の言うことを聞いていた。

「キラが知らないのはその半分だけ。案外、話してみたらただそれだけのことだったのかって理解できることもたくさんあるものよ」

「きみにとって、ウィーグラフはそうだったの？」

「兄さんは……ついぞ半分知ることとは出来なかったわね」

「ウィーグラフはきみの敵だった？」

「最終的には、ね。あの人の妄想じみた革命はもうこりこりだわ」

「でも」私は続けた。

「貴女たちはまだ繋がってる。年上からの老婆心ろうばしんよ。話せるうちに腹を割って話しなさい。いつ私と兄さんみたいに、あつという間に別れが来るとも限らないんだから」

「そっか……そうだね」

すつと、キラが拳を握って私の隣に寄せた。

「ありがとう、ミルウーダ。私の親友」

「どういたしまして、キラ。私の恩人」

私はキラのその拳に、自分の拳をコツンとぶつけた。

キラと話していてようやく気付いた。兄さんはまだ生きているのだろうか。

別れは突然にやってくる。

願わくば、それが私の恩人に降りかからないよう、私は祈るだけだった。

ドラクロワ枢機卿と聖石

side：クラウス・マツケンロー

オレたちはザランダを抜けて一路、南のライオネル城を目指していた。

その前、バリアスの丘に差し掛かった時。

「おまえたちが何者だか知らねえが、ここにいる小僧を置いてゆけ！」

来た来た。恒例のお邪魔虫のごろつきども。

「オレたちだつて争いたくはねえんだ！ おとなしくムスタディオを

引き渡せば手荒なマネはしないぞ！ どうだ？」

ごろつきの啖呵たんかにアグリアスさんが応える。

「そちらこそおとなしく引き上げたらどうだ！」

さすがアグリアスさん。ごろつきどもの啖呵たんかごときじゃ全く氣迫が萎えない。

「ルドヴィツヒ殿に伝えるがいいッ！ 争いに乗じて人身をたぶらかす輩は必ず討ち果たしてみせるとな！」

オレも頑張んなきゃな。護衛隊としての任務、果たしてみせる。

丘上部はきつちり押さえてきてやがる。剣士と弓使い、タフな布陣だ。しかも両脇の丘の外には召喚士まで待機していやがるときた。

こいつは面倒な……だあー、くそー！ 弱音を吐いてる場合じゃねえ。オレはオレのやれることをやるだけだ！

ラムザとアグリアスさん、ミルウーダが上部に陣取る敵を抑える。

ムスタディオとキラ、オレたち護衛隊は召喚士の駆逐だ。

この戦力差で負けるようじゃこの先に未来なんかありやしねえ。

男クラウス、いっちよ底力を見せてやるぜ！

アグリアスさんに転ばされて幾百回、オレの実力を見せる時が来たぜ……！

「命脈は無常にして惜しむるべからず……葬る！」

不動無明剣!!

青い剣閃が召喚士をなぎ払う。アリシアさんとラヴィアンさんがそれを見て、二人して「おおく……」と驚嘆に声を失っている。

そんなオレの奮闘もあつてか(誇張だけど)ごろつきどもはあつさり壊滅した。

ラムザがムスタディオに問いかける。

「何故、奴らはきみを追う? 理由を話してくれないか?」

しかしムスタディオは俯くばかりで。

「すまない……。今はまだ話すことができないんだ……」

「クラウス」

「は、はいっ!」

唐突にアグリアスさんに話しかけられ、直立不動の体勢に移る。

「先ほどの剣、見事だった。いったいどこで会得した?」

いや、それがやってみたら出来たというか何というか。

「あれだけアグリアス様に転ばされてたら身に沁みまして。後は心のままに体が動いただけです」

「心技体の境地だな。まだまだ技は拙つたないが一層精進しろ。期待しているぞ」

「はっ! ありがとうございます!」

頭を下げて、オレはそう声を張り上げた。

side:ガフ・ガフガリオン

イグーロス城の執務室。

オレは任務失敗の報を届けるためダイスダーグの元へ向かった。

「任務は失敗したようだな……」

どこに耳があるんだか、オレが部屋に入って早々ダイスダーグはそう宣った。

「ああ、ちょっとした邪魔が入ってな」

ダイスダーグは腕を組みオレを凝視する。

さすがは元北天騎士団団長。まだ四十路よそじに入った頃だろうに、オレですら身震いする圧迫感がある。

「なんとしてもオヴェリアを捕らえるのだ。むろん、オヴェリアと行動を共にするアグリアスらも同様だ。捕らえてその場で処分せよ！」
試しに一度聞いてみる。

「ラムザもか？」

ダイスダーグが椅子から立ち上がり、棚に置いてある葡萄酒をグラスに注いだ。

「ベオルブの名を汚すばかりか我らの邪魔をする愚かなヤツめ」

さて、ベオルブの名を汚しているのは誰なんだか。

「現実世界の厳しさを知るには丁度よい機会と考え、放っておいたがそこまで愚鈍だとは思わなかったぞ」

まあオレにとつちやどうでもいいことだ。悪い話ばかりでもない。

「正義感の強さは親父譲りってことか？」

「父上も甘やかしすぎだ……」

あの正義感環境のせいじゃないとは思うがね。

あいつが経験してきたこと、過去のジークデン砦やオレの裏切り、それらを総合的に見て答えに至ったと考えられる。

「おとなしく従えばよし、抵抗するなら、そのときは仕方ない……」

ダイスダーグが葡萄酒を呷る。

「実の兄とは思えん台詞だな。胸くそが悪くなるぜ」

オレはケツと口汚く舌打ちした。

「……しかし、ライオネルの枢機卿が邪魔したらどうする？ 教会がバックについたらラグ公といえどもうかつには手出しできんぞ」

だがダイスダーグはニヤリと笑みを浮かべるだけだ。

「それについてはすでに手を打ってある。心配するな」

「すべて準備が整っているってワケか。つくづく恐ろしい人だな、ア

ンタは」

「そう思うなら、少しは言葉を慎むんだな、ガフガリオン」

瞬間、ダイスダーグの眼がギリリと光ったように見えた。

「貴公の首など簡単に切り離すことができるのだぞ。それを忘れるなよ」

おお、こええこええ。

「おいおい、よしてくれよ。オレはアンタの忠実なる僕しもべだぜ。かの聖騎士殿のように頭が固いわけでもない。それを忘れないでくれよ」

「ならば、これ以上のヘマを踏まぬようにするのだな」

そこだ。オレの疑問点は。

「それなんだが、オヴェリアの誘拐をどこのどいつに命じたんだ？」

脳裏にオレを仕留め損なった傭兵の絶命する顔がよぎる。

「オヴェリアを追いかけるときドーターで何者かに襲われたんだぜ。ありや、どういうことだ？」

言つて、ダイスダーグもさすがに訝んだようだ。

「本物の実行犯たちは修道院の近くの林の中で死体で発見された。何者かが、我々の計画をかぎつけて邪魔をしようとしているようだな……」

おうおう恐ろしいねえ、ダイスダーグの奸計を利用している何者かっつてというのが誰なのか。

「いずれにせよ、オヴェリアがまだアグリアスの下にいる間は大丈夫。奪うチャンスはいくらでもある……」

「そう願いたいもんだな」

オレはやれやれと両手を軽く開いた。

side：クレスティア・アルヴァン

バリアスの丘を越えてしばし歩き、やってきましたライオネル城。

かつて聖アジヨラを捕らえた帝国の本拠だったと聞きます。
聖アジヨラって何者かって？

なーにここから先の展開を見てくれればその一端を垣間見れることでしょう。

私たちはライオネル城の城門前に立ち、見張り番に見咎められません。

「何者だ！ ライオネル城に何用か？」

それに答えるは我らが護衛隊長アグリアスさん。

「私はルザリア聖近衛騎士団所属の騎士アグリアス・オークス」

堂々とした佇まいで、凜とした声を響かせます。

「神の御子、聖アジヨラの救済を求めオーボンヌより参上いたしました。
開門を願う！」

その堂々とした様を見て、心打たれたかは知りませんが、見張り番の方が応えます。

「聖アジヨラの救済はすなわち猊下げいかの御心である。猊下の救済を求める者には皆等しく、ライオネル城の入口は開かれるであろう」

型通りの格式ばった言い口で私たちの来意を受け入れてくれました。

「開門せよ！」

城門の内側から錆びた取っ手を引く音が聞こえます。それに合わせて、城門が開きました。

こうして無事に私たちはライオネル城内へ入ることが出来ました。

あの見張り番の人、あんな話し方で肩凝こらないんですね。

まあどうでもいいか。

そうして辿り着いたのはライオネル城内の応接間、ドラクロワ枢機卿御自らが私たちを歓待してくれました。

つるりと反り上がった頭と、対称に立派な口髭を生やした好々爺こうこうやと
いった印象でしょうか。

「なるほど、事情はよくわかりました、アグリアス殿。そういうことで

あれば、このドラクロワ、手を貸さぬわけにはいきませんまい」

しかしながら、さすがは先の五十年戦争で英雄と呼ばれた人物。貫禄が違います。

「早速、聖地ミュロンドへ使者を差し向けましょう。教皇猊下に直奏するので」

心強いお言葉。

言葉だけなら何とでも言えます。

「ラーグ公の不正を暴き、オヴェリア様の命が狙われることのないよう手を打ちましょうぞ」

「猊下、フューネラル教皇猊下はお聞き届けくださいますでしょうか？」

不安げな様子でアグリアスさんが再度、ドラクロワさんに尋ねます。

「心配召さるな、アグリアス殿。この私がついております。貴公がそのような心配されてはオヴェリア様のお心も休まらぬというもの」

諫めるような口調でもなく、ただ安堵させるような口振りで好々爺は仰ります。

「古く汚らしい城ではありますが、聖地より返事がくるまでの間、ゆるりとくつろいでください」

「猊下、お心遣いに感謝いたします」

オヴェリア様がスカートの手を摘まみ、頭を下げられました。「すべては聖アジヨラのお導きです。ご安心召されよ」

ちなみに聖アジヨラとはグレバドス教会が信奉する聖人の事です。とりあえずこれだけ知っておけば後は何となくわかります。

「……ときに、若き機工士よ。そなたの願いも承知しました」
ドラクロワさんはムスタディオ君に顔を向けて首肯します。

「バート商会を壊滅させるために、わがライオネルの精鋭たちを機工都市ゴークへ送りましょう」

「ありがとうございます、猊下」

ムスタディオ君もドラクロワさんに頭を下げます。

「が、その前に、何故、そなたら親子が狙われるのか説明してくれぬか」

「そ、それは……」

ムスタディオ君、俯きます。

結局知らぬ存ぜぬでここまで来ちゃいましたからね。アグリアスさんもいい加減気をもんでいることでしょう。

「よいよい……。これであろう?」

ドラクロワさんが懐から大きなクリスタルを取り出しました。それを目の前の大机の上に置きます。

「そのクリスタルは……?」

アグリアスさんが尋ねます。

「ゾディアックブレイブの伝説」をご存じかな……?」

少し思い出すような仕草で、アグリアスさんが尋ね返します。

「子供の頃、教会でよく聞かされたあのおとぎ話ですか……?」

「これはこれは。……アグリアス殿は教会が嘘を言っているとしても……?」

「そ、そのようなことは決して……」

おもむろに、オヴェリア様が語り始めました。

「……太古の昔、まだ大地が今の形を成していなかった時代、ルカヴィが支配するこの大地を救わんと12人の勇者がルカヴィたちに戦いを挑みました」

ファンタジー世界によくあるおとぎ話ですね。アグリアスさん、慧眼です。

「激しい死闘の末、勇者たちはルカヴィたちを魔界へ追い返すことに成功し、大地に平和が訪れました」

オヴェリア様がそのおとぎ話を暗記したように、つらつらと流れるように謳うたいます。

「12人の勇者たちは黄道十二宮の紋章の入ったクリスタルを所持していたため、人々は彼らを黄道十二宮の勇者……、ゾディアックブレイブと呼ぶようになったといっています」

ただそらんじているだけなのを聞いているのもちよつと飽きちやいますね。眠たくなってきました。

「その後も、時代を超えて、私たち人間が争いに巻き込まれる都度勇者

たちが現われ世界を救ったとか……」

まあおとぎ話ですし、そんな都合のいい展開があつてもいいんじゃないですかね。

「さすがはオヴェリア様、よくご存じですな……」

「オーボンヌ修道院でシモン先生に教わりました。……そういえば」

来ましたね。名前、憶えというて正解ですよ。

「聖アジヨラは彼らを従えて、混乱したイヴァリースをお救いになったと聞いております。」

聖アジヨラ。果たして彼女、いや、彼？は一体何者だったのか。これも伏線のうち……なのかな？

「勇者たちが所持していたクリスタルを我らは『聖石』と呼んでいます」

『聖石』が太陽に照らされていたわけでもないのに、自ら光を放つかのように輝きました。

「そして、今、我らが目になっている石こそ、伝説の秘石、『ゾディアックストーン』……」

「まさか……、聖石が本当にあつたなんて……」

オヴェリア様、驚きを隠せません。

「聖石にはルカヴィたちを凌ぐほどの”御力”が備わっているとか……。たしかに不思議な力を感じますが、私にはただの大きなクリスタルにしか見えませんが……」

不思議な力——魅力、とはちよつと違うんでしょうねえ。

ラムザ君、つとムスタディオ君を見やつて。

「どうしたんだ、ムスタディオ。顔色が悪いみたいだけど……？」

ドラクロワさんが続けます。

「……ゴークの地下でこれと同じ石を見たのではないかな……？」

ムスタディオ君、ようやく白状の時です。

「地下には壊れて動かない機械がたくさん埋まっています……」

ぼつぼつと言葉を紡ぎますが、ラムザ君の言う通り、彼は真っ青な顔色をしていました。

「でも、あの石を近づけると死んでいるはずの機械がうなり始めるん

だ……」

「バート商会が狙っているのはその聖石ですね……？」

「あの石にどんな力があるのか、オレにはわかりません……しかし、
ルードヴィツヒはあの力を解明して兵器にしようとしています……」

「そんな昔の骨董品を調べてどうするっていうんですかねえ。割る
んでしようか？」

「親父は、聖石を渡してはならないと言っていました……。だから、親
父はやつらに……」

「生かされているだけ有情うじょうだと思いますよ、私は。」

「心配いたすな、若き機工士よ」

「ドラクロワさん、元の好々爺の顔に戻ってムスタデイオ君に言いま
す。」

「教会が責任を持って管理しましょう。我らの兵が悪漢どもと戦って
いる隙に一刻も早く聖石を持ち帰るのです」

「は、はいッ。猯下」

「そう言つて、彼は頭を下げました。」

「ラムザ君、周囲を見回します。キラとミルウーダさんは領いて。」

「私はあえてその視線を無視しました。」

「僕らもいっしょにゴーグへ行こう」

「ありがとう。ラムザ。みんな」

「アグリアスさんはラムザ君の方に向かって謝意を伝えます。」

「ここまで来れたのは貴公のおかげだ。感謝するぞ、ラムザ」

「何の力にもなれないけど……。気をつけてくださいいね」

「ラムザ君はそれに領きます。」

「ご心配なく。王女様のお言葉だけで十分です」

「クラウドさんも居残り組ですね」

「当たり前だろ。オレはアグリアスさんの部下なんだから、万一に備
えてオヴェリアを守るのがオレの仕事だ」

「ふくん……」

城外に出て街中を歩くラムザ君の姿を追って、私は呼び止めました。

「ラムザさん、ラムザさん」

「どうしたんだ、クレスティア？」

「私もここに残っていいですか？」

「クレスティアっ？」

脇からキラが顔を覗かせて私を呼びわります。

けど私はそんなキラも無視しました。

「だってゴッグへ行くより、こっちにいた方が面白そうですし」

「面白い？ 何故だ」

「んー、まあ直感ですかね」

ラムザ君。考えるように顎に手を当てて。

「僕にはきみを止める権利はないよ。好きにしたらいい」

「ラムザ!？」

驚きで咄嗟に表情を崩すキラ。見ていて飽きないねえキラは。

「分かってるでしょ？ 私が今、見たいのは”バケモノ退治”じゃな

いんだよ」

「……きみはデイリータに付くつもりか」

「そ。だから頑張ってるね。キラ」

それだけ言って、私はライオネル城の方へと足を向けます。

「ああ、そうそう」

クルリと顔だけキラに向けて言い放ちました。

「もしかしたら私たち、すぐ会えるかもね。じゃあねえ♪」

今度こそ足をライオネル城へ向けて歩き出しました。

ガフガリオンさん。

今度だけは味方でいてあげますよ。今度だけね。

クスクスクス……

聖石に群がる者ども

side：ラムザ・ベオルブ

ツイゴリス湿原。機工都市ゴークに続く陸の難所だ。

「こんな湿原でモンスターと出会うなんて、ツイてない……」

独り言ちる僕にムスタディオが発破をかける。

「足場が少ない上にこの雨だ。用心してかかろうぜ！」

モンスターとの遭遇戦が始まった。

side：キラ・シルベント

何と言ってもこの地形は沼地が嫌らしい。入っただけで毒のステータス異常になるんだからできるなら回避したいところだけど、残念ながらマップ上は沼地の方が圧倒的に多い。空でも飛んでいない限り、回避するのは不可能だ。

ということではここは先手必勝。先のマップで聖剣技を取得したクラウスが抜けたのが悔やまれる。

とはいえ、こんな所で木っ端モンスターに負けるはずもなく、ラムザの剣の前に屍を晒していくモンスターたち。アンデッドばかりだから屍というのも少しおかしい表現だけど。

ムスタディオも凹凸おうつの少ないこの地形が有利に働いているのか、得意の銃撃でモンスターを次々と屠っていく。

結果として、戦闘は私たちの圧勝。

「大丈夫か、ムスタディオ？」

「ああ、たいしたことはない」

ラムザの心配にムスタディオは事もなげに告げる。

「この湿原を越えれば海が見えてくる。機工都市ゴークまではもう少しだ」

私たちは一路、機工都市ゴークへと足を向けるのだった。

side：ラムザ・ベオルブ

機工都市ゴーク。

町中は多くの建物に煙突が伸び上がり、そこから白い煙を吐き出し
ている。

道行きは多くの商人や職人があちこちを行き来しており、実に活気
にあふれている。

だが。

「バート商会のやつらの姿は見えないな……」

そうなのだ。バート商会の輩と思える者の姿は見えず。言ってみ
ればどこにでもある普通の町並みだ。

「とはいえ、ライオネル騎士団と争ったようにも思えない……。何か
様子がヘンだぞ……?」

戦闘にでもなればこんな普通の町並みでは済まされぬはず。

ムスタディオが僕に向き直って。

「ちよつと探りを入れてくる。あとで落ち合おう」

「落ち合うってどこで?」

ムスタディオは町の向こう側にある朽ちた町を指差した。

「あっち側がスラム街だ。あそこなら目立たないだろう」

「わかった。気を付けろよ」

言って、僕は都市の奥へと進むムスタディオを見送った。

side：キラ・シルベント

ムスタディオを見送った私たちは改めて二人を見やった。

「さて、私たちも情報を集めないかね。せっかく頭数があるんだし、手

分けしたいところだけど」

「じゃあ私がキラと一緒に行くわ。ラムザには悪いけど」

「ミルウーダ？」

キョトンとした表情で私は繰り返す。

「お願いしてもいいかしら？　ラムザ」

ラムザはコクリと頷いて。

「ああ、構わない。僕も別口で当たってみるよ」

「ありがとうラムザ。さ、行くわよ。キラ」

「ちよつ、分かったから、そんなに引つ張らないでよ」

言いながら、私はズルズルとミルウーダに引つ張られて都市の中に入っただけだった。

そんな私たちをラムザは鼻を摘ままれたような訝し気な表情で、手をひらひらと振っていた。

噴水が建っている都市の広場まで来たところで、私とミルウーダはその淵に腰掛けた。情報収集という名目で何か話があるのだろうかとは悟ってはいしたが。

「で、何の話なんだい」

「クレスティアよ」

ミルウーダはそれだけ言った。

「貴女、クレスティアの親友なのよね？　でもあの子、あんまり貴女と話さないじゃない。私が忠告しても、貴女の方からはだんまりだし。結局あの子はライオネル城に残って、貴女と話す機会もないまま離れられたけど」

「……まあ、それは悪かったと思っっているよ」

私は俯いてぐいによぐいによと呟く。

「でも聞きたいことはそれだけじゃないんだろう？」

膝の上で両手を組んで、ミルウーダの顔色を窺いながら。

「そうね、あの子、私を見る眼が凄いのよ。口に出してはこないけど、何だか爛々らんらんとしているというか、この世にないものを見てるような、そういうものを見るみたいで正直言って怖い時があるわ」

「それは……きみが」

本当ならもうこの世にはいない人間だから。

そんなきみにどういう風に接したら楽しいか。

とても口には出来ないことを私は抱え込んでいる。

「ねえ、キラ。貴女が隠し事をしているのは知ってる。それが誰にも話せないんだってことも。でも一つだけ聞かせて。彼女にとって、私は何なの?」

「……言ってもいいけど、後悔しないでね。訳も聞かないで」

私の曇った表情を見つめて、ミルウーダは頷く。

「ただの道化。言ってしまえばピエロだよ」

「どういう意味?」

「聞かないでって言ったじゃないか」

無言のまま、沈黙が周囲の喧騒に紛れて消える。と言ったら変な表現か。まあそんな感じだ。

「道化……道化、か」

繰り返し、彼女は呟いた。

「なら道化らしく、舞台上で踊ってみることにしましょう。クレステイアのためじゃなく、キラ、貴女のために」

立ち上がってうーんと伸びをする。

私はそんなミルウーダに、一言だけ告げる。

「……ごめんね」

「いいわよ、聞いたのは私だし。ムスタディオだけに任せるのも悪いし、私たちも働きましょう」

そう言った彼女の顔ははにかんでいて、実に朗らかな笑顔だった。たまに、じゃない。もう私にはクレステイアが分からなくなっている。る。

彼女が見ている眼がブレイブストーリーを楽しんでいるのだけは分かる。だけど、その楽しみ方は――

(多分、悪だよ。クレステイア)

言葉には出さず、口の中からお腹に吸い込むように飲み込んだ。

side：ラムザ・ベオルブ

酒場、食事処、道を行く商人やアパートの住人たち。

誰に何を聞いてもバート商会がライオネルの騎士団と争ったという形跡は見られない。

嵌められたか？

だが一貿易商であるバート商会がライオネル城の騎士団による襲撃を回避できるとは思えない。

もしや分の悪さを察知して逃げ散ったか。

ここで頼りになるのは土地勘のあるムスタディオだけだ。

もうこうなったら彼に頼るしかない。

僕は一路、ゴークのスラム街へと向かった。日は落ちかけ、オレンジの夕日に町並みが照らされていた。

僕がスラム街に到着する頃には夜の帳とほりが降りている時間帯だった。

キラとミルウーダは、来ている。

ムスタディオだけの姿だけがない。

僕らは互いに情報交換するが、釣果が無いことを確かめるだけに終わった。

ムスタディオを待つ間に、にわかにな雨が降り出した。

「遅い……、遅すぎる……」

「そうね」

「悪い予感だけは当たるんだよね、私は」

ミルウーダとキラが追従した。

「ムスタディオのヤツ……、捕まったんじゃないのか……？」

しばらく待つと、背後から声がかかった。

「おまえがムスタディオの仲間か？」

野太い男の声だ。

「誰だッ！」

背後の声に咄嗟に振り向く。

人相の悪い男が一人、突き出た家の屋根に立っていた。

「おい、連れてこい！」

男の背後から追い立てられるように、ムスタディオが姿を現す。

「す、すまない、ラムザ」

「大丈夫か、ムスタディオ!!」

思わず僕らは彼に近付こうとするが。

「おっと、そこまでだ。それ以上、動くんじやねえ！」

「おまえがルードヴィツヒかッ!! ムスタディオを離せッ!!」

僕は男——ルードヴィツヒを恫喝した。

が、ルードヴィツヒもさるもの。

「おとなしく『聖石』を渡せばこの小僧を離してやろう」

余裕の態度でムスタディオに向き直る。

「さあ、言えッ! どこに隠したッ! 白状するんだッ!」

ムスタディオは沈黙を貫く。

「だんまりか? だが、これを見てもそう黙っていられるかな?」

ルードヴィツヒが片手を振り上げる。

「おいッ!」

ムスタディオのさらに背後から、壮年の男が追い立てられてくる。

「親父ッ! 大丈夫かッ!!」

「わしは……大丈夫だ……。『聖石』を渡してはならん……」

散々に痛めつけられたのか、枯れた声でムスタディオに答えた。

「中へ放り込めッ!」

ムスタディオの父が、追い立ててきた男に家屋の一つへ放り込まれた。

「どうだ、おとなしく白状する気になったか?」

俯いて、もはやこれまでとばかりにムスタディオは白状する。

「煙突の中だ……。ラムザの足下の……」

ルードヴィツヒが再度、僕に向き直り。

「よし、貴様が拾え！こいつの命を助けたいならな!!」

成す術もない僕は大人しく裏手の階段を降り、煙突の中に手を突き込んだ。固い感触が伝わる。

掴んだそれは、以前ライオネル城で見た大きなクリスタルだった。

「これか……?」

煙突から元の場所に戻り、ルードヴィツヒに向けて叫ぶ。

「二人を離せッ!!」

「その前に『聖石』をよこせ!」

「二人が先だッ!!」

『聖石』をこちらへ投げろ! そうしたら二人を解放しよう!

やむを得ず、僕は聖石をルードヴィツヒに向けて投げ渡した。

それを受け取ったルードヴィツヒが歓喜の声を上げる。

「これぞまさしくゾディアックストーン! ようやく手に入れたぞ!

枢機卿様も喜ばれることだろう!」

ルードヴィツヒが僕らに背を向け、奴の傭兵たちに指示する。

「ご苦労だったな。おまえたちは用済みだ! あとはおまえたちが片づける。生かしておくな!」

そう言つて、ルードヴィツヒがスラム街から去つていった。

「枢機卿もグルだったのか……!!」

やはり嵌められていた。しかも最悪な形で。

臨戦態勢に入った傭兵たちに向け、僕らもまた剣を抜いた。

side:キラ・シルベント

「ミルウーダ!」

「わかつてる!」

私とミルウーダが阿吽の呼吸で敵弓使いに迫る。その背後には召喚士。もたもたしている場合ではない相手だ。

ラムザはムスタディオを助けに行くため、彼の周囲に散っている傭兵へと向かい一人を斬り倒す。

バート商会の腕利きとはいえ、所詮はごろつきに毛が生えた程度。こんな奴らにかかざらつている場合ではない。

ラムザが二人目を斬り倒している隙に、私とミルウーダは弓使いの群れを撃破し、召喚士に立ち向かっていった。

形勢不利と見るや否や、連中は即座に逃げの手を打つ。

それ以上の深追いはせず、ラムザはムスタディオの傍に駆け寄った。

「親父は……、親父は無事なのか……」

side：ムスタディオ・ブナンザ

「……大丈夫か、親父？」

オレは親父の容態を確認する。痛めつけられてはいたが、そう重傷を負っているわけでもない。おそらく、聖石を隠したオレに対する人質として生かされていたのだろう。

「わしのごとは心配するな……。それより聖石を奪われてしまった」

親父が聖石を奪われたことに絶望的な表情を見せる。

「ルードヴィツヒは聖石の力を使いゴークの地下に眠る機械の力を復活させようとするだろう。それどころか、聖石に秘められた神の力を解明しようとするかもしれない……」

俯き、親父は続けた。

「しかも、頼みの綱であった枢機卿がバート商会と結託しているとあつては我々にはなす術がない……」

その言葉に、オレはニヤリと笑った。

「ふふふ……。それなら大丈夫さ」

オレの浮かべた笑みに親父が尋ね返す。

「どういう意味だ？」

懐からオレはクリスタルを取り出す。ルードヴィツヒが受け取ったものとは違う、本物の聖石だ。

「こんなこともあるかと思ひ、ニセモノを用意しておいたんだ」

オレの機転に、ラムザが驚きの声を上げる。

「じゃあ、僕が奴らに渡した聖石はニセモノだったのか！

「そういうことさ。きつと今頃、泡を食ってるぜ」

と、それを聞いたラムザが顎に手をやって。

「……ということは、オヴェリア様やアグリアスさんが危ない……！」

オレは訳も分からずラムザに返事をする。

「それは、どういう意味だ？」

「枢機卿はバート商会と手を組んでも聖石を手に入れようとしたんだ。この聖石を手に入れるためにオヴェリア様やアグリアスさんを人質にするかもしれない……」

ラムザの意見にオレは驚きを隠せずに叫ぶ。

「バカな！ そんなことをしたら、王家を敵に回すことになる！」

その理由をラムザは淡々と述べていった。

「枢機卿が何のために聖石を手に入れようとしていると思う？」

オレは首を横に振った。どうも庶民には直接伝わらないことかもしれない。

「長く続いた戦乱は人々を疲れさせ、醜い政権争いは人々を不安にさせた。今、人々は救いを求めている……」

そこまで言われて、オレはハッとした。

「ドラクロワ枢機卿は”ゾディアックブレイブの伝説”を利用するつもりなんだ。聖石を集め、おのれの意のままに操れる”ゾディアックブレイブ”を誕生させようとしている……」

ラムザの言葉に、親父は頷いた。

「……彼のいうとおりだ。枢機卿に聖石を渡してはならない」

ならば方針は決まった。ライオネル城へ行き、二人を助けて、ドラ

クロワ枢機卿が持つ聖石を奪取する。

「二人を助けに行こう！」

「わかった。一刻も早く湿原を越えてライオネル城に侵入しよう。防備は固いだろうがそれしか方法はない」

そんなオレの提案に、ミルウーダが口を挟んだ。

「いえ、ライオネル城の正面はとつくに封鎖されているでしょう。ここは船を使つて港町ウオージリスを経由する。裏手から城を攻めるべきね」

至極真つ当な見解だ。さすがは元骸旅団、城塞の弱点もお見通しつてところか。

オレたちは全員で頷いた。

side：ラムザ・ベオルブ

ゴークから港町ウオージリスの航路は長い。

バグロスの海を通つてその間休息できる期間もなく一夜で通り抜ける。

バグロス海は嵐が頻繁に起きるのだ。その危険を冒さないためには一刻も早く海を抜けなければならない。

結果として、その旅程は僕らにとって有利に働いた。

嵐に巻き込まれることなく、ウオージリスに辿り着く。

「……ウオージリスにライオネル軍はいないみたいだな」

僕は船を降りる。すると。

鎧の上から外套を羽織つた、見慣れた騎士の姿が見えた。

「デイリーター！ どうしてここに!？」

「オレたちの情報網を甘くみないでもらいたいな」

「オレたち?」

ゼイレキレの滝で再会した時からデイリーターはどこかおかしい。

王女を助けたり、かと思えば僕らに彼女を預け、こんな場所で再会したりと。

「……悪いことはいわない。イグーロスへ戻るんだ」

デイリータが僕に忠告する。

「これ以上、首を突っ込まない方が身のためだぞ。王女のことにも、聖石のことにも……」

その先の言葉を封じるように、キラが嘴を挟んだ。

「私たちは北天騎士団に追われる身なんだ。きみの言っていることはまるっきりの外れだよ」

「……そうだったな」

デイリータが港の外へ歩き出す。

僕らはその後を追いながら、詰問した。

「デイリータ、いったいきみは何を知っているんだ？」

デイリータは立ち止まり、空へと視線を上げる。

「おまえは王女を救えると考えているようだが、それは目先の問題を解決するにすぎない」

クルリと顔だけ僕に向けて言い放つ。

「真の意味で彼女を救うことができるのはこのオレだけだ」

「何を言っているんだ？ 僕にはさっぱりわからない」

視線を僕から外し、告げる。

「時として、最良の方法が最善の結果を生むとは限らない」

僕が反論する間もなく、彼は語り続けた。

「たとえば、おまえがどんなに頑張ったとしてもおまえには救うことができない」

僕ではオヴエリア様たちを助けることは出来ない、だと？

「それを覚えておくんだ」

「待ってくれ、デイリータ」

思わず僕は彼を制止していた。

「きみはいったい何をしようとしているんだ。いったい何を……？」

僕の疑問に対して、彼は滔々と語る。

「ラーグ公もゴルターナ公もおまえの兄キたちも、皆……ひとつの大

きな流れの中にいることに気付いていない……」

流れ？ 時代の流れだとしても言うのか。しかしそれがどうオヴェリア様を救うことと繋がるんだ？

感傷的に彼は呟く。

「そう、気付いていないんだ」

眼の隅で、彼が拳を握りしめているのが見えた。彼もまたその流れに囚われていることにやり場のない感情を覚えているのか。

「オレはその流れに逆らおうとしているだけ。それだけさ……」

彼は時代の寵児ちやうじになろうとしているのか？ ティータを失って、そのことに絶望して、力を欲して。

「生きていたら、また会おう」

そう結んで、彼は僕らの前から去っていった。

時代の流れ、デイリータの考え、ダイスターグ兄さんの計略、オヴェリア様の危機、そして聖石。

各々が歯車のごとく噛み合って、やがて一つの時代を作る。

僕にはそれくらいのことしかわからない。

「デイリータ……」

ただ、僕は何としてもオヴェリア様を助けてみせる。

たとえデイリータが、最良の方法が最善の結果を生み出すことはない、と断じたとしても。

僕らの前途を祝福するかのように、また嘲笑するかのように。

ウミネコが空高くでみやあみやあと鳴っていた。

枢機卿の怒り

side：クレスティア・アルヴァン

私は今、ライオネル城の応接室の前で待機しています。

理由？ 勿論中で繰り広げられている謀略を聞くためです。

「おい、こんな所でどうした？ クレスティア」

「シッ！」

指を口元に立ててクラウスさんを制止します。

せっかくのこの謀略劇を妨げるのは残念どころか命すら失いかねますからね。

「……その盗まれた宝石を取り戻すためにお姫さまを囿に使おうって魂胆か」

ガフガリオンさんの声です。

さてさてどうやら聖石のことはぼかして伝えているようですね。

「聖職者の考えることじゃねえな」

「なんだと！ この野郎！ そっちがあの小僧どもを取り逃したりするからこんなことになったんだろうが！」

「こつちの手違いには違いねえが、オレの責任じゃねえんだよ！」

「野郎……速攻裏切つてきやがった」

憤慨しながら走り出そうとするクラウスさんを一応、制止します。

「どこへ行くんですか？」

「決まってるだろうが！ アグリアスさんに知らせてくる！」

「むう、せっかくのブレイブストーリー。聞かなきゃ損でしょうに」

「おまえは来ないのか!? クレスティア！」

「ちよつと静かにしてくださいよ。中の話が良く聞こえないじゃないですか」

「やめなさい、ルードヴィツヒ。ダイスダーグ卿には約束どおり、オヴェリア王女を引き渡しますよ。こちら側の意志でもありますしね」

こつちのこの声はドラクロワさんですね。

「ただ、王女誘拐の真相を知る者たちを始末しなければならぬと困るのはそちらではないのですかな？」

さつさと駆け出していくクラウドさんは放っておいて、私は中の声に耳を傾けます。

「宝石を盗んだ者も彼らと行動を共にしています」

好々爺然とした話し方は以前と同じですが、だいぶきな臭くなっています。

「王女を囮に使うだけで、あの者たちを一網打尽にできるのです。一石二鳥ではありませんかな……？」

「たしかにそのとおりだ。だが、万が一ってことがある！」

「ずいぶんと弱気ですな」

「用心深い」って言ってもらいてえな」

ガフガリオンさん、強面の割には慎重な性格してますね。今さらですけど。

「戦場で生き延びるには慎重すぎるぐらいが丁度いいんだよ」

しばらく中が沈黙に支配されます。

「わかりました。回避策をとりましたよ」

ドラクロワさん、ガフガリオンさんの作戦採用です。

「更に、確実に罠にハマってもらうためにエサもまきましよう」
「いいだろう。エサにはあの女が丁度いいな」

どうもアグリアスさんたちを当て馬にするようですね。南無南無。

「それから、やつらの始末はオレに任せておきな。そこにいるヤツよりは安心だぜ！」
「なんだとッ！」

ルードヴィツヒさん、うるさいですね。何も出来ない小物なんですから少し黙ってくれませんか。

「よいでしょう。貴方にお任せしましょう」
「猥下、本気ですかッ！」

いい加減ルードヴィツヒさん、自分がこの場にそぐわない人物だつてこと理解できてませんか。空気を読んでくださいよ。

「では、頼みましたよ、ガフガリオン殿」
「任せておけ。宝石も取り返してやるさ！」

咄嗟に置物の飾り鎧の裏に隠れます。
部屋から出てきたガフガリオンさんが目の前を通り過ぎていきました。

完全に姿が消えたのを確認して、私は再び応接室の扉に耳を傾けます。

「猥下、なにもあのようなヤツに……！」

ガタンと音がします。ドラクロワさん、椅子から立ち上がったようです。

「おまえは何度もしくじった。その責任をとってもらいましょう……」

「げ、猊下、な、何を……！」

打撃音。

そして呻くような野太い断末魔。

それを聞いて、私はほくそ笑んでました。

クスクスクス……

side：アグリアス・オークス

私はあてがわれた部屋で剣の手入れをしていた。

椿油つばきあぶらを浸した布で剣を撫でる。

それを掲げて見て手入れの出来に満足した。

カチンと剣を鞘に納める。

ふと私の部屋の前を走り寄る靴音が聞こえる。ライオネルの騎士のものではない。

「アグリアス様！」

突然、入ってきたのはアリシアとラヴィアンだった。

「緊急事態です！ ドラクロワ枢機卿が裏切りました！」

「つていうか、最初っからダイスダーグ卿と結託していた模様です！」

「何だと！」

届けられた一報に私は驚きながらも憤慨して、その場に立ち上がった。

「城中の騎士たちが私たちを捕らえようと迫っています！ ご指示を

!!

「オヴェリア様はご無事か!?」

「そちらには既にクラウスさんが向かっています!」

「私はその援護に向かう! おまえたちは至急ライオネル城から退避しろ! ここで無駄死にすることはないツ!!」

「ハッ!!」

私は仕舞った剣を手に、部屋の外へと駆け出した。

アリシアとラヴィアンは反対方向のライオネル城入口へと向かう。

オヴェリア様にあてがわれた部屋はライオネル城尖塔の頂上。この時のために逃げ道を塞いでいたか。

尖塔の手前、私の前を遮ったのは。

「はいはい、アグリアスさん。大ピンチですね。城の入口までご案内しましょうか?」

クレスティアだ。私は直感した。コイツは私の敵だ、と。

「……どけツ!! クレスティアツ!!」

「そうはいきません。オヴェリア様を連れ出そうってことでしょうか、もう上にはガフガリオンさんが来ていらっしやいますので」

「ならば押し通るツ!!」

私は剣を抜き放ち、鞆を脇に放り捨てた。

クレスティアも剣を抜く。私こそ近衛騎士団の団長を務めているが、相手は曲がりなりにもベテランの傭兵だ。油断も隙も無い。

突撃した私の剣がクレスティアの剣に重なる。

上部を取った。マウントはこちらにある。そう思ったがその瞬間。キーン!

音を立ててクレスティアが剣を弾いて間合いを取った。だが先手はいただいた。このまま一気にその首、叩き切る!

上段に掲げた剣をクレスティアの右側から振り下ろした。その剣を。

ヒュガツ!!

クレスティアの足が動いた。そう思った瞬間、私の手がしたたかに

打ちのめされ、剣が宙を舞う。私の剣が遠くの地面に突き立った。

「お得意の剣も体術には弱いみたいですね。傭兵としての生活が功を奏して、ほら、御覧の通り」

バケモノか……!!

「で、誰がどこに押し通るんですって?」

私は無手になって、突き立った剣の方を見た。

遠い。取りに行けば間違いない背中から斬られる。

どうすればいい……!!

side:クラウドス・マッケンロー

「オヴェリア様!」

オレはノックもせず、オヴェリアの部屋を蹴り飛ばした。内側に撥ねたドアの先には、キョトンとしたオヴェリアがベッドに座っている。

「どうしたのです? いったい何があつたのですか?」

「緊急事態です! 枢機卿が裏切りました! 今、城中の兵がここに押し寄せてきています!!」

「どういうことですか?」

一刻を争う事態に、オヴェリアは気付いていない。ガリガリと頭を掻いてオレは「あー七面倒くせえ!」と声を荒らげた。敬語を使う暇もない。

「いいか! ドラクロワの奴がダイスダーグと手を組んだ! 城の兵があんたを捕まえようとしている!! さつさとここから逃げるぞツ!!」

「ちよ、ちよっと待って! もう少し詳しい事情を」

「言ってる暇はねえ! ここを抜け出したら詳しく話す! 不敬の罪はそれから受けてやる! 急ぐぞ!!」

その後から唐突に声が聞こえた。

「おいおい、王女の近衛騎士ともあろう奴がそんな無礼な口を利いていいのかい？」

ガフガリオンだ。

おい、ここでコイツと一対一、しかもオヴェエリアを守りながらかよ！

他に成す術はない。オレは剣を抜いてオヴェエリアを庇うように立ち塞がった。

「小僧が一丁前にナイト気取りか？ 悪いが容赦はしねえぞ」「うるせえ！」

裂帛の気合を込めて正眼の構えから剣を繰り出す。

ガフガリオンはヒュつと口笛を吹きながらそれを躲して。

ザンツ!!

オレの右肩を深く斬り裂いた。

利き腕をやられ、剣を取り落とす。

「クラウス！」

オヴェエリアが悲痛な叫びを上げた。

「小僧、おまえに用はねえ。逃げたけりやとつと逃げな。おまえは大事な撒き餌まゑなんぞでな」

傷を負ったオレをよそに、ガフガリオンがオヴェエリアに近付き、その腕を掴んだ。

「イヤー！ 離してツ!!」

「うるせえよ」

ドスツとガフガリオンの手がオヴェエリアのみぞおちを打つ。昏倒したオヴェエリアを連れて、悠々と尖塔から姿を消した。

「ちつくしやう……い！」

オレは斬られた傷を圧して、フラフラと尖塔を降りていった。

side：クレスティア・アルヴァン

さすがアグリアスさん。王都で培った型通りの形式ばった剣ですね。残念ながら一対一ならガフガリオンさんはおろか、私にも敵かなわな
いと思いますよ。

とりあえず彼女には逃げて餌になって欲しいので、これ以上の戦闘は控えたいのですが……

そう思っていた折、私の背後からガフガリオンさんが姿を現しました。

「おう、待たせたなクレスティア」

「ホントですよ。今まさにアグリアスさんを殺ろうかどうか迷っていたところですよ」

まあそんな勿体ないことはしませんけどね。

「後ろからは近衛騎士の一人も来ている。さっさと事を済ませるぞ」

「はい」

そう言つて、私とガフガリオンさんは気絶したオヴェリア様を伴つてこの場を離れようとなりました。

「ま、待てッ!!」

アグリアスさんが制止しようとはしますが、制止するのは私たちの方です。

「あんまり物騒な動きはするんじゃないぞ。王女の命が惜しけりやな」

「ぐッ……!」

ぐうの音も出ないってのはこういう事ですかね。そんなわけで私たちはオヴェリア様の拉致に成功して。

彼女を連れて地下室へと向かいました。牢獄ってほどでもない部屋ですが、何も無いよりはマシでしょう。

「さーて、オヴェリア様も地下に放り込んだところですよ、次はどうしますっ。」

「アグリアスたちは逃がした。オレが斬った小僧も一緒のはず。後はラムザに任せとくか」

「信頼してるんですね、あの子を」

「この騎士が奴らに勝てると思ってるだけだよ」

言いながら私たちは悠々とライオネル城から出ていきました。

もうすぐ会えるよ、キラ。

クスクスクス……

ゴルゴラルダ処刑場

side：クラウド・マツケンロー

命からがらライオネル城から脱出したオレたち王女護衛隊は裏手のバリアスの谷へと隠れ潜んだ。

戦況はよろしくない。

ライオネル騎士団が迫りくる上、オレは重傷。必然足が遅くなる。「ハイポーションと包帯で補強しましたから、少しは動かせるはずですが。でも絶対に無理してはいけませんよ。あの場は無理を通すしかなかったでしょうけど」

「そうですねえ。けど言うのもなんですけど、あんまり足が遅いと置いてつちやいますよ。猪担いで逃げてると一緒なんですから」
オレはぜえぜえと息を切らせながら肩の傷に顔をしかめる。

大丈夫。二人がこの調子なら戦意は落ちちやいない。

「……二人とも、おしゃべりはそこまでだ」

「どこにいる!! どこへ逃げてても無駄だぞーッ!!」

怒声が聞こえる。隠れる場所もほとんどない。簡単に見つかってしまうだろう。

ライオネルの騎士がオレたちの視界に入る。

「こんなところにいたのか!」

騎士の口笛を合図に、騎士団がぞろぞろと現れる。

「さあ、観念するんだな! ……ん!?!」

騎士の一人が素っ頓狂な声を上げた。

ああそうか。この場所でのシチュエーション。

助かったぜ、ラムザ。

「アグリアスさんたちを守るんだ! いくぞッ!!」

ラムザの声が周囲に響き渡った。

side：ラムザ・ベオルブ

ウオージリスを出た僕らは一路、バリアスの谷を目指した。

そこで見たものは、傷を負ったクラウスさんと、ライオネルの騎士から追撃を受けていたアグリアスさんたちだ。

「ラムザ！ どうして、ここに!?!」

「あなたたちを助けるために城の裏側から攻めようと思って。アグリアスさんたちこそ、どうしてここに?」

アグリアスさんが歯噛みしながら応える。

「枢機卿が裏切った！ いや、最初からラーグ公と内通していたようだ！」

ダイスダーク兄さんの計略か……どこまで手を打つのが早いんだ。

「城から脱出しようとしたがオヴェリア様だけ捕らえられてしまった!! なんとかお救いしようとしたんだがこの有様だ……!」

ということとは、ライオネルはアグリアスさんたちをわざと逃がしたに違いない。

オヴェリア様を人質に取る気か？

「奴らはオヴェリア様を処刑しようとしている……。早くお救いせねば……!!」

オヴェリア様の首だけで充分だということか。

これ以上テイータと同じ轍てっを踏むわけにはいかない。

しかし。

「まずは、こいつらをなんとかしないと……!」

こちらは谷間に押しやられ、肝心のアグリアスさんたちは平地。しかもそこにライオネルの騎士団が迫ってきている。想像以上に敵に地の利がある。

アグリアスさんが孤軍奮闘するが、追い詰められるのも時間の問題。僕らがそれまでに間に合えばいいが……

「クラウスさん！ 動いてはダメです！」

女騎士アリシアさんが傷を圧して戦おうとする彼を押し留める。しかしクラウドさんは譲らない。

「ここで戦わずして何が騎士だ！　これはオレの汚名返上の戦いだ！」

「死兆の星の七つの影の経絡を断つ！」

北斗骨砕打！

クラウドさんの聖剣技が炸裂する、怪我を圧してなおアグリアスさんと共に寡兵ながらもライオネルの騎士と渡り合っている。

僕らもまた彼に続き、騎士や魔道士、弓使いを順繰りに片付けていく。

僕が最後の騎士を倒した後、皆の無事を確認した。

「アグリアスさん、クラウドさん、大丈夫ですか？」

「ああ、私は大丈夫。それより急がねばッ!!」

アグリアスさんの焦りが助長する。

「この先のゴルゴラルダ処刑場でオヴェリア様の処刑が行われるんだ

！　急ごうッ!!」

「わかりました。急ぎましょう！」

side：キラ・シルベント

皆には黙っていて悪いが、これは罠だ。

聖石の奪取を目論んだガフガリオンが仕掛けた罠、アグリアスたちはその撒き餌だ。

ラムザの行動もまたすでに奴らに察知されているに違いない。

しかし、私がどう取り繕うとも彼らは処刑場に向かうしかない。

この事実を知るのは私とクラウドだけなのだから。

「どうしたのキラ？ 顔色が悪いようだけど」

ミルウーダが心配そうに私の顔を覗き込む。私は首を横に振った。「何でもない。アグリアスの言う通り、処刑場に向かおう」

やはりミルウーダは訝しげな表情をしたまま私から離れていった。

私は……いったいいつになれば真実を語れるんだ？

私の不安をよそに、ラムザたちは急ぎ、ゴルゴラルダ処刑場へと向かうのだった。

side：クレスティア・アルヴァン

ああ私、ピンチです。

私は断頭台の上に立たされ、今まさに処刑される時を迎えようとしています。

「何か言い残すことはあるか……？」

そんな冷たい響きで話しかけられても何も言えません。

私は眼を伏せて、その時を待ちます。

「そうか、何もないか」

その時。

「ん……？ て、敵襲ッ!!」

処刑場の高台で見張りをしていた騎士が声を張り上げました。

来たーッ!!

王子様が私の大ピンチを救いにやってきてくれましたよ!!

「そこまでだ！ オヴェリア様を返してもらおうか！」

現れたラムザ君たちが処刑人に啖呵を切ります。

もっとも。

「くくく……。かかったな！」

「なにッ!？」

王子は王子でも敵国の王子様ですけどね。

処刑人が身に付けていた外套を脱ぎ払い、正体を現します。
そして私も身に付けていたかつらと法衣を脱ぎ捨てました。

「ガフガリオン!？」

ラムザ君の叫びに、さらに。

「クレスティア!!」

キラが私の名を呼びました。

「あいかわらず、素直すぎるぜ、小僧」

くつくつとガフガリオンさんが笑みを浮かべます。

しかしラムザ君は彼の嘲笑には応えずに。

「オヴェリア様はどこだッ!」

「ライオネル城さ。それより宝石はどこだ?」

「宝石?」

残念。ガフガリオンさんは聖石のことはご存じありません。

「しらばつくれるンじゃねえよ。枢機卿から盗んだ宝石だ」

もともとそれはドラクロワさんのものじゃないんですけれど。

「宝石を盗んだヤローと一緒になんだろう? いいから、さっさとこつちに渡しな!」

「欲しければ力づくで奪うんだな!」

ラムザ君の反発に、ガフガリオンさんは「ほお」と感心したそぶりを見せます。

「少しは成長したようだな。……ならばそうさせてもらおうかッ!」

ラムザ君が先頭に立って突撃し、ガフガリオンさんと剣を合わせま

す。
さあ、見どころはここからですよ……

「今からでも遅くはない! オレと一緒にイグーロスへ戻ろう!」

頑固オヤジのガフガリオンさんがラムザ君を説得にかかりました。

「おまえの兄キ、ダイスターグはすべてを許すと言っていたぞ! さ

あ、いい加減に目を覚ませ!!」

しかしラムザ君、持ち前の正義感で以ってその提案を蹴ります。

「断るッ! 僕はこれ以上、悪事に荷担するつもりはないッ!」

「断るッ! 僕はこれ以上、悪事に荷担するつもりはないッ!」

「悪事」というのか!? おまえは「悪事」というのかッ!!」

ガフガリオンさんが真の勇士であることの証明です。ただし、正義感とは無縁ですが。

「おまえはベオルブ家の人間だ! ベオルブ家の人間には果たさねばならん責任がある! その責務を、おまえは「悪事」というのかッ!! この愚か者めッ!!」

いいオヤジさんですねえ、ガフガリオンさん。ですがラムザ君は極端な人間です。目の前で繰り広げられる”大義”という名の”悪事”には加担できないと言います。

「兄さんたちは自分の都合で戦争を起こそうとしている! それを”悪事”と言わずしてなんとというッ!!」

「何かを成すためには”犠牲”が必要だッ! ”犠牲”を支払わない限り、人は前へ進まない! 歴史を作ることはできないッ!」

ガフガリオンさんが必死の叫びで説得し続けます。しかし当のラムザ君もガフガリオンさん同様、非常に頑固です。

「この腐敗しきつたイヴァリースを見ろッ!! 誰かが変えなきやいかなのだ! おまえの兄キはそれを成そうと している! たとえ、それが”悪事”と呼ばれることでもな!」

「だからといって、オヴェリア様を見殺しにしろというのかッ!」

「ジークデン砦のことなら忘れろ! あれは仕方なかったんだよ!」

それを仕方なかったで済ませられるならそもそも今この場にラムザ君はいませんよ。

私やアルガス君はともかく、あの場にいた人は全員、彼女の死に心を痛めていましたから。

「おまえはベオルブ家の人間だ。おまえは、おまえに与えられた役目を全うしなければならん! それがおまえの運命なんだよッ!」

その論理でラムザ君を説得することは出来ませんよ。アルガス君の二の舞です。

「ティータを死なせたのも運命だというのかッ!」

デイリータ君に代わり、ラムザ君がティータさんの死に怒りを燃やします。

「違うッ！ それは違う！ 僕らは僕らの都合でティータを……そう、ティータを殺したんだ！」

ティータさんの死がディリータ君の覇道を後押ししたとするなら、ラムザ君にはその正義を後押ししたわけですね。この対比、私はちよつと面白いと思いますよ。

「僕はずつと現実から逃げてきた。僕がティータを殺したんだ……」

「何をバカなことを！ あんな小娘一人死んだところでなんだというんだ！ 我々が第一に考えねばならんことは”大義”だ！」

「人を欺き、利用するところにどんな”大義”があるというんだ！」

僕はもう、これ以上、”大義”のために利用され命を落とす人間を見逃すことはできない！」

いい加減、ガフガリオンさんの頭も沸騰してきたことでしょう。ラムザ君の覚悟に火をつけるだけで、結局、彼を説得することはできませんでした。

「僕はオヴェリア様を助ける!!」

「この分からず屋め！」

「ラムザ、おまえはベオルブ家の人間なのか？」

唐突に、アグリアスさんがラムザ君に問いました。

懇切丁寧に私がそれを教えて差し上げます。

「知らなかったんですか？ アグリアスさん」

両手を軽く開いて続けます。

「その子はベオルブ家の末弟、ラムザ・ベオルブ君。あのベオルブ家の一員ですよ」

「たしかに僕はベオルブ家の人間だ！ でも兄さんたちとは違う！」

ラムザ君が抗弁します。

「僕はオヴェリア様の誘拐なんて全然知らなかった！ 本当だ！」

「今さら疑うものか！ 私はおまえを信じる!!」

来た——！ アグリアスさんの名言！

ほら、キラを見てください！ あの名言を前に、キラも度肝を抜かれていますよ！

「オヴェリア様をどうするつもりだ！」

アグリアスさんがガフガリオンさんに向かって叫びました。

「オレは王女を契約どおりにガリオンヌへ連れて帰るだけだ。そのあと、ラーグ公が王女をどうするのか、オレは知らんよ」

ダイスダーグさんがオヴェリア様をどうするかなんて分かりきつてくるせに、よくもいけしやあしやあと言えたもんです。

「貴様たちはオヴェリア様を戦争の道具にしようとしている！ 貴様とて一緒だ！ ラーグ公やダイスダーグにいいように使われている！」

今度はアグリアスさんが論破しようとします。アグリアスさんはアグリアスさんで真の国土でもありますね。ちよつと視野は狭いですけど。

「恥ずかしくないのか!? 犬になりさがっている自分が！ 人間としての誇りはないのかッ!？」

「そんな役に立たないモンはとつくの昔に捨てたよ！」

とつくに捨てた——以前は持っていたということでしょうか。

思うに東天騎士団での非道な戦いというのは、効率を求めてやったことだったのではないでしょうか。多くの民をできるだけ救うため、少数の犠牲で済ますために。

私、クレスティアはそう愚考します。

side：ミルウーダ・フォルズ

キラが叫ぶ。

「クレスティア!!」

その叫びに応じるかのように、クレスティアはその剣をキラに向けて振りかぶった。

ガキン！ と剣と剣が重なり合い、火花を散らす。

なに？ 私は何を見ているの？

クレスティアの剣戟が容赦なくキラを追いつめていく。

どちらも決め手に欠けるが、クレスティアが一方的に打ちまくっている。

「アハッ！ 楽しいねキラ！ こんな劇的な場面でキラと戦えるなんて、私、興奮しつ放しだよ!!」

「やめろクレスティアツ!! きみはその享樂だけで私たちと戦っているつもりか!!」

「親友同士だからって遠慮は無用だよ、キラ！ 私は今、本当のブレイブストーリーの中で戦えているつもりなんだから!!」

「もはや言うまでもない！ きみその楽しみ方は”悪”そのものだ！ 今すぐ剣を引くんだ、クレスティアツ!!」

クレスティアの剣に圧され、遂にキラはクレスティアの前で尻もちを突いた。その首目掛け、爛々とした眼でクレスティアが剣を振りかぶる。

「キラッ!!」

私はその横から即座に援護に入った。キラを狙った剣戟を私の剣が迎え撃つ。

「引きなさい、キラ！ コイツは私が相手をする!!」

「くそツ……どうか、無理をしないで」

言ってキラは私の背後へと走り去った。

「なーに、『家畜に神はいないツ』のミルウーダさん。せつかくの私とキラの決闘を邪魔するつもりですか?」

「貴女は何を言っているの？ 貴女たちは親友同士なんでしょう?」

「どうしてそこまでしてキラと戦えるの!? 貴女の悪意は天井知らずなの!?!」

「悪意じゃありませんよ。私はキラと戦うのが本当に楽しいんですから。邪魔をしないでくれませんか?」

「救えない奴……キラがどう思っていようと、貴女は全く懲りないみたいね。貴女のその無邪気な悪意、私の剣で斬り伏せる!!」

「それじゃあ今度はキラが悲しみますよ。私とキラ、いずれは同じ道を進んできつと手を取り合うんですから」

「ふざけるなツ!! キラとおまえを同列に扱うなツ!!」

私の恫喝は、されどクレスティアには全く届かないようだった。右から左へ、彼女と分かり合う気はもはや消え失せていた。

side: クラウス・マツケンロー

雪辱戦だぜ、ガフガリオン。今度はラムザもキラも一緒だ。負ける気がしねえ。

「あの時の小僧か! どうやらクレスティアと同輩らしいな。クレスティアの言動が気になってるってか?」

「おまえさんを前にしてそんな余裕はねえよ。オレはオレでやるべきことをやるだけだ。キラのことはキラに任せる」

「はっ! ラムザに引かれておまえもようやく火が付いたようだな! 少しばかり現実の怖さってのを思い知らせてやろうか!」

「神に背きし剣の極意、その目で見るがいい……」

闇の剣!

ガフガリオンの暗黒剣がオレの体を貫く。

怪我をした右肩に響くが、だからといって負けていられるか!

オレもまたガフガリオンの剣技に対して聖剣技を繰り出した。

「天の願いを胸に刻んで、心頭滅却!」

聖光爆裂破!

「こ、コイツ……!」

ガフガリオンの意気が一段挫けた。少なくともオレにはそう見え
た。

「どうだ、オレの雪辱の一撃は！」

「ガフガリオンさん！」

クレステイアがオレの前に躍り出る。

キラとは違う。オレはおまえ相手でも容赦はしねえぞ！

だが、コイツのとつた行動は。

ヒュつと口笛を吹いた。

どこからともなく戦場の外からチョコボが走り寄ってくる。

「形勢不利です！ 撤退しましょう！」

クレステイアのセリフにガフガリオンが毒づく。

「くそツ！ これほどまでに強いとは……！ ええいッ、一時退却
だツ!!」

ガフガリオンも駆けるチョコボに捕まって、共に戦場の外に駆け抜
けていった。

強敵二人を退けて、戦況は一気に逆転した。

残る敵兵を片っ端からなぎ払う。

不利を悟ったライオネル軍は徐々に戦線を引かせ、退却していっ
た。

「急いでライオネル城へ行かなければ……！」

ラムザの呟きが聞こえる。

クレステイアの奴、やっぱり敵に回りやがったか。あいつの行動を
見ていればそれも察知できたろうに。

それでもキラは信じ続けていたんだな。親友だった——いや、今で
も親友のアイツを。

だけどクレステイア、もうオレはおまえを友人とは思わねえ。

今度こそ、オレはキラに代わっておまえをぶった切る！

利用する者される者

side：クレステイア・アルヴァン

ゴルゴラルダ処刑場での敗北を期に私はガフガリオンさんと別れました。

この先、せつかくの大イベントが待ち受けているのですから。

ガフガリオンさんには胡乱気な眼で見送られました。多分、自分一人でもラムザ君たちを一蹴できる策をこさえていることでしょう。その自信のほどが伺えます。

私はライオネル城に戻って、ドラクロワさんとその横に待る壮年の騎士さんに顔を合わせます。

「……この娘は何者だ」

ドラクロワさんにとっても私はただの手駒扱いでしょう。ガフガリオンさんの私兵的なものでしたから。

「ガフガリオン殿の従者、といったところでしょうか。ここにしているのを見るに、処刑場での計略は失敗したようですね」

私はその場に跪き、ドラクロワさんに報告します。

「はっ、先の戦いでは確かに私たちが敗北しました。ですがその分、時間を稼げたかと思えます。夜にはラムザたちが攻め寄せてくるでしょう。その奇襲を逆手に取り、一網打尽にするのが上官ガフガリオンの計略です」

「それでは何故、貴女はここにいます？ ガフガリオン殿についてラムザたちの奇襲に備えるべきでは？」

不遜な笑みを浮かべながら、私は答えます。

「私は負け戦はしない主義です。ガフガリオンはこの戦いで敗れるでしょう。なればこそ、私も枢機卿様の采配に従いたく思います」

そんな私を、騎士さんは胡乱気な視線で見つめました。

「……そう大したものが見れるわけではないぞ」

言葉に圧があります。聞いているだけで冷や汗が垂れました。

「まあ、よろしいではないですか、ヴォルマルフ殿。王女殿下にも良い薬となりますよう」

「ふん、貴公がそうまで言うなら構わんがな……」

騎士——ヴオルマルフさんから許可が出ました。私の口の端が強い笑みに釣り上がります。

オヴェリア様、利用する者される者。

お互いその意地を御覧に入れましょう。

side: デイリータ・ハイラル

ライオネル城の地下、その暗い一室。

「食事に手を付けていないのか。食べないともたないぜ」

その場にうずくまる王女を前に、オレは不遜な言い方で物申す。

「おまえが死んで悲しむヤツなんてひとりもないぞ」

オレは掌を軽く掲げて続ける。

「それどころか、喜ぶヤツが大半だ。どうせ、死ねやしないんだ。無理

せず食べる」

「……やはり、あなたも枢機卿と結託していたのね」

疑念に満ちた視線をオレに送ってくる。

「私をどうしようというの？ ラーグ公に引き渡さないのならどうするつもりなの？」

「本来、おまえがいるべき場所におまえを連れていく……、それだけだ」

「あなたも私を利用しようというのね。……でも、私はあなたの言うとおりにはない」

やれやれと、強情なお姫さまに対してオレは首を横に振った。

「おまえに選択肢はない。生き延びるためにはそれしかないぞ」

王女オヴェリアがオレに胡乱気なものを見るような視線で眺め見た。

「それはどういう意味？」

「それは……」

応えようとしたところで、扉が開いた。

外から枢機卿と壮年の騎士が入ってくる。

「この娘がオヴェリアか……」

「王女様、ご機嫌はいかがですか？」

枢機卿が好々爺然とした態度でオヴェリアに迫る。

「もう少しおとなしくしていただければこの部屋でなくともよいのですがね」

それを聞いた騎士——ヴォルマルフが口を開く。

「フン、王女の身代わりの娘には十分すぎるぐらいだ」

オヴェリアは驚いた様相で、ヴォルマルフに眼を向けた。

枢機卿がヴォルマルフに耳打ちする。

「ホホホホ……。ヴォルマルフ殿、この娘はまだ知らないのです」

「そうか……。哀れな娘よ」

腕で体を支えながら、その先を聞くことを心で拒絶しているのか、はたまた無謀な好奇心がそうさせたのか、ヴォルマルフに問い返す。

「それは、どういうことなの……？」

ヴォルマルフは一拍置いて、話しかける。

「いいか、よく聞け」

そして、一言。

「おまえはオヴェリアではない」

一瞬、部屋に沈黙が降りた。

「え……？」

「本物の王女はとうの昔に死んでいる。おまえはその身代わりなのだ」

「そんな！ ウソよッ!!」

オヴェリアの必死の叫びに、ヴォルマルフは冷淡な口調で続ける。

「嘘ではない。おまえはオヴェリアではないのだ」

滔々と語り続ける。

「ルーヴェリア王妃をよく思わぬ元老院のじじいどもがおまえを作り出した……。いつの日か、王位を継がせるために身代わりを用意した

のだ。邪魔な王妃を追い出すためにな」

オヴェエリアは体を震わせる。

無理もない。自身の存在意義に初めて疑問を投げかけられたのだ。「やつらのやり口は実に周到だったよ。上の二人の王子を病死に見せかけて暗殺し、おまえを王家に入れた。病弱なオムドリアに新たな王子ができるとは思えなかったのな、自動的に王位はおまえのものだ」

ヴォルマルフはオヴェエリアの存在を容赦なく切り刻んでいく。

「ところがオリナス王子が誕生した。……いや、未だに王子がオムドリアの子であるかどうかなどわからん」

ヴォルマルフが軽く手を開いてみせる。その仕草は、所詮お前はその程度の価値でしかないのだ、と暗に語っているように見えた。

「ラーグ公が実妹を王の母にするために外から”種”を用意したのかもしれん……。いずれにしても、元老院のじじいどもの計画は台無しになったのだ」

「ウソよッ！ 絶対にウソだわ！ 私には信じられない！」

ヴォルマルフに向けて、オヴェエリアが必死の叫びを上げた。

しかし、ヴォルマルフは東風、馬耳を射るかの如く、心に響かない態度で続ける。

「どう思おうとおまえの勝手だ。我々にとってもおまえが王女であるかどうかなどどうでもいいこと」

ヴォルマルフの言葉がオヴェエリアを切り刻む。彼女の価値は我々のものだといった風に。

「我々は『王女』という強力なカードを手に入れた。それで十分だ」
「……あなたたちは私をどうするつもり？ いったい何をさせたいの？」

その言葉はオヴェエリアの必死の反発だったのかもしれない。自分が誰かのために何ができるのか。彼女の心優しい性格が反転しようとしていた。

「何もしなくていい。今のまま『王女』でいてくれればよい」

「私はアトカーシャ家の血を引く者！ 誰にも命令されたりはしな

いッ！」

だがヴォルマルフはやれやれと肩をすくめた。

「では、どうする？ ラーグ公に捕らえられれば即、処刑だろう？」

そこで、ヴォルマルフは初めて笑みを浮かべる。薄汚いものを唾棄^{だき}するような、そんな笑みを。

「我々は手助けをしたいだけだ。おまえが王位につくためのな……」

幾分か頭が冷えたのか、冷静な口調でオヴェリアが問う。

「……あなたはいったい何者なの？」

不遜な笑みを浮かべたまま、ヴォルマルフは答える。

「我々はラーグ公の味方でもなければゴルターナ公の陣営の者でもない」

そして結びの言葉を告げる。

「ただの”協力者”だ」

部屋に沈黙の帳が落ちる。

枢機卿が朗らかな笑みを浮かべて、ヴォルマルフに忠言した。

「ヴォルマルフ殿、王女様にはもう少し頭を冷やしてもらいましょう」

しかしその笑みはやはり、オヴェリアの心を切り刻むには充分すぎるほどに伶俐なものだった。

「現実をきちんとして認識すれば我々の”協力”を拒むこともありませんまい……」

「うむ、そうだな……」

ヴォルマルフと枢機卿が部屋を出ていく。が、彼は振り返り。

「行くぞ、デイリーター！」

その言葉に従い、オレも部屋の外へと出た。

side：クレステイア・アルヴァン

私が部屋に入ると同時、ヴォルマルフさんとドラクロワさん、それ

にデイリータ君が出てきました。

ヴォルマルフさんとドラクロワさんは私を全く無視。デイリータ君は私に視線を投げかけて。その眼はほんのちよつぴり私への敵意を感じさせるものがありました。

私は構わず部屋に入ります。

オヴェリア様と視線がぶつかり合いました。

「オヴェリア様、ご機嫌麗しゅう」

近付き、彼女の前で跪きます。

「貴女は……あの時ライオネル城まで私を助けてくれた……」

「クレスティア・アルヴァンと申します。お見知りおき頂ければ幸いです」

オヴェリア様は虚ろな眼で私を見つめます。

「貴女も私を利用しようとするの……？」

「それはオヴェリア様の意志一つでお決まりになりましたよう」

「どういうこと？」

私は胸に手を当て、かしづきながら話しかけます。

「私はランベリー出身のただの使用人、平民の者です。紆余曲折あつて、今はしがたい傭兵身分の者としてこの世界を渡り歩き、戦っています」

「戦う……？」

そう。貴女は戦わなければならない。

そうでなければ私がラムザ君を裏切り、キラをいじめた甲斐がありません。

「世界と戦うのです。貴女にはそれだけの力がある。いえ、与えてくれる者がいます」

「それは……さっきの騎士たちのこと？」

「彼らは貴女を利用することのみを企んでいる者たち。貴女が行きつく先はもつと大きなものでなくてはなりません」

そう。貴女にはそれだけの力がある。そう仕向ける心意気さえあれば、貴女に勝るものはほとんどないと言っていいでしょう。

「もう一度言います。貴女には世界と戦う矛と盾がある。それを以

て、このイヴアリースに大きな風を巻き起こすのです」

私の大演説は、しかし彼女の耳を通り過ぎるだけだったようです。

「私にはそんなもの、いらぬ……」

「オヴェリア様……」

私は顔を上げました。彼女は両手を顔に当てて、うつうつと涙を流していました。

「私ね、修道院で暮らしていた時はどうして私だけがこんな目に遭うんだろうって、ずっと思ってた。知っているのは修道院に囲まれた青い空だけ……それでもそこには友達もいた。同じ境遇だねって、互いに笑い合っていた。あの時は本当に嬉しかったの」

彼女の長ゼリフはしかし、私には何の感動も感激も与えません。私が求めている答えはそんな些細なことではないのですから。

オヴェリア様が床に手を突き、止まらない涙をこぼしながら続けます。

「どうしてこんなことになってしまったの……私はいったい何者なの。王女なのに修道院の壁しか知らない。でも私にはそれしかないって分かっていたから、そのために我慢だつてしたわ」

そう言つて、彼女は首をブンブンと横に振る。

「あの苦しき、辛さはいったい何だったの……？ 私は何を与えられていて、何をすればいいの？ 私の役割は……いったい何なの？」

パシン！

そこまで聞いてオヴェリア様の頬を鋭く引っぱたきます。私の苛立ちゲージが振り切れました。

「臆病者」

私は顔を怒らせて、彼女と眼を合わせました。

「貴女には武器がある。それを使って、貴女を利用しようとする者を逆に利用しなさい。武器もあるのに戦わず流されていくのはただの臆病者です」

語気を荒げて私は続けます。

「私は自分の楽しみのために世界と戦ってきました。そういう風に生きてきました。これからもそう生きていくでしょう」

オヴェリア様には矛も盾も、翼もある。それが自分を縛っているだなんて勘違い、私は許せません。

彼女には大きなものを抱え込むだけの力がある。それはイヴァリース全体を背負って立つことも出来る力。

それさえも使わずに戦いを放棄するなんて選択、私は許せません。

「貴女が望むのなら私だって利用されましょう。オヴェリア様にはそうするだけの権利があります。ヴォルマルフ殿も枢機卿様も、デイリータさんも、何もかも利用して生きなさい。それが王女である貴女が戦う道です」

「……貴女を信じていいの？」

「言ったでしょう。甘えるんじゃないやありません、オヴェリア・アトカーシャ。使えるものは使い尽くして捨ててしまおう、そういった戦い方が出来るのはほんの一握りの人間だけ。貴女に与えられた力です」

オヴェリア様はそれっきり黙ってしまいました。しかし私が言いたいことももう言い尽くしてしまいましたし、ここらが潮時でしょう。

「……ご無礼、お許しください。お食事はきちんと召し上がられますよう」

私は立ち上がり、オヴェリア様を背にして部屋から出ていきました。

オヴェリア様は結局、私を引き留めませんでした。

なんて軟弱。

私にとつては無いもの全てを持ち合わせているのに、自らの享樂にすら使えない臆病者。

私は自然とオヴェリア様に敵意——いえ、殺意を覚えていました。

ライオネル城

side：ラムザ・ベオルブ

夜半時。

僕らは首尾よくライオネル城に潜入した。

城門前は無人。

ここで城門を開いて一気呵成に攻め落とす。

「そこで待っていてくれ。今すぐ、城門を開けるから」

城門前に立つ仲間たちに向けて声をかける。

だが。

「そうはいかなー！」

僕はぼつと城門内に振り返る。

そこから姿を現したのはガフガリオンだった。

「忍び込んだまではよかったが伏兵には気付かなかったようだな」

ガフガリオンが口笛を吹く。

城門前の皆を取り囲むように、ライオネル軍が立ち塞がる。

「しまった!!」

ガフガリオンが剣を抜き、僕に啖呵を切る。

「ラムザ！ おまえの相手はこのオレだ！」

城門の上から、ガフガリオンを見下ろすように僕も剣を抜いた。

「さあ、いくぞッ!!」

僕とガフガリオンの死闘が始まった。

side：ミルウーダ・フォルズ

「参ったわね……完全に後手に回ったわ」

言つて、私は剣を正眼に構えた。

「勝ち目がないと思ったなら、後ろで見ているも構わんぞ」

アグリアスが私に忠告する。

冗談、この程度の包囲で私が挫けるとでも本気で思っているのかしら。

「こんなザコにかかずにらつている暇はない。何とかして即せん滅させないと……」

キラはやる気のようなだが、どこかその表情に焦燥を感じさせた。

「ストーリーを引っ張ってる暇はねえ。さっさと片付けるぜ」

クラウスも戦意を高めている。

この布陣なら勝てる。そう思わせるだけの意気があった。

緒戦は敵が有利。

弓使いと召喚士を中心とした遠距離からの攻撃で私たちを攻め立てる。

だがそんな中途半端な攻撃に怯む私たちではない。

「おい、ミルウーダ。どうするよ？」

クラウスが盾で敵の矢撃を防ぎながら、私に意見を求める。

「そうだな、ミルウーダ。貴様が指揮をとれ」

「はあ？　なんでそこで私に振るのよ」

唐突な隊長推しに少々思考が乱れる。

「貴様はもともと骸旅団の幹部だったのだろう。それに野戦経験も豊富、キラもクラウスも貴様にだけは心を許している。この場は従ってやる」

アグリアスも慧眼ね。私ごとき野盗の成れの果てに分隊指揮を寄せすぎだなんて。

「いいけど、後で死んでも文句は言わないでよ」

「ああ、頼んだ」

あの頑固なアグリアスの言葉が妙に心地よく響いた。
よし。

「私とキラで敵剣士を打ち払うわ。その隙に弓使いと魔道士を、アグリアスたちとクラウスが剣技で撃破。時間との勝負よ、決して連携を途切れさせないで」

「オーケーだ、ミルウーダ」

「背中はきみに任せるよ」

クラウスとキラが頷く。私も力強く頷いた。

「それじゃあ、行くわよ！ ……散開ッ!!」

私たちは散り散りに、敵軍の包囲を崩しにかかった。

大丈夫、行ける。

こんな修羅場は五十年戦争の時に嫌というほど味わった。

その底意地、見せてあげる！

side：ラムザ・ベオルブ

ギイン！

僕とガフガリオンの剣が重なり合い、火花を散らす。

「ガフガリオン！ いい加減、兄さんの計略に踊らされるのはやめろ

!!」

「それはこっちのセリフだ！ おまえさえ投降すればこんな無駄な戦

いはしなくて済むんだよ!!」

「こんな戦いに何の意味がある!?!」

「あるさ、オレにはな！ ダイスダーグがたんまり報酬を用意して朗

報を待っているんだからな!!」

「所詮、貴方も一人の傭兵か!!」

「当たり前だ！ それの何が悪い!? おまえのような小僧にオレの生

き方を悪しざまに言われてたまるか!!」

ガキン！ と剣が離れ、互いに必殺の距離が生まれた。動かなければ、死ぬ。

「貰ったぞ、小僧ッ!!」

パアン！

「なに!?」

銃撃が、ガフガリオンの剣を弾き飛ばす。

ムスタディオが城門の上から得意気に言い放った。

「へへ、伏兵はおまえたちだけの十八番おはじじゃないんだぜ」

武器を失ったガフガリオンに向かって、僕は剣を上段から振りかぶった。斬撃がガフガリオンの体を引き裂く。

致命傷だ。

ガフガリオンはその場に倒れ伏した。

「むう……、こ、このオレが敗れるのか……?」

僕は剣を鞘に納め、力を失っていく彼を身罷った。

「さよなら、ガフガリオン……」

城門外での戦いも決着したようだ。

敵も伏兵故に寡兵。一部の倒れた敵を除き、残った兵は後退したみたいだ。

「敵の増援が現れる前にオヴェリア様をお救いしなければ……!」

僕は独り言ちた。

何としてもオヴェリア様を救ってみせる……!

デイリータ、きみの思惑を乗り越えて……!

side:キラ・シルベント

私たちはライオネル城内に突入した。

目指すは城の最奥、ドラクロワ枢機卿がいるはずの大祭壇だ。

廊下に飾られた鎧の中央を走り、先に見えた扉を蹴り開く。

その部屋の祭壇上、そこに奴はいた。

「ガフガリオンも口ほどにもありませんね……」

ドラクロワ枢機卿。聖石を巡る陰謀の首魁。

「それとも相手が悪かったのですかね？ さすがベオルブの血を引く者だけのことはありますね。それがたとえ妾めかけの子だとしてもね……」

祭壇を横切り、枢機卿がこちらへと近づいてくる。

「しかし、これ以上の邪魔は遠慮願いたいものですね」

コツンコツンと、靴音を響かせて歩く。その音は薄暗い祭壇に反響するように大きく響き、枢機卿の姿を大きく見せた。

「おとなしく聖石を置いて帰ればよし、抵抗するならば容赦しませんよ……」

抵抗……抵抗、か。

「オヴェリア様はどこだ？」

ラムザの言葉に、枢機卿はふと立ち止まる。

「助け出してどうするのでしょうか？」

そうだ、そのビジョンが私たちにはない。

「ベオルブの名を棄て独りで戦うおまえにいったい何ができるといいますか？」

いちいちもったいぶった話し方をする。そんなこと、やってみなければ分からないということも。

「無駄な努力はおよしなさい。いかに志が高くとも力を持たない者にはなにもできない……」

滔々と語る枢機卿。ふざけるな、力なんてなくてもやり方はきつとあるはずだ。

「おまえは非力な人間なのですよ」

その言葉を否定するかのように、ラムザが叫ぶ。

「オヴェリア様はどこなんだッ!!」

その気迫にも動じず、枢機卿が応える。

「ここにはいませんよ。ゼルテニアへ向かいました。王女はおまえの助力よりも我々の方を選択したのです」

「ウソだッ!!」

「王女は王座につくため自分の足で歩き始めたのです」

コツンコツンとまた歩き始め、私たちに近付いてくる。

「自力で王位に就くにはおまえでは心許ない……。我々を選ぶのは当然です」

打ちひしがれるラムザに、枢機卿は続けた。

「どうです？ おまえも我々と手を組みませんか？ 兄たちの鼻をあかしてやりたいのでしよう？」

祭壇の大机を背に、私たちを見下ろしてそう言う。

「この世界を憂えているのは我々も同じ……。いかがですか？」

その言葉をラムザは振り払う。

「僕は世界を変えたいと願っているわけじゃない！ ただ、一部の人間の迷惑のせいで人々が苦しみ命を落とすとしていく……。それが許せないだけだ」

先に、力を失った言葉を捨て、その力を気迫に変えてラムザは叫んだ。

「世界を変える？ そんなことが本当に行けると思うのか？ 僕はそれほど傲慢じゃないツ！！」

それを聞いた枢機卿が薄笑いを上げた。

「ホッホッホッホ……。聖石を持つ者が何を言う……」

枢機卿の気配が……。別の何かに変化したような、そんな気がした。

「おまえが手にしたその聖石の力を使えば、世界はおろか万物の真理まで変えることもできるのですよ」

気配。それは邪悪なものだった。

「口で言ってもわかりませんか。ならば愚かなおまえにその素晴らしい力を見せてあげるとしましょうか……」

そう言って、枢機卿は懐から聖石を取り出す。

枢機卿が掲げたそれは鋭い光を放ち、それが枢機卿の体を覆っている。

邪悪なぬめりが枢機卿の体を隠し、鈍い光が放たれる。

悪魔の鳴き声——悪意そのもののような声と共に、それは現れた。腹に開いた巨大な口を縫い留めた、白い巨人。

現れたな、ルカヴィ——不浄王キユクレイン！！

『クククク……どうだ、驚いたか……?』

ラムザも、そして他の皆も眼を見開きながら言葉を失っている。

『さあ、この私を楽しませてくれ。おまえの悲鳴を、苦痛を、断末魔を私に聞かせてくれ……!!』

「行くぞ！ クラウス!!」

「がっくん合点だ!!」

私たちはキユクレインに向けて、突撃を敢行した。

『肉体をむしばみ、魂の器に満つる毒、禁忌なる生命……』

バイオ！

私たちを取り囲むように上空から油のような毒素が流れ落ちてくる。

先に動いた私たちはそれを避けるが、背後で棒立ちになっていたラムザたちにそれは降り注いだ。

仲間の何人かが毒素を吸い込み、体の不調を訴えかけてくる。

「ばかな！ これが聖石の力だというのか!?!」

ラムザは片膝を突きながらも、戦意を高めようと叫んだ。

「邪悪な力を討ち滅ぼすために聖石があるのではないのか!?!」

醜悪な外見の塊を見つめ、ラムザは続けて叫ぶ。

「しかし、これでは……、あの枢機卿は”邪悪”そのものだ!!」

『これが、かつて世界を支配したルカヴィの力なのだよ……!』

「ルカヴィだど!?!」

驚愕のまま、ラムザは大声で返す。

「おまえはいつたい何者だ！ 本物の枢機卿はどこだッ！ どこへやった!!」

『クククク……、何を言っている……？ 私がドラクロワだ……！いや、ドラクロワであった者と言った方がよいかもしれんな……』

枢機卿だったモノが暗い口で言葉を垂れこぼす。

『私は聖石の力を使い、脆弱な人間を超越したのだよ……。私は”神”になったのだ……!!』

それが本当に神の力かどうか、自分の身で確かめてみるといい……！

私は剣を振りかぶる。

『我々の邪魔をする愚かな者たちよ……！ 死ぬがいいツ!!』

私の剣を肩で受ける。が、浅い。というよりも固い。固すぎて刃が通らない……！

『死を供なす永劫の呪縛とならん、災いあれ!』

バイオ!

再び毒素が上空から降り注ぐ。散開している私とクラウスには当たりはしないものの、ラムザたちは辛うじてその毒素を躲すばかりで精いっぱいだ。

『無駄なことを……だがこの私を恐れぬとは……。おまえたちは何者だ……?』

「キラ・シルベント! 貴様の死神だ!!」

「同じくクラウス・マツケンロー! 悪を断つ正義のミカタだよ!!」
不動無明剣!

青い剣閃がキュクレインの体を引き裂く。
奴が怯んだ。

「ラムザ！ 今だッ!!」

ラムザが剣を握り締め、キュクレインに突貫した。同時、次々と仲間たちが剣を取ってキュクレインへと殺到する。

彼らの剣が、キュクレインの巨大な腹を貫いた。

地が震える。

『不死身のこの私が敗れるだと……？ そんなばかなことが……』

瘴気が薄まっていく。床にねばついた毒素も併せて消え去っていく。

『あ、あの方の復活まで……死ぬわけには……いかな……い……』

その言葉を最期に、キュクレインは爆発、消滅した。

その場に聖石が音を立てて転がった。

ライオネル城の城門前。

「キラ……きみはいつたい何者なんだ……？」

当然のごとく、私はラムザに問いただされた。

しかし私は口にするには出来ない。

未来を知る者、などといった、皆の信頼を裏切ることとは。

「うるせえよラムザ。それよりキラ、急がねえと間に合わねえぞ」

「分かってる」

そう言ってクラウドスは二頭のチョコボを連れてきた。どうやらライオネル城御用達のものらしい。

「すまない、ラムザ。私たちはやらなければならぬことがある。ここで別れよう」

「なッ……!?!」

驚きのあまり、絶句するラムザ。

「ディリータを止めなければ……すまない、察してくれ。ラムザ」
「キラ、クラウス。おまえたちにそんな勝手が許されると……」

制止するアグリアスを、すかさず手を横に突き出して制する。ミルウーダだ。

「時間が無いのよね? キラ」

「……ああ」

「なら私も一緒に行くわ」

ミルウーダの言葉に、全員が一斉にどよめく。

「キラとクラウスを誰かが見張っていればいいんでしょう。私がその役目を負うわ」

「ミルウーダ! しかし、それでは……」

ラムザの抗弁はしかし、言葉にならなかった。無理もない。私たちの単独行動の意味が分からないのだから。

「安心なさい。レナリア台地でのあの時の約束、私は覚えているもの」
「……嘘をついたら私たちの首を獲る。確かそんな約束だったね」

「行きましよう。事情は道すがら聞かせてもらおうわ」

「ありがとう……ミルウーダ」

言つて、私とクラウスはチョコボに騎乗する。

「ラムザ、これは決して別れじゃない。必ずまた会いにくる。それだけは信じてくれ」

私の決然とした誓いに、ラムザはようやく首を垂れた。

「わかった。きみの真意は分からないけど、武運を祈るよ。そしてまた、会おう」

「感謝する、ラムザ」

ミルウーダがもう一頭チョコボを連れてきた。騎乗する。

ここからは3人の旅だ。

果たして私は救済を成し遂げられるのか、それともただの道化——
ピエロにしかねないのか。

答えはもうじきに出る。

何としても、デイリータを止めなければ……！
私たちはチョコボの腹を蹴って、ラムザたちの元から駆け去って
いった。

ライオネル領・ルザリア領間

side: デイリータ・ハイラル

ゼイレキレの滝からベスラ要塞を躲し、ランベリー領を通ってゼルテニア城に向かう。

その先頭に行くオレはいい加減、苛立ってぼやいた。

「何をのろのろしてるんだ。そんなペースじゃいつまで経ってもゼルテニアに辿り着けないぞ」

不意に、黙ってついてくるオヴェリアが口を開く。

「……貴方はここで、私を自由にしてくれると言ってくれた。あの言葉は嘘だったのね」

「まだそんなことを言っているのか？ おまえがガリオンヌにいる限り、無事でいられる保証はないんだ。オレについて来るしかおまえの生きる道はない」

「そうです。精々私たちを利用して身の安全を確保してください。利用という言葉が嫌なら、頼りにしてください」

……何故かチョコボに乗ったクレスティアもこの逃避行についてきている。まあ役に立つつもりなら取り立てて言うこともないが。

その時。

「こんな所に王女がいるとはな！」

滝の上から声が降り注いだ。滝の上を見やると、北天騎士団がオレたちを包囲しようとしていた。

「連絡がなくて不審に思っていたが、どうやらガフガリオンは失敗したようだな。ふん、口ほどにもないやつ」

北天騎士団が剣を抜く。

オヴェリアが慌てた様子で橋へと渡ろうとしていた。

「チツ、北天騎士団か。おい！ さっさと来い！ 死にたいのかッ!!」

敵は斥候か、もしくは暗殺者か。

包囲してきてはいるが、数はそう多くない。

「私たちをおまけ扱いしたこと、死ぬほど後悔させてやります！ やりますよ、デイリータさん！」

「おまえに言われるまでもない！」

オレは剣を抜いた。クレスティアも剣を抜き、チョコボの突破力を武器に敵に突貫する。

襲撃してきた北天騎士団だが、数はともかく練度はこちらが上の程度の連中にかかずらっている暇はない。

結局、北天騎士団はオヴェリアに近付くことさえままならず、ここで全滅した。

「これでわかっただろ。おまえはオレたちと一緒にいるしか生き延びる道はない」

「……私は貴方たちに付いていくしかないのね」

諦観と達観に満ちた言葉で、彼女は渋々納得したようだった。

side:キラ・シルベント

ライオネル城を進発した私たちはチョコボ超特急、不眠不休で北へと向けて駆けていた。

ザランダを越え、ゼイレキレの滝から、ベスラ要塞へと向かう。

「キラ、ちょっと待って」

不意にミルウーダがチョコボを止める。

「どうした？」

私もクラウドもそれに追従するように、チョコボを止めた。

「仮にも貴女は北天騎士団、クラウドは王都の騎士でしょう。ルザリアの領土に入っても大丈夫なの？」

「ダメに決まってる。見つかったら即、王家に不審人物として指名手配されるだろう」

「じゃあどうして危険を冒してまでベスラ要塞を通過するの？ ランベリー領から回った方がまだ監視の目は緩いと思うんだけど」

ふむ、と私は手を顎に当てて思案する。

「そうだね。まだベスラ要塞は遠い。少し速度を緩めて話しながら先へ進もうか」

息を切らしたチョコボを緩めて、そうすることにした。ここまでの道のりを不休で走り続けたこいつらにはちよつと悪いことをしたかもしれない。

ポッコポッコと歩かせながら私はミルウーダの隣に付いた。自然、クラウドが先頭を務める。

「まず大前提として、デイリータとクレスティアが何をしようとしているか分かるかい？」

「大前提……その前に王女は北天騎士団に狙われていたのよね。ラীগ公にとつて邪魔になるからって」

「その通り。それを阻止するためにデイリータや枢機卿は彼女を安全圏に連れ出そうとしたわけだ」

「それがゴルターナ公ね。彼らが枢機卿の協力を得て、ゼルテニアに向かったというのは……あのバケモノから聞いたわね」

「デイリータはオヴェリアを安全地帯に避難させたいだけじゃない。これにあいつの野望が関わってくる」

「デイリータの野望……それが私に問うた貴女の言葉ね」

「そう。それが何か答えが分かるか、ということさ」

ミルウーダの視線が虚空を彷徨^{さまよ}う。

やがて軽く両手を開いて、首を横に振った。

「……お手上げね。万一デイリータとクレスティアがゴルターナ公に王女を差し出したとしても、王女誘拐の罪をでっち上げられてあの二人は処断。これじゃあ滝でデイリータが言ったことと同じじゃない」

「そこからがデイリータの計略さ。彼はある組織のエージェントなんだ。それも、かなり厄介な」

ミルウーダの眉間にしわが寄った。ちよつと踏み込みすぎたかな。

「それはどこ？ デイリータの狙いは何なの？」

一拍置いて、続けた。

「貴女たちは、いったい何者なの？」

やはり踏み込み過ぎたか。けれどここで誤魔化すのは彼女に嘘を

つくこと。それだけは……私は絶対に出来ない。

首を獲る云々じゃない。彼女の信頼を裏切るのは、死よりも恥ずべきことだ。そう思った。

やおら。

「オレたちは別世界から来た人間だ」

クラウドがそう答えた。

私はクラウドを見て。

「クラウド……」

そしてミルウーダを見やる。彼女はポカンとした表情で、クラウドの顔を追い、私に視線を移した。

「どういうこと？」

もうどうとでもなれと思いつながら、私もクラウドに倣った。

「クラウドの言う通りさ。私やクラウド、それにクレスティアは別世界からこのイヴァリースにやって来た異邦人なんだ」

ミルウーダは平静な顔で、しかし怒りを滲ませながら言葉を放つ。

「私たちがいいように騙っていたの？ 私を助けたのも、自分の手駒を増やしたかったから？」

「それは違うー！」

私はミルウーダの疑念を振り払うように叫んだ。

「私はこの世界を見てきた！　そしてそこに邪悪な意思が潜んでいることも知った！　だからこそ、きみや世界を救いたくて行動してきた！！　そこに二心はない！！」

「落ち着けよ、キラ」

クラウドが私の精一杯の叫びを遮る。

「なあミルウーダ。こいつには嘘も何もないよ。ただ世界を救いたい。その心のままに生きてきた。それを信じられないって言うなら」

トントンと、彼は自分の首を人差し指で二度つついて。

「オレの首をやるよ。だからキラは見逃してやってくんねえかな」

「クラウドス!？」

「いい加減、白状しとくのが正解だよ。秘密を抱えたまま、信頼関係を取り繕ってもどつかでほつれるもんだ」

私とクラウドが言い合う中、ミルウーダは俯き加減に首を垂れている。

元の冷静な表情に戻って、されど凜とした視線を私に向けて言う。「多くは言わない。ただこれだけは教えて。デイリータは……いえ、クレスティアは何を企んでいるの？」

「それは……」

言えない。言いたくない。言ってしまうえば私と”ゆかり”は完全に決別し、ミルウーダは彼女を倒すことに全力を注ぐだろう。

私の親友……そんなのは、いやだ。

「なあキラ、もう話しちまえよ」

クラウドが私に答えを求めていた。

「クレスティアは……、まあどこで何が間違っただあなっちゃまったのか知らねえけど、処刑場でおまえと敵対したんだ。それはゆるぎない事実だ。それでも皆を危険に晒してまで、おまえは友情を取るのか？」

そして流れるように、しかし決断を促すように続ける。

「ラムザは……ミルウーダはおまえの親友じゃないのか？ ラムザたちを切り捨ててクレスティアを取るのか？ 選べよ、どっちかを」

口調は平静だが、クラウドに言葉には激しい怒りを感じられる。

そうだ。

クラウドも私と同じ異邦人だ。そして、私とクレスティアを見てきた。

いい加減、私のどちらともつかない態度に苛ついているのだろう。

「私は……」

”ゆかり”を親友として救う。

ラムザたち、そしてミルウーダを助ける。

私にとって重要な選択肢だった。

俯く。

でも。それでも。

「……ごめん、クラウド、ミルウーダ。少し時間をくれないか。私にとっては全てが大事なんだ」

クラウドスはやれやれと、肩をすくめる。

「まあおまえさんならそう応えると思ってたよ。だが肝に銘じとけ」
強い口調で、このために語気を荒げまいと待っていたかのよう。

「おまえの言う”全て”ってのは一人で背負えるほど安くねえ！」

どっちかを取れないなら、おまえはミルウーダにもクレスティアにも
討たれておしまいだ！ オレはおまえをそんな中途半端なことで無
くすのは、絶対に許さねえからなッ!!」

そう叫んで、「ふんッ」と鼻息荒く私から視線を外した。

私は俯いたまま、クラウドスの説教を反芻していた。

果たして、私の大事な全てを救うのは叶わないことなのか。自分の
エゴで、ダメなことなのか？

「ミルウーダ、きみには言っておく。私がきみを助けたのは決して二
心があったからじゃない」

私は首を垂れたまま、顔だけをミルウーダに向けた。

「答えを先送りにするつもりがないとは言えない。でもクレスティア
は止めなくちゃいけない。デイリータとクレスティアのやろうとし
ていることは邪悪な所業だ」

言って、ミルウーダが答えを促す。

「それが貴女の隠し事の一つでしょう？ 二人は何を企んでいるの。
それだけを教えてくれたら今回のあれこれは不問にしてあげる」

「助かる……。二人のやろうとしていることは……」

私は意を決して、顔を上げた。

「戦争だ。イヴァリースを大きく揺るがすほどの、巨大な戦乱を巻き
起こすための」

「ラーグ公と、ゴルターナ公の？」

「それは見た目だけに過ぎない。その戦乱を引き起こして、二人は独
自の行動を見せるだろう。それは二人の獅子だけではなく、武器王
と、教会をも巻き込んだ巨大な混沌を」

私はそう結んだ。

ミルウーダがそれを信用したのか、はたまた愛想が尽きたのか分か
らない。

でも彼女はそれ以降、何も口にしなかった。
私はチョコボの腹を蹴る。それに従い、私は二人を追い抜いて駆け
ていく。

二人は——追いかけてきてくれた。

私はどうしようもない道化だ。

さもなければド下手な狂言回しかもしれない。

デイリータの野望を阻止し、オヴェリアを救う。

それがラムザの意志である限り、私はそれに付き合おう。

でもクレスティアは……”ゆかり”は。

何としてもいつか決着しなければならぬ。

私にはそれが怖くて、皆には大事なことを伏せている。

ミルウーダ。ごめん。

私はまだクレスティアを、”ゆかり”を諦められない。

獅子戦争勃発

side：オヴェリア・アトカーシャ

私は、デイリータとクレスティアの先導に従ってランベリー領に入った。

今日はここ、ランベリー城で一泊するらしい。

ランベリー領は風光明媚な景観で、ディアラ湖を臨むランベリー城は白亜城とも名高い美しい景色を映し出していた。

シモン先生に教わってはいたが、こうして初めて見てその景色の美しさに圧倒される。

私たちはデイリータが選んだ、木製の小屋を大きくしたような宿に一泊することになった。

クレスティアが意見する。

「ちよつとデイリータさん、オヴェリア様をこんな粗末な宿屋に泊めちやつていいんですか？」

彼女の言に、デイリータが生真面目に言つて聞かせた。

「何言ってるんだ。高価な宿になんか泊まったら要人を連れていると喧伝しているようなものだろうが。何のためにオヴェリアに分厚い外套まで着せていると思ってるんだ」

言われて、改めて自分の格好を見る。

頭からすっぽりと下半身まで伸びた大きな外套で、外套の下にはいつもの絹製の高価なローブを身にまとっている。

この外套が、私がデイリータとクレスティアの持ち主であると言っているような気がして、なんだか自虐的な気分になった。

憂鬱な気分になっている私を察したのか、クレスティアが話しかけてくる。

「オヴェリア様も、少しはデイリータさんに意見しないとそれこそ一生利用されっぱなしですよ。なんたってプリンセスなんですから。ちよつとくらい我がまま言つたつて誰も文句は言いやしませんつて」

その言葉に、私は小声で返す。

「私が言つたつて、何も変わらない。私がどうして命を狙われている

かそれは理解できるし、デイリータも貴女も私を守ってくれているわ」

「だから何ですか。また引っぱたきますよ」

「貴女もデイリータも私に利用価値があるから助けるのでしょうか？
本当のことを言つて何が悪いの」

「これだからお姫さまは……」

はあくどクレスティアは息をついて。

「利用されるのされないのどうこうじゃありません。言つたじやないですか。私たちを利用する気がないなら頼りにしてください、つて」
それは利用することと、どう違うの。

私は俯いて、ほそぼそと応える。

「そんなもの……、私はいらない」

「このツ……！」

大馬鹿者、とても言いたいのか。激情を込めて反論しようとした彼女を。

「そこまでだ、クレスティア」

デイリータが制した。

「あんまり大声でお姫さまだのプリンセスだの言うんじゃない。人目を引くだろうが。それと」

言つて、彼は私に向き直る。

「オヴェエリア。おまえもいちいちクレスティアの言葉を真まに受けるな。そいつは弱い者いじめが好きなだけの社会不適合者だ」

「ちよつとデイリータさん？」

クレスティアが眉間にしわを寄せてデイリータに詰め寄る。

デイリータはしっしつと手で振り払った。

「部屋を取つたらさっさと寝ちまえ。まだまだ旅程は長いんだ。ランベリー側からゼルテナに着くまでは、特にな。クレスティア、おまえもオヴェエリアの一言一句に憂うのはやめろ」

取る部屋は二部屋。当たり前だけど。

でもクレスティアと同室になる私の身の上に関しては同情してくれてもいいと思つた。

side：クレスティア・アルヴァン

私とオヴェリア様が部屋に入ると、もう既に寝る支度は出来ていました。ベッドメイクは完璧だし、明かりも仄暗いランプだけ。

オヴェリア様はさつさと外套を上着掛けに掛けて、絹のローブからネグリジエに着替えています。

私もとつと寝ることにしました。鎧兜と鞆に納めた剣を立て掛けて、薄着の格好でそのままベッドにダイブします。ぼふんと、安普請の宿らしくベッドからかすかに埃が舞い散りました。

布団にくるまった私はオヴェリア様に話しかけます。ガールズトークじゃないですよ？ 実際私が出来るのはお互いの趣味だの生活の話題だの、”美月ちゃん”との『ファイナルファンタジータクティクス』の熱烈トークだけです。

その登場人物であるオヴェリア様が傍にいる。もうこれは話しかけるしかないでしょ。向こうさんはそんな気は微塵も無いでしょうけど。

「あと2、3日でゼルテニア城ですか。短いようで遠いですねえ」

オヴェリア様は私に背を向けて、黙っているままです。

「ゼルテニアに着けば後はデイリータさんが上手くやってくれます。オヴェリア様は無事安泰ですし、デイリータさんも私も晴れてお役御免といったところです。もともと、どこをどうすれば上手くいくのかはデイリータさん頼みですが」

黙秘を続けるオヴェリア様に、私はめげずに話し続けます。

「ゴルターナ公は相当な野心家と聞きます。オヴェリア様を利用して何かと事を成すでしょう。でも心配はいりません。デイリータさんに頼めば、オヴェリア様は無事でいられます。そのためにオヴェリア様もゴルターナ公やデイリータさんを利用して」

「やめて」

刹那に拒絶の言葉がオヴェリア様から発されました。

「今はそんな話、聞きたくない」

むう、可愛げのない。ライオネル城で引っぱたいたのが尾を引いているのでしょうか。それとも彼女が利用されるしかないサマを受け入れるしかないことへの孤独感が成せる業わざなのか。

私は、ああそうですか。と口の中でだけ呟いて、私もそれきり無言で寝ることにしました。

さて翌日。

私は旅程にあるポエスカス湖、ゲルミナス山岳を迂回する方針を提案しました。

デイリータ君は時間をかけるのに難癖なんくせをつけようとはしましたが。

「ポエスカス湖の正面はアンデッドの住処すまかで余計な戦闘に時間を取られます。ゲルミナス山岳も”爆裂団”という山賊が跋扈はっこしていて山越えは危険と隣り合わせな上に時間の無駄遣いです。急がば回れ、といます。ここは迂回するのが正解です」

と、ゲームで得た知識をフル稼働してデイリータ君を説得しました。

それを受けたデイリータ君は。

「とんでもない慧眼だなクレスティア。まるでこの土地を実際に見てきたようだ」

ほう、と感心しながら先のセリフを口にしました。

迂回路を取った私の提案が功を奏して、旅は順調に進みます。

道中何事もなく、私たちはゼルテニア城に辿り着きました。

デイリータ君は一軒の大きな酒場に入って。

「ここを拠点にするぞ。おまえたちはオレの用が済むまでここに隠れている」

「こんな喧騒に満ちた所を拠点にですか？」

「余計な人の眼がある方が隠れ場所としては最適だ。まさかこんな所にオヴェエリアがいるとは誰も思わないだろ」

「そんなもんですかねえ」

私の心配をよそに、デイリータ君は酒場を出ていきました。

あ、そのおつちちゃん。エールとリンゴの果汁一つずつ。それと適当なおつまみ盛り合わせで。

当のオヴェエリア様は一般の酒場が珍しいのか、周囲をキョロキョロと見回しています。

「あんまりきよどんない方がいいですよ。悪目立ちしますから」

私の言葉に返答はありませんでしたが、彼女はできるだけ目線を周りに配らないよう、席についてじっとしていました。

先に頼んだ飲み物と、炙った腸詰め——ウインナーと揚げた馬鈴薯——いわゆるフライドポテトがやってきました。うひょー、美味そう。

早速、私はウインナーにかぶりつき、それをエールで流し込みます。ぷはー美味しい！ 人生、生きててなんぼですよ。こういう楽しみが出来るなんて。もしかしたら本当の私、”榎宮ゆかり”は死んじゃってるのかもしれないけど。

オヴェエリア様は食事に手を付けず、リンゴの果汁を眺めています。

「どうしたんです？ 食べないんですか？」

オヴェエリア様はちよつと動揺した様子を見せて。

「私、こんなもの食べたことないわ」

「だったら今、食べてみればいいんですよ。市井の食べ物も王宮の上品な料理と違った美味しさがありますよ」

ざくつと、私はフォークで揚げ馬鈴薯を刺し、オヴェエリア様に差し出します。素直に彼女は口を開けて食べられました。

「……！ あつツ！」

言いながら、オヴェエリア様が咀嚼されます。

「……おいしい。平民はこういうものを食べられるのね」

「まあ多少の資産がある平民だけですけどね。商人とか傭兵とか。あ、そのジューズと食べ物、いくらでも召し上がってもらって結構ですよ」

言いながら、私は腸詰めとエールでお腹を満たしています。

その時でした。

side：キラ・シルベント

私たちは無事にルザリア領を抜けて、自治都市ベルベニアを越えてフィナス河を迂回した。とんでもなく凶悪なチョコボが出るからね、あそこは。

クラウドがぶちまけた「オレたちは異邦人だ」という言葉をミルウーダがどう受け止めたのかは分からない。

ただ、私とクラウドに付いてきてくれるのは確かだ。

私はミルウーダを騙していたわけじゃないが、大きな隠し事の一つがクラウドにバラされたのは事実だ。彼女の不興を買ったとしてもおかしくはない。

「ねえ、ミルウーダ」

私はチョコボを駆けさせながら、ミルウーダの隣に速度を落として声をかけた。

「どうかした？ 異邦人のキラさん」

う、やっぱり彼女は渋い表情のままだ。

「私はこの顛末てんまつを知っている。それをきみに見守ってもらいたいし、力も貸してほしい。それが出来ないと思ったら、いつでも私のこの首を刎はねてくれて構わない。ただ知っておいて欲しいのは、私は邪心を持ってきみを助けたわけじゃない。今も私たちに協力してくれて感謝もしている。それでも信用できなければ、せめてゼルテニア城に着

くまでは待つてくれないか。何としてもデイリータの野望を阻止したいんだ」

「あのね、キラ」

私の長ゼリフをぶった切るように、彼女は応える。

「私の命を助けてくれたこと、本当に感謝しているのは私なのよ。だから、そのとき拾った命だけは貴女に捧げてあげる。もし本当に貴女を殺すことになったとしても、私たちは一蓮托生よ。それで、私は死にたくない。意味、分かる？」

私は彼女の言葉に力強さを感じると共に、同時に後ろめたさも張り付いていた。

「……本当にすまない、ミルウーダ」

「いい加減、飽き飽きなのよ。貴女の謝罪は。もつと堂々とした態度でいてもらわないと、私の立つ瀬がないじゃない」

私はその言葉に顔を上げた。

そうだ。私がここで憂鬱に負けてどうする。

私がここで、このゲームの転換点を終わらせるんだ。それが果たしてブレイブストーリーに傷が付いたとしても。

ティータの二の舞にはさせない。

先頭を駆けるクラウドが私たちに声をかける。

「お二人さん、お話し中申し訳ないが、もう着くぜ……。ゼルテニア城だ」

目を凝らして前方を見ると、巨大な城塞都市がその威容が徐々に明らかになっていた。かつて五十年戦争で最前線となった要地。煌びやかなイグロスとはまた違った違った圧迫感を感じる。

私は二人に視線を向けて、声をかけた。

「行こう。必ずここでデイリータを止めてみせる」

「さて、と。まずは情報集めだな。王女がもうここに来ていたとしたら、とんでもない騒ぎになっているはずだぜ」

クラウドが情報収集を提案する。異論はない。

「まずはこの都市の中でも大きな酒場を当たろう。掲示板も新聞もあるだろうし、王女の行方も分かるかもしれないね。……ただその場合、もはや手遅れになっているかもしれないけど」

「無駄な心配をする必要は無いわ。私たちがやるべきことは一つだけなんじゃない？」

ミルウッドの言葉に、私は強く頷く。彼女とクラウドの発破が無ければ私はここまで来れなかったかもしれない。

本当に、感謝だらけだ。

酒場に入って情報収集しようとしたところ。

「——あ、そのジュースと食べ物、いくらでも召し上がってもらって結構ですよ」

聞き覚えのある声が、聞こえた。聞きたかった、それでも聞きたくなかった声が。

「クレスティア!?!」

私はそのテーブルに座る彼女——クレスティアに向けて呼ばわつた。

彼女は私の方へ向いて。

「あれ、キラじゃない。こんな所で会うなんて世間って狭いね」

「きみがいるということは、そちらの外套姿の女性は……」

「そ、オヴェリア様。なーに、キラもオヴェリア様に何か用なの?」

「今は王女がご壮健であるならそれでいい。デイリータはどこだ?」

「さあ? 私たちに内緒でどこか出掛けたよ。もうそろそろ戻ってくるんじゃないかな」

言ってるうちに、背後に気配を感じた。私たちはそちらに一斉に振り向く。

デイリータと、知らない誰かだ。

「なんだなんだ。いつの間におまえたちが合流したんだキラ。ここは同窓会の会場じゃないぞ」

「ちようどいい、デイリータ。ちよつと私たちに付き合ってもらおうよ」
「オレはこれでも忙しい身なんでね。どこに用があるかは知らないが、ここでは話せない話なんだろう？」

デイリータは王女を連れて逃げる方針だ。だが甘い。もう既にミルウーダとクラウスが酒場の入口付近を抑えている。

彼は観念したかのようになり、両手を軽く掲げた。

「……分かったよ、付いていけばいいんだろ。さっきも言ったが忙しいんだ。できるだけ近場で勘弁してくれよ」

そう言つて、デイリータが一口クレスティアに耳打ちした。

「もういいぜ。好きなようにしてくれ」

私たち三人はデイリータを囲つて、酒場を出た。

私たちはゼルテニアの郊外までデイリータを連れ出し、詰問する。

「さて、オレをこんな辺鄙な所まで連れてきて何の用だ？」

「とぼけるんじゃない、デイリータ」

私は彼を諭すように彼に言い放つ。

「黙つて王女を解放するんだ。獅子戦争は起こさせない」

デイリータは「ほう」と感心したように私たちに視線を配る。

「獅子戦争」、か。洒落たネーミングじゃないか。ということはおレがオヴェリアに何をさせようとしているか分かっている、と考えていいのか？」

「お生憎様」

ミルウーダが樹の幹にもたれ掛かりながら告げる。

「ここには二人、異邦人がいるのよ。貴方の計画は危険だ、つてね」
次いでクラウスが続けた。

「もうやめろデイリータ。ティータを助けられなかったのはオレの痛恨のミスだ。だけど、今おまえはそれ以上の血を流そうとしている。ティータはきつとそんなことは望んじやいない」

「貴方がそれを語るのか？ クラウス殿」

不敵な笑みを浮かべながら、デイリータは続ける。

「大体、オヴェエリアをここで解放したとしてどうなる。もうこのイヴァリースに彼女の安穩とできる場所はない。オレがいなければ彼女は守れない」

「ティータのことは仕方なかったなんて言わない。それともおまえはティータと同じ轍……いや、それ以上の血を流させるつもりなのか」
「いい加減、ティータのことを引き合いに出すのはやめてもらおうか、クラウドス殿」

その言葉は冷静だが怒りに満ち満ちていた。

「オレはティータを殺した貴族社会もこの世界全部を許す気はない。そのためなら何千何百の血を流してやる。オレがこのイヴァリースをぶち壊し、ティータを死に追いやった奴ら全てに報いを与えてやる」

そこまで言って、デイリータは普段の平静さを取り戻し、続ける。

「おまえたちはオヴェエリアをどうしたいんだ？ 彼女を助けて、この後はどうするつもりだ？ おまえたちの計画に、明確な目標はあるのか？」

私が反論する。

「このイヴァリースに彼女の居場所がないなら、居場所を作れる場所を探す。そのためならイヴァリースもいらぬ。彼女をオルダリアだろうとどこだろうと亡命させるつもりだ」

「発想がお人好しすぎる。まるでラムザだな」

「生憎、自分のこういうところは嫌いじゃないんでね」

「ふん、そうかい」

デイリータは剣に手をかけた。私たち三人が即座に、戦闘態勢に入る。

だが。

ガシャン。

デイリータはその剣を足元に投げ捨てた。

「負けたよ」

その敗北宣言に私はホツとした。いくら何でも、学友を手にかけるのは気持ちのいいものではない。

「だが、勘違いしていないか？」

私が安堵したのも束の間、デイリータが続けた。

「オヴェエリアをゼルテニア城に連れて行くのは、オレでもクレステイアでもいいんだ。要は誰かがオヴェエリアをゴルターナ公に差し出せば上手くいくのさ」

その言葉に、私は一時頭の血の巡りが鈍った。

なんだ。彼は何を言っている？

そこに。

「しまった！ これはデイリータの罠だわ!!」

やおらミルウーダが叫ぶ。

「どういうことだ？」

クラウスも気付かなかったが、私はハッと気付いた。

「まさか……でも、そんな！」

「おい、どういうことなんだ二人とも」

「クラウス、のんびりしている場合じゃない！ クレステイアを止めないと!!」

叫んで、私たちはゼルテニア城に戻っていく。

クレステイアならやりかねない！

「もう遅いさ……。歯車は回り始めているんだよ」

背後から聞こえる小さな声が、異様に暗く響き渡った気がした。

side：クレステイア・アルヴァン

ゼルテニア城内。

「感謝いたします。カンバベリフ司教」

私の言葉に、カンバベリフ司教が頷く。

「これもまた神のお導き。オヴェエリア様を救助された貴女にもまた、神の加護があらんことを」

そう言つて、彼は聖印を切つた。

「さて、貴女はどうなされます。クレステイア・アルヴァン女史」

「ゴルターナ公に取り次いで頂けないでしょうか。捕虜を捕らえましたので」

「よろしいでしょう。早急に取り次ぎましょう」

私は含み笑いを堪えながら、先ほどデイリータ君が捕まえてきた知らない誰かを連れてゴルターナ公との謁見に臨みます。

さて、ここからが緊張の連続ですね。この流れでしくじるわけにはいきません。

「貴公か……、オヴェリア王女を救出したというのは……」

ゴルターナ公が私を注視します。謁見の間には雷神シド——シドルファス・オルランドウ伯を始めとした重鎮が立ち並んでいました。まったく、気の休まる暇がありませんね。

「グリムス男爵配下の黒羊騎士団、副官アルヴァン。名をクレステイア」

勿論、全くの嘘です。

「グリムス男爵の密命により王女を救出するために身分を偽り出兵。任務を果たし、帰還いたしました」

それを聞いた横に立つグルワンヌ大臣が呟きます。

「……アルヴァンだと？ 聞かぬ名だ」

まあすぐ退場してもらうことになるんですけどね。

「男爵は先月、亮目団との戦いで戦死し黒羊騎士団も全滅したはず」

「それ故、急ぎ帰還いたしました」

ゴルターナ公、カンバベリフ司教に向けて。

「王女は？」

司教が応えられます。

「長旅の疲れのためか、死んだように眠っておいでです」

いくらお疲れとはいえ、死んだようにとはやや不謹慎ではないでしょうか。

「……捕虜を連れてきたと聞いたが？」

「ハッ」

シドさんの言葉に私は応えます。

「捕虜を連れてきなさい！」

背後の扉が開き、騎士が名も知らない誰かに縄を打って連れてきます。

「何故、王女を誘拐したのですか？」

私の問いに、あらかじめ決められたセリフを彼が喋り出します。

「ゴルターナ公に嫌疑をかけることで王都ルザリアへの上洛を妨げ、摂政の位を与えぬためだ……」

「誰が貴方に命じたのですか？ ラーグ公ですか？」

「……ラーグ公に取り入ろうとするゴルターナ公の側近の一人だ」

それを聞いたグルワンヌ大臣が憤慨します。

「バカな！ そのような不忠者がおるはずもない！」

精々、末期のセリフを考えおいてくださいね。大臣さん。

「ええい、その痴れ者の口を閉じさせよ！」

「かまわぬ、聞け」

ゴルターナ公は冷静なようで、今にも発奮しそうなご様子。

無理もありません。オヴェリア様が届けられなかったら不忠の罪で王家に裁かれるところだったのですから。

「……それは誰です？」

私の言葉に、名もなき誰か——捕虜は黙ったままでした。

「言いなさいッ！ これは君命でもありますッ！」

またしばらく黙ったままだった捕虜が、口を開きます。

「オレの命は助けてくれるんだろうな？」

「約束しましょう。言いなさいッ、誰ですかッ!!」

捕虜はグルワンヌ大臣に視線を向けて。

「……そこにいるグルワンヌ大臣だ」

唐突に指名された大臣が狼狽します。

「なんだと！ ウソを申すな！ わしはおまえなど知らぬ!!」

私は即座に大臣に向かい、弾劾だんがいします。

「誰にそそのかされたのです？ 王妃ですか？」

「ばかなッ、わしには関係ないッ！」

「主君を裏切った罪は重いですよ、大臣殿！」

叫び、私は剣を抜きます。周囲が一気に緊張感で満たされるのが眼に見えてわかりました。

「知らぬッ！ わしは知らぬッ!!」

背を向けて引く大臣の背に向けて、私は剣で突き貫きました。

グルワンヌ大臣が断末魔の声を上げて倒れ伏します。

呆気ない最期でした。

私はゴルターナ公に向かって跪き、大声を張り上げます。

「僭越ながら申し上げます！ 今すぐ南天騎士団を率いて上洛されるべし！」

私は大声の内に暗い笑みを浮かべながら、ゴルターナ公に提言します。

「さもなくば、大臣の謀り事の責任を公爵閣下にとらせようと言出す輩が出て参りましょう」

これで、幕です。

「その前に、速やかにオリナス王子と王妃を排斥し、オヴェリア様を御位に!!」

さすがデイリータ君。

ゲームで見えていましたが、デュライ白書でまさに奸雄と呼ばれるほどの手腕の持ち主。

その一方、キラたちに先駆けて私にこんな舞台を与えてくださるなんて、なんて心意気でしょう。

これで”獅子戦争”が幕を開き、ブレイブストーリーはより血を流して進んでいきます。

血で血を洗う大戦乱。

その幕が開くのを私にくださるなんて。デイリータ君、大感謝です。

さあブレイブストーリー、そして『ファイナルファンタジータクティクス』の世界よ。

もつと私に夢を見させてください。
クスクスクス……

side：アラズラム・J・D

王都ルザリアへの上洛を果たしたゴルターナ公は、王妃ルーヴェリアを王女誘拐の首謀者としてベスラへ幽閉し、オヴェリアを即位させた……

しかし、ラーグ公はオリナスこそが正統の王位継承者であるとして即位させると同時に自分は後見人として摂政の座についた。

すぐにラーグ公は王妃救出のためにオリナス王子を総大将とした北天騎士団をベスラへ派遣した。

一方、ゴルターナ公もオヴェリアを総大将とした南天騎士団を派遣……

後世”獅子戦争”と呼ばれる大乱の始まりである……

幕間 獅子戦争開戦直後

幕間 《クレスティア・アルヴァン》

side：クレスティア・アルヴァン

今、私はグレバドス教会の総本山、聖地ミュロンドに來ています。
黒羊騎士団の副官の地位はどうしたかつて？

だーいじょうぶ。適当に戦傷を偽ってデイリータ君に引き継いで
もらいました。

そういうわけで、私はミュロンドに訪れた意味はというと。

「お待たせした。騎士クレスティア殿」

私は席を立ち、騎士流のお辞儀でお迎えます。

來ました、ミュロンドの現異端審問官、ザルモウ・ルスナーダさん。
今回はちよつと彼を言いくるめねばなりません。

まあザルバツグさんを説得した私にとってはお茶の子さいさい。
この会談もまた、ゲームに沿って突き進むのですから。私はそれを
ちよつと後押しするだけです。

「話は伺っている。ラムザ・ベオルブがドラクロワ枢機卿を殺害し、聖
石を奪い取ったとのことであつたな……。なんとも嘆かわしい話だ」
「私のような小物の弁にお付き合いくださり、ありがとうございます。
異端審問官ザルモウ様」

「うむ……」

そう言つて、彼は窓辺に近寄つた。

「この世は天に施され、神によつて開拓された大地である」

おつと説教モードに入られましたか。

「貴殿の言うことが真実ならば、このザルモウ、聞かぬわけにはいくま
い」

「もし私の言が信じられなければ、この場で”異端者”の烙印を押さ
れることも覚悟の上です」

「そなたにはそれほどの覚悟があたりか。ならばこの情報の出所はど
こがお分かりかな」

「故あってその事情は伏せさせていただきますが、ラムザ・ベオルブが聖石を強奪したことについては間違いないと思います」

窓辺に視線を這わせていたザルモウさんが私に視線を向けてきます。

「この大地にはたくさんの言霊が存在する」

また説教モードですか……聞いている立場にもなって欲しいものです。

「それは歓喜、怨嗟、悲哀、悲喜ごもごもに形を成して存在する。無論、貴殿の言葉にも魂がこもっている」

「では……」

ザルモウさんが頷いて。

「早急にラムザ・ベオルブに異端審問会への出頭を命じよう。これに對し、不測の事態があれば”異端者”の烙印を押さねばなるまい」

厳しい顔つきで、そう仰られました。

「貴殿の用件はこのことだけかな？」

「いえ、まだお一人様をお待たせしていますので」

「そうか……殺風景な応接室で悪いが、そこでお待ちになると良い」

そう言つて、ザルモウさんは応接室を後にしました。

ふう、と息をついて椅子に座り直します。

私はザルモウさんに会いにここまで来たわけですが、用件はそれだけではありません。

もつともつとブレイブストーリーを楽しむために、私も自己研鑽してパワーアップを計らねば。

不意に扉が開きました。

「お待たせした。クレスティア・アルヴァン殿」

私はもう一度立ち上がり、一礼して述べます。

「本来なら私の方から出向かなければならぬこの無礼、まずはお許しください」

「ははは、そう畏^{かしこ}まらずともよい」

そう言つて私の対面の席に座る神殿騎士の方。青いサーコートのようなものを被られた方です。

「私はローファル・ウオドリング。貴殿の面談役を仰せつかった。まあ楽しんでくれたまえ」

そう言われて楽にできるかと思えば大間違いでしょうよ。

私はそれ以上にビシツと背筋を伸ばして一礼し、再び席に着きま

す。
「貴殿は神殿騎士団に入団希望だったな。それがどういう意味かお判りか。聞くことはそれだけだ」

「はっ、天より祝福されしこのイヴァリースの大地を守るため、我が血の一滴をも捧げる覚悟と存じます」

「ふむ……」

値踏みするような眼で私を見つめるローファルさん。

適当に美辞麗句を一言にした私に、ローファルさんは。

「ならばこの場で貴殿にその血を流せと申せば、その最後の一滴までも流す覚悟はありや?」

そう来ましたか。

「無論のこと。死を以て示せとあらば、この場で自らの首を刎ねてみせましょう」

瞬間、ローファルさんの気配が変わりました。

なんとというか、異常な不気味さを伴った、怪物のような気配に。

しかしそれはすぐに止み。

「ふっ、まあ冗談だ。気にすることはない」

いやいや、今さっき本気の眼でしたよ。私の眼は誤魔化せません
て。

「追って沙汰を伝えよう。入団試験もその時に時期を計らせてもらう。それまで貴殿の部屋を用意しておくので、旅の疲れを癒すと良い」

「私のような小娘に過分なお言葉、ありがたく頂戴いたします」

そう言つて、深々と礼をしました。

「では短いが、面談はこれまで。用意が済むまでこのミュロンドの地を散策したまえ」

そう言つてローファルさんは席を立ち、応接室から立ち去っていき

ました。

ふえ、マジで死ぬかと思った。あそこで首を刎ねろと言われて、はいそうですかと頷くわけにはいきませんから。ま、嘘も方便というやつですね。

さて、お沙汰が出たところで、まずはこのミュロンドを見て回りま

すか。
案外ブレイブストーリーから外れた面白いものも見られるかもしれ

れませんか。
とは言ったものの、ミュロンド寺院って面白いところ何もありませんね。

大聖堂に礼拝堂、教皇猊下の謁見の間がある程度で後は、食堂とか寮とか。

まあ雨露凌げて寝られる上に、一日三食きっちり食べさせてくれるだけ充分かとは思いますが。

ああでも、訓練場とかは面白そうですね。

一端の剣士がここでディバインナイトにジョブチェンジするの

かと思うとワクワク感が止まりません。
いずれは私もここで修練に励むことになるんでしょうかねえ。
そう思うとやっぱりワクワクテカですね。

部屋を与えられた私は一週間後に神殿騎士団入団試験を受けることになりました。

実技はともかくとして、座学一般が身に付いていない平民クレスティア・アルヴァンの身を初めて激しく呪いました。

あー、ダーラボン教官の授業を受けてたキラが羨ましい！

こうなったらもう三徹して一回寝てまた三徹ですよ！ 座学は根性だ！

でもって、紆余曲折を経ながら世間一般常識の基礎からグレバドス教会の教義まで。

頭脳をフル回転させて座学は見事合格！

お次は実技です。

実技のお相手は……と。

イズルード・ティンジェル君。

なんとあのヴォルマルフさんの実子じゃないですか。気合がみなぎってきましたよー！

side：イズルード・ティンジェル

……なんなんだこのクレスティアとかいう女は。

腹をすかせた子犬のような外見をしながら、飢えた獣みたいなギラギラした眼でオレを見つめてくる。

いくら実技を交えた訓練検討会といえど、ここまで変な奴は18年間ですら初めて見る。

だが父上も見ているこの実技試験、下手なマネは見せられない。悪いが女が相手だろうと容赦はしない。

そのギラついた眼ごと叩きのめしてやる。

模擬戦とはいえ、真剣を使った本格戦闘。

ギイン！

オレの剣とクレスティアの剣がぶつかる。一合、二合と打ち合うたびに違和感を感じ始めてきた。

この女、何故か満面の笑みを浮かべながらオレと打ち合っている。何が楽しくてそうさせているんだ？

オレの剣がクレスティアの剣を打ち上げた。

彼女の剣が大上段まで上がり、胸元に必殺の距離が生まれる。貫った！

ここで胸元に剣を突き付ければオレの勝ち——と。

ヒュガッ！

クレスティアに隙が生まれたと思ったと同時に、彼女の体が急速に回転した。

彼女の回し蹴りがオレの手をしたたかに打ち、オレの剣がヒュンヒュンと舞って離れた地に突き立つ。

クレスティアの剣が大上段から振りかぶり、オレの左肩に袈裟斬り寸前で止まった。

無手になったオレはクレスティアの眼を見る。

相変わらず爛々とした眼で彼女はオレを見つめていた。

「それまで！」

我が父——ヴォルマルフの声が響く。

負けた。

しかも相手の実力は、悔しいが未知数だ。剣での対戦にもかかわらず、開いた隙を体術で補い、不意を打つ。

オレにはない戦術。気付かされたのはオレの方だ。

「見事だった。クレスティア・アルヴァン」

言って、父上がクレスティアに向かっていき、剣を抜いて胸の手前で十字に固める。

負けたオレには一切、口も利かず、眼すら移さなかった。

「座学、技量共に神殿騎士の団員として相応しいと判断した。略式ではあるが、ここにて新たななる団員として認める」

それだけ言って、父上は訓練会場から去っていった。

パチパチと、父に代わって喝采の拍手を送ったのは姉であるメリアドールだった。

彼女がクレスティアに近寄り。

「見事だったわ。貴女の剣と体の使い方。外法の使い手だと思ってい

たけれど、実際に使ってみせてもらって評価が変わったわ。剣も技も、使い方次第ということね」

それに対し、クレスティアが応える。

「いやいや、だいぶ紙一重かみひとえの勝利でした。イズルードさんの剣に対抗するに、私も自然と力が入ってしまいましたし」

……？

オレ、彼女に名乗ったか？

不審に思った束の間、姉さんがオレに注意してくる。

「イズルード。貴方ももう少し修練と経験が必要ね。相手がどんな技を使ってくるか分からない場合、初めから自分の手を見せるのは悪手あくしゅよ」

「……肝に銘じておく」

姉さんは新たな団員が入ったことに有頂天になったのか、だいぶテンションが高い。

「今晚は試験合格も兼ねて食堂で一緒にお食事でもどう？ お酒も用意してもいいわ」

まるで年頃の少女のようにはしゃぐ姉さん。姉さんのこういうきつぷの良さはオレは嫌いではない。

そんなご機嫌な姉さんの提案に対して、クレスティアは。

「いや、お気持ちだけいただきます。正直、今回の試験でだいぶ疲れましたので、部屋に戻って休むことにします」

「あらそう？ 残念ね」

でも姉さんは気分を悪くしたわけでもなく。

「貴女のような若い力が加わるのは私たちにとっても嬉しいわ。これからよろしくね」

「こちらこそ。よろしくお願いします」

そう言つて二人は握手を交わした。

言葉とは裏腹に、相変わらずクレスティアの眼は輝いていた。

side：クレスティア・アルヴァン

あー、疲れた。

アルバイトの面接並みに疲れしました。あの値踏みされる独特の緊張感。あんまり味わいたくはないものです。

でもその後のメリアドールさんのお誘いを蹴ったのはちよつと勿体なかったかな。はやまったかしらん。

そんなよそ事を考えながら歩いていると、通路の角際で。

「おぶっ」

誰かとぶつかりました。

「おっと、失礼した」

長身の騎士さんのようです。察するに神殿騎士団の一員……
って、この人は。

「ケガはないかね。私もぼうつと歩いていてうっかりしていた」
ウィーグラフ・フォルズ。

かつてギユスタヴによる侯爵誘拐事件の際に顔合わせした、あの骸
旅団の首魁。

「……？ どこかで会ったことがあるかね？」

私は言葉もなく、必死で首を横に振りました。ちよつとチラ見した
程度なのになんで私の顔なんてうろ覚えしてるんですか。

「きみも神殿騎士団の一員か。ということは次の任務が初任務という
ことになるのかね」

「は、はい。ええくつと」

「ああ、私はウィーグラフ・フォルズ。神殿騎士団としてはまだ若輩者
の身だ。低頭する必要はないよ」

私の知るウィーグラフという男は真つすぐな理想を持ち、革命に熱
意を燃やした熱血漢でした。

それが今や、この人からはそんな熱い血潮は感じられません。

まるで、暴漢が更生されて公務員になったような、そんなサマでし
た。

「我々は聖石を集め、新生”ゾディアックブレイブ”を結成しなければならぬ。次の任務はそんな内容だ。強盗行為のようでも少気が引けるだろうか……」

「いえ、っ(心配なく。私も神殿騎士団の端くれ。先輩方の後塵を拝すことなく、前線にて任務を果たすのみです」

「ハハハ、若いというのはいいことだな。私から言えることは何もないが、まあ無理はするんじゃないぞ」

そう爽やかな笑顔を残して、私とは反対方向に去っていきました。ウイーグラフ・フォルズ。

あれほどの熱意を持ちながら、神殿騎士団として変わった彼を実際に見ていると、寒気がするほどの虚無感を感じてしまいます。

ゲーム中では知れない、彼のもう一つの側面、というものでしょうか。

そんなことを考えながら、彼の不意打ち『無双稲妻突き』を思い出してしまう私は、どっかネジが緩んでいるのだろうかと思う次第でした。

幕間《キラ・シルベント》

side：キラ・シルベント

獅子戦争勃発から三ヶ月。

私とミルウーダはゼルテニア城を去って、今現在は王都ルザリアに潜伏している。

クラウスには先んじてラムザの元へ戻ってもらった。皮肉なことに、一番危険に見舞われている彼の隣が一番安全だった。

それに、アグリアスも彼らと共にいる。

ルザリアの宿の一室で、私は窓越しに雨がしとしとと降る景色を眺めていた。

ここ三ヶ月間、私はいつもこんな感じだ。

獅子戦争に関わるニュースを見るたび、私は自分の無力さを思い知る。

デイリータの野望が始まってしまった。

この戦争での犠牲者は、死亡者、負傷者、難民。数えても数えきれない。

クラウスが言っていたが、本当にデイリータはこんなことを望んでいたのだろうか。

私はデイリータが何を考えて、これだけの戦争を仕掛けたのか分からない。

ゲームで何度も見てきたのに、彼の考えが何なのか、一向に理解できなideいた。

畏国王になること？

それにはこんなにも迂遠で、流血を強いることが必要だったのか？違う。

彼はグレバドス教会のエージェントであり、この戦争は彼にとってただの踏み台に過ぎなかったただけだ。

本当に悪いのはグレバドス教会だ。

王家を利用し、ラーグ公、ゴルターナ公の両者を扇動して戦争を起こし、その間隙を縫って教会の権威を高めようと企んだ教会こそが、

真の黒幕だ。

そして、その流血を己の企みに利用して、大望を成そうと考えたのが――

「キラ、貴女また難しい顔をしているわよ」

考えの最中、私の思考をミルウーダが制止する。

「貴女の予想通り、戦争が始まってもう三ヶ月。両軍ともに決着の兆しが見えないまま、戦費と人員を浪費するだけね。私たちだっていつ戦争難民になってもおかしくないわ」

「……本当はこうなるはずじゃなかったんだ。私の読み間違えのせいだ。デイリータに固執し過ぎて、クレスティアの狙いを読み損ねた、私の失態だ」

私は自然と、悔し気に歯噛みした。

「私のせいだ……。私がクレスティアの先を読めなかったから、この戦乱が始まってしまった。私の――」

自分を苛め続ける私の襟をぐいっと引っ張って、ミルウーダが怖い顔で私に迫る。

「いい加減、馬鹿なことばかり言うのはやめなさい！ この戦争が起こったのは誰が悪いわけでもない！ デイリータのせいでもクレスティアのせいでも、私たち3人の誰が悪いわけでもないの！ ラーグ公とゴルターナ公の緊張状態はいつ爆発してもおかしくなかった！

この戦乱は歴史の必然だったのよ！」

「そんな馬鹿なこと……！」

ミルウーダは私の言を聞かなくまま、ブンブンと頭を横に振った。

「馬鹿なことを言っているのは貴女よ！ どうして貴女はいつもそんなの!? 貴女一人でこの世界の歴史を変えられることが出来るのももうの!? 思い違いもほどほどにしなさい、キラ・シルベント!!」

「……………くッ……………」

私はゆっくりと、私の襟首を掴んでいたミルウーダの手を離れた。

彼女が語気を鎮めて、私へ話を向ける。

「言っておくけど、貴女は救世主じゃないのよ。聖アジヨラにでもなったつもりかもしれないけど、異邦人だとしても貴女はここではた

だの人間一人なの。それが世界を救えるなんて考えること自体、おこがましいとは思わない?」

「……そうだね。きみの言う通りだ」

肯定する私の声とは裏腹に、私の心はまだ諦めきれない心が渦巻いている。

「それでも、私に出来ることは何もないのかな……」

私の未練たらたらな発言に、ミルウーダは渋面になって。

「だったら私たちはこれから何をすればいいか、それすら考えつかないの? 異邦人のキラは」

「その点に関しては心配ない。手紙を送ったからね」

「手紙?」

私はミルウーダの言葉に、コクリと頷く。

「ラムザ宛に送ってある。私たちはここに潜伏しているってね」

「その時まで私たちはここに潜伏していられるのかしら。王家の眼が私たちを狙っているのでしょうか?」

「それについては大丈夫。もうダイスダグ卿の計略はフィになってしまったから。北天騎士団所属の私たちが狙われる理由はもうなくなっている」

「精々、徴兵されないか心配する程度には安心ってことね」

「ああ、あつちにはクラウドスもいることだしね」

「クラウドス、ね……」

彼の名を出した途端、ミルウーダが疑念に満ちた表情で続ける。

「貴女とクラウドス、それにクレスティア。貴女たちが異邦人だというのは本当なの?」

「それに関しては……正直、応えかねる。クラウドスなら大見得を切つて『その通りだ』っていうかもしれないけれど。私からは何も言えない」

「どうして?」

「この世界を知る者が及ぼす影響を考えると、あまり先のことをしゃべれないんだ。それは大きなパラドックスを生むかもしれない」

「それが、貴女が恐れていることか……やっぱりね」

「やっぱり?」

私の疑問にミルウーダは頷いて応える。

「貴女はその姿勢で満足なのかもしれないけど、クラウドもクレスティアも、多分自分が異邦人だつてこと、おおよけ公にはしないでしようけどそれを踏まえて行動している。このままじゃ貴女、クレスティアどころかクラウドにも勝てないわよ」

それはつまり、どういうことになるんだ?

クレスティアはともかくとして、クラウドが敵に回るといふ事態が想像できない。

ミルウーダが続ける。

「単純に姿勢の違いよ。クレスティアはまるで私たちが物語のピエロのように眺めている。降つては消える星屑のようにね。クラウドは単純よ。単純一途に自分磨きに余念がない。足元がフワフワしている貴女じゃもう敵わないかもしれない」

「それは私だけが取り残されるつてこと?」

「そう言つてもいいかもね。ともかく、貴女は貴女の出来ることに自信を持つこと。そしてそれを実現して、勝利すること。負けるかもつていう態度はもうやめなさい。気持ちで負けてたら、何に勝つことも出来ないのだから」

言われて、私は俯く。

「……ごめん、ミルウーダ。その言葉、忘れないでおく」

「そんな自信のなさそうな言葉で言われても、全然信用できないわよ」

「……ああ」

何が欠けているのか、自分でもわかつた。

力だ。

力が欲しい。

何を置いても、私には自信も力もない。

だから、何にでも勝てるような自信と力が欲しい。

——ルカヴィ。

聖石に秘められた力。

私は無意識のうちに、
その中にある禁断の魅力に惹かれつつあつた。

幕間《クラウス・マツケンロー》

side：クラウス・マツケンロー

貿易都市ドーター、その郊外の森にて。

ギイン！

アグリアスさんの剣閃に、オレの剣が吹っ飛ばされる。

「次ッ！」

続いて、アリシアさんとラヴィアンさんの連携がアグリアスさんを襲う。

が。

ドツとアグリアスさんが迫るアリシアさんの腹を蹴飛ばし、ラヴィアンさんの剣を絡み取り。

キンと弾いてその首筋に剣を止めた。

「おまえたちの剣技、連携もなかなかだが、まだまだ力不足だな。だが力不足なのは私も同じだ」

そう言って自戒する。

「ライオネル城のあの時、ルカヴィを名乗るバケモノ相手に手も足も出せなかったのは私も同じだ。だからこそ、私たちは強くあらねばならない。たとえあんなバケモノが数百、数千で襲ってこようとも負けないという心持ちを忘れてはならない」

剣を地に突き立て、オレたちに向かつて喝を入れた。

「だから、今は立て！ 私たちの闘志はバケモノの群れに挫ける程度のものか、とその身に刻み込んでやれ！ 私たちは仲間だ。結束した力だ！ 仲間を信頼しろ！ 集めた力で敵を屠ってみせろ！ そのためならば私はいくらでもおまえたちにこの命を預けよう。同時に、おまえたちも私に力と命を預けてくれ！」

こうまで言われて立てないほど、オレたちも愚かじやない。

剣を手に取り、オレは「押忍ッ！」と氣勢を上げた。

自然、アグリアスさんの眼がオレへと向く。

「クラウス、おまえの剣は愚直なまでに真っ直ぐな力だ。だがそれは

個の力。誰かを頼って初めておまえの技は一つの完成を見るだろう。心と体を健やかに保て。そして技を鍛えろ。それでも不足なら仲間を頼れ。おまえの剣は一つではない。仲間の力を借りて、十にも二十にもなる。それさえ忘れなければおまえに敵はいない」

あのアグリアスさんがオレの剣をこうまで評価してくれたことがあつただろうか。

もう一度、オレはアグリアスさんの闘志に負けなくらいに「押忍ッ!!」と叫んだ。

「精が出ますね、アグリアスさん」

「ああ、ラムザか」

一旦、訓練を休止して、腰を下ろしてタオルで汗を拭くアグリアスさんに、ラムザが話しかける。

「皆の調子はどうですか？」

「見ての通りだ。一つの完成が見られれば、といったところだが、その先にまだ予想だにしない道が広がっている。剣の道に終わりはないのかもしれない」

「ええ、僕もそう思います」

ラムザがアグリアスさんの手を取って立ち上がらせる。

「よろしければ、僕が代わります。いえ、やらせてください」

「おまえが相手か。ベオルブの剣、是非ともやつらに学ばせてやってくれ」

「はいー」

ちよつと休憩したら今度はラムザが相手かよ。

腕が鳴る……と言いたいところだが、ラムザの根性は底なしだからなあ。

「クラウスさん、貴方の剣技、僕にも学ばせてください。遠慮は無用です」

と、早速ご指名いただいた。

「了解した。……って言いたいところだが、オレの剣技はアグリアスさんの見様見真似だからな。ハッキリ言ってきみの剣とじゃ発想が

違う」

「それでもです。僕だって色々見てみたいんです。そのためにも今は貴方の剣を学んでみたい」

「付け焼き刃の剣で良ければ喜んで。それじゃ行くぜ！」

ダツと地を蹴り、ラムザに肉薄する。

オレとラムザの剣が互いに交錯した。

side：ムスタディオ・ブナンザ

度重なるラムザとアグリアスの剣の稽古に付き合わされたクラウスがぜえぜえと息を切らしていた。

木陰にぶつ倒れながら、今はアリシアとラヴィアンの介抱を受けている。なんだかんだ言いながら、この人、親心をくすぐる何かがあるのかもしれない。

なんとか体を持ち上げ、樹の幹に背中を預けながら起き上がったクラウスに話しかける。

「ちよつといいか？」

「ん……、ああ、ムスタディオか」

「オレだと不服かよ」

にっこり笑顔で憎まれ口をたたくオレに、クラウスが応える。

「ああ、いや。別に何でもないよ。何かの雑談？」

「雑談って言えば雑談なんだが」

オレはあの時感じた、微妙な違和感を思い出しつつ聞く。

「クラウス、あんた一体何者なんだ？」

「って言うのと？」

「あのルカヴィだよ」

ライオネル城で、ドラクロワ枢機卿が聖石の力を発して変化した悪魔。

そいつは自分をルカヴィ、”神”と名乗った。

当然、戦慄するオレたち。

それと違って、キラとクラウスは真つ先に斬り込んでいった。

「オレは正直、震えたぜ。なんであんたは真つ向から突撃した……いや、出来たんだ?」

クラウスが即座に応ずる。

「言っただろ。オレは悪を断つ正義のミカタだつて」

「それにだつて程がある。オレが思うに、あんたはあいつの正体を知つてたんじやないか?」

「オレは猪突猛進型だからな。あれこれ考えるのは苦手なんだよ。体が勝手に動いたんだ」

直感した。

クラウスの言葉には嘘がある。

多分、誰にも話せないような嘘が。

「クラウスにオレが言うのもなんだが、一個忠告だ」
「なんだ」

「話したくないことを無理に話せとは言わないさ。だけどあんまりだんまりだと、気を悪くするやつは割と近場にでもいるもんだ。それがあんたへの信頼関係を壊しやしないかとオレは心配なんだよ」

「ムスタディオのくせに女房役か? それにしてはサマになつてるもんだな」

「茶化すなよ。で、どうなんだ?」

クラウスはやはり頭を横に振つて。

「オレはいつでも悪を挫くスーパーマンさ。そうとだけ思ってくれればオレのことは大体理解してもらえると思つてるよ」

「そうかい」

オレはそれだけ言つて、クラウスに背を向けた。

「だましましたしやつてくのは相当厄介だぞ。ラムザたちだつてきつとあんたやキラに疑問を持つてる。それに対して、何らかの答えは出しとけよ。見限られる前に、さ」

ちよいと口が過ぎたかな。

そう思いながら、オレはクラウドの元から立ち去った。

side：クラウド・マツケンロー

答えを出しとけよ、か。

別に見限られるのは怖くない。

皆にとつて、オレはその程度の存在だと思われすることに異議はない。

ただ、キラの仲間だつてというのがオレの事実だ。

でも、オレが皆にとつての”異邦人”なら？

異世界からこの世界を見てきた、いわゆる神の視線を持つ人間だと知られたら？

オレはそのことがバレる方がよっぽど怖い。

ミルウーダは信頼できた。言っちゃなんだが、あいつのキラへの入れ込みようは異常なほどだ。

だからこそオレはあえてばらした。

ミルウーダには、本当のキラを知ってもらいたかったから。

だが、オレはどうだ？

本当に信頼を得られるだけの価値がある人間なのか？

でも。

オレは思う。

アグリアスさん、アリシアさん、ラヴィアンさん。

こんなにも世話になった人たちがいる。

そんな彼女らに、オレは実は全てを知る”神の視線”を持っている人間だと、胸を張って言えるのか？

……言えつこないよ。

そしてまたオレは嘘をつく。

悪を断つ正義のミカタだつて。

こんな嘘だらけの正義のミカタ、信用してくれるやつがいるのか？
そんなやつがいたら言ってみよう。

願わくばそれが、アグリアスさんたちみたいなお人であるように。

Chapter 3 偽らざる者

雷神シド

side：シドルファス・オルランドウ
ベスラ要塞の会議室。

ここではゴルターナ公を中心とした会議が開かれていた。

「死亡者は昨日までに約2万、両軍を合わせると倍の約4万……」

死亡者の数に頭が痛くなる。それだけでなくボルミナ男爵の報告は続いた。

「負傷者はわが軍だけでも軽く20万は超えます」

「問題は死傷者だけではない」

それを次いで、エルムドア侯爵が報告する。

「兵糧の蓄えもあとわずかになってきたが、これは計画どおり。厄介なのは今期の干ばつだ」

天も我らを見放したもうたかと思う。

「兵糧を買い付けようにも、モノがない有り様で、税収の大幅減と合わせて通年の半分以下しか備蓄できん」

「それについてはラーグ公も同じであろう」

ブランシユ子爵が所見を述べる。

「あちらはこの収穫時期に長雨が続いたおかげで、刈り取る前に穂が腐ってしまったそうだ」

それを追って私の報告が続く。

「むしろ問題なのは、この戦乱によって職や住む処を奪われた民だらう」

懸念すべき点が多い。

「オーランの調べによると王都ルザリアにはすでに10万人を超える難民が流入しているとか」

「ハハハッ、それはよい。ラーグ公側も食料の買い付けに苦勞するだらうよ」

不謹慎なブランシユ子爵の発言を私は咎めた。

「笑いごとでなないぞ！ 戦線が拡大すれば我々として同じ。大量の難民がいつこちら側に流れ込んできてもおかしくないのだ！」

併せて、ゴルターナ公に提言する。

「……やはり、そろそろ、和平工作を始めるべきではないだろうか……」

意見を聞いていたゴルターナ公が重々しく口を開く。

「貴公らの心配はもつともだ。だが、この戦いをやめるわけにはいかぬ」

やはりか、とも言うべきか、公は臨戦態勢を崩すことはなかった。

「通年より3割ほど増税しよう。また、穀物などを高値で売買する輩が出ぬよう監視を厳しくするのだ」

モノが無いのにそれを増税で賄おうとは、我が主君ながら恐れ入ったものだ。

「また、難民についても同様だ。ランベリーの境界を越えぬよう監視をより一層厳しくしようぞ」

「苦しいのはラーグ公も一緒。今なら和平的解決もできましよう」

「くどいぞ、オルランドウ。和平的解決などありえん話だ」

私は椅子を蹴り、立ち上がってゴルターナ公に意見する。

「民あつての国家！ 民あつての我々なのです。五十年戦争でもつとも苦しんだのは民百姓ではございませんか！ これ以上の増税はいかがでしょう」

私は公のお達しに耐えきれず、思わず声を荒げて注進していた。

「民だけではございません。前線で戦っている兵たちは満足な食事にありつけない有り様。これ以上、戦いを維持し続けるのは物理的にも精神的も不可能です」

「精神的にだと？ 貴公ともあろう者が臆病風に吹かれたか？」

「五十年戦争では鷗国——オルダリーアの侵略から祖国を守るという大義がございました！」

「この戦いにはそれがないと申すかッ？」

公は私の意見を一蹴した。

「いつから貴公はそのような“偽善”を口にするようになったのだ

「？」

それだけではなく、私の提言を”偽善”と口走る。

「甘くすればつけあがるのが奴らだ。我々が戦っているのは民のためでもある！」

民のためと言えば聞こえはいいが、それ以上にこれ以上厳しく当たられては民百姓の犠牲はさらに上回るだろう。

それを”甘くすればつけあがる”などとよくぞ申されたものだ。

「これ以上、腐った王家の行いによって民に迷惑をかけたためにもこの戦いをやめるわけにはいかんのだ！」

公に続いてブランシユ子爵も異を唱える。

「閣下のおっしゃるとおりですぞ。あとわずかではございませんか！」

私は子爵をきつと睨みつけた。

「雷神シド」とまで称えられたオルランドウ伯のおっしゃることとは思えませんな、まったく」

「あとわずかだと？ 何を見てそう申すのだ？」

子爵に対し、轟然こうぜんと言い放つ。

「この状況のどこを見てそのように楽観的になれるのだ？ 貴公の目は節穴ではないのか！」

「そ、それは暴言でございましょう!!」

「もう、よい、やめよ！」

余りにも大人げない態度を取ってしまった私と子爵に、公からの仲裁が走った。

しかし。

「見損なつたぞ、オルランドウ。これ以上の暴言は 貴公の身を危うくするぞ！」

公は私をお叱りになった。

「よいか、二度とは言わぬ。これ以上、わしの方針に不服があるならば早々にここを立ち去るがいい！」

私は黙つたまま、椅子に腰を下ろした。

「よいな、オルランドウ!!」

公はおわかりではない。

こんな戦争に何の意味も無いことについて。

私は今は亡き戦友バルバネスの顔を思い出していた。

side：ラムザ・ベオルブ

デイリータは僕に言った。

”大きな流れがあり、それに逆らっている”と……

この戦乱の世が避けようのない運命のような”大きな流れ”だとしたら、僕はその流れに逆らうことができるのだろうか？

僕は兄ザルバグに戦乱を影で操る者がいることを告げるため王都ルザリアを目指していた……

占星術士オーランとの出会い

side:オーラン・デュライ

しくじった。

雪吹きすさぶこの町で、吹雪が通り過ぎるのを待とうと一軒家に軒を借りようとしたのがケチの尽き始めだ。

まさかこんな町の郊外に盗賊団のアジトがあるうとは。

「どこだ！ どこへ逃げやがった!?!」

オレは思わず一步を踏みしめ、家屋の屋上から音を立ててしまう。

「上だ！ 屋上だッ!!」

その声を皮切りに、盗賊たちが続々と家屋から姿を現す。

「囲まれたか……!」

今の状況にほぞを噛んだ。起こってしまったことは仕方がない。

ここはなんとしても切り抜けなければ……!」

そうしている間もなく、屋上——つまりオレの傍に、盗賊の首領らしき人物が姿を現した。

「何者だか知らないが、オレたちの隠れ家に入ったのが間違いだったな」

不遜な物言いでオレに通告する。

オレはそれを皮肉で返した。

「今度から入り口に書いておいてくれ。ここが『盗賊のアジト』だったね」

それをもつともか、と思ったのか、思わずその首領らしき男がくつくつと笑いをこぼす。

「ククク……。減らず口もそこまでだ。さあ、観念するんだな」

そこにどやどやと、家屋の外から大勢の人物たちが姿を現した。

盗賊の仲間ではなさそうだが……

「何か様子がヘンだな……?」

先頭を歩く青年が口を開く。

「今日は来客の多い日だな。まあ、いい。皆殺しにしてやるぜ!」

盗賊の首領が発破をかけた。

side：クラウド・マツケンロー

毎日のお勤めお疲れさん。

恒例の盗賊退治のお時間だ。

ラムザ率いるこの布陣を見てなお戦意を失わない盗賊連中には、勇猛を通り越して無謀だとオレは思うんだがね。

敵は女盗賊を中心としたシーフに話術士らしき首領。そいつが敵のボスだが、銃装備していない話術士なんざカモでしかないね。

オーランもオーランで災難だが、オレたちと出くわした盗賊どもも天災に襲われたようなもんだ。

戦闘が始まった。

「天球の運命をこの手に委ねよ、我は汝、汝は我なれば……」

星天停止！

星空が回転し、急激にその回転が止まる。

それと同時に、敵勢の動きが静止した。

あいつかわらさず訳の分からない術を使うねこのオーランって人は。

動きの止まった盗賊ごときにオレたちが敗れることなんてあるはずもなく、盗賊どもは一下せん滅の元に終わった。

side：ラムザ・ベオルブ

「大丈夫かい？」

盗賊たちを殲滅した僕たちは彼の無事を確認する。

「ありがとう。きみたちのおかげで助かったよ」

僕とそう年齢は変わらない、彼の人柄は眼に見れてしれた。

「オレの名はオーラン。オーラン・デュライだ。きみは？」

「ラムザ・ベオルブだ」

僕の名を聞くなり。彼は。

「——ッ!!」

何故かよほど驚いて見えた。

「どうかしたかい？」

彼は取り繕って、話を切る。

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

そうして彼は話題を転換させる。

「それより、きみたちはこれからどこへ行くんだい？」

「王都ルザリアだ。……きみも王都かい？ よかったら僕らが一緒に行くけど？」

「それは残念、逆方向なんだ。気持ちだけでもらっておくよ」

「そうか……。じゃ、気をつけて」

また野盗なんかに出くわさないよう、気持ち伝えておく。

「ああ、そつちこそ」

そう言って、彼は手を差し出した。

彼と握手するかどうか、何故か僕は逡巡した。

結局のところ、別に悩むことではないと思い、彼の手を握り返す。

手を離して、彼は去り際にこちらを向いた。

「機会があったら、また会おう。それまで死ぬなよ」

「あ、ああ……」

side：クラウドス・マツケンロー

「オーラン・デュライ、か……不思議なやつだったな」

「そうですね。クラウドさんは彼をどこ存じで？」

「存じちゃいないよ。ただそんなやつだなんて思っただけだ」

もしかして、ラムザにはバレてるのか？ オレの正体。

まあ変な場面で姿を消したり、突然、彼と合流したりして。警戒するなって方が無理かもしれないんだが。

オレはぶるつと体を震わせた。物理的な意味で。

「ちよいと寒くなつて来たな。盗賊のアジトだけど、ちよつとここで吹雪が止むのを待とうぜ」

「それもそうですね……ゼクラス砂漠を越えたと思ったら、この天候ですし、皆も疲れてると思います」

「まあ警戒するに越したことはないな。ここの残党が帰ってくるかもしれないし、オレが見張りをやるよ」

「僕も付き合いますよ。まだまだ体力は残ってますから」

言うねえ。やつぱりジョブアビリティが『ガッツ』のやつは体力も底なしなのかね。

言いながら、オレはアジトの扉を開けた。

盗賊のアジトという割には、まめに片付いていた。元いた一般人の揃えた家具をそのまま使っていたのかもしれない。

まあテーブルや床には割れた酒瓶やら後片付けされていない食品などが転がっててもいたが。

休む分にはちようどいい。

オレは外に出てぐいーつと背を伸ばして体をほぐした。

元盗賊のアジトなんかだけあって、外敵の帰還やら報復やらには油断できない。

そこに一羽、何かが飛んできた。

「……伝書鳩？」

そいつはオレの腕に止まり、足に括り付けられた手紙をアピールしている。

オレがそれを解くと、鳩はそれきりオレから離れてどこへともなく飛んでいった。

「なんだって、こんな所に……しかもラムザ宛？」

おい、いくら何でもおかしいだろ。

ここにオレたちが滞留していることさえ知られていないだろうに、ピンポイントでラムザに手紙だと？

悪いとは思いつつも、オレは手紙を開いた。文面は無視して差出人を見やる。

それを見て、オレは即座に家に入った。

「おい、ラムザ！ きみ宛に手紙が来てるぞ！」

突然入り込んできたオレを見て、ラムザはキョトンとした表情で。

「どうしたんです、クラウスさん？」

「どうしたもこうしたもねえよ、見れば分かる。きみ宛の手紙だ」

繰り返す言うオレに対して、ラムザはガタンと座っていた椅子を蹴倒した。

「そんなまさか！ ここに入ったのも偶然なのに、どうして僕宛に手紙なんか届くんんです？」

「差出人を見ればなんとなく分かる。差出人は……」

差出人の名前。

それはキラ・シルベントのものだった。

こいつは奇手きしゅに出たなキラ。こんなもん出したら、もう言い訳なんて利かねえぞ。

ようやくこいつも、オレにも、ラムザに話す時が来たのかもしれない。

ザルバツグとの再会

side：キラ・シルベント

カッチ、カッチ。

懐中時計を手にし、長針が回るのを眺める。

他にやることも無いのだ。

外は土砂降りどしゃぶの雨が降っていた。

今はただ、彼がここに来るのを待つだけ。

「ねえ、キラ。本気なの？」

「本気って、何が？」

私は懐中時計から目を離すことなく、ミルウーダの問いに逆に問う。

「異邦人キラ・シルベントのことよ。クレスティアがゼルテニア城から行方をくりましたのは貴女の言い分だから信じてもいいわ。ディリータがその後釜に納まったっていうことも」

「じゃあ何の問題が？」

「だから、貴女の正体よ」

「ばらすのは覚悟の上さ」

私はミルウーダの顔に視線を移した。

「クラウドが言っていたらう。いつまでも秘密を抱えてはいられない。信頼関係が壊れる前に、全部明かした方がいいって」

「ラムザなら信じてくれるでしょう。でもその仲間たちは？ ムスタ

ディオはともかく、あの潔癖なアグリアスたちが貴女を信用するとは思えないもの」

「それについても考えはある」

多分、とても最低な。

これを話したら私はきつと軽蔑されるだろうし、離反者も出るだろう。

けれど、いい加減に白黒はつきりさせないといけない。

私はクラウドほど勇気がない。

だから、皆に向かつて私は異邦人だなどと打ち明けることは出来ない

い。

ならどうすればいいか。

決断の時を見極めるしかない。それが、ここルザリアに逗留^{とうりゆう}する理由の一つでもあった。

コンコン。

ノックの音が響く。

来たか。

「どうぞ、開いてるよ」

私の声に応ずるように、扉が開いた。

そこには水を弾いた外套姿のラムザが立っていた。

「キラ！ それにミルウーダも！」

ラムザが再会の歓声を上げる。

私はそれを無視して、できるだけ冷淡な表情を作って話しかける。

「日にち、時間もピッタリだ。伝書鳩を送った甲斐があったね」

「そう、それだ」

ラムザの表情も一変して、歓喜から真顔へと移り変わった。

「どうして僕らがゴルランドの町にいることが……いや、盗賊の家に留まって僕宛の伝書鳩を送ることが出来たんだ？」

ラムザが渋い表情と視線で私を見つめる。

彼のこんな顔は見たことが無い。相当、私のことを疑っているんだろう。

「それについては……ミルウーダ」

「私がしゃべってもいいのね？」

「ああ、ラムザも私自身から聞くより、他の誰かから聞いた方が分かりやすいだろうし、信頼もおけるだろう？」

ミルウーダが椅子に腰を下ろし、ラムザにも椅子に座るよう勧めた。

無言のまま、ラムザは脇の椅子を動かして自分も腰掛ける。

「ラムザ、キラはね。異邦人なのよ」

「異邦人？ 異国からの旅人だともいうのか？」

「いいえ」

ミルウーダが首を横に振る。

「文字通り、”異世界からの人間”よ。彼女は何度となく、この世界の混乱と残酷さを目にしてきた。まさしく”神の視線”でね」

ラムザはそれに驚くこともなく、ミルウーダの話聞いてる。

いや、もしかしたら内心では驚いているかもしれないし、私への猜疑心も深めているのかもしれない。

「……僕だけをこの宿に招いた理由はどうしてだ？」

彼の口から漏れた声は、信頼のおける仲間へのものではなかった。

敵か、味方か。それを推し量ろうとしている。

「貴方以外の人間にこのことを話しても、逆に混乱を招くと思ったからよ。だから、貴方もこのことは内に秘めていて欲しいの」

「ミルウーダ。きみがキラを信じた理由はなんだ」

「忘れたの、ラムザ」

逆に語気を強めてミルウーダが迫る。

「一年前、レナリア台地で、きつと私は死ぬ運命にあった。貴方はそれほどまでに強かった。だけど、そんな私たちの命の奪い合いを止めてくれたのはキラ。彼女なのよ」

グツと手を握り締め、胸元に手を当てる。

「私は彼女に命を助けられた。だから今度は私が彼女に命を懸ける番。彼女が何者だろうと関係ない。だからこそ、私は彼女を信じると決めたの」

「キラがきみを手駒にしようと考えなかった理由はなんだ」

「クラウスに諭されたからよ。キラを疑うのなら、自分の首を差し出すって。そうまで言われて、二人を信じない理由はないわ」

「クラウスさん？ 何故そこに彼の名前が出てくるんだ？」

ミルウーダがふう、と一息つく。

「言っても信じないかもしれないけど、クラウスも異邦人よ」

「クラウスさんが？」

「そう、それと……」

眼光を鋭くして、彼女は答えた。きつとゴルゴラルダ処刑場の一件

を思い出したのだろうか。

「クレスティア。彼女もね」

「クレスティアが……そうか」

ラムザが初めて、バツの悪い表情を見せた。

「キラとクレスティアは親友同士だったんだろう？ どうして今は敵味方に別れているんだ？」

「それは……」

チラリと、ミルウーダが私に視線を寄越す。こればかりは自分で答えるというらしい。

「私と彼女の、この世界に対する思い入れの違いだよ。私は人助けがしたかった。でも彼女は人が死ぬのを楽しんでた。それだけさ」

事もなげに言う私に、ラムザは沈痛な面持ちで聞いていた。

「キラ、一つ聞いていいかい？」

「いいよ。一つと言わず何でも聞いてくれ」

ラムザは遠慮のない声音で、私にハッキリと尋ねた。

「きみの最終目的はなんだ」

虚偽は許さない。そんな声だった。私は即座に答える。

「イヴアリース全土の救済。私が守れるもの、全てを救うことだ」

私の答えにどう思ったのか、それは分からない。

ただ、彼がこれが最後とばかりに尋ねたことは。

「きみは士官アカデミー時代から、ずっとそんなことを考えていたのか」

「ああ。でも結局、ティータは救えなかったし、こんな戦争も止められなかった」

「そうか……」

ラムザは意を決したように、いや、満足そうな声音で続けた。

「そんなきみなら信じられる。疑ってすまなかった。僕もミルウーダと同じく、きみを信じてみるよ」

「……ありがとう。ラムザ」

ラムザは立ち上がり、私に手を差し出した。私も彼の手を握る。ラムザの心しんにおける、力強い握手だった。

ミルウーダが腰掛けたまま、ラムザに問う。

「ところで、ラムザはどのようにしてルザリアに来たの？ キラに聞いてもパラドックスがどうしたとかはぐらかされて、聞き損ねただけけど」
難しいことだが、とりあえず私の分かる範囲で説明してみる。

「パラドックスっていうのはいわゆる矛盾のことだよ。誰かがそうしたいという決定された未来を先読みして、反対の方向に誘導することであり得た未来を変えてしまう。そんな変化の一つだ」

「難しいことを言うのね」

「異邦人」だからね」

ミルウーダが視線を私からラムザに流して。

「で、どうなの？」

ラムザはひとつ頷いて応える。

「ザルバググ兄さんに会いに来たんだ。この戦争を利用して益を得ようとする何者かが存在する。デイリータが何かの狙いを持っていたように」

「それをザルバググ將軍に伝えるため、だね」

「キラにはお見通しか」

ふっと一息をついて、ラムザは応えた。

「僕は明日、ルザリアの王宮に行く。さすがにミルウーダを連れてはいけないけど、キラ、きみはどうする？」

「同伴させてもらうよ。立場上、私はラムザの従者だからね」

ハハッ、と私は空笑いを一つ上げた。

ラムザには信じてもらえた。こんな頓珍漢とんちんかんな真実を。

でも、他の皆にはどう伝えればいいのか。

しかし、プランはある。

皆からしても、私の最低のプランが。

翌日。

ルザリア王宮の執務室にて、ラムザと私はザルバッグ將軍に謁見する機会を与えられた。

とはいうものの、ザルバッグ將軍は執務中。ラムザも居心地悪くテーブルの傍に立ち尽くすのみだった。

私は彼の従者ということで、彼の傍に侍^{はべ}って跪いている。

「……どうした、座らないのか？」

ラムザはその言葉に反応せずじいた。

「驚いたぞ。おまえがルザリアに来ていたとは思わなかった……」

執務の手を止めることなく、それどころか顔すらも見せずにザルバッグ將軍は呟く。

「アルマもここにきている。会っていくといい……」

「……兄さん」

「なんだ？」

ザルバッグ將軍の口調も妙に詰問しているように聞こえる。

招かれざる闖入者^{ちんにゆうしや}が訪ねてきたと言わんばかりに。

「戦いをやめることはできませんか？」

ラムザの言に、ザルバッグ將軍は罵^{ののし}るように返す。

「……何をばかなことをー」

ラムザが一所懸命に話を続ける。

「この戦いにどんな意味があるっていうんですか？ ベオルブ家は王家を守るために戦うのではなく、民を守るために戦ってきました」

私の頭の中に数人の顔がよぎった。雷神シドたるオルランドウ伯、銀の貴公子と敬われたエルムドア侯爵。そして、老いて力尽きたバルバネス將軍。

「なのに今は、私利私欲のために戦っている……」

「おまえに何がわかるというのだ！」

「兄さんこそ何もわかっていない！」

ラムザは語気を強め、ザルバッグ將軍に言い聞かせるようにまくし立てる。

「この争いは誰かが企んだもの！ ラーグ公とゴルターナ公は何者かに利用されているんだ!!」

その時、初めてザルバツグ將軍の執務の手が止まった。

「……利用されているだど？ いったいおまえは何を言っている？」

ザルバツグ將軍の怪訝な声音に対し、ラムザは俯く。

「僕にもよくわからない……」

自信なさげな口調でラムザは続けた。

「ただ、ダイスダーグ兄さんがゴルターナ公を摂政にさせないために王女誘拐の狂言を仕組んだとき、暗殺されるはずだったオヴェリア様をゴルターナ公のもとへ連れ去った奴らがいるんです」

オーボンヌ修道院からライオネル城までの一連の出来事を簡潔にまとめ上げ、將軍に伝える。

「もし、あるとき暗殺されていたら、ゴルターナ公は王家に逆らう国賊として誅伐されていたでしょう」

それを聞いて、ザルバツグ將軍が椅子を蹴倒し、立ち上がった。

「兄上が王女誘拐の狂言を仕組んだだど？」

その声は怒りに満ちていた。

「ラムザッ！ おまえは、実の兄がそのような謀略を用いたというのかッ！」

ザルバツグ將軍のその言葉に、今度はラムザが驚く。

「ザルバツグ兄さんは何もご存じないのですかッ!？」

「このたわけ者めッ!! おまえは肉親を信じることができないのかッ!!」

この様子を見る限り、ザルバツグ將軍は本当にダイスダーグ卿の奸計を知らないのだろう。

ゲームの上でも、ガフガリオンはやはり秘密裏にダイスダーグ卿に使われていたに違いない。

「ええいッ！ ここから立ち去れッ!! さっさとイグーロスへ戻るんだッ!!」

將軍の怒りに、ラムザもまた大声で反論する。

「兄さん、兄さんこそこの僕を信じてはくれないのですか！」

「勝手な行動ばかりとるおまえの何を信じろというのだ！」

ラムザの言葉に怒り狂うザルバツグ將軍が、悪しざまに彼を誹謗す

る。

「腹は違えど同じ血を分けた兄弟と思い今日まで目をかけてきたが、所詮、下賤げせんの血は下賤。高貴なベオルブの名を継ぐには相応しくないということかッ!!」

怒りに火が付いた將軍への説得はもはや不可能と悟ったのか、ラムザは寂し気に呟く。

「……兄さん」

ラムザと將軍が兄弟睨み合っている最中、北天騎士団の騎士が執務室に駆け込んできた。

「たいへんです、將軍閣下！ ドグーラ峠を雷神シドの軍勢に突破されたとの知らせがたった今、届きましたッ!!」

ザルバググ將軍がラムザから眼を外し、騎士の方へと振り向く。

「なんだとッ!? ヤツはベスラではなかったのかッ!」

ザルバググ將軍と雷神シド。かつてオルダリーア軍からイヴァリースを守った両雄がその牙を剥き出そうとしている。

「すぐに軍議を開くッ！ 皆を集めよッ!! 私も行くッ!!」

「ハッ!」

そうして、ラムザには一片の視線も寄越さず、ザルバググ將軍は騎士と共に執務室を駆けて出ていった。

私たちを残して無人となった執務室で、ようやく私は重い腰を上げて立ち上がった。 跪き続けるのも疲れる。

「きみには醜いものを見せてばかりだね、キラ」

「構わないよ。ザルバググ將軍は潔癖な人だ。ダイスターグ卿がそう簡単に尻尾を見せることはなかったんだろう」

「キラ、きみはこれからどうする?」

わかりきった質問をするなよ。

「きみに付いていくよ、ラムザ。きみには大きな借りを作ってしまったからね」

「昨日のことなら気にする必要はない。恩に着るのは僕の方だ」

これでもウルザリアに用はなくなった。

戦争は引き続き行われ、両軍互いに疲弊する消耗戦が続くだろう。

もう獅子戦争は私たちの手から離れてしまった。どだい、デイリー
タの計略を見破れなかった私には手に余る案件だったのだ。

そして訪れる、ラムザの運命の時。

私が皆を陥れる最低最悪のプラン。

その時、私は生きていられるのかな。

私は自身の”プラン”に身悶えしながら、ただ震えてその時を待つ
ているだけだった。

”異端者”として

side：ラムザ・ベオルブ

ザルバツグ兄さんへの説得は失敗に終わった。

また思案の袋小路に追い詰められる。

王都ルザリアの裏門から密かに出ようとした時。

「ラムザ兄さん、待ってー!」

少女の声が聞こえた。

「アルマ……」

僕の妹であり、唯一の理解者でもある。

心許せる、最愛の家族。

「黙って行くななんてひどいじゃない」

アルマが投げ掛ける視線から、僕は眼を逸らして。

「別れは……苦手なんだよ……」

その言葉ですべてを察したのか、アルマが呟く。

「もう戻らないのね……?」

僕はそれには応えず、自然と出てきた心に従い、口にする。

「……デイリータが生きていたんだ」

「え?」

「王女誘拐の実行犯の中にデイリータがいたんだ」

「どういうこと?」

アルマから顔を背けたまま、僕は空を仰ぐ。

「……最初は、僕らに復讐するためにゴルターナ軍に入ったと思ったけど、もっと……そう、何か厄介な奴らと行動を共にしているみたいだ……」

数ヶ月前、港町ウォージリスで再会したデイリータの言葉を思い出す。

『最良の手段が最善の結果を生み出すとは限らない』。

その言葉通り、オヴェリア様是最悪の手段で最善への道を選んでいった。

否、選ばされてしまった。

「暗殺されるはずだったオヴェリア様を助けたのは、デイリータの背後にいる奴らの思惑みたいだ……」

「……ダイスダグ兄さんが誘拐を仕組んだのは本当なの？」

僕はアルマに向き直って、一つ頷く。

「ああ、本当だよ」

自然に出た言葉。

僕はもはやダイスダグ兄さんの”大義”に懐疑的。いや、それを越えて全く納得が出来なかった。

「兄さんには兄さんなりの考えがあるのだろうけど、僕には納得できない……」

僕の言葉の後に、アルマが涙交じりの声で囁くように問う。

「ティータは……ティータはやっぱり……？」

「ああ……」

僕は虚空を再度見やり、アルマの顔に視線を移して語る。

「アルマ、よく聞いてくれ」

アルマの肩に手を置き、僕自身にも言い聞かせるように続けた。

「デイリータの背後にいる奴らが何者かはわからない。だが、奴らはとても危険だ」

僕はアルマの潤んだ瞳を手の甲で撫でて、涙を拭う。

「この戦乱を利用して何か邪悪なことを成し遂げようとしている……」

「……デイリータも荷担しているの？」

「それはわからない……」

『王女を真に救うことが出来るのはオレだけ』。

そう言ったデイリータには、彼を援助するバックボーンの影響が見え隠れしていた。

「デイリータにはデイリータなりの思惑……というか、何か狙いのよ
うなものがあるみたいだったけど……」

「ラムザ兄さんはそうした人たちと戦おうというのね？」

僕は首を縦にも横にも振ることが出来なかった。

やおら、決然とした表情でアルマが言う。

「私も一緒に行くわ」

「何を言っているんだ!? ダメに決まっているだろ!!」

唐突な彼女の言葉に、僕は思わず大声で否定した。

「兄さんの言っていることが本当だってことを証明したいのよ!」

僕はアルマに背を向けて、今度こそ頭を横に振った。

「ダメだ、ダメだ」

しかしアルマは頑なに叫ぶ。

「私だって、ティータみたいなのを出したくないのよツ!!」

僕はアルマに向き直り、再び彼女に眩く。

「アルマ……」

side：キラ・シルベント

私たちがラムザと共にルザリアの裏門を出ようとした矢先、一人の少女が私たちの間を縫うように走っていった。

ラムザの妹、アルマだ。

ここに来るまでの間、私とミルウーダはアグリアスたちに、ラムザに語った私の経緯を話した。

その上で、私と袂たもとを分かとうとする者、私という存在を疑問視する者、様々な視線を浴びてきた。

この事態に追従してきたのはクラウドとミルウーダだけ。

そうだろう。こんな私やクラウドの妄言に付き合う人間は多分。

ラムザとミルウーダだけだ。

「……釈明はそれだけか? キラ・シルベント」

アグリアスが眉間にしわを寄せて、腕を組みながら私に問うてくる。その口調にはありありと私への疑念が募つっていた。

「待ってください、アグリアス様! こいつだって好きでこんな事実を隠していたわけじゃ……!」

「おまえへの詰問はまた別にある。だが今はこの女だけだ」
クラウスの抗議には全く耳を貸さず、私に向けて厳しい口調で問うた。

私の胸ぐらを掴んで続ける。

「私たちはおまえにとつてただの手駒だったというのか？ おまえが私たちを利用しようと、今まで正体を隠していたのか？」

「キラを放しなさい、アグリアス」

横から口を挟んだのはミルウーダだ。

「彼女に二心が無いのは分かっているでしょう。今の貴女は感情のままに問いただしているだけ」

冷たい声音のまま、彼女は私に向かって言う。

「キラ、その女の言うことなんて聞くことはないわ。所詮は貴族をかさに着た平凡な人間。利用されることに慣れてないだけよ」

ミルウーダの言葉にカツとなったか、冷静さを保ちながら口調だけは怒りのままに吠える。

「その言葉、コイツの行動が私たちを利用していたのを肯定することだと言っているも同然だぞ」

「それでもいいわ。彼女は私の恩人。彼女の道を私は辿る。それが出来ないのならこの場から消えなさい」

「言わせておけば……!!」

胸ぐらを掴むアグリアスの手から力が緩む。その手を、私は強く振り払った。

アグリアスが私の眼を睨みつける。

そんな彼女に私は忠告した。

「私の正体なんてどうでもいい。気に入らなければ去ればいいし、私の事が気に食わなければ斬り捨ててくれても構わない。ただしここで私を見限るということはラムザを見限るのと同義だとだけ言っておく」

「どういうことだ？」

「簡単だ。私を切り捨ててラムザと袂を分かつか、もしくは——」
そのタイミングで、“プラン”は訪れた。

「ラムザ・ベオルブだな？」

野太い男の声が静かに響いた。

「我が名はザルモウ・ルスナーダ！ 異端審問官である！ ドラクロワ枢機卿殺害、及び邪教崇拜の容疑により、異端審問会への出頭を命ずる！」

声は貫禄ある怒声へと変わり、ラムザに向かって宣告する。

「このままおとなしく我々に従え！ 抵抗する場合は、”異端者”としてこの場で処刑を執行するッ！」

「——ラムザと共に”異端者”として、グレバドス教会に楯突くか、だ」

「異端審問官!!」

「逃げて！ 兄さん!!」

「そうはさせせん！ 行けッ！ ”異端者”を殺せッ!!」

ラムザたちの錯綜する声が裏門前に響き渡った。

「これが私の”プラン”だよ。さあどうする？ 決断する時間はもうないよ」

私は極力、暗い声を発して、悪人を演じていた。

「……そういうことか。それならば、おまえの言うことなど聞く必要などあるまい」

スラリと鞘から剣を抜き、ルザリアの裏門へと立ち向かうアグリアス。

「勘違いするな。私が信じたのはおまえではない。私の信じる道にラ

ムザがいるだけだ」

「ですよね！ アグリアス様！」

「こんな鉄火場に出くわすだなんて、しかし旅は道連れとも言いますし」

ラヴィアン、アリシアもアグリアスに追従する。

「あんた一人でこんなことをずつと悩んでたのか。水臭いぜ」

ムスタディオが銃を片手に裏門の外へと飛び出す。

そして、私は。

「おい、行こうぜキラ。なんだかんだでみんなラムザの味方なんだしよ」

クラウスもまたラムザとの同行に付き合うつもりだ。

そうだ。ラムザは勝ち戦の旗頭だ。

「いつまでボーっと突っ立ってるつもり？ キラ、貴女はこのためにラムザや皆に打ち明けたんでしょう」

「……すまない。私だけが出遅れるなんて、この場面じゃ許されないもんな」

私も佩いた剣を抜き、ルザリアの裏門へと進入していった。

side：クレスティア・アルヴァン

さくやつてきましたよ、神殿騎士クレスティアの初陣が。

ラムザ君はどうやら私がいることに気が付いていない模様。

異端審問官を前にして、少々気が昂っているみたいですねえ。

思っていたところ、裏門から見慣れた連中がどやどやと出てきました。

そんな折。

「クレスティア!？」

私を大声で呼びやるのが聞こえました。

「あつ、キラじゃない。多分ラムザさんたちと一緒にだと思ってたけど、久しぶりだね。何ヶ月ぶりだっけ？」

「何故きみがここに!? きみは教会に付いたのか!」

「ご名答。あとラムザさんが聖石を強奪したこと、ザルモウさんにしゃべったのも私だよ」

「きみってやつは……!」

「さーて、時間も押ししてるし、それじゃやり合いますよるか、キラ」
言つて、私は剣を抜きました。

とは言うものの、戦況的にはやっぱりこちらが不利ですよねえ。

神殿騎士とは違い、木っ端の教会騎士団に、常勝無敗のラムザ君をリーダーとした遊撃隊。明らかに質と練度が違い過ぎます。

「我々に刃向かうということは神を冒瀆する行為に等しい!」

神への説法を盾に降伏を迫りますか。

さすがザルモウさん、頭の隅々まで神様一色です。

「今からでも遅くはない! 悔い改めよ!! さすれば命だけは助けよう!!」

「なぜ、僕が」異端者 なんだ!! 僕は何もしていないツ!」

聖石を持つて「何もしていない」は無いですよ。

ラムザ君もこの辺、どうしようもないですね。

「シラをきるつもりかツ! 聖石を邪神に捧げるためにドラクロワ枢機卿を殺害し、聖石を奪ったのは貴様であろう!」

「言いがかりも甚だしい!」

ラムザ君、気迫で押し返します。

異端審問官相手にこれだけ啖呵切れるのなら怖いモノなんてないんでしょね。

「そもそも聖石は伝説と違い邪悪な力を有する”魔石”だった!」

まあその辺は解釈の違いってことで。邪神崇拝なら聖石は魔石の方が都合がいいでしょうし。

「しかも、枢機卿はその邪悪な力によって伝説の悪魔、ルカヴィになつていたんだぞ!!」

邪神崇拝のラムザ君ご一行以外の、誰がそんな戯言信じると思ってるんですか。

説得するには真つ当な事実だけ並べても意味ないですよ。

「この期に及んで、枢機卿の名誉まで傷つけようというのか！」

ブチ切れるザルモウさん。

いやはや、グレバドス教会ナンバー2のご威光を貶めるラムザ君は説得力が圧倒的に足りてません。

「なんと嘆かわしい！ ベオルブの名が泣くぞ!!」

ここまで来てベオルブの名を出してもねえ。残念ですがラムザ君は一向に聞く気はありません。

「兄さん！ 早く逃げてッ!!」

アルマさんが叫びます。うーん麗しい兄妹愛。

「異端審問官に連れていかれた者は絶対に帰ってこれない!! 早く、早く逃げてッ!!」

「アルマこそ逃げるんだ!! このままでは、おまえまで”異端者”の烙印を押されてしまう! そうなる前に早く逃げるんだ!」

「そんなことできるわけじゃないじゃない! 兄さんを置いて一人で逃げるなんて!」

そんなこんなで戦闘も大詰め……じゃなかった。

私目掛けて迫ってくる一人の騎士がいました。

キラです。

先手を打って私が先に挨拶します。

「ハロー、キラ。元気してた?」

「きみは相変わらず元気そうだねクレスティア。そんなに人が人を殺すのを見て楽しいか!」

「うーん、それは拡大解釈というか何とというか。別に私、人が死ぬのを見るのが楽しいわけじゃないよ?」

「だったら何故きみはその凶刃を振るう? 何のためだ!」

「私がちよこーっと一押しするだけでブレイブストーリーが順序立てて進んでくれるんだもの。これを利用して私が剣を振るうのは楽し

みとして間違いだと思う?」

「間違いだ何だというのは私たちが決めることじゃない。ただ、きみのやってることは間違いなく、イヴァリースにとって邪悪なことだ!」

「それならそれでいいじゃない。キラの言う通り、私の楽しみがイヴァリースにとって害悪となることなら、その邪悪を貫いてみせるよ!」

「言ったな……ならもうきみ相手でも容赦はしない。全力できみの無邪気な邪悪を止めてみせる!!」

「へえ。どうやって? 言つとくけど、私は殺されるまで止まるつもりはないよ!」

キラの剣が私の盾に突き立ちます。だけどそんな殺意のない剣、私は歯牙にもかけません。

逆に私の剣は必殺の剣。殺意を伴わない攻撃の隙を縫って、彼女の右肩に剣をかざします。

はい、これで一人退場。

「ぐッ……!」

ガシャン、とキラが剣を取り落とします。

殺るか殺られないかのチャンバラで手加減だなんて、甘い甘い、大甘。

私は自分の中で、キラへの評価を一つ下げました。

「言ったでしょ。殺されるまで止まらないって。だったら私をここで殺してみせてよ、キラ」

つと。

私がキラと問答している間に形勢は不利になってきたみたいですね。

無理もない。

銃使いのムスタディオ君やら 聖剣技使いのアグリアスさん、クラウスさん。幾多の修羅場を越えてきたモブのお方々。

ミルウーダさんあたりともお話してみたんですけど、これ以上は無理ですね。

撤退しましょう。

ザルモウさんが撤収の号令をかけます。

「神をも恐れぬ」異端者、めッ!! この借りは必ず返すぞッ!!」

私たちは速やかに、ルザリアの裏門前から姿を消していききました。

side:キラ・シルベント

私はクレスティアから受けた傷を、アリシアとラヴィアンに介抱してもらっていた。

さすがに睡つけとけば治る、とはいかない。ポーションをまぶして包帯を巻いてもらう。

「大丈夫ですか? キラさん」

「クレスティアのことになると頭が沸騰しちゃうみたいですね。まるで猪モードのクラウスさんみたいですよ」

「…………ごめん」

私は素直に陳謝する。

あれだけ啖呵を切っておいて、私はクレスティアに歯が立たなかった。

『殺されるまで止まるつもりはないよ』。

あの時のクレスティアの言葉が脳裏をよぎる。

私は本当に甘かった。覚悟が足りなかった。

彼女は言葉通り、死ぬまでブレイブストリーをしゃぶり尽くすつもりなのか。

このままクレスティアの良いようにさせてたまるものか。

「大丈夫?」

「ミルウーダ…………」

私の顔を覗き込んで、ミルウーダが声をかけてくる。

「貴女はクレスティアに負けていない。先の舌戦で分かったわ。でも

……」

「彼女を殺すことを躊躇っている、だろう?」

ミルウーダが頷く。

「私と彼女の差はきつとそこなんだ。私は彼女の死を恐れている。だけれど彼女にとっては私なんか障害でも何でもない。路傍の石と同じようなものだ」

「で、その路傍の石のキラはどうするの?」

私は俯き、けれど言葉を絞り出す。

「決まっている。今回の件で腹は決まった。絶対に彼女の罪業を暴いて、彼女に分からせてやる」

「そう……」

対するミルウーダは心配そうな声音で私に応えた。

「付き合うわ、キラ。私に出来ることがあれば何でも言うて。せめて、一人で抱え込まないで。私に出来ることなんて、人を傷つけることくらいしかないけど、クレスティアは私も止めてみせる」

「ああ、頼りにしているよ。ミルウーダ」

私は彼女の手を取って、握りしめた。

彼女の握り返す手は、どこか弱々しかった。

ルザリアの裏門の外側から「おーい」というムスタディオの声が聞こえた。

走り寄ってきて、私たちに伝える。

「今度の目的地はオーボンヌ修道院だ。何でもヴァルゴの聖石があるらしい、ってラムザの妹が言ってたぜ」

知っている。

けれど、クレスティアもまたそのことは知っているはずだ。

神殿騎士イズルード、神殿騎士ウィーグラフ。

そして、神殿騎士クレスティア。彼女にとってはどれだけのイベントの宝庫だろう。

彼女との対決が近付く時が、ひしひしと感じられた。

オーボンヌ修道院

side：クレスティア・アルヴァン
翌々日。

我ら神殿騎士団がオーボンヌ修道院へ強襲を仕掛けるにあたり、無謀にも挑戦しようとする輩が登場しました。

勿論、ラムザ君ご一行です。

私は斥候の役目を終え、先陣を任されたイズルード君に報告します。

「この修道院に近付く闖入者あり。先頭はラムザ・ベオルブを始めとした私兵団。どうやら異端審問官に楯突き、我ら神殿騎士団を駆逐しに来た模様」

「以上です」と締めくくりました。

「やはり来たか、ラムザめ」

殿を務めるウィーグラフさんが戦意をみなぎらせませす。

「イズルード、おまえはいち早く聖石を手に入れろ。私は一旦身を隠し、後詰を務める。修道院内で挟撃し、この修道院を奴らの墓場にしてやるー!」

「わかった、抜かるなよウィーグラフ」

「任せろ。今度こそ奴らに吠え面をかかせてみせるぞ」

「よし、クレスティア! おまえは我々と共に来い! オレを破ったおまえの力、アテにしているぞー!」

私はイズルード君に一礼して。

「ご期待に応えましょう。イズルード様」

「よし、行くぞ!!」

オーボンヌ修道院に神殿騎士団の軍旗がひるがえりました。

side：キラ・シルベント

オーボン又修道院の外側は誰もいない。まるで入ってくれとでも言わん限りにその扉は開かれていた。

私たちは修道院に入り込む。

そこにいたのは。

「シモン先生ッ!!」

倒れ伏す僧侶たちの中に、シモン先生の姿があった。

アルマがその傍に駆け寄る。

「先生、しつかりしてくださいッ!!」

「う……う……アルマ……様……何故……ここに？」

シモン先生が枯れた声で応える。

「いったいどうしたんですか？ 何があつたんですか？」

事情を聞こうとアルマがシモン先生に詰め寄った。

「……、ここは……危険です……。早くお逃げなさい……」

危険なのは見れば分かる。それに対し、ラムザは逃げないだろうことも。

「やつらが……聖石を……聖石『ヴァルゴ』を奪いに……」

「聖石!? アルマの言ったとおりだ……」

ラムザが驚きのままに口走った。

「……あの聖石は王家に伝わる秘宝の一つ……。オヴェリア様をこの修道院に……お迎えした際……、王女の証にと王家よりお預かり……いたしました……」

「奴らとはいったい？ 聖石を狙う奴らとは何者なんですか？」

ラムザも薄々感じ取っているだろう。聖石を狙う奴らの正体を。

「……あなたは……アルマ様の兄君……ラムザ様ですね……？」

ラムザはコクリと頷く。

「これ以上……、彼らに関わるのはおやめなさい……。命を失うことになる……」

「聖石はどこだッ!!」

「あわてるなッ！ 必ずあるはずだッ!! 探せッ!!」

「ここから地下へ降りれるようだ！ 行くぞッ!!」

階下では聖石を探し、群がる軍勢の音が響き渡る。

「僕は教会から」異端者」の汚名を受け命を狙われています。それも僕の持つ聖石のためですか？ 教えてください。彼らはいったい何者なんですッ!?!」

ラムザの言葉に、シモン先生はゆるりゆるりと語り始める。

「……教皇フューネラルとその一派は失った教会の威信を取り戻すために、まずはラーグ公とゴルターナ公を争わせ、軍事力を削ぎ落とそうとしています……戦乱が長引けば軍事力を失わせるだけでなく、民からの王家に対する信用を落とすこともできるでしょう」

シモン先生の問題提起に、ラムザが反応する。

「聖石を集め、伝説のゾディアックブレイブを復活させる真意は？」

それにシモン先生も応える。

「……むろん、民からの信望を集めるためです……」

「だが、枢機卿はルカヴィとの融合を遂げていました」

それは事実だとしても、見ていない者が聞けば相当、荒唐無稽な話だったろう。

「あれが聖石の力だとしたら騎士団に代わる恐ろしい軍事力になります。教皇が欲しているのはその力……?」

しかしシモン先生は。

「あなたは、兄上たちとは違う……。亡きバルバネス様に似ている……」

ラムザの真摯な言葉に、信頼を見せていた。

「あなたなら……彼らの野望を打ち砕くことができるのかもしれない……」

やおら、ラムザはアルマの方へと向いて。

「おまえはここに残れ。僕は奴らを追う」

「私も一緒に行くッ！」

アルマは即座に反発した。

この先に待ち受ける危険は承知の上だろうに、なんて胆力だ。ラムザをしてこの妹あり、といったところか。

しかし、ラムザは首を横に振る。

「シモン殿を一人にしておけない。安全なところに隠れているんだ！」

シモン先生を当てに、危険のない場所へと隠れるように指示した。ラムザは二つの聖石を取り出す。

「もしもの時のために聖石を預けておく」

アルマが聖石を受け取り。

「僕が戻ってこなかったら必ずバグロスの海に捨てるんだ。いいな？」

無言のまま、アルマは床に手を突いた。

囁くように呟く。

「……こんな時に何もできないなんて本当に悔しい……」

何も出来ないなんてことはない。

聖石を託されたきみの使命は重大だ。

「私も兄さんみたいに男に生まれたかった……」

「……ばかだな。心の許せる肉親はアルマだけさ」

「兄さん……」

失礼ながら、私は横合いからラムザに声をかける。

「ここに戦闘能力を持たない二人を残すのは危険すぎる。後詰もあるかもしれない。私とクラウスはここに残ろう」

「え？　ここでオレ？」

突然の指名にクラウスが声を上げた。

ラムザは少し悩んだようだが、頷いて肯定の意を示した。

「確かに……。二人だけでは不安だ。任せていいか？　キラ」

「任された。クラウスも、それでいいね？」

「まあな。キラ直々の指名なら残るのもやぶさかじゃない。アグリアス様もそれでいいですよね？」

「アグリアスも首を縦に振った。

「任せよう。キラの監視も怠るな」

「……こんな場面で皆を裏切ったりなんかはしないよ」

洩面で応える私。

それきりに、ラムザは最後に私たちに向けて発破をかける。

「シモン殿を頼んだぞ！」

気力をみなぎらせ、ラムザたちは地下へと続く階段を下りていった。

どこにいたって確実にクレステイアはどこかで仕掛けてくる。

なら私たちの仕事はいくつかある。

まずはシモン先生を助けること。

そして、聖石を預かったアルマを守ること。

最後に——私たちの前に現れるだろうクレステイアを下す^{くだ}こと。

ここで決着をつけるぞ、クレステイア……!!

side：クレステイア・アルヴァン

地下へと進む私たちに、先頭に行くイズルード君が立ち止まります。

「クレステイア！ おまえたちはここに残れ！ いいな！」

「ハッ！」

その指示に私は素直に従いました。

何故か？ そりゃ”ゾディアックブレイブ”のフラグシップ候補であるイズルード君の命令に逆らうわけにはいきませんし、何よりせっかくキラが来てくれるって思ったなら居残りでも何にでも甘んじましょう。

イズルード君の舌戦はラムザ君がいないと始まりませんしね。

私からしたらこの命令は渡りに船だということですが。
まあ、ここで私を残して他の団員にはお亡くなりになってもらわな
いといけないわけですが。

イズルード君がさらに地下へと姿を消した直後、上からどやどやと
迫る一団が。

「ご存じラムザ君たちです。」

「これ以上、奴らの好きにはさせない！ 聖石を奴らの手に渡すなッ
!!」

ラムザ君、なかなかの気迫で登場です。

彼もまた私同様、傭兵時代からここまで勝ち続けてきた猛者でしょ
うが、私はさらにデイベインナイトとして研鑽を（ちよつとだけでは
が）積んできた身。

あんまり大きな顔はさせませんよ。

side：ラムザ・ベオルブ

シモン先生の言っていた通り、修道院内部は教会配下の騎士団に荒
らされている。

書物があちこちに散乱し、傷付いた僧侶たちがそこかしこに倒れ、
血の匂いが充満していた。

地下に下りた僕らを待ち構えていたのは、やはり教会の騎士団。同
じグレバドス教会を奉仕する身なのにここまで暴力的に聖石を奪お
うとするとは、教会も一枚岩ではないということか。

「待っていましたよ、ラムザさん」

聞き覚えのある少女の声が凜として響く。

段差が上がってくる一人の人影。

「おまえはクレスティア！ おまえがなぜ教会の騎士団に!?」

「正式名称は神殿騎士団ですよ。グレバドス教会本部の配下。こんな木っ端の修道院の事情なんか構っていられない、だから無理矢理にでも聖石を取りにやってきたのです」

いけしやあしやあと言つてのける彼女に、僕は怒声を浴びせる。

「おまえもディリータ同様、教会の手駒になったのか！ 目的はなんだ!?!」

しかし、彼女はしたり顔で。

「知りたいですか？ 知りたければ私をここで倒してみなさい！」
そう言つた彼女の顔は相変わらずの笑みを浮かべていた。

ムスタディオたち、僕の仲間が周囲の敵を遊撃し始めた。

ここでは全ての人間が敵対する勢力だ。

乱戦になろうと連携を崩さない僕らの前に次々と倒れていく。

僕は中央を突破し、真つ先にクレスティアと剣を合わせた。

クレスティアは僕の剣を捌きつつ押しまくってくるが、そこは傭兵時代の賜物。

負けじと僕の剣が彼女の剣を迎撃する。

お互いに必殺の距離を計りながら打ち合う。

「やりますね……！ ラムザさん！」

しかし、彼女は戦闘の緊張に晒されながらも、どこか愉快そうにこぼれんばかりに笑んでいる。

何合と合わせただろう僕の剣の切っ先が、クレスティアとの必殺の距離を掴んだ。

もらった!!

「甘いッ!!」

気迫を込めた言葉と同時に、彼女のその体が急速に回転する。

甘いのはそちらだ。

僕は剣を大上段に構え、一拍置く。

そのフェイントに釣られて彼女の、僕の腕を狙った蹴撃しゅうげきが空を切った。

アグリアスさんにさえバケモノと称された彼女の外法の剣はしかし、僕には通じない。

彼女の対人戦闘に特化したその戦術は、傭兵時代でとっくに見飽きている。

今度こそ、体勢を崩した彼女の体に僕の剣が振り下ろされるのを幻視した。

しかし。

空を踊った蹴りと同時に彼女の体が大きくぶれる。

僕の剣もまた空を切り、お互いに接敵の距離が広がった。

コイツもまた修羅場をくぐってきているのを、僕は実感する。

距離が生まれたと同時に、さらに地下から声が響き渡るのが聞こえた。

「おおッ、これが聖石『ヴァルゴ』か！ 美しいッ!!」

若い男の声だ。

しくじった。クレスティアたちに時間を取られ過ぎた。

同時、クレスティアを除く他の神殿騎士は全滅していた。

よし、まだ間に合う！

クレスティアが告げる。

「ここまでしておきましょう、ラムザさん」

彼女は剣を片手に、鞘に納めることなくさらに地下への階段へと進んでいった。

「逃げるのか、クレスティア!!」

僕らは追いつて立てられるように彼女の後を追いつ、地下へと潜もぐつていった。

side：クレスティア・アルヴァン

私は修道院の地下3階に進むなり、本棚のアーチをくぐって身を隠しました。

せつかくのラムザ君とイズルード君の舌戦、生で見させてもらいましょうか。

「クレスティアを退けたか！……だが、ちょうどよかった。異端者ラムザよ、貴様の持っている聖石をこちらに渡してもらおうか！」

イズルード君の恫喝。

「残念だが、そうはいかない。そちらこそ聖石を置いていくんだ！」
しかしラムザ君もまた恫喝で返します。

「おとなしく従うならば、このままきみたちを見逃すでしょう！」

世が世ならどっちが悪役か分からないセリフですね。聖石をめぐって争い合ってる人たちは万事、こんな感じですよ。

「我々に勝てると思っているのか！ ならば、力づくで取り返すまで！！」

イズルード君の言葉に従い、彼の部下たちが戦闘態勢に入りました。

ラムザ君がイズルード君と剣を合わせます。

一合、二合と合わせるたびにラムザ君が不利に陥っています。イズルード君お得意の高精度戦闘です。

しかしそこはラムザ君。イズルード君の攻撃を徐々に捌き始め、快刀乱麻を断つがごとく追従し始めました。

空中戦を不利と悟ったか、イズルード君は地上——ラムザ君の土俵で戦闘を巻き戻します。

「異端者ラムザよ、何故、貴様は我々に逆らうのだ！」

おっと始まりましたよイズルード君の説得。

しかし、おかしいな。

「貴様はベオルブ家の人間でありながらダイスダグやザルバツグに従おうとしない……。それは何故だ!!」

「僕はベオルブの人間だ！ だからこそ兄さんたちには従えない！」
キラがどこにもいない。

ラムザ君とイズルード君の舌戦をよそに私の頭の中で彼女の憂い顔が浮かび上がります。

「ベオルブの名は私利私欲のために使うものではない！ 天が定める”正義”のために使うべき力！」

ラムザ君、正義感が父親譲りというのはガフガリオンさんの言った通りですね。

でもあの死の淵に立たされていたバルバネスさんの最期からはあんまりそんなイメージが湧かないんですが。

「五十年戦争のとき、父上は鷗国——オルダリーアの侵略から民を守るために戦い、そして死んでいった……。腐敗した王家の……。いや、貴族全体の利権を守るためだけにベオルブ家は戦ってはならないのだ！」

ラムザ君の主張に、イズルード君が応えます。

「ならば、我々と共に戦え！ 目指すものは我々と同じはず！ 異端者ラムザよ、よく聞けッ!!」

イズルード君が恫喝から、ラムザ君への説得に移り変わります。

「我々グレバドス教会が理想とする世界は、身分の差など気にせず、皆が平等に暮らせる世界だ！ それは聖アジヨラが唱えた理想郷にほかならない！ それはすなわち”神の国”！」

残念ですがイズルード君、理想郷やら”神の国”とやらはおとぎ話にしか存在しない、絵空事なんです。

少しでもデイリータ君の暗躍を見ていれば、それを築くためにどれだけの流血が必要か、もしくは人間全体の血を捧げなければいけないか分かるでしょう。

「民の心はすでに王家や貴族から離れている！ それは貴様も十分承知のはず！ 今、我々が正しい道を示さなければイヴァリースは滅んでしまう!!」

「この戦乱を起こさせたのはおまえたちではないかッ！ それが神の意志だともいうのかッ！」

戦争を巻き起こしたのは神の意志。

かつてアルガス君も言っていましたね、平民は貴族に家畜として従わなければならない、それが天の意志だって。

「大きな変革のためにはある程度の犠牲も必要なのだ！ 腐りきった王家や貴族の豚どもはその罪を贖わねばならない!! それが民のためなのだッ！」

イズルード君、渾身の一言でラムザ君に告げます。

「さあ、我々に協力しろ！ かつて、おまえの友であったデイリータがそうしたようにな！」

しかし聖石、及び”ゾディアックブレイブ”に懐疑的なラムザ君にはその説得は全くの無意味です。

「民のためといえば聞こえはいいが、結局、おまえたちが欲しているのは騎士団を超えた強大な軍事力ではないか！」

さすが、騎士団を超えた強大なバケモノを目にしたラムザ君、眼の色が変わりました。

「聖石に秘められた恐るべき力で民を支配しようというのだろうか！ あの忌まわしき”悪魔の力”でッ！」

それに対してイズルード君が反発します。

”悪魔の力”だと？ ばかな、聖石は”神器”だぞ！」

まあ見た目だけはね。

「我々は神の奇跡によって民を導こうというのだ！ けっして”悪魔の力”ではない！」

その聖石がどんな奇跡を起こすのかよく分かってないイズルード君は、ラムザ君との舌戦が平行線になりました。

ラムザ君が問い返します。

「枢機卿がルカヴィになったことを知らないわけではないだろうか？ あれを”悪魔の力”と言わずしてなんというッ!？」

イズルード君は頭に「？」を浮かべながらラムザ君に詰め寄ります。「なんのことだか、さっぱりわからんな！ 聖石を奪うために貴様が枢機卿を殺害したのではないのか!？」

もはや舌戦にもなっていないません。

ここまで来ると清々しいほどに単なる言い合いです。
「もつとも、枢機卿は我々に内緒で聖石を集めようとしていたからな、死んで当然だったよ！」

戦闘は大詰めに入り、立っていたのはラムザ君でした。

まあイズルード君も健闘した方ですね。

「くそッ!! 奴の強さを認めろというのかッ!!」

地上戦でラムザ君に敵うはずがないでしょう。イズルード君は瀕死に陥る前に、剣と膝を床に突き、息を荒げます。

「……………ここで死ぬわけにいかない。聖石を持ち帰らねば……………! 異端者ラムザよ、おぼえておけ！」

もうここまで来るとイズルード君、ただのザコ悪党ですね。

「次に会ったときに貴様の最期だッ!!」

そんな悪党セリフを右から左へと流しつつ、私は密かに上階へと戻っていきます。

なんで来ないの? キラ。

『ファイナルファンタジータクティクス』でも貴重な舌戦シーンだっというのに、わざわざ欠席するなんて。

となると、彼女には他に役目があった、ということかな。

とりあえず上に戻りましょう。そろそろウィーグラフさんたちも来る頃でしょうし。

私はイズルード君にもラムザ君にも見つからないように、こっそりと、しかし誰よりも先んじて撤退しました。

side:ミルウーダ・フォルズ

私は本棚がアーチ状に広がる地下書庫で、散々に敵を屠っていく。しかし、何かがおかしい。

足りない。

ただ一人、上階からこの地下に撤退したクレステイアの姿が影も形も見えない。

ラムザと神殿騎士が剣を結び合って、今にも決着しそうなその時、私は見た。

誰よりも先に、速やかに上階へと戻っていくクレステイアの姿を。

奴はこの戦いを見に来ていたのか？

だとすると……もしかして、彼女の目的がこの戦いが本命ではなかったとしたら。

嫌な予感がする。

クレステイアの変則的なあの挙動に。

まさか……、キラたちが危ない！

強襲

side:キラ・シルベント

私たちは書庫の一角に身を潜ませ、シモン先生の負った傷を治療していた。

本来ならば、ラムザに『あるモノ』を託して息絶えた彼だったが、この調子ならその心配はなさそうだ。

「すみませぬ……、騎士殿。私のために貴重な戦力を割いてくださつて……」

私はシモン先生の礼に対して、あえて首を横に振った。

「気にする必要はありません。貴方はここで死んではいけない人間なんですから」

「それは……、どういう……?」

書庫の角から外はクラウドが見張っている。

アルマは落ち着かない様子で俯いたり、頭を上げたりしていた。

「落ち着くんだ、アルマ」

落ち着きなくクラウドの見張る角を眺めている彼女を、私はなだめた。

「でも……、キラさん」

「大丈夫。ラムザたちはあの強大なルカヴィさえ倒したんだ。こんな所で木っ端の騎士団相手に負けるようなやつじゃないよ」

「だから信じて待つんだ」と私が結ぶと、彼女はコクリと頷いた。

「シツ、静かに」

クラウドが口元に人差し指を立てて、私たちに向けて警戒を促す。

「神殿騎士団の後詰だ。先頭に立っているのはウィーグラフだな。どうする?」

私は悩んだ。ラムザの手前、後詰の襲来に備えると言ったが、実際、私とクラウドだけでは手に余る。それに。

私は即座に決断した。

「ここにはアルマもシモン先生もいる。彼らを放つて私たちが戦線に立つのはまずい」

彼らを守る方が先決だ。私たちはそのために残ったのだ。

シモン先生の命を救うことは勿論、アルマがさらわれるのを防ぐためでもある。

「ラムザたちには悪いが、彼らもちようどイズルードたちを下しているところだろう。一旦、ウィーグラフは彼らに任せて、タイミングを見て私たちが加勢する。このプランで行こう」

「オーケー、引き続き監視に入るぜ」

どこかかと、乱暴な足音が引き続き聞こえてきた。どうやら本格的に後詰が書庫を荒らしに来たらしい。

連中の狙いは聖石だろうが、ウィーグラフのそれはラムザやミルウーダもその範疇だろう。

それを考えると、この一角まで敵が押し寄せてくる場合がある。その備えも必要だ。

本当に申し訳ないが、ウィーグラフに関してはラムザたち頼みだ。できればここは見つけてほしくない。

アルマたちがいるのだ。無駄な戦闘は避けるに越したことはない。と。

「なッ！ てめえッ!!」

クラウスが急に大声で叫んだ。

即座に鞘ごと剣を横に構え、闖入者の斬撃を受け止める。

露わになったクラウスの腹目掛けて闖入者の蹴りが入るのが見えた。

クラウスが私たちの居る書庫の一角に転がり込んでくる。

「はーい、キラ♪」

クラウスを蹴り飛ばした闖入者は。

「クレスティア!!」

私は思わず立ち上がった。アルマたちを庇うように前に出る。

「イズルード君の所にいないと思ったら、こんな所で足手まといのお守り？ せっかくラムザ君とイズルード君の舌戦イベントがあったのに、見ないなんて勿体ない」

「黙れ！ 今日こそここできみを下してやる！ きみが犯してきた過

ちの数々、ここで私が清算する!!」

私の恫喝に、クレスティアは両手を軽く広げて、やれやれと首を横に振った。

「残念だけどそれは無理だね。ブレイブストーリーの後押しは私がする。つまり、ブレイブストーリーは私の味方。ここでアルマさんがさらわれるのは物語上の必然なんだよ」

「だーかーらー」にいつと彼女は笑みを浮かべた。どことなく邪悪な気配を帯びた笑みを。

「どれだけ頑張っても、キラは私には勝てない」
「吠えたな!」

私は剣を抜き放つ。クレスティアも呼応するように剣を構えた。

「やる気だね、キラ。本当にここで私たち、決着するかもね」

「そうだと、きみの敗北という形でね」

私のセリフに、クレスティアはプツと嘔き出した。

「ククツ、アハハハッ! 面白い冗談を言うね、キラ!」

その言葉を皮切りに、クレスティアが私へと突進してくる。

先々の戦いで分かった。クレスティアの強さは、異様な臂力と半端のない速さだ。その動きは獣を思わせる。

だったら、それをいなす方法もある。

弾丸のような速度で突っ込んできたクレスティアのふりかぶる剣を、軽く横に躲す。闘牛の要領と同じだ。

即座に反転したクレスティアの剣が私を貫こうとギユンと向きを変え。その一撃を剣で弾き、彼女の剣の根元を打ち上げた。

ギイン!

クレスティアの剣が吹っ飛ぶ。

無手になったクレスティアを押し倒し、剣を彼女の喉元に突き付けた。

獲った!

そのままクレスティアに向けて剣を突き刺そうとして。

今、自分が何をしようとしているか、分からなくなった。

動きを止めた私の、ハッキリと見せた隙を逃さず、クレステイアの足が私の胸を蹴り飛ばす。

私は無様に転がり、私の剣をクレステイアが奪い取る。

攻防が反転した私の右肩目掛けて、彼女は躊躇なく突き刺した。

「ぐうッ！ うああッ!!」

「キラッ!!」

私の呻き声を聞いて、クラウドが叫んだ。

クレステイアが哄笑する。

「アハハハハッ!! なーにキラ？ せっかく私を殺るチャンスだったのに、どうして躊躇ったの？」

嘲るクレステイアの笑い声を聞きながら、私は一瞬前の自分に疑念あざけを持った。

私はあそこで、躊躇なくクレステイアを殺すべきだったのか？

それが私が決めた、彼女の罪業の清算だったとでもいうのか？

違うだろう、キラ・シルベント！

「クレステイア！ このヤロウ!!」

クラウドがクレステイア目掛けて突進する。裂帛の気合いを込めて、剣を振りかぶって。

ヒュガッ！

彼の腕目掛けて放ったクレステイアの回し蹴りをもろに受けて、剣がヒュンヒュンと書庫の隅に弾き飛ばされる。

無手になったクラウドに躊躇せず、剣を振りかぶるクレステイア。

ザンッ！

「ぐおッ!!」

右肩から胸板までを深く斬り裂かれ、クラウドはその場にくずおれる。

クレステイアは再度、哄笑し、高らかに自分の勝利を宣言した。

「アハハハハッ！ やっぱりだ、やっぱりブレイブストーリーは私の味方！ 私は無敵なんだ！ 物語をちよつと後押しするだけで、私に力をくれるんだ!!」

「言つて、私の剣を放り投げ、自分の剣を拾って鞘に納めた。アルマに向けて満面の笑みを浮かべて視線を送る。アルマは彼女の狂気に当てられて「ひっ」と怯えた子犬のように縮み込む。

そんな彼女に向かってクレステイアは近寄り、ぐいっと腕を捻り上げて無理矢理立ち上がらせた。

「それじゃ、アルマさんはいただいてくね。あ、そのおじいさんは興味無いから好きにしていよいよ」

アルマを拉致して、悠々とクレステイアは書庫から離れていく。

私たちの元から去ろうとして。

「じゃあね、キラ。クラウスさんも。バイビー♪」

「ま、待て……！ クレステイア!!」

私の必死の叫び声を背中に受けながら、クレステイアは書庫の一角から姿を消した。

side：ミルウーダ・フォルズ

地下書庫から撤退した神殿騎士を追い、私たちは地下1階の書庫へと戻った。

人の気配がする。

キラが懸念していた通り、後詰の部隊が私たちを挟撃してきたか。だが、その先頭に立つ神殿騎士を見て、私は自分の眼を疑った。

「兄さん!？」

骸旅団壊滅から一年と少し、まさか生きているとは思わなかった。

「おまえはウィーグラフ!! 生きていたのか!!」

ラムザもまた、兄さんの姿を見て驚いていた。

「久しぶりだな、ラムザ、ミルウーダ。また会えて嬉しいぞ!!」

神殿騎士におもねった兄さんを見て、ラムザが恫喝する。

「……理想の実現に燃えていた戦士が教会の犬に成り下がったか!」

その言葉に対し、兄さんが反論する。

「実現することの難しさを知らぬおまえたちに何がわかる？ 理想がどんなにすばらしいものでも実現されなければそれはただの夢にすぎない！」

兄さんが階段の段差を飛び降り、私たちの前で臨戦態勢に入った。「では、どうやったら実現できる？ この世の中、力がなければ何もできない！」

猪を思わせるような速度と突破力とで、あっという間に兄さんはラムザに剣を突き込んでくる。

ラムザはかろうじて、盾を構えてその軌道を逸らした。

兄さんは続ける。

「私はそれを悟った!! 力を持たぬ者は何をやっても夢を実現化することはできません！」

繰り出される兄さんの連撃に、ラムザは防戦一方。

その中でただ兄さんが持論を展開していく。

「おまえたちには私が教会の犬に見えよう！ なんとでも言え!! 私はいっつこうに構わん！ どんなに蔑まれようとも最後に笑うのは私だ!! 必ずおまえたちを屈服させてやる！」

「兄さん！」

私が言い放つと、兄さんはラムザの腹を蹴り飛ばして、私の方へと向いた。

ラムザとの接戦に距離が開く。

私はその隙に吸い込まれるように、兄さんと剣を交えた。

兄さんの殺意は本物だ。

必殺の距離。一步踏み間違えればこちらの首が飛びかねない。

「ミルウーダ、おまえまでもがラムザとまだ共にいるとはな。正直、どこかで野垂れ死んでいたかと思っていたぞ！」

「ふざけないで！ 助けられた私の命、そうたやすく捨てるつもりはない!!」

「ふざけるな、だど？ 私こそおまえがどれだけふざけていたと思っているのか分かるか！ 骸騎士団の信念を捨て、己の保身を図ったお

まえをどれだけ憎く思っていたかと!!」

ギン!

私と兄さんの剣が交錯し、互いに一步退く。

兄さんが再度、剣を構え、私に肉薄してくる。

私はそれを正眼に構えた剣で迎撃する。

「今さら貴方の抗弁を聞くつもりはないわ。どれだけ生き汚かろうと、私はラムザたちを信じて戦う!」

「愚かな妹め! ラムザもおまえも、ここで私が引導を渡してやる!!」

私と剣を交える中、ラムザが静かに兄さんに語りかける。

「……ウィーグラフ、あなたは悲しい人だ」

悲しい人と言われ、兄さんの剣が不意に鈍った。

「たとえ、夢敗れても、人々はあなたのことを忘れなかつたはずだ!」

骸騎士団の夢。

それは兄さんの理想そのもの。

貴方がそれを言い飾るのはお門違いかもしれない。

「あなたの思想や行動は人々の価値観に影響を与え、それは我々貴族の古い慣習にも一石を投じた! あなたは、あなたの考えで行動するところに意義があつたのだ!」

しかし骸騎士団はただの野盗の群れとして、貴族の騎士団に全て肅清された。

貴族はまた平民を統制し、そうして始まつたのがこの戦争。

「あなたの仲間だつた人はたとえその選択しかなかつたとしてもあなたの行動を残念に思うだろう」

違う。

貴方にとつては兄さんの選択が正しくなくとも、意義があつたと思えていくでしょう。けれど。

「夢や理想は、誰かの手を借りて実現しても価値が半減してしまう!」

そうじゃないのか、ウィーグラフ!」

「此度の兄さんの選択は”正しい”」。

価値が半減しようと、夢や理想を叶えるならまずはそれを実現する

力が必要だ。

私たちにはそれがなかった。だから、負けたのだ。

ラムザ。貴方が言う理想は、貴方だけが実現してしまえる理想の押し付けに過ぎない。

「ならば、おまえは違うとでも言うのか？ おまえは独りで生きていくとでも？」

そう、ラムザは独りじゃない。

だからこそ彼の理想や正義は実現できた。実現してしまえた。

「持たざる者」の気持ちなどおまえにわかろうはずもない！」

私にはそんな兄さんの言葉が負け犬の泣き言に聞こえてしまった。

私は、変わった。変わることが出来た。

だけど兄さんは変わらない。これだけの時を経ても、己が理想を実現するのだと、過去の理想に縋って教会の犬に墮してしまった。

「たとえ理屈でわかっていたとしてもおまえにはその実感がない！それがおまえの限界だ！」

私もラムザといて分かった。”持たざる者”は何も出来ない。実感がなくてもあつても、無慈悲にただすり潰されていくのみ。

「現実”はもつと厳しいものなのだ！ おまえが考えている以上にな！」

その”現実”を実現してしまえるラムザは、今の兄さんにはまぶしすぎた。

「おまえに責められる覚えはない！ おまえたちに責められる理由など何もないのだッ!!」

瞬間、兄さんと剣戟を交わしていた彼の剣から力が萎えた。

今――！

私は兄さんの剣を絡め取り、打ち上げた。兄さんの剣が弾き飛ばされ遠くの床面に転がり落ちる。

必殺の距離へと詰める。

相手が武器を手放した好機！

ザンツ！

私は兄さんの体を深く斬り裂いた。

「くう……！」

兄さんの体がある場にくずおれた。致命傷だ。

皮肉なものだ。兄さんの重ねてきた業を断ったのが、実の妹である私の手によつてだなんて。

「……だが、私は……負けぬ……！」

瀕死の兄さんがじりじりと後退し始める。止めを刺す必要もない。これ以上、彼はもう逃げる体力も無いだろうから。

「私は……『アリエス』を……持つゾディアックブレイブの……一員……！ 負ける……わけには……いか……ぬ……！」

そこへ。

「ウイーグラフ様！」

書庫の一角から声が響いた。少女の声だ。

現れたな……クレスティア！

「アルマ!!」

ラムザが叫ぶ。

クレスティアがアルマの体を担いで姿を現した。気絶させられているのか、アルマからの返事はない。

「ウイーグラフ様、お逃げを!! ここは私が保たせます!!」

「すまぬ……」

言つて、兄さんはよろよろと修道院の出口へと向かっていく。

「待てッ! ウイーグラフ!!」

「待つのは貴方ですよラムザさん。ちよつとでも動けばこのアルマさん、どうなるかお判りでしょうね?」

クレスティアのそれを聞き、ラムザはその場で動きを止めた。

「くそッ! 卑怯だぞ、クレスティア!!」

「なんとでも仰おっしゃいなさいな。とにかく、私たちが逃げる間、そこから動かないことですね」

言いながら、兄さんに肩を貸しつつ撤退していくクレスティア。

後詰の部隊が兄さんを守るように密集し、彼らと共に修道院の出口へと消えていく。

「兄さん!!」

私の声は、もはや彼には届くことなく修道院は私たちを残して無人となった。

アルマがさらわれた。あのクレスティアに。

後詰の部隊を止めきれなかったとなれば、キラたちは一体どうなったの？

そう私が思っていた矢先、キラがクラウドを担いで書庫の一角から姿を現した。

「キラッ!!」

私はすぐさま彼女の傍に近寄る。二人とも重傷だ。特にクラウドが負った傷はせめて応急処置を施さないと、手が付けられなくなる。

「すまない……、ラムザ、ミルウーダ……。任せろと……言っておいて……このザマだ……」

「キラ！ それ以上しゃべらないで、今はここで大人しくしていなさい！」

「クラウドを……助けてやってくれ……。この場で今一番ひどい傷を負ったのは彼だ……」

そう言つて、キラは体を横たえた。

「キラ!? キラーツ!!」

私の絶叫をよそにラムザが口走る。

「ミルウーダ！ それにアリシアさんもラヴィアンさんも、彼らの手当てをしてやってくれ!!」

「貴方はどうするの、ラムザ!？」

私はラムザに問うた。

「決まっている！ ウィーグラフを……アルマを追う!!」

そう言つて、ラムザは修道院の出口へと駆けていった。

悔しいが、今は二人の治療が最優先だ。

こんな場面で彼女たちを失いたくない。

キラを下したのは、きつとクレスティアだ。アルマを伴ともなつてそこ

から現れた。

彼女は、負けたのだ。

キラとクラウスを同時に相手取ってほぼ無傷でアルマの身柄を抑えるなんて、あの子は一体どれほどの力を持っているというの？

キラの身を案じつつも、クレスティアの底知れない強さに私は身震いした。

魔人ベリアス

side：ラムザ・ベオルブ

修道院を出たすぐ先に見えたのは、アルマをチョコボに乗せた神殿騎士——イズルードの姿だった。

「アルマ!!」

僕の叫びに反応しない。気を失っているのか。

クレスティアの肩を借りて何とか歩いているウイーグラフが、イズルードに一言だけ告げる。

「行け……イズルード……」

「すまないッ、ウイーグラフ!!」

それだけ残して、イズルードはチョコボを駆けさせた。

「待てッ！ イズルード!!」

神殿騎士団を撃退したのも束の間、アルマが連れ去られてしまった。

なんてことだ……!

「グホッ！」

瀕死の重傷を負ったウイーグラフが激しく吐血する。

完全に力を失った彼は、クレスティアの肩からずり落ち、その場に倒れ伏した。

「くそ……こんな……ところで……死ぬのか……」

力尽きたウイーグラフが最期とばかりに呪詛を吐き出す。

「仲間の……仇も……討たずに……。このまま……死んでは……死んでいった仲間たちに……申し訳が立たん……」

ぽつりぽつりと、死に近付くたび、この世への未練を口にする。

「いやだ……死にたくない……。このままでは……あまりに……」

その姿は理想を追う革命家でも、教会の権力に墮したものでもなく、ただ一人、死にゆく者の姿だった。

死んでしまえば、もはやこれまで、ということか。

その時。

ウイーグラフの懐から聖石が転がり落ちる。

それが、中空に浮かび上がる。

そしてその聖石は、何の光源も無いのにひとりでに光を輝かせた。

《聖石を持つ者よ……》

その聖石から、人間が腹から声をひり出すような低い声で響き渡る。

《我と契約を結べ……》

契約……？ 契約と言ったのか……？ 今……？

「なんだ……？ 聖石が……喋ったのか……？」

《聖石を持つ者よ……我と契約を結べ……》

聖石がひとり勝手に続ける。契約を結べ、と。

《さすれば汝の魂は我が肉体と融合し……永遠の生を得ることができよう……》

それは……聖石が持つ悪魔の囁きだった。

「これが……聖石の秘密……？」

ウィーグラフがぼつりと呟いた。

《汝の絶望と悲憤が我を喚びだした……さあ、我と契約を結べ……》

咄嗟に僕はウィーグラフに向けて叫ぶ。

「ダメだッ！ ウィーグラフ!! 聞いちゃいけないッ!!」

「助けて……くれ……」

しかし間に合わず、ウィーグラフは聖石に助けを乞うた。

聖石が輝きを放ち、呪われた魂のような気配が辺りからウィーグラフへとまとわりつく。

轟音と閃光。

聖石が最後に呪われた声を発した。

《我が名は魔人ベリアス……汝の願いを聞き届けよう……》

光が消え去り、ウィーグラフのいた後には。

羊のような角。

悪魔のような顔立ち。

そして四本の怪腕を持つ。

巨躯の怪物の姿だった。

『これが聖石の力か……！』

「ウィーグラフ……！」

怪物——魔人ベリアスが僕の方へと向き、声高に鈍い声を放つ。

『ラムザ、素晴らしいぞ、この力は……！』

酔いしれた心地で、ウィーグラフだった怪物が歓喜に満ちた声を上げる。

『いや、力だけではない。時空を超えて幾百年分の知識が頭に刻み込まれていく……』

僕は剣を抜き放ち、ベリアスの出方を窺う。
しかし。

『クククク……、あわてるな……楽しみは後にとっておけ……!』

異形の佇まいで歓喜の声を震わせるベリアス。

どうやらいまだ酔いさまらず、戦意は感じられない。

『クククク……、素晴らしい……素晴らしい力だ……!』

そう言つて、ベリアスはその場からどこへともなく消え去つた。

僕は眉間にしわを寄せて。

「……クレスティア、おまえは聖石が悪魔の石だと知っていたのか?」

クレスティアは満面の笑みを浮かべて、歓喜に打ち震えるようにはしやぐ声で応える。

「勿論ですとも。私がここに来たのは、これが見たかつたからにほかありませんから!」

「貴様……!」

僕は剣を構えたまま、彼女ににじり寄る。

だが。

「そう怖い顔しないでください。そんな眉間にしわを寄せた表情、ラムザさんらしくないですよ。それに妹さんも探さなくちゃいけないですもんね」

「アルマはどこだ! どこへ行つた!!」

「直に分かりますよ。直にね。それじゃキラたちによろしくお願いします。アデュー」

言つて、修道院から駆けて逃げ去つていく。

「待て! クレスティア!!」

僕の伸ばした手は空を切るのみで、彼女は姿を消した。

不意に、背後から扉が開く音が聞こえた。

修道院からシモン先生が姿を現す。

続けて、ミルウーダがキラを、アグリアスさんがクラウドさんを支えて出てきた。

皆、応急処置をされていたが、深手を負っている。

僕はシモン先生の元に駆け寄った。

「シモン先生ッ!! しっかり……、しっかりしてください!」

深い傷を負ったシモン先生がゆっくりと懐に手を入れる。

「……これを……」

それは一冊の書物だった。

「この本は?」

「これは……聖アジヨラの弟子……ゲルモニークが記した本です……」

そう言つて、シモン先生が僕に手渡した。

「長い間、行方不明……でしたが……私がここの地下書庫で……発見しました……」

この修道院で?

一体どれ程の書物が所蔵されているか僕には分からなかったが、地下書庫に眠っていたということはそれだけ重大な意味を持つ書物に違いない。

「ここにはゾディアックブレイブ伝説の真相が……詳細に……記されています……」

言つて、ゴホゴホと咳をする。その咳には小さく血が混じっていた。

「先生、もうしゃべらないで!」

「大丈夫です……私は罪深い男です……。教会の不正を知りながら……ただ黙って傍観していました……」

教会を弾劾できるほどの真実が記された書物を隠ぺいしていたということだろうか。

だけどシモン先生にそんな義務はない。責任を感じる必要はない。「この本さえあれば……教会の不正を……暴く……ことができる!」

この本を利用して……アルマ様を……取り戻すのです……」

「先生ッ!!」

僕はシモン先生の手を握った。

「大丈夫です……こちらの騎士殿たちが、私を助けてくれた……」

言つて、キラとクラウドさんの方へと視線をやる。僕も併せて彼女らに視線を流した。

二人とも、ひどい傷だ。

「あとは……頼みましたよ……、ラムザ様……」

ふう、と一つ息をつき、シモン先生は一つの労働を終えたように、僕へと口を結んだ。

「あなたは……若い頃の……バルバネス様に……本当に……そつくりだ……」

「シモン先生ッ！」

それきり、先生はぐったりと体を横たえた。

大丈夫だ。傷は深いが致命傷ではない。応急処置も効いている。

教会、神殿騎士団、聖石、悪魔の力。

各個に分かたれた事象が一つになって繋がろうとしている。

シモン先生から授けられた『ゲルモニーク聖典』によって。

僕はイヴァリースに秘匿された真実に、今まさに手を触れようとしていた。

ゲルモニーク聖典

side：ラムザ・ベオルブ

……僕はシモン先生から委ねられた『ゲルモニーク聖典』を手にとりページをめくった……

文章は古代神聖語で書かれている。

ところどころに挿し絵があるが、中身の破損が激しく文字の判別も難しい。

いったいこの本には何が書かれているのだろうか？

そのとき、慣れ親しんだ畏国語の文字が僕の目に飛び込んできた。

ところどころに、畏国語による注釈が書き加えられていたのだ。

いったい誰が？

注釈に使われたインクからすると、古いものは十数年前、新しいものは数日前に書かれたようだ。

指で触ってみると、少しにじむ。やはり、インクが完全に乾いていない。

文字の筆跡は同一人物。つまり、シモン先生が十数年の歳月をかけて少しずつ、少しずつ解読していたのだ。

……断片的な注釈を頼りに読み進めてみた。

……どうやらこの本は聖アジヨラの弟子、ゲルモニークが書き記したもののらしい……

ゲルモニーク……？

どこかで聞いたことがある……

歴史の授業で習ったはずだ……

そうだ、思い出した。

ゲルモニークといえば、師である聖アジヨラを裏切り、神聖ユードラ帝国に聖アジヨラを売り渡した裏切りの使徒……

そのゲルモニークの書き記した書物がこの世に残っていたなんて、これはすごい！

……興奮する自分を抑えながらページをめくる。

しかし、歴史的遺産を手にした興奮をはるかに上回るような衝撃が

僕を襲った。

この本は、聖アジヨラの語った言葉をゲルモニークがまとめたものと僕は考えていた。

しかし、その考えは甘かった。

これは聖アジヨラの活動の記録……

しかも、僕らが知っている聖アジヨラとは違う一人の人間としてのアジヨラの行動が記されていたのだ……

そもそも聖アジヨラは人間ではない。

僕は兄・ザルバツグほど敬虔けいけんなグレバドス教信者ではないが、聖アジヨラは、混乱した人間界を救おうと神の国より遣わされた”神の御子”であると信じている。

いや、信じていた……

そう……、この本を読むまでは……

……かつて、何艘もの飛空艇が大空を飛び、天を埋め尽くしていた黄金の時代……

ルザリアのベルベニアに生まれた聖アジヨラは生まれるとすぐに立ち上がり、井戸まで歩くと、「この井戸はもうすぐ災いがふりかかる。今のうちに封印し、人が飲まぬようにしなければならぬ。」と予言したという……

数日後、ベルベニアを黒死病が襲い、汚染された井戸水を飲んだ人々は次々に病に倒れて死んだ……

しかし、聖アジヨラの言葉を信じた家族だけは病にかからずに生き延びることができた。

以後、聖アジヨラは”奇跡の子””神の御子”と崇められることになった。

そんな聖アジヨラが”救世主”となり、”神の一員”として天に召されることになったのは、二十歳のときだ……

イヴァリースが現在ののように統一される遙か昔、この地はゼルテニア、フォボハム、ライオネル、ランベリー、ルザリア、ガリオヌヌ、ミユロンドの7つの小国に分かれており、それぞれ自国の版図を広げようといつ終わるともしれない争いを続けていた……

数百年続いた争いの中、ミュロンドに一人の野心溢れる若き王が誕生した。

若き王はイヴァリース全土を手中に収めるべく大軍を率いて戦ったが、勝利への道は険しく厳しかった。

そこで、王は古文書より解読した秘法を用いて魔界より魔神を召喚し、その力を利用しようとした。

しかし、地上に降臨した魔神は王を殺すと、世界を滅ぼそうとした……

勇者は魔神に対抗すべく、十二人の使徒とともに世界に散らばった“ゾディアックスストーン”を集め、ゾディアックブレイブを復活させた。

彼らはまたたくまに悪魔たちを倒すとともに魔神を魔界へ戻すことに成功した。

こうして彼らは“世界の救世主”となった。

ここまでは有名なゾディアックブレイブの伝説だ。

ゾディアックブレイブたちはその後も世界に危機が訪れるとそれに対抗すべく忽然と姿を現し、忽然と消えていった。

聖アジヨラの生きていた時代にも似たような危機が訪れた。

イヴァリースの覇権を狙うランベリーの王が魔神を召喚し世界に混乱を招いた。

聖アジヨラは伝説と同様に十二個の聖石を集めるとゾディアックブレイブを結成し、魔神を倒したのである。

しかし、いつの世にも執政者にとって“英雄”ほど邪魔な存在はいない……

神の国の到来を説く聖アジヨラの台頭を恐れた神聖ユードラ帝国はその一派を捕らえるために挙兵した。

当時、もつとも大きな宗教であったファラ教の司祭たちは聖アジヨラの力を恐れたのだ。

結局、金に目のくらんだ十三番目の使徒・ゲルモニークの密告によって聖アジヨラは捕らえられ、ゴルゴラルダ処刑場で処刑された。

しかし、聖アジヨラは“神の御子”……

神の怒りがファラ教の司祭たちを襲った。

処刑の直後、ファラ教の本拠地ミュロンドは天変地異により海中に没したのである。

……こうして、聖アジヨラは“神の御子”として天界に迎えられ、“神の一員”になったのである……

ここまですべてが僕の知っている……いや、畏国に住む者ならば誰もが知っている聖アジヨラの“神話”だ。

だが、この『ゲルモニーク聖典』に書かれている聖アジヨラはまったくの別人であった……

アジヨラは“神の御子”などではない。

僕たちと同じただの人間だ。

野望を抱き、おのが夢の実現のために戦った革命家なのである。

しかも、彼は平和を愛し、他人のために命を賭して戦うような勇者ではなかった。

……ゲルモニークの記したところによるとこうである。

新興宗教の教祖として信者を増やしていたアジヨラは、当然のように、帝国にとってはただの厄介者でしかなかった。

しかし、アジヨラはそうした宗教家としての“顔”だけではなかったようだ。

敵国に侵入し情報収集と攪乱を行う工作員。

帝国と敵対する国家の間者スパイだったのだ。

とにかく、帝国はアジヨラを恐れた。

帝国はアジヨラが間者である証拠を掴むためにゲルモニークを送り込んだ。

そう……、ゲルモニークもまた、アジヨラの動向を探るために帝国から送りこまれた工作員だったのだ。

……アジヨラがゾディアックブレイブを再結成しようとしていたのは事実らしい。

実際に聖石を数個、発見したことをゲルモニークは確認している。

だが、再結成に何の意味があるのか？

若きランベリー王が本当に魔神を召喚したのかどうか、僕にはわか

らない……

少なくともこの本にはそうした記録が1行たりとも記録されていないらしい。

ただし、アジヨラの死とほぼ同時期にミュロンドを天変地異が襲い、ミュロンドの大半が海中に没したのは事実であった……

ここで、僕は注釈とは別の、おそらくシモン先生の個人的な考えであらう記述に興味を引かれた……

これまで、その存在が語られていたにも拘わらず、誰の目にも触れることのなかった幻の書『ゲルモニーク聖典』……

この本が真実を語っているのか、それとも聖アジヨラの偉業を貶めるために捏造されたのか、その真偽を私は知っている……

私がかつて異端審問官として教会の仕事に従事していた際、多くの異端審問官たちはこの本が世に出ることを恐れていた。

それは教皇も同じ思いであっただろう。

なぜならば、この本が語っていることはすべて『真実』だからである……

逆にいえば、聖アジヨラの死後、彼の偉業を利用し権力を手にしてきた教会がなさねばならぬことはただ一つ、聖アジヨラを神格化し、神と一体化させることであつた。

それには都合の悪い点を歴史に残してはならない。

聖アジヨラは『神の御子』でなければならぬのだ……

そのために、畏国で幅広く信仰されているゾディアックブレイブの伝説を利用したのは賢い手段であつた。

ありもしない魔神を倒したのは聖アジヨラ率いるゾディアックブレイブだと民衆に信じ込ませることは簡単だ……

私がこの本を手にしたとき、私は信仰を失ったことに気付いた。

だが、悲しくはない……

何故なら、真実を追求しようとする好奇心がすでに私の心を支配していたからだ……

だが、同時に私は罪も犯した。

教会が民衆に対して嘘を吐いているにも拘わらず、それを糾弾する

気が起きないからだ。

それは何故か？

もし、私がこの本を世に出したら、私はこの書庫を取り上げられてしまっただろう……

私にとって、私の知識欲を満足させるこの書庫を取り上げられることほどの苦痛はない。

私は、私の好奇心に負けたのである……

シモン先生は”ありもしない魔神”と語った……

だが、聖石の邪悪な力を目の当たりにした僕は教皇の企みとは別の、邪悪な何者かの思惑を感じていた……

貿易都市ドーターの宿の外。

シモン先生の記した注釈を読んで、僕は一息ついた。

”ありもしない魔神”。

しかし聖石は”悪魔の石”。それはドラクロワ枢機卿やウィーグラーの例を見れば明らかだ。

聖アジヨラは革命家として、ゾディアックブレイブを再編させようとした。

そして、アジヨラは聖石をいくつか見つけたとゲルモニークは語る。

何のためにアジヨラは聖石を求めたのか。

そしてゲルモニークはそんなアジヨラをどのように解釈したのか。逆に考えてみよう。

聖石は”悪魔の石”だ。そして教会が再編しようとしているゾディアックブレイブはいくつか聖石を所持している。

ここまではアジヨラの行動と同じだ。

だが聖石が持つ強大な力を教会が求めているとしたら？

アジヨラが求めていたものもまた、聖石の”悪魔の力”だとしたら？

そこでシモン先生の”ありもしない魔神”という解釈は逆転する。

アジヨラが求めていたのは民衆の希望だけではなく、帝国をも打倒する強大な力だとすると考えれば、答えは変わってくる。

聖石によって人間を超越した怪物と化した者たち。

それがゾディアックブレイブを再編する真意だとしたら。

果たして、聖アジヨラは本当に”ただの”人間だったのか？

「よう、ラムザ」

唐突に、僕の背後から声がかげられた。

そちらへ向くと、クラウスさんが僕の顔を覗き込むようにして立っている。

「クラウスさん、もう怪我の方は大丈夫なんですか？」

「おう。薬ぶっかけて包帯巻いて、ひと眠りしたら歩けるようにはなったさ」

そう言って、チラリと僕が持つ『ゲルモニーク聖典』に眼を移す。

「『ゲルモニーク聖典』か……、使えるのかね、果たして？」

「これは教会を弾劾する強力な証拠になります。ただ……」

クラウスさんが僕の言葉に頷く。

「分かっている。ルカヴィを擁するグレバドス教会にそんなものが通用するかってことだろ」

「やはりクラウスさんも、そう思いますか？」

”異邦人”だからな。これ以上は何も言えないよ」

「クラウスさんなら分かるんじゃないですか？　これから起きる、悲劇や惨劇も」

僕の疑問に対し、クラウスさんは少し悩みつつ。

「……オレは卑怯者かもしれねえ。多分、クレステイアと同じようにな。この世界のこととはそこで生きる人に任せるよ。オレは端役だ」

「いえ、分かります。その気持ち」

「スマン、何の力にもなれなくて」

「いいえ。クラウスさんのそういう正直なところ、僕は嫌いじゃありませんから」

アグリアスさんならどうだろう。

彼がひた隠しにしようとしている”未来”を知りたがるだろうか。潔癖な彼女がそんなクラウスさんをどう扱うべきか、むしろ彼女の方が悩んでいるのかもしれない。

それに、クラウスさんも語ろうとしない。ともすれば、キラ以上にだからと言って、一から百まで全て話してしまうことは誠実だと言えるのだろうか。

その辺りはキラやクレスティアよりも信頼が置けるように見える。キラはキラで、僕らには内緒の”未来”を先読みし、僕らには見えない何かと戦おうとしている。

僕らはそれほど頼りないだろうか。

彼女に悪意が無いのは見ていてわかる。ミルウーダも彼女にだけは心を開いている。

しかし、クレスティアは――

「異端者ラムザだな？」

宿の外門から声がした。威嚇するような声、敵対の色が声だけで知れた。

そちらの方へと向き直る。

「……アルマはどこだ？」

その男は異国の風貌を持っていた。色黒で、顔つきもイヴァリースの人間よりわずかにほりが深い。

「妹を返して欲しければリオファネス城まで来い」

リオファネス城……イヴァリースの北にある巨城か。この男はそこからの刺客か、もしくは使い走りか。

「ただし、修道院で手に入れた『ゲルモニーク聖典』を持つてくることが条件だ」

情報が早い。いや、早すぎる。

神殿騎士団をも即座に取り込んだのか、もしくは既に手を回していたか。

「あんな古文書にどんな意味がある？」

『ゲルモニーク聖典』を読んでいないわけではないんだろ？」

ついさつき読んだばかりだ。

教会の弾劾に使えるのは間違いない。間違いないのだが。

「……教会の不正を暴かれたくなかったらアルマを返せッ！」

僕は敵対心を露わに、その魔道士に向かって息巻いた。

「おまえは条件を出せる立場にいない。選択する余地はないんだ」

そうだ、コイツは文字通り、ただの使い走りだ。この男相手に条件を突き付けても何の意味もない。

僕は無力感に俯いた。

「確かに伝えたぞ」

そう言つて、異国の魔道士は宿から去っていった。

アルマはリオファネス城にいる。それだけ分かっただけでも充分だ。

「クラウスさん、キラの怪我の具合はどうです？」

「オレよりも軽い程度だ。もう元気に歩き回っているよ」

僕は意を決して、クラウスさんに伝える。

「すみません。僕はアルマを取り戻しに行かなければなりません。キラとクラウスさんは養生して、後からゆっくりと追いかけてきてください」

「野暮なこと言うなよ」

クラウスさんは僕の言葉を否定した。

「オレもキラも、きみの仲間だ。きみが正しい道を選ぶ限り、オレたちはきみたちに付いていくよ」

「正しい道……ですか」

「オレはきみたちの中でも半端者さ。だけどキラは違う。彼女は彼女なりの信念をもって動いている。リオファネス城に向かうとあらば、たとえ火の中の水の中だろうが立ち向かっていくさ」

「クラウスさんは、それでいいんですか？」

思わず僕の言葉は彼を詰問するような口調になってしまった。慌てて言い直そうとしたが、先んじてクラウスさんが口を開く。

「さてね。オレもまだ、自分の気持ちに整理が付いていない。アグリ

アス様たちとどう接すれば分からないし、どんな風にオレの覚悟を伝えればいいのかも見当がつかない。要するに、どこまでもオレは中途半端なわけさ」

そう言う彼は、仲間と共にあつてもどこか寂しそうな、切なげな笑顔を浮かべていた。

アルマを取り戻す。

これが一番の僕の道しるべ。

それに付いてきてくれるなら、これほど心強いことはない。

クラウスさん、貴方だけが独りじゃないんです。

皆が皆、思い思いに僕の旅に付いてきてくれている。

貴方もその一人だ。

決して、独りじゃない。

だから。

いや、だからこそ。

貴方が本心から僕らを信用してくれるようになるまで頑張ります。

クラウスさんも僕らを頼ってください。

迷い、悩む。そんな彼の心情を慮おもんばかりながら、僕は彼の虚空を見つめ

る瞳から眼を逸らさずにはいられなかった。

オヴエリアとデイリータ

side：オヴエリア・アトカーシャ

ゼルテニア城の教会跡。私はここが好きだった。どことなく、修道院での暮らしを思い出させてくれる場所だったから。

草葉の地面に座って、私は空高くを見ていた。鳥が飛んでいる。チチチと自由な鳴き声を上げながら。

私はその姿にあこがれていた。

鳥になりたい。誰にも縛られず、どこにでも行ける翼が欲しかった。

背後から気配がする。隠すつもりもないようだった。

「……こんなところにいたのか、皆が捜していたぞ」

耳慣れた声。

デイリータのものだった。

「なんだ、元気がないな」

貴方たちと一緒にあって、元気でいたことなんてあったかしら。

「おっと、こんな口の利き方は失礼なのかな」

デイリータがおどけるような口調で再度、口を開く。

「女王陛下におわしましては御機嫌も麗しく存じ……」

「やめてッ!!」

私は思わず叫んでいた。

「……お願い、やめて」

偽り。

そんな女王の役目なんて、なんだかイヤだ。

「…悪かったよ。すまない」

デイリータは素直に謝ってくれた。

私は思いの丈を打ち震わせるように独り言ちる。

「……貴方たちは私をどうしようというの?」

自然、私は自分自身の身を嘆く。

「私はオヴエリアじゃないのよ。貴方たちにとって何の価値もないはず」

私には、自分の価値が分からない。

「そう……、私には生きる価値なんてない……」

言って、私は顔を伏せた。

心の中がぽっかりと空いた、虚ろのような体。

今の私がそんなだった。

「そうだな、たしかにおまえはオヴェリアじゃない」

デイリータが何の遠慮も無しにそんなことを言う。

「それどころか、本当の名前すらわからない。貴族なのか平民なのかも不明だ……」

私が虚ろの存在であることを肯定するような彼の言葉は、私に強く、悲しく響いた。

私はまた独り言ちる。

「……私の生きてきたこれまでの時間はいったい何だったの？ 王女の身代わりとして育てられ生きてきた……」

身代わり、それ以上に私は何者なのかも分からない。

「ふふふ……、おかしなものね」

苦笑する。

「王女なのに王都から離れた修道院で一生ひっそりと暮らさなければならぬなんて……」

私にはそんな義務だけが生き甲斐だった。悲しいほどに。

「どうして、私だけがそんな風に生きなければならぬんだろうって、ずっと考えていた……。でも、私一人が我慢することで畏国の平和が続くならそれでもいいって思ってたわ」

虚空に眼をやる。相変わらず鳥たちが小さな鳴き声を鳴らしながら飛んでいる。

「あの悲しみ、あの寂しさ……、いったい何だったの？」

やるせない感情だけが私を支配する。

私は後ろに目線を当てた。デイリータは、いつの間にか私に背を向けて立っていた。

「おまえはオレと同じだ……偽りの身分を与えられ生きてきた哀れな人間だ……」

デイリータの偽られた身分とは一体何なのだろう。されど、別にそれに興味はない。

ただ、私と同じ名もなき役割を演じさせられ、そして大事なものを失ったのだらうことは、彼の言葉の悲しみから知れた。

「いつも誰かに利用され続ける」

デイリータが続ける。

「努力すれば報われる？ そんなのウソだ。努力しなくても、それに近いヤツだけが報われるのが世の中の構造だ」

デイリータにとって、その努力を結実させたのは、かつて親友と称した少年のことだったのだろう。

「多くの人間は与えられた役割を演ずるしかない……。もっとも、大半の人間は演じていることすら気付いていないけどな」

私は演じ続けている。いや、演じ続けさせられている。

私は女王の座を手に入れた。

そして、今もなおその女王という名の役割を演じている。

「オレはそんなのまっぴらゴメンだ。オレは利用されない。利用する側にまわってやる！」

彼の言葉に激情が見え隠れする。

「オレを利用してきたヤツらにそれ相応の償いをさせてやる！」

デイリータが憎むのは、この世界全ての構造なのだろうか。彼の内面が知れたことは新鮮で、とても熱いものだった。

「貴方は何をしようというの？」

ふと、私はデイリータに尋ねた。それ相応の答えが返ってくると思っていなかったけど。

「決まっている。オレはオレの演じる役割から演じさせる高みへと昇ってやる」

「それが……貴方が持つ翼の意味？」

私の言葉には応えず、されど彼は私に言い放つ。

「オレに協力しろ、オヴェリア。おまえが協力するなら、オレがおまえを助けてやる」

「デイリータ……？」

「オレとおまえでこの世界を変えてやる。オレたちの世界が、人生が、光り輝くものになるよう導いてやろう！」

不意に、私の脳裏に”彼女”の言葉が反芻した。

——臆病者。

私は、自分の意志で何かを決めたわけじゃない。ただ流されるだけで、何もしなかった。

確かに私は憶病に過ぎた。

デイリータは、そんな私に決断を迫っている。

私はくすりと少しだけ笑んだ。

「まるで共犯者ね。私たち」

「同志、と言ってほしいな、オヴェリア」

そうだ。”彼女”が教えてくれたじゃない。私には世界と戦う武器があるんだって。

少しだけ、デイリータに甘えてみよう。

まずはそこから始めよう。

その証として、私はデイリータに手を伸ばした。

彼は、私の手を取って強く握りしめてくれた。

雷神シドの息子

side：クレスティア・アルヴァン
カッチ、コッチ。

私は少々お高い懐中時計（経費で買いました）を眺めながら、その時が来るのを待っていました。

時は真夜中、丑三つ時。

グローグの丘。

ルザリア地方最大の穀物生産地域。

しかし今年は長雨と干ばつにより、生産量が激減。それをゴルターナ公が無茶苦茶な収税で軍費を補うという経済音痴の無茶振りを発揮して、民の多くの心はゴルターナ公を見限る難民が多く、ルザリアにも殺到する始末。まあブランシユ子爵が仰った通り、その難民のせいでラーグ公側も軍費には四苦八苦しななければならないのは事実ですが。

そこで現れたのが南天騎士団。

の、脱走兵。

無茶な戦いに嫌気が差し、泥にまみれてでも家族と過ごしたいというお涙ちよちよ切れる兵士さん方の姿です。

「くそッ、ここまで逃げてきたのに追撃部隊と遭遇するなんて!!」

来ましたね。グローグの丘までわざわざお疲れ様です。

「もう戦争はたくさんだ！ オレたちは故郷へ帰りたいたんだ！ どんなに貧乏でも泥にまみれて暮らしていた方がいいに決まっている！ もう人殺しはたくさんだ！ 故郷へ戻って家族と一緒に暮らしたいッ!!」

脱走兵の先頭に行く青年が一息にまくし立てます。

私は一声かけてなだめます。

「落ち着いてください。私は南天騎士団の者ではありません。この鎧にサーコート、見覚えありませんか？」

そこまで言って、アイテム士の青年が集団に声をかけます。

「……間違いない。以前、神殿騎士団の兵装を見たことがある。あの女の言うことは本当だ」

おお、ろくに面識も無いのに神殿騎士団のことをご存じとは。試しに言ってみただけなのに。

「……で、その神殿騎士団さんがオレたちに何の用なんだ？」

私は人差し指で、丘の南の方角を指差します。

「まもなく、あちらから”異端者”として指名手配されているラムザ・ベオルブが参ります。あなた方にはその始末を手伝っていただきたい」

唐突に現れた私の言に、訝し気に先頭の青年が聞き返してきます。「それを手伝って、オレたちに何のメリットがあるんだ？」

まあそうですね。信用しきれないのが眼に見えて分かります。自分もあなた方と同じ立場なら信用しなかったでしょうし。

”異端者”の首は敵将に匹敵する手柄です。見事討ち取った暁には私からゴルターナ軍に除隊の手続きを取り成して差し上げましょう」「……なんでアンタたちがやらないんだ。”異端者”の始末はアンタたちの仕事だろう」

私は大袈裟にため息をついてみせます。

演技って大変ですね。平常心平常心。

「正直、神殿騎士団は別口で手が取られている状態なんです。私はその始末を任されたのですが、有り体あていに言って人員不足なんですよ。ですから利害が一致しているあなた方をここでお待ちしていたのです」「オレたちがアンタを信用する証拠はあるのか？」

「それでも私、異端審問官として拜命を受けている者です。あなた方の活躍次第でいくらでも口添えいたしますよ」

大嘘ですけどね。

ですが、脱走兵の集団はひそひそと内輪うちわで会話し始めます。まあ腹は決まっているでしょうけど。

「アンタの言うことはもつともだ！ よし、アンタに協力しよう！」「その意気です。もう殺しちゃっても構いません。どうぞ”異端者”の末路は死しかありませんから」

かくて脱走兵の集団は威勢を上げて、殺気をみなぎらせました。

side：ラムザ・ベオルブ

なんだか様子がおかしい。

前方から人の気配がする。

だが、その気配は明確に敵意を放っている。

僕らに対してだ。

「来たぞー！ 異端者どもだ!!」

集団の先頭を行く青年が氣勢を上げた。

僕らを見止めたその集団は、姿を見るなり武器を手にする。

一体、何事だ？

「南天騎士団の斥候か……？」

「どうやら違うみたいだぜ、ラムザ」

ムスタディオが目ざとく反応した。

「あいつらは、異端者、狩りだ！ 多分、教会の連中にたぶらかされてオレたちの当て馬にされたんだろうぜ！」

言って、ムスタディオは銃を取り出した。

アグリアスさんたちも剣を抜き放ち、臨戦態勢に移る。

「くっ、戦うしかないのか！」

遅れて僕も、自分の剣を抜いた。

コイツらは一体、何者だ？

南天騎士団の紋章を身に付けているということはゴルターナ軍であることは間違いないだろうが。

「ツ!! ラムザ、気を付けろ!!」

「え？」

考え事に終始してしまっていた僕に、ムスタディオが忠告の声を発

する。

横合いから僕に騎士が急襲してきた。

剣を振りかざし、かろうじて僕はその剣戟を受け止める。

「どうもラムザさん、先日ぶりですね！」

「おまえは、クレスティア!!」

ガキン、と剣と剣が交錯する。

鏢迫り合いの様相になった僕は改めて彼女に問う。

「神殿騎士が何故ここに!? ゴルターナ軍と手を組んだとでも言うのか!？」

「ああ、あれ? あれはただの脱走兵ですよ」

アグリアスさんたちの奮戦で次々に倒されていく兵士たちは。練度はまったく僕らに敵っていない。

「あなたたち、”異端者”の首を挙げたら、除隊の取り付けを言いくるめたら快く承諾してくれましたよ」

「卑怯者め! そんなにおまえは無駄な戦いを広げたいのか!!」

「よく考えることですね。私がここにいなくても、”異端者”の顔は割れているんです。遅かれ彼らとは戦闘になっていたでしょう」

キラとクラウスさんには後ろからゆっくり来てくれるよう頼んで正解だった。

相手がクレスティアだと知れたら傷を圧して、眼の色を変えて戦っていただろう。

かくして脱走兵は全滅。

僕はクレスティアに向けて吠える。

「自分の命が大切なのはわかる。わかるけど、そういうものなのか!」
クレスティアは僕の言葉に対して。

「そんなものなんですよ、自分の命なんて。他人のと天秤にかけたら大事なのは絶対、自分の方なんですから」

いつの間にか戦線から遠ざかっていた彼女のセリフが癪に障る。

しかし、反論できずに口の中で舌を鳴らすだけに終わった。

「……父さん、父さんならどうしたんだろう……」
雨に濡れるグローグの丘で、僕は体が濡れるのも構わずに独り言
ちた。

僕の背後から、何者かが近付いてきていた。

二人や三人ではない。

「キラ、クラウドさん……それに、きみは……」

「また会ったな。この二人はきみの連れだろうか？」

オーラン・デュライ。かつて炭鉱都市ゴルランドで出会った通りす
がりだ。

「ラムザ、この人は……」

キラが代弁しようとするが、僕はゆっくり首を横に振った。

「黒獅子の紋章……きみは南天騎士団の人間だったのか」

オーランが周囲に転がる死体に眼を這わせて。

「きみが脱走兵を片付けてくれたのか」

渋面でそう呟く。

「ベオルブ家の人間が我々に手を貸してくれるとは思わなかったよ」

「……好きで彼らと戦ったわけじゃない」

「わかってはいるさ。きみが望んで戦うはずがない。そうだろう？」

僕はそんなに悲痛な顔をしていたのだろうか。

オーランにはお見通しだったようだ。

「僕らも同じさ。好きで脱走兵を追っているわけじゃないんだ。わか
るだろう？」

やれやれと、やむを得ず仕方ないといったその素振りにはデイリータ
を思わせた。

「きみは僕のことを知っていたんだな……」

オーランは頷く。

「ああ、手配書の中にきみの名前と似顔絵があったよ」

オーランは肩をすくめる。

「しかも第一級の”異端者”だ。……いったい何をしでかしたんだい

？」

その言葉に、僕は応えられなかった。

信じられるわけがないだろう。

ルカヴィを倒して聖石を奪い取った、だなんて。

「……僕を捕らえるのか？」

オーランに対して、僕は投げやりに聞いていた。

「どうして、そんなマネをしなけりやいけなんだ？」

オーランはさも心外とばかりに応える。

「僕らの任務は脱走兵を捕らえることで肉親に追われているきみを捕らえることじゃない……」

もはや僕はベオルブ家の人間ですらないということか。

ザルバッグ兄さんの言うように、聖石のことなんか忘れてイグーロスへ戻った方が良かったのだろうか。

「後ろの連中がきみの首を欲しいと言い出す前に、さっさと行くんだな」

僕はその場から立ち去る。

が。

立ち去りかけて、オーランに問う。

「……なぜ、きみたちは戦いを続けるんだ？」

「きみの兄さんが剣を僕らに突きつけている限り、戦いは続く……」

「ラーグ公が剣を引けばゴルターナ公も引くのか？」

「……いや、それはないだろう」

それは無意味な問答だった。

互いが総力戦になってしまった今、お互いがお互いを殺し尽くすまで、この戦乱は止まないだろう。

「南天騎士団の将軍オルランドウ伯に会う機会があるなら伝えてくれ」

僕は一縷の望みに懸けてオーランに伝える。

「ラーグ公とゴルターナ公を煽り”利”を得ようとする奴らがいる。

僕らは奴らの手の中で踊っているにすぎないってね。……倒すべき相手はそいつらだ」

「なぜ、オルランドウ伯なんだ？」

「父上が言っていた……。友と呼べる人は彼だけだったと」

オーランはそれを聞いて、了承した合図として頷いてみせた。

「オルランドウ伯は僕の義父だ。伝えておこう……」

「信じてくれるのか？」

僕はまだこのオーランという男を信じ切れていない。

オーランもまた僕を値踏みしているようだ。

「奴らがなぜ聖石を集めようとしているのかは知らない。それが民のために役立つことなら僕らは口出しするつもりはない」

その言葉は僕を驚かせるに値するものだった。

「ただし、おのれの”利”のためだけに伝説を利用しようとしているのなら義父は黙っていないだろう」

聖石が本当に存在していることを知る人間は教会関係者だけかと思っていた。

だが、オーランは違う。

”雷神シンド”の名にかけて誅伐することを約束するだろう」

僕は何故、彼が聖石のことを知り、そしてそれをバックにグレバドス教会が戦乱を煽っているかを知っているのか、思わず叫ぶ。

「きみたちは教皇の陰謀に気付いているのか!？」

「証拠をつかんでいるわけじゃない」

彼はそのことを残念そうに呟く。

「僕らも内偵を進めているが、むしろ、きみの方が詳しいんじゃないのかい？」

詳しいも何も、決定的な証拠も持っている。

だが。

「陰謀の証拠をつかめば戦いをやめてくれるのか？」

「証拠でもあるのか？」

「ここに『ゲルモニック……いや、なんでもない』」

まだ僕はオーランを信じ切れずにいた。

いや、本心では信じることはできたが、彼を中心にゴルターナ公側にその証拠が掴まれたらそれこそ、ラーグ公、ゴルターナ公、教会を

巻き込んだ更なる戦乱を巻き起こすことになりかねない。

オーランは雨空を仰いで呟く。

「……戦いが終わるかどうかなんて誰にもわからない。だが、義父は必ず剣を引くに違いない……」

「オーラン……」

僕は彼の名を再度、口にした。

不意に、オーランの背後にいた騎士から声がかかる。

「オーラン様、参りましょう！」

オーランは振り返って。

「わかった、今、行く！」

彼は去り際に僕に告げる。

「お別れだ、ラムザ。死ぬなよ」

騎士たちが去っていく中、オーランは立ち止まり、僕に向かって叫んだ。

「ラムザ、きみは独りじゃない！ きみには仲間がいる！ 命を賭して戦ってくれる仲間がいる！」

最後に結びの言葉を口にする。

「僕もその仲間の一人だッ！」

そうして、今度こそオーランは立ち去っていった。

「……ありがとう、オーラン」

そうだ。僕は独りじゃない。僕には仲間がいる。信じられる仲間がいる。

「キラ」

僕は彼女の名を呼んだ。

「ありがとう」

「？ 何だい藪から棒に」

「いいんだ」

僕らはリオフアネス城を目指して歩き始めた。

聖石を奪還するため。

そして、アルマを助けるために。

天道士ラファ

side：ラファ・ガルテナーハ

暗殺集団カミュジャ。

フォボハムの領主、バリンテン大公が養成する特殊な訓練を受けた兵士。

決して表には現れず、陰から要人を暗殺する特殊機関の人間。

私はその事実能耐えかねていた。

「自分が何を言っているのかわかっているのか、ラファ!!」

私と同じ、褐色の肌に畏国人と比べてややほりの深い青年が私を叱咤する。

「兄さんこそ、わかっていない! 私たちは道具じゃない! 人殺しの道具じゃないのよ! あそこにいたら死ぬまで私たちは”道具”として扱われることになるのよ!」

私は目の前の兄——マラークに必死で訴えた。

「ね、行こう、マラーク兄さん。一緒に逃げよう!」

しかし兄さんは頑として聞かず。

「戦争で親を失ったオレたち兄妹が生きてこれたのは誰のおかげだ! あのととき拾われていなかったらオレたちはきつと野垂れ死んでいただろう……」

大公を信じ切っている、いや、心酔していると言っても良い。

兄さんは心からバリンテン大公を信じていた。

「大公殿下はオレたちを可愛がってくれた……。その恩を仇で返すつもりか!!」

「兄さんは騙されているのよ!」

私もまだ兄さんを説得しようと頑なに言い聞かせる。

「……私は聞いてしまった。戦火に乗じて村を焼き払ったのはバリンテン大公なのよ!」

事の真相はしかし、兄さんに伝わるとも思えない。でも私は言い続ける。

「何故だと思う? あいつは私たち一族だけが知っている一子相伝の

秘術を手に入れるため、私が受け継いだ天道術と兄さんの天冥術、この二つの術を手に入れるため村を焼いたのよ！」

必死に叫ぶ。叫び散らして、それでもなお兄さんには通じないことは分かかってしまっていた。

「私たちの父さんや母さんを殺した張本人はあいつなのよツ!! 目を覚まして兄さんツ!!」

「バカなことを言うなツ!!」
パシンツ!

私の頬を思いきり張る兄さん。兄さんは私の言葉を全否定するよ
うに、そんなマネをした。

「……兄さんだっけ知っているでしょ?」
思い出すだけでもおぞましい。

「私があいつに何をされたか……! 知っているクセにツ!!」
「それ以上言うな! それ以上言うと、オレはおまえを……!」

そこまで兄さんが叫ぼうとした時、同じカミュジャの一員が現れる。

「こんなところにいたのか、マラーク。そろそろヤツがやって来るぞ」
ぞろぞろと、他の団員も配置に付く。

「わかつている。準備は万全だ……」
「兄さん……」

城塞都市の外から複数人の気配がした。
「来たぞ! 異端者ラムザだ!」

その声に呼応するように、私は一人走り出す。
「ラファ!!」

兄さんの制止を聞かず、私は城塞を出て叫んでいた。
「助けてツ!!」

side：ラムザ・ベオルブ

「おまえはあの時のツ！」

確か、ドーターで僕に『ゲルモニーク聖典』を持ってくるよう強要した男だ。

「……リオフアネス城で待っているんじゃないのかッ!!」

それに対して男は啖呵を切る。

「あれは大公殿下の言葉を伝えたまでのこと！ おまえごとき剣士など神殿騎士団の力を借りなくとも倒せることを証明してやる!!」

暗殺集団の一人が、リーダー格の男に話しかける。

「マラーク、いったいこれはどういうことだ!？」

男——マラークに戦闘中にもかかわらず詰問する。

「ラファはオレたちを裏切ったのか!？」

「ラファのことは気にするな！ 妹の始末はこのオレがつける!! お

まえはラムザを殺すことだけ考えていればいい!」

「しかし、大公殿下にはどう説明するつもりだッ!？」

「余計なことを考えるなど言っているだろ!」

マラークが暗殺者に一喝する。

「ラファのことを大公殿下に一言でも喋ってみろ！ 二度とその口で息を吸えないようにしてやるツ!」

「妹だと？ 妹を殺すというのか!？」

今、まさに妹であるアルマを助けようとしている僕にはまったく理解できない思考だった。

side：クレスティア・アルヴァン

城塞都市ヤードー。

先の五十年戦争では主戦場ではなかったにもかかわらずこれだけ

大層な防衛都市を築くことに当時のお偉いさんの思考様式にはついていけません。言うなれば、石橋を叩いて渡る、ってことくらいでしょうか。

さて、そこでラムザ君たちを待ち受けていたのは武器王バリントン大公が擁するリオファネス城の暗殺集団カミュジャ。組織立って強力な暗殺者や魔道士を養成しているというなんともきな臭い集団です。

さすが”武器王”バリントン。彼にとっては兵器も人も同じく己の意のままにできる武器だということですね。

どうやら戦況はラムザ君たち一行の方が優勢な模様。

アグリアスさんたちが狭い入口をうまく活用して聖剣技をぶち込みまくって、出入り口を占拠し、ミルウーダさんが城塞の城壁も何のその。身軽さを活用してひょいとジャンプし、あっという間に都市内部に侵入して内側から敵勢を崩します。

奇襲に失敗した暗殺者なんて、ラムザ君の敵じゃないってことでしょうかね。

その暗殺集団がせん滅される様子を、私はどっかの屋根の上から、パンを齧りながら遠眼鏡（これも高いので経費で落としました）で眺めていました。

かくして暗殺集団は壊滅状態。マラーク君や無事な団員が撤収にかかります。

私はパンくずを口の中に放り込み、次なる目的地を目指すことにしました。

side:キラ・シルベント

城塞都市ヤードーの一角にある武器庫の一つ。

暗殺集団の追っ手がかかる前に、ラムザや私たちはそこに一旦身を隠した。

ぼつぼつとラファアが語り出す。

「バリンテン大公の狙いはただ一つ、畏国王の座よ」

どこの世にも強い権力を持ちたがる輩はいるものだ。

”武器王”と異名をとるほどの強力な兵器を開発したり、数多くの魔道士を育成したりするのもそのためなの」

「王家と血縁関係にある大公殿下をそそのかす奴らがいるんだよ」

ラムザがラファアの説明をフォローする。

ラーグ公とゴルターナ公の争いに便乗しようとするとは思えないバリンテン大公の計画からすると、少々の外れな気もするが。まあ概ねまちがってはいないが。

「ラーグ公とゴルターナ公を亡き者にし摂政の座を大公殿下に、そのお膳立てをする……という奴がね」

教皇は教会の権威を高めるために、傀儡となる者を求めているのであって、大公にその座を渡すということではないと私は思っている。

「なぜ、あなたは”異端者”の汚名まで受けて戦うの？」

聞くまでもない。ラムザをラムザたらしめる彼の人柄がそうさせるのだから。

「ううん、もちろん理由を知っている。でも、やつらを倒したとしても誰にも感謝されないわ」

「僕は誰かに感謝されるために戦っているわけじゃない。ベオルブの名を継ぐ者である以上、自分の名誉と誇りのために戦っている……」

「それはウソね……。あなたはそんな人じゃない」

ラムザの人間性を少しでも理解していれば、彼の悪評などすぐさまどこかへ飛んでいくというものだ。”異端者”と呼ばれる賞金首という、悪評は。

「あなたは目の前で繰り広げられている不正や悪事を見捨てておけないだけ。そこに代償なんて求めない……」

「それは買いかぶりすぎだよ。僕はそんなに立派な人間じゃない」

今度はラムザがラファアに向かって問うた。

「……それより、きみはどうする？ 僕は妹のアルマを助けるためにリオファネス城へ行かねばならない。でも、きみはやつとの思いで逃げ出してきたんだらう？」

「兄さんを連れ出さなきゃ……」

ラムザはアルマを、ラファはマラークを。

お互いに助け出したい人が多すぎる。これもまた戦乱の悲劇なのか、それとも謀略的一幕なのか。

「……どうして、彼ときみが争っているんだ……？」

「私たちは五十年戦争で親や住む処を失った戦争孤児なの……」

私たち貴族には分らない境地だ。

戦争はいつだって平民や農民の食い扶持や命を無惨に刈り取っていく。

「今でも忘れない……。死臭のただようガレキの山の中を、食べ物を求めてさまよい歩いたあの日々を……。そんな私たち兄妹を拾って育ててくれたのがバリンテン大公。神様って本当にいるんだと思ったわ」

「大公殿下は戦争孤児のために孤児院など数多く建設されている」

言い方は悪いが、養殖場みたいなものだ。

「その裏側で”才”を持った子供をプロの暗殺者に仕立て上げるために英才教育をほどこす……。それがきみたちというわけか……」

「私たちガルテナーハ一族には一子相伝の”秘術”があるのよ……。私が受け継いだ天道術と兄さんの天冥術……。この二つの術はどの魔法体系とも異なる技……」

さすがに口を挟むのは悪いので黙っておくが、きみたちの百発一中の爆発魔道はゲームで役に立った場面は一度もない。

多分、”ゆかり”なら実際に役立てるほど研究し尽くしていただろうが。

仮に使うとしたら暗殺それ自体ではなく、周囲を爆発に巻き込んで混乱を起こし、その隙に要人を始末してしまうとかだろうか。

「あいつはそれが欲しかった。だけど、一族の長老は協力を拒んだ。だから、あいつは村を焼いた……。自分のものにならないのならいつそ

のことこの世から消してしまおう……そう考えたのね」

こんな秘術を受け継いだためにガルテナーハ一族は焼き殺されたとしたら、そりゃ死んでも死にきれなからう。

「戦争孤児たちの中に私たち兄妹を見つけた時、あいつは心の底から喜んだでしょうね」

大公も大公だ。見る眼が致命的に欠けているとしか思えない。

まあゲームの設定と実際の口伝とでは天地の差があるだろうし、大公もその時は役に立つと思っただのだろう。

どうも大公はこの二人を鉄砲玉にして扱っている節があるし、少なくとも虚偽だとは言い切れまい。

「その事実には気付いたきみは逃げようとしたってわけか……」

「そんなことを知らない私と兄さんは本当の父親のように慕ったわ」

大公も表向きには人徳があるように見えるだろう。裏で何かきな臭いことをやっているところはバート商会のルードヴィツヒに似ている。

「それなのに……!!」

ラファは悔し気に涙を流した。

秘術の扱いはともかく、彼女らに与えられた宿命はあまりにも悲惨だと言えた。

「こんな所に潜んでいたんですね」

急にランタンの光が私たちを照らした。

その光は彼女の笑顔も煌々こうこうと照らし出す。

「クレスティア！」

私は咄嗟に腰に佩いた剣に手をかけた。

周囲の面々が一齐に臨戦態勢に入る。

「まあまあ、ここは刃を収めてくださいな。ラムザさん、貴方にバリントン大公殿下から伝言です」

「伝言？」

クレスティアの口伝に、ラムザは問い返す。

「リオファネス城に急いでください。さもなければアルマさんを見捨て

たとみなし、処刑するとのことですよ」

「アルマに指一本でも触れてみる！　ただではおかないぞ！」

そんなラムザを無視して、今度はラファの方へと向く。

「ラファさんも一緒に来てください。それでもアルマさんが死ぬことになります」

「卑怯者！　彼らとは関係ないじゃないツ！！」

ラファの涙を拭った怒りがクレスティアに突き刺さるが、まったく意に介してないようだ。

「これは警告ではなく、命令です。ではご機嫌よう」

さっとこちらに背を向け、立ち去ろうとするクレスティアに私は思わず声を荒げた。

「クレスティア、私には何も無いのか？　本当にきみは変わってしまっただのか？」

「うーん、そうだねえ」

彼女は首だけこちらに向けて。

「だったらキラとミルウーダさんも一緒に来てよ、リオファネス城まで。皆さんのチャンバラはそこでしましょうか」

「私が言いたいことはそんなことじゃない！」

「じゃあ何が言いたいのか？　言つとくけど、無意味な説教はもう聞き飽きたよ」

ダメだ……もはや私の言葉は彼女には暖簾のれんに腕押しだ。

もう、彼女を救う術は……本当にないのか？

「クレスティア」

憔悴する私の前に出たのはミルウーダだった。

「キラが貴女と決着をつけられないなら仕方ない。この子が納得できないやり方でも、私が勝利してみせるわ」

クレスティアがヒュッと口を鳴らした。

「おお怖い怖い。いいですよ、キラが相手じゃなくても。リオファネス城でなら、きっと私は誰よりも強いと思いますから」

「吠えてなさい。そのそつ首叩き落として、地獄に送ってやるわ」

「やれるもんならやってみてください。誰の挑戦でも受けますよ。

もつとも、誰が相手でも負けませんけどね」

「それじゃ」とだけ残して、クレスティアは私たちの前から去っていった。

「行きましよう、ラムザー！」

ラファが率先してラムザに声をかけた。

「すまない、ラファ。僕らのために……」

彼女はふるふると首を横に振って。

「あなたが謝ることじゃないわ。気にしないで」
そう結んだ。

「ミルウーダ、私は……」

私はミルウーダの決意表明に、どうしても一言いっておきたかった。

しかし。

「彼女は貴女の親友、よね？ でもあの態度、とてもじゃないけど私は看過できないわ」

「私は彼女を嫌っていないんだ。それにきつとクレスティアも私を嫌っているわけじゃない。ただ、歯車が決定的に合っていないだけなんだ」

私はミルウーダに懇願していた。

「お願い、ミルウーダ……。彼女を……クレスティアを殺さないで……」

私は弱々しく、床に手をついて彼女に乞うていた。

「キラ……」

ダメだ。こんな私の決意じゃ、まだ足りない。

だけどクレスティアを失うのも、私には耐えられない。

どうやったら私とクレスティアは本当の仲を取り戻せるのか。

彼女が死んだらそれで解決なのか？

違うだろうか？

私のやりたいことは一体、何なんだ？

何をすれば、私はクレスティアを止められるんだ。
クレスティアは吹っ切れている。

私もまたどこかでそうならなければならぬのか。
リオファネス城。

私はそこで何を見るのか。

side: クラウス・マツケンロー

「ラムザ、気を付けろよ」

「クラウスさん？」

オレの言葉にラムザが耳を傾ける。

「リオファネス城はオーボンヌ修道院の比じゃない。城内の騎士も使
用人も片っ端からぶっ殺される」

ラムザは驚いたように、ただ静かに問う。

「……それも、”神の視線”によるものですか？」

「ああ、だがこれを皆に伝えるのはきみの自由だ。だけどきみにだけ
は伝えておく。オレも腹の括り時ってわけだ」

「具体的に、何が起るんです？」

オレは間髪入れず、応える。

「神殿騎士団が来る。当然、ルカヴィもだ」

ラムザがゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。

「ハッキリ言っただけを回避できる方法が、オレには見つからない。
ただ見捨てるか、命を投げ捨てても食い止めるか、きみに任せる」

「……クラウスさんなら、どうするんです？」

「決まってるだろ」

言っただけ、オレは剣を鞘に納めたままラムザの前に突き出した。

「助けられるやつは片っ端から助ける。神殿騎士団のアホどもにいい
気にされてたまるかってんだ」

「クラウドさん……」

ラムザは何か考えるように顎に手を当てて、一つ頷いた。

「わかりました。僕らもクラウドさん同様、何ができるか考えてみま
す。もちろん、助けられる人は助けます」

「皆に伝えるか？」

「きつとキラもそうするでしょう。僕だけが皆を蚊帳の外にはしま
せん。皆で意志を一つにして、救える者を救ってみせましょう」

オレは強く頷いた。

「頼りにしてるぜ、若きリーダーさんよ」

そう言ってラムザの肩を叩いて、オレも武器庫の出口へと向かっ
た。

リオファネス城の惨劇。

未曾有の大災害。

果たしてオレに止められるのか？

無理だ。

だが、ラムザやアグリアスさんがオレと共にいれば……

オレは居もしない神様に、この時ばかりは祈るだけだった。

バリントン大公の野望

side:キラ・シルベント

ユーグオの森。

死霊の森として物騒な別名を頂いている、ヤードーとリオファネス城を繋ぐ難所だが、幸いにも私たちがそれらを目にすることはなかった。

「払暁奇襲?」

私はどこか懐かしい言葉をクラウドから聞いた。

「おう、ラムザにはもう話してある。奴らがラムザを待ち受けているその隙を狙ってオレたちがリオファネス城に密かに潜入する」

「きみはいつだつて自信家だね。ラムザを狙っているということは、手すきなのは私ときみくらいのものだ。たった二人でリオファネス城の惨劇を食い止めるだけでも?」

「そうだ。最悪、ラムザたちにも助けてもらおうつもりだが、それよりも早く、無関係なやつを助けられるだけ助ける」

「そう都合良くいくかな」

「いかせるんだよ。おまえもクレスティアが待っているんだろ?」

ヤードーの武器庫での一件か。しかし、彼女は……

その時、私の後ろから声が聞こえた。

「話はラムザから聞いたわ。夜半時を狙ってリオファネス城に突入するんでしよう?」

「ミルウーダ……」

「貴女がクレスティアとどんな決着を求めているのか、私は知らない。貴女も多分わかかっていないんでしょう。でもきつと、彼女は殺されなければ止まらない。それだけは貴女に言っておくわ」

「そんなことはわかってる!!」

私は思わず、ミルウーダの言に向かって叫んだ。

「私だつてどうクレスティアと決着すればいいかなんて、見当もつかないんだ。でも私がクレスティアを殺すのだけは間違っている。ラムザたちも皆も、あの子を憎らしいほど殺したいんだろう。だけど、

それはダメだ。それは私にとっての決着じゃない、ただの逃げだ。彼女を殺すことだけは、私が許さない」

私は必死に声を絞り出す。

頭では一体何を考えているのか、私でも分からないのに。

そんな私に、クラウスが横合いから声をかける。

「抑えろよ。クレスティアの件はとりあえず保留だ。奴がどう出てくるかはわかんねえけど、その場に三人いれば何とかできるかもしれないだろ？」

「そう上手くいくかしら？ ラムザから聞いたわ。兄さんが、ルカヴィと融合したって……。あの枢機卿と同じく、ね」

「最悪の場合、アルマだけでも助けねえとな。今はまだ、アルマの利用価値をヴォルマルフに知られてる可能性はないはずだ」

「難敵に出会ったら全員で仕掛ける。兄さんには悪いけど、数の暴力で叩き潰させてもらうわ」

「その裏でオレたちが城内の騎士や使用人に逃げるように促す。これだけでも大分違ってくるんじゃないか？」

私はクラウスとミルウーダが着々と構想を練っているのをよそに、独りだけ考えていた。

「クレスティアは……出てきたらどうしたらいい？」

「おまえ、マジでクレスティア、クレスティアばかりだな。おまえをアイツの目の前に出すのは差し出すのはご法度だな。少なくとも、オレかミルウーダ、どっちか付けるべきだ」

「安心なさい。私だって本気でクレスティアを殺すつもりはないわ。ただ最後の手段としてそれくらいの覚悟はしておいて欲しいだけ」

「ごめん、ミルウーダ……」

私たちが作戦を練っている間、森の東が白んできた。もうすぐ夜が明ける。

「ま、話はまとまらなかったがもう引き返すことは出来ねえ。覚悟を決めてリオファネス城をルカヴィの連中から助け出すぜー」

クラウスは強く宣言し、私たちは足早にリオファネス城へと駆けていった。

side：ヴォルマルフ・ティンジェル

私はウィーグラフと共にリオファネス城の執務室に案内された。
バリンテン大公自らが話をされるそうだ。

「ようこそ参られた。我が城はいかがですか？」

いかかも何も無い。が、バリンテン大公が興に乗っているのは眼に見えた。

「ルザリア城と比べるといささか無骨な造りとなっていていますが私は気に入っている……統治のために建設された平城とは違い戦争のために造られたこの城の方がよほど美しい……」

さて、私としては城の価値など微塵も分からぬものだが。

「イヴァリースは常に”力”を持つ者によって統治されてきました。このたびの戦乱はひとえに王家がその”力”を失ったことの証でしょう」

「……用件を伺いましょう」

「……せっかちですな」

別に大公の城自慢を聞きに来たわけではない。察してほしいものだ。

「単刀直入に申しませう……、手を結びませんか？」

「……どういう意味ですか？」

「今、申したとおり、イヴァリースを支配する者は”力”を持つ者です」

大公が得意気に滔々と語り続ける。

「では、今、”力”を持つ者とは誰なのか？ 北天騎士団を持つラーグ公？ それとも南天騎士団を持つゴルターナ公ですか？」

もったいぶった話し方はそれだけで癪に障った。

「いや、それは、ゾディアックストーンを持つあなたたち神殿騎士団で

す……」

少し驚いた。

聖石の奇跡に気付いているのか、この男は。

「聖石は、それ一つで大いなる魔力を備えていると聞きます」

いや、コイツも昔話の伝承に惑わされているだけだ。

聖石のことも、我ら神殿騎士団を引き入れるための方便くらいにか思っていないのだろうか。

「いにしえの伝説によると、かつてミュロンドを襲った天変地異も聖石によるものとか……」

「ハハハハ……。……いや、失礼」

一息、大公の言を笑い飛ばして興を潰した。

「それにしても、大公殿下ともあろうお方がそのようなおとき話を信じているとは思いませんでしたな」

「おや……。では、あなたたちは 信じていない……。？」

当然だ。

聖石の奇跡が貴様ごとき愚者に語られるだけで反吐が出る。

「それは変ですね……。ライオネル城の枢機卿が亡くなったのも聖石をめぐるトラブルと聞きますが？」

迂遠な話しぶりで神殿騎士団を操ろうなど笑止千万。

茶を濁すことにする。

「……。さて、枢機卿は病死なさったと聞いておりますが……」

「では、あのベオルブ家の末弟を追っているのは何故ですか？」

確信する。

こいつは愚者だが賢者でもある。

よもやこの男がラムザ・ベオルブのことを知っているとは。

「わざわざ」 異端者」にまで仕立てあげて追いかける理由は何ですか？」

「異端審問会の者どもの決めた事などに神殿騎士団は関知しておりませぬ」

「おやおや……。あくまでも知らないと申されるのですね……。しかし、これならどうですか……。？」

執務室上段の扉に向けて大公が大声を発する。

「マラークを呼べッ!!」

そこから現れたのは、異国の風貌を持つ魔道士と、我が息子イズルードだった。

「ち、父上、申し訳ございません」

イズルードが一言、謝意を申し渡す。

「……く、そういうことか」

『スコープオ』と『タウロス』は我々が預かっています」

ニヤニヤと人の悪い笑顔で大公が得意気に話す。

「この愚か者めッ!!」

パシンッ!!

私はイズルードの頬を一打ちした。

よろりとふらつき、何とか姿勢を保つイズルード。

「望みはなんだ?」

いい加減、頭に血が昇ってきた。

「はじめに申したとおりです。我々も力を貸したいのですよ」

「……断ると言ったら?」

「教会の不正を世間に暴くだけのこと」

「聖石だけでは何の証拠にもならぬ」

「たしかにそのとおりですね。だが、『ゲルモニーク聖典』ならどうでしょう?」

大した賢者ぶりだ。

そして、大した愚者ぶりだ。

反吐が出る。

「あれならば、ラーグ公も、ゴルターナ公も、元老院の方々も興味を示すでしょうね……」

「……どこにある?」

「さて……。それを教えるわけには参りません」

怒りが頂点に達した。

もはやこれ以上、ここにいる意味も、コイツらを生かすだけの理由もない。

「ウィーグラフ、城内の人間は任せた。ここは私が始末する……」
無言のまま、ウィーグラフは執務室上段の扉から部屋を出ていった。

バリントン大公が立ち上がり。

「おかしなマネはおやめなさい！ あなたたちに勝ち目はありませんよ！」

私に警告を発した。

「勝ち目だと……？」

胸元に仕舞った聖石が淡い光を放つ。

「おまえたち脆弱な人間どもに何ができるといふのだ……！」

「父上……？」

訝し気にイズルードが私を呼ぶ。だがそんなことはどうでもいい。

「我々をなめるなよ、バリントン……。貴様を殺すことなど容易いのだぞ……」

「刃向かう気かッ!？」

大公の狼狽した声を聞き、周囲に配置していた騎士たちが私の周囲を取り囲む。

「戦おうというのか……？ いいだろう。貴様に聖石の力を見せてやる！」

私の胸元の聖石が激しく光を発した。

side：ミルウーダ・フォルズ

ユーグオの森を抜けて、私たち3人は小高い丘からリオファネス城を遠眼鏡で見渡す。

思った通りだ。城には最低限の騎士しか配備されていない。これなら私たちだけでもせん滅はともかくとして城内に潜入できそうだ。

「予想通りの陣構えね……このまま城内にまとまって侵入すれば私たちを見つけてるのはさぞ困難でしょうね」

「そこをオレたちが引つ掻き回して使用人を中心に撤収を促す。そうすればさらに城内は混乱して城外に哨戒に出る騎士も少なからず出るだろうさ」

「そのままアルマを探して、彼女を奪取する。これが上手くいけば完璧ね……。裏を返せば」

「わかっているよ。裏を見ればきりがなが、まあろくな目には遭わないだろうな」

私とクラウドが作戦目標を立てている間、キラはずっと無言だった。

クレスティアの件に触れないよう、私たちも腐心しているのだけけれど、さすがに彼女自身の内面まではフォローしきれない。

私は励ますようにキラに言う。

「キラ。この際クレスティアは後回しよ。クラウドの話だと、既に城内には暴発寸前のバケモノがいるって話なんだから」

「……わかっている。ただ、どうしても不安がぬぐえないんだ。絶対に、どこかでクレスティアは邪魔をしてくる。私にはそんな確信がある」
「貴女はクレスティアのことを怖がり過ぎね。そのための奇襲でしょう。これがクラウドの言う”物語”を避ける一種の賭けみたいなものなんだから。腹を括りなさい」

「わかっている」

キラは自分の頬をパシんと張り、気合いを入れた。

「さあ行こう。城門の裏手に回って城内へ侵入する」

私たちは頷き、城門を避けるようにして裏から城内への侵入を図った。

「ここが裏手ね。城門前よりさらに警備が手薄だわ」

「よっし。門番を片付けて一気呵成に突っ込むぞ」

「残念ですが、そうは問屋が卸さないですよねえ」
城壁から声が降り注いだ。

「クレスティア!?!」

「上手く城の裏手に回ることが出来たでしょうが、こっちはその道のプロがいるんですよ」

クレスティアが指笛を吹く。

そこに姿を現したのは。

「ラムザはいない、か。おまえたちを人質にすれば『ゲルモニーク聖典』を奪い取るのも楽になるだろうな」

マラークたち、暗殺集団カミュジャ。

その名の通り、斥候、奇襲、暗殺のプロフェッショナルたちだ。

作戦の初めから出鼻をくじかれた。

「どうする!?! ミルウーダー!」

クラウスが予想だにできなかった事態に、私に意見を求める。

大丈夫。私は初めからこんな作戦が上手くいくとは思っていない。

「こんな事態は想定済みよ。最初の計画通り、3人で敵を片付けて城内に侵入する。敵がちよっと増えただけよ」

確かに敵は増えたが、そのほとんどがラムザの迎撃に備えているためか、そう多くはない。

それに元が暗殺集団だ。闇夜に紛れられれば厄介だが、こんな開けた戦場でなら負ける道理はない。

「キラ! クラウス! この際クレスティアは無視よ! 最低限の敵を片付けて、城内へ突入する!!」

私たちは剣を抜いた。

トントンと軽やかにクレスティアが真っ直ぐキラの目の前に下りてくる。無視はさせない、ということか。

「キラ! 私に会いに来てくれたんだね。嬉しいよ!」

「クレスティア! もう戦うのはやめにしないか!?! 他にきみの望みを叶える方法だってあるはずだ!」

「私に迎合するつもり? 悪いけど、そんな三文芝居は受けられない

ね！ そんなことより、一緒に遊ぼうよ！」

「私はきみとは戦いたくない！」

「どうして？ 私はキラと戦うの、楽しいよ？」

話にならないとはこういうことか。仕方ない、キラ一人に任せては
いられない。

「クラウス、キラに加勢するわよ！ クレスティアをここで下す!!」

「任せろ!!」

クレスティアの今までの戦いを見ていてわかったことがある。コ
イツの剣は常識外れの発想の技術を交えた傭兵上がりの凶剣だ。

だがそんな剣、五十年戦争を戦い抜いた元骸騎士団にとっては成り
上がりの外法の剣。貴族や正当な騎士には厄介だろうけど、私には通
用しない。

「下がって、キラ！」

「くっ……気を付けて、ミルウーダ!!」

私は背後からクレスティアに剣を振りかぶる。

クレスティアはキラと交えていた剣を、キンと弾き、私の方へと振
り向いた。

そこで狙ってくるのは、剣を持つ手元を一撃する回し蹴り！

クレスティアの得意技だ。

この蹴撃で数多の騎士を無力化してきただろう。

狙い変わらず私の手元を目掛けて振り抜いてきた足を、私は一歩大き
く退いてその一撃を躲す。

逆に、私はクレスティアの手元を剣の腹で思いきり叩きつけた。

クレスティアの剣が大きく吹き飛び、ヒュンヒュンと宙を舞い、城
外の堀の中にポチャンと沈んだ。

これでクレスティアは無力化……

「やっつけてくれますね！」

ゴッ!!

思った瞬間、私の顔面に彼女の拳が叩きつけられる。裏拳をもらっ
てしまった。

たたらを踏んで後退する私に、彼女が連続で拳を浴びせ続けてく

る。

コイツ、モンクの技も習得済みか！

「やはり私の最大の敵はミルウーダさん、貴女ですね！ ラムザさんよりよっぽど躊躇がない死神の剣ですよ！」

「貴女の死神になったつもりはないけどね！ でも貴女が死ぬと、キラがピーピーうるさいのよ！」

「へえ……やっぱキラは私と同じで親友でいてくれたんですね。ちよつとでも疑った私が馬鹿みたいです」

「戯言はそこまでよ。無手になった貴女に私の勝ちの目は揺るがないわ」

「それもそうですね……マラークさん!!」

「仕方ないやつだ！」

そう言つて、マラークが呪文を詠唱する。

「黒竜王、その哮りを嵐となせ！ 天下無双の破邪の印！」

裏天鼓雷音！

マラークの術で、周囲が雷撃が爆発する。

視界が封じられると共に、私たちの元からクレスティアが離脱していくのが見えた。

クレスティアは退けた。

後は暗殺集団カミュジャのみ！

遠方から投げ付けられる短剣を凌ぎながら、狙うはマラーク。敵の大將を討てば、この場は勝利だ。

クラウスの剣技が炸裂し、マラークを打ち据える。

その隙を狙って私の剣が彼を一閃した。

「く……、強い……。やはりオレの力では勝てんのか……！」

悔し気に歯噛みしながら、後退していくマラーク。

それを見た他の暗殺者たちも、潮が引くように城内へと撤退していく。

その途端。

雷鳴が轟いた。

裏門が開き、そこから傷ついた騎士がずりずりと這い出てくる。

「た……、助けて……。ば、ばけものが……」

「ンなツ!？」

素っ頓狂な声を上げるクラウス。

「馬鹿な……。事態の進行が圧倒的に早い……。まだラムザは城にすら辿り着いていないんだぞ!？」

キラが予想外のアクシデントに見舞われたように叫ぶ。
だが。

これは感じた覚えがある。

あのライオネル城で出会ったバケモノの気配と同じ、悪魔の匂い。
それに、そこから混じってくるのは……

「兄さん……う？」

思わず私は一人、裏門から城内に向かって突入していた。

「待て！ ミルウーダ！ 死に急ぐなツ!!」

しかし私はキラの警告を無視して城内へと入っていった。

確かめなければならぬ。

あの高潔さと、力を求めている兄さんが、本当にバケモノになってしまったのか、私が確かめなければ。

side：アルマ・ベオルブ

「兄さん……」

私は軟禁されていた粗末な部屋の隅に座り込み、独り兄ラムザのことを想っていた。

ここに閉じ込められて何日経ったのか、それを調べる術もない。

その時。

うわあーッ!!

「え!?!」

私は顔を上げた。

ぎゃあーッ!! ヒイイーッ!!

部屋の外から剣戟の音と断末魔の声がこだまする。

唐突に扉が開き、重傷を負った騎士が一人、部屋に入り込んでくる。

私の前で倒れたその騎士は、腹を打ち抜かれて内臓と大量の血を漏らしていた。

「……ひどい怪我!」

私はその騎士の手を取る。その騎士が息を切らしながらかすれた声で声を漏らした。

「う……う……た……助けて……あんな……バケモノが……」

「しっかり……、しっかりして!!」

私の必死の声も虚しく空回りするだけで、もはやその傷は手の施しようもない。

「に……げろ……ここ……は……危険……だ……」

そう言っつて、騎士は力尽き果てた。

外では未だ、断末魔と剣戟が続いている。

怖い。

だけど、ここにいればその殺戮に襲われる。

意を決して、私は部屋の外へと駆け出した。

邂逅

side：クラウドス・マツケンロー

ミルワードは城内に単身突入し、キラもそれを追っかけて、自然オレが殿を務めることになっちまった。

これじゃあ最初に立てたプランなんかあったもんじゃねえ。

大体、正気か？ ミルワードも、キラも。

今この城内では大殺戮劇が繰り広げられてるんだぞ。

その中で一人になったら各個撃破されるに決まってるだろうが。

そこんとこちゃんと冷静に理解してんのかねえ？

と。

「クレスティア!!」

オレは城内が大混乱に陥っているにもかかわらず、平然と闊歩するクレスティアの姿を、まるっきりの偶然出くわした。

いや、もしかしたらこれもゲームの筋書き通りなのか？

まさか。オレとアイツ、異邦人同士の邂逅なんてゲームにあるわけがない。

つてことは、やることは一つ。

クレスティアがオレの声に反応して振り返る。

「なんだ、誰かと思えばラムザ君の金魚のフンやつてるクラウドスさんじゃありませんか」

「ほぎけ。……帯剣はしてねえみたいだな」

「ああ、ミルワードさんに打ち据えられて堀の中にポチャンしましたからね。大事な剣だったのに」

「なら好都合だ。ここでテメエをボコボコにしてきっちりキラの目の前で土下座させてやる。そうすりゃあいつの留飲も少しは下がるってもんだらう」

「できますか、貴方に？」

オレは鞘から剣を抜き放ち、クレスティアへと刃先を向ける。

「リオファネス城で異邦人同士のやり合い。さすがにテメエが言つたブレイブストーリーのご加護もありやしねえだろ。テメエはここでぶっ潰す」

啖呵を切るオレに、奴はいつもの愛嬌のある不気味な笑顔で応える。

「フッフ、やれますか?」

「試せばわかることだ!」

オレは地を蹴り、クレステイアに肉薄した。剣を振りかぶり、狙いは右肩。

無手な上に利き腕を狙う。無手ではまさかもう対処は出来まい。

「くたばれ!」

狙い違わず右肩にめり込もうとした剣は。

すんでのところで止められた。

「なにッ!?」

白刃取りだ。

『ファイナルファンタジータクティクス』でも屈指の防御アビリティ。

どこまで芸達者な奴なんだコイツは……!」

「フッ!!」

剣を支え取られたまま、クレステイアの蹴撃がオレの腹を打ち抜く。

オレは無様に転がり、地面を這った。

そこに、奪い取ったオレの剣を突き付けるクレステイア。

「この剣、もらっておきますね。大事な剣を堀に沈められたお礼です」

「この野郎……」

「やっぱりクラウスさんはクラウスさんですねー。まともになり合っても勝てると思っていました。お手本通りの甘い剣技では私は倒せませんよ」

「アグリアスさん相手じゃわかりませんけどね」とだけ付け加えて。「それではクラウスさん、ご機嫌よう。帯剣もしていないクラウスさんじゃ、この城の殺戮は止められないでしょうから、今から逃げた方

が無難ですよ」

そう言い残して、クレスティアは悠々と去っていく。

畜生………！

オレは歯噛みしながら、悔しさに顔を歪めて地面を殴り付ける。

結局、ここでもオレは半端者かよ………！

side：キラ・シルベント

城内に入ったものの、巨城の内部は複雑な迷路のようであつという間に二人を見失った。

クラウスの立案もこれでご破算だ。

後は二人を信じて、できるだけ多くの人を城から逃がすしかない。

だが、ブレイブストーリーはなんて残酷なのだろう。

そこかしこに凄惨な死体が群れを成すように転がっている。

頭を潰された死体。手足をもがれた死体。胴と胸とが別れて内臓をはみ出している死体。

あまりの景色の惨状と死肉の匂いに、私は耐えられなくなって傍の側溝に胃の中の全部を嘔吐した。

「キラ♪」

そんな無体な私を見て、声をかけてくるのは。

私はそちらの方に振り向いた。

「クレスティア……」

「ダメじゃない、こんな殺戮劇、滅多に見られないよ？ もっと楽しまなきゃ」

「ふざけるな………！！ こんな無残な有り様に楽しみななんてあるものかッ!!」

ここは……地獄だ！

遊園地気分でこんな所を悠然と闊歩する親友に、私は改めて怒りを感じた。

と、クレスティアが口を開く。

「キラは私のこと、相当歪んでると思ってるけどさあ」

そうだ。殺劇溢れるこの物語を追って楽しむなんて、狂気の沙汰にも程がある。

「そういうキラだって、歪んだ願望持ってるってこと、分かってる？」

「……何のこと」

私が歪んでる、だって？ 私は私だ。ラムザやデイリータの友人、キラ・シルベント。

正義感の塊のようなラムザ、根はいいやつのデイリータ。

あいつらとこのブレイブストーリーを追ってきて、歪みなんてあるはずもない。

そうだ、私はクレスティアとは違う。私は正常だ。

だけどクレスティアは、それを切り裂くように持論を展開する。

「キラの目的は人助けなんですよ？ それこそミルウーダさんやシモン先生を助けたり、獅子戦争を回避したがつてみたいに」

「その何が悪い？ 少なくともきみみたいに物語を楽しむベクトルは違って、私の価値観の方がよっぽど正常だと思うけど」

「それだよ、それ」

びしっと私を指差して得意満面な笑みで私に指摘する。

「正義のミカタってのはさ。倒すべき敵がいないと完成しないんだよ。ミルウーダさんなら骸旅団然り、シモン先生なら神殿騎士団然り」

そこで一拍置いて、彼女は剣を抜いた。クラウドの剣だ。あいつからぶんどったのか。

ただ、私に敵意はないらしい。

「そうだよ、いつかアルガス君も言ってたよね。『お前は親友と称するデイリータさえも利用してきたんだ』って。かっこよかったよねえ、あれは」

「馬鹿な。私が誰を利用しているっていうんだ」

「馬鹿はキラだよ。分かんない？ キラはブレイブストーリーを壊してまで、ミルウーダさんを、シモン先生を助けたんだ。意識せず、自分に都合のいい駒にするためにね」

なんてくだらない言い草だ。

その罵声に対して、私は叫び声で返す。

「暴言だ！ 私がミルウーダを利用してきただつて？ ならきみこそ、何人の人間を利用してきて、犠牲にしてきたっていうんだ！ 私ときみが目指すところが違う！ ブレイブストーリーが何だ!! こんな多くの犠牲を出して、それを救済することの何がおかしいっていうんだ!!」

「だーかーらー。そこがキラの歪みなんだよ。言っても分からないかなあ」

「応えろ、クレスティア。私はいったい何がいけないんだ。この残酷なブレイブストーリーの犠牲を減らしてどこに意味がないって言うんだ」

「言つたでしょ。キラは救済にかこつけて、ブレイブストーリーに介入している。それは私と同じ、ブレイブストーリーを追いながら眺め見ているに過ぎないってこと」

「ならミルウーダの件はどうなる。私は彼女を助けた。それにも意味がなかったと言えるのか？ 言えはしないだろう。彼女を助けたのは、私なんだ！」

それを聞いて、クレスティアはやれやれと両手を軽く広げて呆れたように口を開く。

「相当重症だね。キラにとってはミルウーダさんは友人になったと同時に、ブレイブストーリーに無理矢理乗せたピエロにしちやっただよ。本来なら彼女はレナリア台地で死んでいた。その命をチップに、キラのピエロに仕立て上げたんだ」

「ふざけたことを……!! ミルウーダは私の友達だ！ 彼女をピエロだなんて呼ぶな！ 反吐が出る！」

「吐きたければ吐けばいいよ。もつとも、ミルウーダさんのピエロっ

ぷりは私には面白いから、その辺りはキラに感謝だけどね」

「……これ以上、きみと話したくもない。失せろッ!! 私ほきみとは違った方向でブレイブストーリーを追ってみせる!!」

私の必死の叫びに、彼女はただ淡々と応えるだけだ。

「ま、キラはミルウーダさんとよろしくやっててよ。私はここで見たいものがあるから、そろそろ行くね」

「二度は言わないぞ、さっさと行け!!」

「はいはい」

チャキつと剣を鞘にしまい、彼女は去ろうとする。

しかし、顔だけこちらに向けて。

「獅子戦争の死傷者や難民、リオファネス城の犠牲、意地でも救えたらいいね。私はその面白さが分からないけど、それだけは応援してあげるよ」

嘲笑するようにそう言った。

私は思いの丈をありつたけぶつけるように、彼女に向かって叫ぶ。

「私はきみとは違う! 消えろッ!!」

「はあい、じゃあねえ」

今度こそクレストティアは私から顔を逸らして、惨状極まりない城内を闊歩していった。

私は間違っていない。

私がいみんなを助けるんだ。

敵がいるなら容赦しない、私の邪魔をして、私が救いたいと思うものを脅かすのなら、戦ってやる。

ああそうだ、戦うんだ。

私が救いたいものを邪魔する奴は全部、私が打ち倒してやる!

side：ミルウダ・フォルズ

城内に突入した私が見たのは、有り体に言って酷い惨状だった。

惨たらしく殺された騎士や使用人があちこちに転がっている。

かつて五十年戦争を戦った時ですら、こんな惨憺^{さんたん}たる場面はなかった。

人間の所業じゃない。

明らかに、バケモノの仕業と言っている。

そんな血の匂いに混じって、邪悪な匂いもまた私の鋭敏な嗅覚を刺激する。

邪悪な気配。それに兄さんの匂いの残滓^{ざんし}が残っていることも。

その気配を辿る。

そうして辿り着いた匂いの元。そこにいたのは。

「兄さん……」

骸旅団団長——いや、神殿騎士ウィーグラフ。あの時、オーボンヌ修道院で私が命を絶つたはずの男だった。

彼はいったい何を考えてこんな惨状に手を貸したのか。

「兄さん、聞こえて？」

彼はゆつくりと、私へと振り向いた。

ああ、兄さんはもう死んだんだな。

ここに居るのは、兄さんの皮をかぶった異界のバケモノに過ぎない。

私は彼の歪んだ笑みを浮かべた顔を見て、そんなことを思った。

惨劇の痕

side：ラムザ・ベオルブ
様子がおかしい。

キラたちに先行してもらい、僕らはユーグオの森で小休止を取っていた。

それが数刻前。

リオファネス城に着いた僕らを待ち受けていたのは無人の巨城だった。

見張りすらいない。

「おかしい……キラたちは無事か？」

率先して斥候役を務めてきてくれたムスタディオが僕の元に戻ってきた。

「やっぱりだ。城門前には敵影の影も形も無い。クラウドが言っていた通り、もう既に城内は大混乱に陥ってるかもしれないな」

僕は不安と焦燥に駆られながら、先を急ぐことにした。

ラファ……、アルマ……。無事でいてくれ……

side：ミルウーダ・フォルズ
ゆっくりと振り向く兄。

しかし、その形相は慣れ親しみ、敬愛していた騎士ウイーグラフの面影はなかった。

昔と同じ、兄さんの顔だというのに。

「……なんだ、ミルウーダか」

彼はどうやら私が目の前に現れたことが肩透かしのようだった。

ラムザにご執心らしいのがわかる。

「まあいい……。さあ、剣を抜け、ミルウーダ」

しかし、私はその場に立ち尽くしたまま、兄ウィーグラフを見つめていた。

何者にも負けない無敵の兄。五十年戦争を生き抜いてきた、豪傑。それらを凌駕するだけの力と、邪悪さが彼からにじみ出ている。

「どうした、抜かないのか？ ……ならば、こちらから行くぞ」

ゆらりとウィーグラフが、音もなく剣を抜く。

「哀れね……。貴方は本当に哀れな人……」

私は蔑む気持ちを抑えながら、彼に向けて呟く。

「ルカヴィに魂を売ってまで復讐を果たしたいなんて……。私たちの仲間が知ったらさぞかし嘆き悲しむでしょうね……」

結局、蔑みは私の胸の内から口に出た。

だが。

「復讐だと？ クククク……。そんなことはどうでもいい……」

くつくつと笑みを浮かべながら、心外だとばかりにウィーグラフが吐き捨てる。

「私の望みはそんな小さなものではない……。仲間の仇などどうでもよい」

そう言う彼の言葉は非常に感嘆で、そして暗く響いてきた。

「私が望むのはこの世に”混沌”をもたらすこと……。そう……。脆弱な人間どもの悲鳴を聞くことだ……」

しかし、何なんだこの男は。

その感覚はもはや人間のものではなく、バケモノに魅入られたものだとしてもいいのか？

「だが、安心しろ、ミルウーダ。ラムザの前に、おまえは特別にこの私が殺してやる！」

私は二人の姿を眺め見て、思わぬ感動に打ち震えました。まさかこの兄妹のデスマッチが見られるなんて。

ここはキラに大感謝です。グツジョブ、キラ。

二人は多分、私が戦いを端から見てるのを分かっているでしょうが、今はタイマンの最中。

私に構ってはいられないはず。

ならばとつくりと観劇しましょう。

一風、食い違ったブレイブストーリーを堪能するためにね……
クスクス……

side：ミルウーダ・フォルズ

私は剣を抜き放った。

ウィーグラフが剣を片手にゆらりゆらりと近付いてくる。
ガキンツ!!

そして放たれた凶刃は、異常なほどに重い。

騎士の剣ではない。まるで悪魔の腕だ。

私は独り言ちるように、ウィーグラフに向かって呟く。

「聖石は悪魔の石……、ゾディアックブレイブは悪魔の騎士団……」

以前、王女が語ったゾディアックブレイブの物語を思い出す。
だけれど。

「私たちが信じてきた伝説はすべて嘘だった……」

一合、二合と剣を合わせて、重い剣に圧された私は力任せに距離を取る。

互いに剣の間合いから外れたところで、ウィーグラフが語り出す。

「ククク……、所詮、”神の奇跡”などそんなものだ……その時々の執政者たちが自分の都合の良いように歴史を改ざんしているだけ」

彼は満足気な、どこか空虚な笑みを浮かべながら滔々と続ける。

「だがな、その行為のどこに問題があるというのだ？ 彼らが責められる理由は何もない」

ウィーグラフが軽く両手を開く。

「なぜなら”神の奇跡”を望むのはいつでも民衆だ」

そう。

貴方はそう言うのね。

私だって、食い詰めた骸旅団時代には、家畜に神は不在だと嘆いたものだ。

「何もせず、文句ばかり言い、努力はせず、他人の足を引っ張る……それが民衆というもの……」

それが理想を捨てて、力を求めて神殿騎士となった貴方の答えだというのか。

「そうした民衆が望むものを執政者たちが用意する……歴史などその繰り返しにすぎん」

そして、その答えに辿り着いた貴方はもはや、私にとっての無敵の兄ではない。

犬ですらない。

ただ『それ』としか言えない存在だ。

「たしかに施政者たちはそうした民衆の弱い心を利用していたかもしれん……」

コツンコツンと徐々に私に迫りくる。

私は改めて剣を正眼に構えた。

「だが、民衆もまた、利用されることに満足しているのだ……”神”なんぞ、人間のもつとも弱い心が生み出したただの虚像にすぎん……」
嘘つき。

貴方は”神の不在”なんてとうに知りながら、それでも”人間”としての理想を持って、また力を求めて神殿騎士になったのでしょうか。それを理解しながら、民衆を”神”にすぎる俗物だと揶揄するの
か。

「それに気付いていながら その”ぬるま湯”に甘んじている奴らがいけないのだよ……」

その言葉に対し、私は皮肉を込めて疑問を呈する。

「人間としてのその弱い心を克服せずに聖石の奇跡に頼る貴方は何なの？」

だがそれすらも、彼の中では噛み砕かれた答えがあるようだった。

「弱い人間だからこそ”神の奇跡”にすがるのは……おまえこそ、自分が本当に強い人間と自信を持って言い切れるのか？」

私はそんな彼に告げる。

「貴方と一緒にしないで。私は独りじゃない」

刹那、ウィーグラフの眼がくわつと開いた。

彼の足が大きく動く。

「ならば、ここで倒れてまた独りに戻るんだなッ！」

彼の剣——いや、悪魔の腕が大上段に振りかぶられ、私を両断しようとして襲い掛かる。

だが。

そんなやぶれかぶれな剣が私に届くはずもなく、彼の剣の軌跡に飛び込み。

ドシュツッ！

彼の心臓を正確に貫き通した。

人間なら即死だ。相手が、人間ならば。

「く……、強くなったな……」

「違うわ。貴方が弱くなったのよ」

彼は口と胸から血を吐き出しながら、その場から姿を消した。

「逃げる気ッ!? 兄さんッ!!」

私は視線を辺りに配った。城内中央に移動し、どこにいてもその姿を確認できるような眼を凝らす。

「出てきなさいッ！ ウィーグラフ!!」

私の言葉に呼応してか、私から少し離れた場所にウィーグラフが姿を現した。

「ここで決着をつけよう……」

ウィーグラフの言葉と共に、彼の胸元が鋭く光を放った。辺りの血風を巻き込むように、怨嗟の音が鈍い光となってウィーグラフの体を包み込む。

激しく光が炸裂し、轟音を撒き散らして。

羊の頭と、四本の怪腕を持つ巨人の姿が私の前に現れた。

『待たせたな……。おまえにこの姿を見せるのは初めてだったな……』

なんておぞましい姿。

ライオネル城のバケモノ同様、強烈な威圧感を放っている。

ガタン！

私の背後で扉が開く音がした。咄嗟に振り返る。

「ラムザ！」

私は遅れて現れたラムザに向かって声を上げた。

「ミルウーダー！ ウィーグラフ!!」

ラムザが私と、バケモノと化した『それ』の名を叫んだ。

『ラムザを呼んだか……。ならば、こちらも呼ぶとしようか』

ウィーグラフ——いや、魔人ベリアスが体を震わせて叫ぶ。

『出よ、我が忠実なるしもべたちよ！』

ベリアスの背後に、異形の悪魔たちが召喚された。

またも見ることのないバケモノどもだ。

『さあ、行くぞ、ラムザ！ ミルウーダー！ おまえたちに魔界の力を見せてやろうッ！』

私たちは改めて、各々の武器を携えて臨戦態勢を取った。

side：ラムザ・ベオルブ

「ウィーグラフ！ アルマは……、僕の妹はどこだッ!?」

僕の必死の叫びに、ウィーグラフ——魔人ベリアスは嘲笑する。

『知ったことではないな……。私にはもはやそんな小さなモノのことなどわからずとも良い……』

「おまえがまだ人間の心を残しているのなら、僕の言葉が分かるはずだッ!! アルマの……ラファの居場所を言えッ!!」

ベリアスの異形の顔が釣り上がるように歪み、吠えるように叫ぶ。

『フツ……、ハハハハッ!! 言っただろう、知ったことではないと!!』

『陽光閉ざす冷気に、大気は刃となり、骸に刻まん!』

クリュプス!

虚空から単眼の巨人が現れ、冷たい刃が吹き荒れる。

それは僕らだけではなく、周囲に散らばるリオファネス城の騎士たちの骸をもさらに斬り刻む。

「言っ通じる相手ではないわ、ラムザ!! 今は何より、コイツを倒す!!」

ミルウーダが叫び、突撃する。

その横から悪魔たちが濁った声で魔法を詠唱し始める。

『極光よ、血塗られた不浄の大気を人の手に還せ……』

ダークホーリー!

漆黒色の光弾がミルウーダの周囲を包み込む。このままでは、やられる！

「はあッ!!」

間髪入れず、アグリアスさんが悪魔たちをなぎ払った。

青い剣閃が悪魔たちを消し飛ばす。

黒い光は不発に終わった。

『やってくれる……。これならどうだ……。!』

『大地を統べる無限の躍動を以て、圧殺せん!』

タイタン!

ベリアスに突撃するミルウーダの目の前に、地を砕く巨人が立ちはだかる。

ミルウーダはそれを構わず突き崩し、ベリアスへの門戸を開いた。
「今よ、ラムザッ!!」

彼女の檄に喝を入れられ、僕らは剣を手にベリアスへと突撃する。
ムスタディオの銃撃が。

アグリアスさんの聖なる剣が。

ミルウーダの不屈の闘志が。

そして、僕の意志が。

それぞれの形を成してベリアスへと一斉に突き刺さった。

ベリアスの放つ威圧感と邪悪な気配が中空へと霧散していく。
バケモノの濁った声が城内に響き渡る。

『うおおおおおッ!! ばかな……。たかが人間ごときに……。!』

宙に浮かぶ血風がベリアスへと集約し、炸裂する。

轟音、そして爆発。

ウィーグラフ——ルカヴィの呆気ない最期だった。

side：アルマ・ベオルブ

殺戮から逃れる途上、私は執務室らしき部屋に辿り着いた。

数人の潰された死体を見て、うつとえずく。

「……う、……うう」

階下の騎士が呻き声を上げたのが聞こえた。

急いで階下に下りて、その騎士の元に侍る。

「しっかりして」

「……け、剣はどこだ……？ どこにある……？」

死の瀬戸際にありながらもその騎士は未だ戦う意志を見せていた。

「あいつを……倒さなければ……。お願いだ……明かりをくれ……

真っ暗で……何も見えない……」

「……もう大丈夫よ。戦わなくてもいいわ……。安心して……」

「……きみの兄貴……に……伝えてくれ……。やはり……。聖石は……」

「悪魔の力」……父は……。あいつは……。父上じゃない……。聖石の力に

よって……。ルカヴィに……。ゲホッ!!」

激しく喀血する。素人目に見ても、もはや手の施しようがない。

「お願い、もう喋らないで……」

しかし彼はその生命の灯をわずかに灯すように、続ける。

「ラムザの……言っていたことは……。正しかった……。あいつを……。倒

さなければ……。世界は……。滅ぶぞ……」

私にはどうすることも出来ず、ただただ彼の末期の言葉を聞き届け
るしかなかった。

「皆に……。伝えて……。くれ……。戦争なんて……。やってる場合じゃない

……。協力して……。立ち向かわないと……」

彼の一言一句が私の内側に響いてくる。悲痛な、死への抗い。

「け、剣はどこだ……！ くそ……腕が……動かない……」

私は彼をせめて、これ以上苦しませないように、語りかける。

「大丈夫よ、安心して。大広間に『あいつ』の死体があったわ」

届いて欲しい。この胸の思い。これ以上、彼が苦しまないよう。

「兄さんが倒したのよ。だから大丈夫。あなたが戦う必要はないの……」

それが通じたのか、彼の顔に安堵の表情が差したような気がした。

「本当か……？ そうか……なら、安心だ……」

そして、最期の役目とばかりに私に伝える。

「オレの……上着の中に……聖石がある……それを……きみの兄貴に……」

私は彼の上着の中に手を入れた。

コツンと、何か硬いものに手が触れる。

抜き取ると、それは双魚宮の紋章が刻まれたクリスタルだった。

「必ず兄さんに渡すわ」

「頼んだぞ……」

刹那、彼が首を垂れる。

「……ふう、……疲れた……眠い……少し眠るよ……」
それを最期に、彼はこと切れた。

side：キラ・シルベント

クレスティアと別れた私は、ミルウーダを探して城内を散策していた。

どこを見ても、凄惨な死体ばかり。この中にまさか、ミルウーダが居るんじゃないかと、不穏な思いが心をよぎる。

ブンブンと頭を横に振る。

ミルウーダはラムザも認める強靱な戦士だ。こんな殺戮の中でも、

きつと無事に違いない。

私は目の前に迫る扉に向かった。

それを開く。

そこにも無残な死体が数人転がっていた。

一番最初に眼に入ったのは、死体と化したイズルード。それに。

「アルマ!!」

「キラさん!?!」

「よかった、きみはまだ無事なんだな?」

「ええ、私は大丈夫です。でも……」

ちらりとイズルードの死体に視線を寄せる。

「イズルードか……、くそツ!!」

私はその場に膝を突き、床を拳で殴り付けた。

「なんでこいつが死ななきやならないんだ! 私なら助けられるんじゃないのか!? どうして私はいつもこうなんだ!!」

「キラさん……」

心配そうな表情でアルマが私を見ている。不安にさせるわけにはいかない。

「……大丈夫、心配しないで。それよりもここから早く逃げるんだ。

奴が来る前に——」

「——誰だ、そこにいるのは……?」

階上の扉から壮年の男の声が聞こえた。

入ってきたのは……神殿騎士ヴォルマルフ……!

「そこにいたのか。貴様らもあの世へ送ってやろう」

コツンコツンと階上から階段を下りてくる。

「怖がらなくともよい。苦しまずに殺してやるから……」

不意に、絶叫が遠くから響いてきた。断末魔の声だ。

「なんだと……、ベリアスがやられたのか……?」

ふっと、ヴォルマルフがアルマの方を見やる。

「貴様の兄はずいぶんと悪運が強いようだな……」

アルマはヴォルマルフから離れるように背後へとたたたらを踏み、私
はそれを庇うように前に出る。

「邪魔をする気か……？」

私は剣を抜き放ち、ヴォルマルフと対峙する。

「簡単にやれると思うな……！」

不意に、ヴォルマルフの胸元が淡い光を放つ。

「そうか」

その言葉を期に、私の腹を灼熱感が襲った。

皮膚を突き破り、バキバキと骨を砕き、ぶちぶちと内臓が千切れる
音。

それらが正確に、やけに酷く耳に届いた。

私は腹を抑え、その場に倒れ伏し、ゴホツと大きく吐血した。

この世界に来て、初めての致命傷だ。

「キラさん!!」

アルマの悲痛な叫び声が聞こえる。だが、遠い。

「次はおまえの番だ……」

ヴォルマルフがアルマに近付く。

と。

ヴォルマルフが胸元へと手を置いた。

「なぜだ……、なぜ、ヴァルゴが反応するのだ……？」

ヴァルゴが音を立てて淡い光をヴォルマルフの胸元から放った。

「まさか……、貴様は……」

ヴォルマルフがアルマの胸ぐらを掴み上げる。

「これはいい！ 思いがけぬ処で出会うとは……！ あと百年は必要
だと思ったぞ!! まさか、貴様がそうだったとはな……！」

「やめてッ!! 離してッ!!」

アルマが悲痛の叫びを上げる。目の前にいるのに、それがどこまで
も遠い。

「安心しろ、命を奪ったりはせん。さあ、来るんだ!!」

ヴォルマルフがアルマのみぞおちに拳を突き込み、気絶させる。

そしてどこかへと消え去り、後には瀕死の私だけが残された。

(誰……か……)

目の前を双魚宮の聖石が転がっている。

アルマが手にしていたものが、ヴォルマルフの転移の際に転がり落ちたのだろう。

そして、それが。

中空に浮かび上がった。

《我が選びし者よ……。我と……、契約を結べ……》

聖石が、私に話しかけてきた。

「馬鹿な……、いつたい、何の冗談だ……?」

《おまえの救済を求める心と……、死に瀕する悲嘆が我を呼び出した……。さあ……、契約を結べ……》

ウィーグラフとは違う、お断りだ。

そう言えたならどんなに簡単だっただろう。

しかし死に瀕してしまえば、人間はどこまでもその命に執着するものだと改めて思い知った。

そして、私は。

「お願いだ……助けて……くれ……」

みつともなく、聖石に命を乞うていた。

《我が名は背徳の皇帝マティウス……。その契約……、確かに請け負おう……》

双魚宮の聖石が激しく光を放つ。

地面からまるでリオファネス城の惨劇をすべて集めたかのような

無念と悲哀が、光と声となり、私を包み込んだ。

そして、現れたのは。

上半身を鎖で縛られた女性の彫像に、下半身がサハギンのヒレで足をひたりと付くバケモノの姿だった。

『これが……ルカヴィ……』

体から失われた力がみなぎってくる。

そして体中を魔性の血——いや膨大な知識が巡ってくる。そうか。

これが、クレスティアも欲したブレイブストーリーの極致。

いや、それだけじゃない。

私はそれ以上の力と知を得た。

クレスティアが考えていたことが今になってわかる。

彼女の思いが私に伝わってくるようだ。

所詮は、彼女も道化だったのだな。

しかし、私は違う。

もはやブレイブストーリーに従う必要すらない。

私が得た力は何者をも御せはしない。

私は躊躇していた。

しかし人間の身では手に余っていたものよりも、遥かに大きな存在がここにはある。

この力があれば、私は誰よりも人を救える。

これがキラ・シルベントの物語だというのなら、それに従ってやろうじゃないか……！

私は哄笑した。

笑いながら、涙を流していた。

歓喜か悔恨か、私にその区別はつかなかった。

side：クレスティア・アルヴァン

私はベリアスさんの消滅と共に、瞬時にその場を離れました。

あのままミルウーダさんに見つけられでもしたら事ですからね。

リオファネス城のメインイベントを消化したところで、さて私はどうしましょうかと考えます。

あと残っているのはラファさんとマラークさん関係のイベントだけ。

そこに行くわすのは――

「――誰だ、きみは……」

低い男の声が聞こえました。思わずそちらに顔を向けます。

そうでした。ベリアスさんとの激闘で忘れていましたが、もう一人、要注意人物がいたではありませんか。

「……ああ、きみは確か一年ほど前に世話になったね……。覚えているよ……。クレスティア・アルヴァン女史……」

エルムドア侯爵。

ヴォルマルフさん、ウィーグラフさんに続く、三人目の悪魔の眷属。彼らにこのリオファネス城は蹂躪されたに違いありません。

私は無言のまま、腰に佩いた剣に手をかけていました。

エルムドア侯爵もまた、いつの間にもやら抜刀しています。

「このような場所であ会った不運を呪うといい……。ヴォルマルフはこの城の住人すべてを殺し尽くさねば気が済まないらしいから……。私はそんな物騒なマネをしたくはないのだが……」

言つて、ヒュンと持っていた刀を一振りしました。

ちよつと待つて。私まだ死にたくないんです。まだ見たいものがいっぱいあるんですから。

そんな私に構わず、エルムドア侯爵は腰だめに刀を構えます。

「安心して逝くといい……。せめて苦しまずに死なせてやろう……」
ひいん。私は泣きそうな声を上げてしまいます。

死体しか転がっていない城内、神殿騎士ですら無情に殺す騎士団長、そして目の前のエルムドア侯爵。

この三つが繋ぎ合った答えは、
絶体絶命。

この四字に尽きました。

「……………」

不意に、いざ殺さんとしたエルムドア侯爵の動きが止まりました。
胸元から何かを取り出します。

それは聖石でした。

「この気配……、そうか……きみもか……」

訳の分からない事態に、私は謝ってお茶を濁そうとしましたがどうもそういう展開ではない様子。

聖石がキーンキーンと鋭い音を放ちます。

「存分に語り合うといい……………」

そう言って、エルムドア侯爵は聖石を私の目の前に突き出しました。

言葉が流れ込んでいきます。

いや、言葉ではなく、これは靈魂でしょうか？ 言霊と言えるのかもしれませんが、生憎、私はそういうのには疎い身。

ただ、この音は私を迎え入れようとする意思を思わせてくれました。

それを受け取った私は、胸を大きく揺り動かす何かを感じます。

聖石による、眷属を引き入れるような、歓迎の鳴き声。

聖石が放つすべての言葉を受け取った私は、エルムドア侯爵の前に
跪きます。

「侯爵様、お願いします。私をルカヴィの眷属として迎え入れてください」

自然と、私はそんなことを口走っていました。

侯爵様はそれを見て頷き、刀を一振りして。

「今はまだ眠るがいい……。目覚めた時……。その時こそきみは我々の眷属として生まれ変わるだろう……」

刀が一振り、私の体を一閃して斬り裂きました。

急所を正確に裂いたその傷は、出血もほどほどに、しかし確実に私の命を奪っていきます。

熱い、けれど寒い……

しかし私はどれだけ祝福されているのでしょうか。

私はこのまま死に逝くのか。

そんなことはありえませんが。侯爵様もまたそれを期待されている。

もはや私はただの人間じゃない。

次に目覚めた時は、私は人を越えるものになっている。

その嬉しさ、楽しさ、喜びに歓喜の心を震わせながら、どう、と倒れ伏し、意識を失っていきました。

もうひとつの力

side：ラファ・ガルテナーハ

殺戮から逃れるバリントンを追いかけていた私は城の内部の逃げ道を塞ぎながら、その姿を追っていた。

徐々に道が狭く、高くなっていく。

そして最後の扉を開けた時、ごうつと突風が吹き抜けた。

城の屋上にバリントンを追い詰めた私は、剣を片手に奴へと肉薄する。

「この痴れ者め！ 恩を仇で返すとはこのことだッ！」

バリントンが怒声を発する。

「おまえが生きていられるのは誰のおかげだと思う！ わしだ、わしのおかげだ！ わしがおまえをあのガレキの山から救い出したのだッ！ その恩を忘れたかッ！」

しかし復讐に燃える私はその怒声に対してまた、怒声で返す。

「恩を仇で返すだつて？ 村を焼いたのはおまえではないか！」

そうだ。

あの炎に炙られた地獄を作り出した存在。

それこそが。

「父さんや母さんを殺したのはバリントン……、おまえだ！」

私は煮え立った怒りの渦を頭に、奴を弾劾する。

「恩を仇で返す？ 違う……、これは正当な復讐だ！」

私は剣を構え、バリントンに迫る。

それに対し、奴もまた銃を取り出し、私に射線を向けた。

「復讐だど？ おまえにわしを殺せるのか？」

そうだ。

そうでなくては私の復讐は終わらない。私は私のけじめをつけなければならぬ。

「わしはおまえの父親だぞ？ おまえを育てたのはこのわしだ！ その父を殺そうというのか？」

それはすべて嘘だった。

私や兄さんを救い出して、暗殺集団に放り込んでおいて、私たちの力を軍事力に組み込もうとした。

そのやり口、私は決して許しはしない！

「さあ、殺してみるがいいー！」

言っている、この偽善者が。

私がこの剣で復讐とけじめもすべて斬り裂いてやる！

だが。

足が前に出ない。

どころか、沸騰していた頭の中がどんどん冷えてしおれていく。

「ククク……、殺せはしまい……。何故、殺せないかわかるか？」

バリントンがどこか勝ち誇った表情で嘲笑する。

「それはおまえの身体が覚えているのだ……。恐怖をな……。」

村を焼いたバリントン、私たちを救ったバリントン、そして暗殺技術を仕込んだバリントン。

いくつもの顔が思い浮かび、それらがすべてごちやごちやと頭の中で複雑に乱舞する。

「だが、安心しろ……。次第に恐怖が恐怖でなくなるよ。クツクツクツク」

「その話は本当なのかッ!!」

唐突に、男の声が屋上に響いた。

マラーク兄さんだ。

「……今の話は本当なのか？」

訝し気に、されど詰問するようにバリントンへと言葉を投げかけた。

「おまえまでわしに刃向かおうというのか……？　なんと恩知らずな奴らなのだ！」

私はぐちやぐちやに沸き起こった感情を全て押し込め、殺意だけで体を動かす。

もう何もかもを投げ捨てて、私は叫んだ。

「殺してやるーッ!!」

「やめろ！ ラファア!!」

バリントンに飛び込む私の前に体を投げて、私を体当たりで留めた。

そこに銃撃を放つバリントン。

一瞬の交錯の間に挟まれ、銃弾はマラーク兄さんを撃ち抜いた。

「兄さんッ!!」

私は倒れ伏した兄さんの元に駆け寄る。

「兄さん！ しっかりして！ 兄さんーッ!!」

side：ラムザ・ベオルブ

僕らは死体を改めつつ、城内を上へ上へと進んでいった。

徐々に階段が細くなり、城内を進む。

ひときわ大きなその扉を開くと、突風が僕らを襲った。

どうやらここがリオファネス城の屋上らしい。

そこで僕らが見たものは。

「ラファア！ マラーク!!」

倒れ伏すマラークと、それにすがるラファアの姿だった。

「おまえがラムザか。……動くなよ」

彼がバリントン大公か。銃をちらつかせながら僕らを牽制する。

「さあ、ラファア、マラークを助けたかったら聖石をこちらへ持ってこい」

聖石はマラークが所持しているのか。

だが、今のマラークは……

「マラークが持っているはずだ。捜して持ってくるんだ!」

ラファアがマラークの衣服から聖石を見つけたらしく、それを抜き取った。

その時、彼の背後に人影が差した。

大公はまだ気付いていない。

「そうだ、それを持ってくるんだ！早くしろ！……！！」

大公もようやく気付いたのか、背後に現れた人影に振り向く。

若い女性の姿が、ハッキリと僕らに見えた。

彼女はその華奢な体格とは裏腹に、大公の体を片手で掴み上げ。

「グアツ!!」

無造作に、大公を屋上から放り投げた。大公の絶叫がこだまする。

「……その聖石をこちらに渡してもらえないかな？」

低い声が屋上に響く。ぼそりとした小さな声だったが、なぜかそれがハッキリと聞こえた。

その声の主を見て、僕は驚きを隠せずに言う。

「あ、あなたは……、エルムドア侯爵……。なぜ、こんなところに……？」

思わずラファが、聖石を懐にしまいこむ。

「そうではない……。こちらに渡すんだ……」

聖石。魔性の女。戦死したはずのエルムドア侯爵。

頭の中でピースが繋がった僕は、ラファに警告を発した。

「ラファ！ 気をつけろツ!! そいつらは人間じゃないツ!!」

そんな僕をまったく意も介さずに、エルムドア侯爵が僕に話しかける。

「……きみが異端者ラムザか。……きみには礼を言っていないかったな。いつぞやは世話になった。ありがとう……」

殊勝な言葉を投げかけられてもまったく嬉しくない。

コイツらは、ルカヴィの一味だ！

「私はヴォルマルフのように手荒なマネをしたくはないのだよ。その辺りをわかって欲しい……」

この惨劇はやはりルカヴィの力なのか？ ならばこの惨状を成したのはそのヴォルマルフとやらなのか……

「さあ、おとなしく聖石を渡してもらおうか？」

エルムドア侯爵が宣告する。

「そうしてくれたなら、ヴォルマルフに彼が連れ去ったきみの妹を返してくれるよう頼んであげよう」

その言葉は僕にとって衝撃的なものだった。

「アルマを!? どこだ、返せッ!!」

「私の話を聞いていないのか? まず聖石が先だよ……」

一瞬、僕は聖石とアルマの身柄を天秤にかけた。

アルマは取り戻さなければならぬ。されど、聖石は……

「……だめだ、渡してはならない」

「妹を見殺しにするのかね?」

聖石を渡さなければ、アルマの命は無い、ということなのか。

もはややむを得ないのか。

「きみは妹を助けるために危険を承知でこの城へ乗り込んで来たのはなかったのかな……?」

「くッ……」

僕の様子を見ながらエルムドア侯爵はふう、と息をついた。

「まあいい……。今夜は思いがけない拾い物をした」

そう言つて、あっさりトラファの持つ聖石を諦める。

僕が訝しんでいると、彼は連れ立った二人の女性に声をかけた。

「セリア、レディ、今夜は引き上げるぞ!」

二人は即座に体を屋上から消した。

「異端者ラムザよ、我が聖石が欲しくば、ランベリー城へ来るがいい! 待っているぞ……!」

そう宣言して彼もまた屋上から姿を消した。

残されたのは、無傷の僕ら、それにラファと。

「兄さん……」

大公の凶弾に倒れたマラークだった。

僕らがリオファネス城に辿り着いた頃は既に昼過ぎだったが、外ではいつしか暗夜が過ぎ、東日が顔を出してしようとしていた。

「兄さん……、ほら、夜が明けたよ。よく夜が明けるまでいろんなことを話したよね……」

ラファはどこか虚ろな表情で、視線を太陽に向けながら、物言わぬマラークへと語りかけていた。

「旅行したかったな……。ほら、よく話したじゃない。戦争が終わって平和になったら私たちガルテナーハ一族の故郷へ行ってみたいって……」

僕はそれを慰めることも、たしなめることも出来ない。

ラファとマラークの最後の時を静かに眺めていた。

「ねえ、覚えてる？　ねえ、兄さん……、なんとか言つてよ。兄さん……」

僕は行方不明のまま、姿を消したアルマに思いを馳せる。

(アルマ……)

刹那。

ラファの持つ聖石が音を発し始めた。

「……なに、これ？」

彼女は懐から聖石を取り出すと、聖石が光を放ち始める。

「まさか……、ラファの心に反応しているのか……？」

僕は咄嗟に危機感を覚えた。

「マラークの死を悲しむ心……、ウィーグラフの絶望と悲憤がベリアスを呼んだ……」

戦慄する。ウィーグラフの時と同じように。

「だとしたら……！」

思わず、僕は鞘に納まった剣に手をかけていた。

「おまえも、悲しんでくれるの……？　ありがとう……」

「違う……、ラファ……、それは……」

聖石がひとときわ鋭い光を放つ。

それは轟音と爆発を呼び出し――

――は、しなかった。

代わりに天上からゆつくりと光が降り注ぎ、マラークを包み込んでいく。

「……………え？」

呆然とした僕の目の前で、マラークの体がかすかに動いた。

「う……………、う……………」

「に、兄さんッ!!」

「ラファ……………？ ここは……………？ オレはいつたい……………？」

蘇ったマラークの体を必死に抱きしめるラファ。

「兄さん……………、兄さん……………、兄さん……………。よかった……………」

「痛いよ……………、ラファ……………。あはははは……………」

マラークの独白を僕は聞いていた。

「誰かに喚ばれたんだ……………。わからない、聞いたこともない声だったよ……………」

彼の不思議な復活は、聖石自身が行ったとでも言うのだろうか。

「正しき心を持つ者のもとへ戻れ……………、その声はそう言ってた……………」

僕は独り言ちるように、聖石の生まれた経緯を想像する。

「聖石は神が創ったものではなくもつと邪悪な……………、そう……………、ルカヴィがこの世界へ出現するために創ったものだと思っていた……………」

「誰が創ったのか知らないが要は”使う側”の問題ということか……………」

僕の言葉に、マラークはそう結んだ。

side:キラ・シルベント

渦巻く知識が頭の中で反響する。

その気色悪さに辟易しながら私は城内を散策していた。
いた。

見つけた。

うつ伏せに倒れ伏したクレステイア。

クレステイアの遺体……いや生命の鼓動は感じる。

だが弱々しい。

私は近寄って、魔法を詠唱し始める。

「空の下なる我が手に、祝福の風の恵みあらん！」

ケアルガ！

癒しの光が彼女の体を包み込み、急所に達した傷までも回復していく。
く。

完全に傷は塞がり、彼女の指先から、体までわずかながらに動いた。

「起きなよ、クレステイア」

私は冷や水をぶっかけるように冷たい声で話しかける。

「ん……うーん……」

彼女がゆっくりと体を起こす。きよろきよると周囲を見回し、最終的に私を見て留まった。

「あれ……、キラだ……」

「そうだよ、きみの親友、キラ・シルベントだよ」

「そっかー……、うぐツ!!」

彼女は口元を抑えながら、顔を青ざめさせる。

「ちよ、キラ、ごめん……向こう向いて……」

言われるままに私はクレステイアに背を向ける。

げえっと吐瀉物を側溝にぼちやぼちやと垂れ流す彼女の音が聞こえる。

幾百年の知識が巡る感触に、体が耐えられなかったのだろう。

私は背を向けたまま、無言で後ろ手に彼女へとハンカチを手渡す。

彼女はそれを受け取り、汚れた口回りを拭ったようだ。

「そのハンカチはあげるよ。さすがに吐いた後のモノは受け取りたく

ないからね」

「うん、ごめん……」

陶然とした顔で、クレスティアが私に詰問する。

「つていうか、なんでキラがここにいるの？ またお説教に来たの？」
「そのつもりは無いよ。なんだかんだで、私はブレイブストーリーから外されたみたいだ」

言って、聖石を取り出しクレスティアに見せる。

「それ、聖石……」

「私は、ルカヴィになったよ。おぞましいほどの高揚感が今も私の中を駆け巡っている」

それを聞いたクレスティアは一瞬、呆然としたが、すぐに見慣れた爛々とした表情になって。

「ルカヴィになったって……、それ、凄い！ 大出世じゃない！ 私なんて眷属止まりなのに！」

それから矢継ぎ早に質問が飛んでくる。

「やっぱり全知全能になったの？ ウィーグラフさんみたいに、人間の悲鳴を聞きたい？ ヴォルマルフさんとは仲良くなった？」

「そんないつぺんに聞かれてもね……。少なくとも、今いる私は他の誰でもない、キラ・シルベントだよ」

逆に、私はクレスティアに問う。

「それより、きみも闇の眷属になったって言ったね。エルムドア侯爵辺りに諭されでもしたのかい？」

「大当たり〜。聖石に選ばれたって感じかな。なんかそんなイベントがあつて、エルムドアさんの眷属になっちゃった」

ふむ、と顎に手を当てて私は一つ、考えを言った。

「……良ければクレスティア、エルムドア侯爵じゃなく、私の眷属になつたらどうだい？ ブレイブストーリーの範囲から逸脱してしまつた”異邦人”同士として」

「んー。いいかも」

適当なものだ。

「きみにもやりたいことがあるんだろう？ もう私たちにブレイブス

トリーは関係ない。従っていけば、ラムザたちに討たれるのがオチだ。そのためにも、上手く立ち回らないと、ね」

「そっか。これで正真正銘、ラムザ君たちの敵になったんだものね」

「でも私たちには戦力が足りない。なんとかしてどこかで調達できないかな」

「それに関しては当てがあるよ。すぐに連れてきてあげる」

言いつつ、魔法で消え去ろうとする彼女。

だが私には言わなければいけないことがある。

”ゆかり”

彼女は眼をパチクリとして、私の表情を覗き込むように眼を合わせる。

「私はきみに謝らなければならない」

私は俯いて、続ける。

「今までゴメンね。私、きみが邪悪だと勝手に決めつけていた。いや、私たちと戦い合っていたことを言うわけじゃないけど、きみは本気でブレイブストーリーを楽しんでいたんだね。私やクラウスと違って、”物語”を”現実”と受け止めて、ラムザたちを追っていたんだ。それを忘れて、私はきみに偉そうに、一方的に説教して、やめさせようとした。この”物語”は私たちのものじゃなく、ラムザたちの”現実”のものだっというのを忘れて、ね」

対して、クレスティアは今までの爛々とした笑顔ではなく、微笑むような表情で返す。

「そんなの、今さらだよ、”美月ちゃん”。私だってちよこつとだけやり過ぎたかなあ、って思っていた時もあつたし。今は隣に”美月ちゃん”がいてくれる。それだけで充分、私は嬉しいよ」

「恩に着るよ」

私はそう言つて、”ゆかり”——クレスティアに首を垂れた。

クレスティアはそんな私に心を開いてくれたのか、いや、元々開いていてくれたに違いない。

私はその最初の一步に、ようやく踏み入れたのだ。

「さて、漫談はこれまでにしてお互いの物語を創つていこうよ。出来

るなら、それが結実するようにね」

「ああ、ブレイブストーリーはご破算だけど、これからは私たちの物語だ。いつかまた会えるといいね」

「当然だよ。」美月ちゃん——キラは私の親友なんだから」

そう結んで、彼女は今度こそ本当に姿を消し去った。

どこに行くのか、魔力の軌跡を追えばすぐにわかるところだったが。

さて、私も行くのでしょうか。

借りがあることも含めて、連中に挨拶でもしておくか。

ラムザたちには……クラウスがいるから平気だろう。

そうして私もその場から消え去った。

行き先は特に決めていなかった。

幕間 悪意ある者たちへ

幕間 《クレステイア・アルヴァン》

side：クレステイア・アルヴァン

こんばんは。クレステイア・アルヴァンです。

土砂降りの雨の中、分厚い外套を被ってイグーロスの共同墓地に来ています。

「そこの方、どなたかをお見舞いですか？」

振り向くと、好々爺然とした老紳士が、傘を差してそこに立っていました。

墓場の世話人さんでしょうか。

私はゆつくりと首を垂れました。

「ええ、私の上官です。一年前の折、ジークデン砦での戦いでお亡くなりになりました」

私は作り笑顔で返します。まあ殺ったのは私なんですけどね。

「それはそれはご愁傷様です。こちらにはもう何度も来られているのですかな？」

「いえ、実は私、グレバドス教会の神殿騎士団に所属しております、だしぶ雑務に追われていたんです。ようやく間が空いたから、こうして改めて彼に参ろうと思ひまして」

「そうですね」

老紳士は墓に向けて聖印を切りました。

私も礼儀作法には大分疎いので、老紳士のマネをします。

「……ファーム」

私は手を合わせながら、あえて何も言いませんでした。

老紳士は私を殊勝だと思ったのか、それきり私には何も言わず、寂し気な笑顔だけを残して去っていきました。

そうして、この土砂降りの中、わざわざ墓参りなんて来るのは先ほどの世話人さんくらいで、彼がいなくなつてようやく私一人になりま

した。

かねてより立ててたプランに従い、私は魔法を詠唱します。

「生命を司る精霊よ、失われゆく魂に、今一度生命を与えたまえ！」

アレイズ！

魔法の詠唱と共に私の目の前の墓塚に、柔らかな光が降り注ぎます。

光が墓石に吸収されて、しばらく待ちます。

十分ほどもした頃でしょうか。墓がガタガタと揺れ、墓石の地面からボコつと手が掘り出されました。

もう片方の手も地面から這い出し、やがて顔を、体を地面から引っこ抜くように這い上がります。

ああつと、言い忘れてました。

墓石に刻まれた名前、それは。

『アルガス・サダルファス』。

ジークデン砦でラムザ君たちと戦い、その脇から私に剣で突き貫かれてお亡くなりになった、ザルバツグ將軍の与力です。

「……………うぐつ……………、こ、ここは……………」

アルガス君、言うや否や口元を抑えます。

墓石に手を突き、その場で嘔吐して胃の中のを吐き出しました。胃の中に何も物は残ってなかったので胃液だけでしたが。

「大丈夫ですか？ アルガス君」

労い程度の言葉で私は彼に話しかけました。

「……………？ なんだ、どこかで会ったか、おまえ」

「やだなあ、忘れないでくださいよ。ジークデン砦で最期を看取った仲じゃないですか」

それだけで、彼の中で頭の中のピースが噛み合ったようです。よしよし、記憶の経過は良好、と。

「ジークデン砦……………？ なら、貴様はまさか……………」

「クレスティア・アルヴァン、ただ今罷り越しました。元上官、アルガス君」

「貴様、よくもオレの前に姿を現せたものだな……………」

とは言うものの、汚れた白装束に無手のアルガス君なんて全然怖くないもので。

それはアルガス君も分かっていたようです。

「チツ。それで、何の用だ？」

「蘇って第一声がそれですか。せっかく私のアレイズで地獄の底から這い戻ってきたというのに。まあ私のアレンジが入ってますから本物の人間じゃなくても変じゃないですが、見たところそういった部分はなさそうですね」

うん、私の白魔法ばつちり。せっかくルカヴィの眷属になった私です。これくらいは試してみないと、ですね。

「だから、何の用だと聞いている」

アルガス君が急かします。もうちよつと心に余裕を持って生きられないんでしょうか。貴族だの平民だの、肩が凝って仕方ないと思うのは、もはや人間を超越した私だからでしょうか。

私は応えます。

「別に用という用は無いんですけどね」

「ならとつと失せろ」

「まあそう言わずに。実を言うと戦力、と言えば聞こえはいいですが使い走りの手駒が欲しかったんですよ」

「オレがおまえの手駒、なあ？」

「だってアルガス君、もうそれくらいしか道はないですよ。ジークデーン砦での戦死で北天騎士団の籍は剥奪されているでしょうし、私は神殿騎士団の一員ですからね」

「神殿騎士団……聞いたことはある。確かグレバドス教会が擁する武闘派集団のことだったな」

「そうですねアルガス君、世の中を席捲するのは王権でも元老院でも公権力でもない。純粋な暴力のみが生き残る機会がやって来たんですよ」

得意気に話す私に、アルガス君はツンと鼻を上げて。

「そのアルガス”君”っていうのはやめろ」

「いいんですか？ 私これでも神殿騎士団員張ってるくらいには実力

ありますよ？ それに私の方が年上なんですから、敬ってくださいよ。ほらほら」

「……チツ」

さすが悪魔の実力社会、アルガス君でもその辺は理解したようで、私に楯突くことなく舌打ちだけして納得したようです。暴力万歳。

私は懐に持っていた、畳んだ外套を彼に投げ渡します。

「さっさとそれ被ってくださいよ。汚れて青ざめた相貌の少年だなんて、どこのB級映画のゾンビかって思われちゃいますよ。ちやつちやと着てください」

言うや否や、私は墓地を立ち去っていきました。アルガス君を置いて。

「おい、待てよ!!」

外套を被り終えたアルガス君が私の後を追ってくるのが分かりません。健気ですねえ。使用人と上官だった私たちがこうも立場逆転してしまえるなんて、これもブレイブストーリーの枠から外れていないとしたらちよつと寂しいな、とも思ってしまった。

私たちはそれから安手の酒場に入って、エール片手に事情を説明します。もちろん先の白装束は捨てまして、適当に武器を見繕って装着してもらいました。

「……つてなわけで、リオファネス城で一回死んじやったんですよ、私。それをキラが助けてくれて、闇の眷属に至る、というわけです」
「なるほどな。……しかしまさか侯爵様がルカヴィの眷属になつていたとはな」

「ルカヴィ、なんてもの、本当に信じてます？」

「キラが聖石片手に貴様に言っただろう。あの正直者でクソが付くほど生意気なガキが得意気になつてるようじゃ世も末だな」

「ラーグ公とゴルターナ公も騎士団のぶつけ合いで、それをルカヴィが中心になって操っている、まさに世紀末ですね。それを止めるのがラムザ君、先延ばしにしようとしているのがデイリータ君なわけで

す」

「はっ、あのガキどもに何が出来るつてもんだよ」

「ラムザ君を侮らない方がいいですよ。これまで現れたルカヴィを散々に討ってきた剛の者ですし、デイリータ君はデイリータ君で、教会に帰属しながら出世街道まっしぐらですから」

そこでアルガス君、エールを空にしたジョツキをダン、とテーブルに叩き置きます。

「貴様が言ったんだろ。もうこれからは悪魔による暴力の時代だろうが。試しにどうだ？　ダイスダーグかザルバツグでも始末してやろうか？」

「やめた方がいいですよ。あの人ら、別の意味で人間やめてますし」

私もエールを飲み干し、ジョツキをテーブルに置きます。

げっぷを口の中で飲み込みながら思索します。

これからラムザ君たちは本格的に教会の邪魔に入ります。そしてその混乱に乗じてデイリータ君が暗殺と謀略を重ねて出世にひた走ります。

どうやらここがルカヴィとしての活動の過渡期のようなですね。

このチャンス、生かさねば何のための私たちの”物語”だか。

キラも同じ結論に達しているでしょう。

このまま放っておいてはルカヴィ討伐に専念するラムザ君たちの後手に回るのは明白。

どこかで抑えを利かせないといけませんねえ。

そう思う私は、私たちの”物語”に暗く淀んだ笑みを浮かべるのでした。

クスクスクス……

幕間《キラ・シルベント》

side：キラ・シルベント

リオファネス城から転移して一瞬、ここはどこかと本気で悩んだ。ゲームで大まかな地理は分かっているつもりだったが、それが細かな細部に至るとどこだか本気で分からなくなる。

まずは店だ。

店で売っている道具を見れば、大体の地理は分かる。武器防具が揃っているなら城下町。魔道士用の武具があれば貿易都市、などなど。

それにしても。

「クレスティアは本当に、この物語を観客として楽しんでいたんだな」今まで気づかなかったが、以前、私が見ていた世界は本当に色褪せた世界だったんだと思い知らされる。

物語の登場人物として道化を演じていた私と違い、ラムザたちを物語のピエロとして、観客に徹していたクレスティアにとっては、色褪せた世界がこんなにも美しい彩りに満ちた世界として見えていた。

正直、羨ましい。

私も、下手な正義感なんか放り捨ててクレスティアのように振る舞えばよかったのだろうか。

……ああ、これは無駄な問いだ。

私はもはや人間ではない。

ラムザと出会えば干戈を交えることになるだろう。

だけど、それはやはりブレイブストーリーの範疇じゃないか？

ルカヴィを追って、アルマを助ける。ラムザのストーリーはこれだ。その間に何体か多くルカヴィを討滅しても些細な傷痕だろう。

よって、ラムザとの邂逅は出来るだけ避けるべきだ。

ラムザがルカヴィとの戦いに参加しないところ……ああ、そうだ。

ベスラ要塞。

ここに獅子戦争の終末が訪れることとなるだろう。

ならばそれが止められなければ？ あるいは時間を稼いで両軍を

激突させてみては？

私はここに啓示を受けた気分になった。

多分、クレスティアも同じ考えに至ったに違いない。

何はともあれ、私が仮にラムザたちと邂逅しても私と気付かれない方がいい。

私は武器屋に入って、色とりどりの金属武器を見た。どうやら城下町らしい。どこの城下町かは計りかねるが。

いや。

私がここに来たのはもはや運命だったのだろう。

とはいえまずは武器屋だ。

私は東方の、いわゆる片刃の剣——刀を二振り買った。

他にも見て回る。何か私の正体を簡単に隠してくれるものはないだろうか。

見て回ると、思いがけない代物に出合った。

鬼の仮面。黒鍛工の全身甲冑。

これらがあれば鬼面の武者として正体を隠せると同時、ラムザたちにとって新たな脅威として見なされるのではないか。別にルカヴィでなくても良いのだ。

何より、私の厨二心ちゆうじこころを刺激した。

正体不明の鬼面武者。いいじゃあないか。

満足しながら私はそれらをなけなしの所持金で買い取る。これで懐の財産はゼロだ。

そして武器屋を出た。

出た矢先、遙か遠くに城が見える。

湖——確かディアラ湖とかいったか。その畔ほとりに建つ、“白亜城”の異名を持つ美麗な城だが、先の五十年戦争で大きな傷跡を残している。その上、獅子戦争の最中に流れ矢で戦死したエルムドア侯爵がいなくなつて以来、無人の廃墟と化している。

盗人が荒らしに来ないのだろうか。もし来たとしても、ルカヴィの眷属たる悪魔たちが生還を許さないのだろうか。

そう、ランベリー城はルカヴィの居城と化していた。

適当な転移先を選んだつもりだったが、連中へのお礼参りに行こうと無意識に思ったのか。

とりあえず、会いに行ってみることにした。

一度、私を殺した元凶に。

ひとけ 人気がない所からダレポの魔法でランベリー城前に転移する。

この転移魔法、便利なのだが異様な浮遊感が妙に腹の底に響くようで、少々気分が悪い。

ランベリー城の入口に差し掛かった時、何者かが私の前に光と共に転移してきた。

「ランベリー城へようこそ」

二人の女性——エルムドア侯爵の眷属だ。私の前に姿を現し、私の前に跪く。私を歓待したようだった。

「ご来訪をお待ちしておりました。マティウス様」

もう一人の女性がやはり、歓待の挨拶をよこしてくれた。だが。

「私はキラだ。マティウスなどと二度と呼ぶな」

ルカヴィの名で呼ばれるなど、妙に居心地が悪い。

二人は顔を見合わせて。

「失礼しました。キラ様」

女性の一人が謝罪すると、呼び名を変えた。

ふと、気になって鬼面を外す。

「私が誰か分かるのか？」

私の疑問に、エルムドア侯爵の眷属の一人——セリアが応える。

「勿論でございます。私たちは悪魔の眷属。ルカヴィの皆さまが放つ魔性の気配で察知できますので」

「そういえばラムザも分かっていたようだったしね。主におまえたちやローファルとの戦いの時に」

「私たちと、ローファル様の戦い？」

「ああ、独り言だ。聞き流してくれていい」

いずれはラムザたちと戦って果てる連中だ。別にコイツらには興味はない。

「我が主がお待ちです。どうぞご謁見なさってください」

「恩に着るよ」

二人の女性——セリアとレデイに導かれてランベリー城内へと入っていった。

先導された先は大きな扉の前だった。セリアとレデイが扉を重々しく開いて私はその先へ足を踏み入れていく。

広い応接室。抱いた印象はそんなところだった。

「来たか。マティウス」

そこにはある意味での私の元凶——ヴォルマルフが卓に着いていた。脇にはエルムドア侯爵の姿もある。

「マティウスじゃない、キラだ。……しかし城の大きさの割には閑散としているな。キュクレインやベリアスがやられたのが相当効いているんじゃないか？」

「否定はせんよ。奴らの戦力を見誤った結果だ」

「なるほどね。ルカヴィっていう連中はその程度の計算しかできないのか。私が数学の教師なら全員真っ先に試験不合格にしているよ」

「戯言を」

凶星を突かれたのが気に障ったのか、少しイラついたようにヴォルマルフが返した。

そこをエルムドア侯爵がたしなめる。

「まあ、落ちつけ。ハシユマリム。……貴公も卓に着きたまえ」

私は命令されるのが嫌いだ。渋々ながら、ほんの少しの抵抗として連中から一番離れた席に着く。

「……で、何をしに来た？ ただ挨拶回りに来たわけではあるまい。用件があるなら聞くだけ聞いてやる」

ヴォルマルフが両肘を卓に着け、顔面で手を組んでいる。某有名アニメのNERVのお偉いさんがしているあのポーズだ。

「いい土産話だ。とくと聞くといい」

私は勿体ぶりながら、ただ簡潔に告げる。

「おまえたち、このままだと全員死ぬぞ。神殿騎士団はもちろん、ルカヴィの連中も残らず、だ」

「……詳しく言え」

「まずセリアとレデイ、ザルエラが討たれる。次にアドラメレク。ローファル、クレテイアン、バルク、そしてハシユマリム。この順でラムザに各個撃破される」

エルムドア侯爵が私に視線を配る。穏やかな面持ちだが眼が笑っていない。

「……なぜ貴公にそれが分かる？　そもそもアドラメレクは”狭間”に囚われたままだ」

「直に相応しい”肉体”が見つかるさ。そこで私からも質問がある」
私は片手で肘を突き、もう片方の手の指でトントンと卓を叩いて。

「なぜ総力戦を挑まない？　波状戦で戦う義理も騎士道もないだろう。そんなものがあるならさっさと投げ打って、無様な勝ち戦を選べ」

苛立ちが頂点に達したか、ヴォルマルフが静かに怒気をはらませて威圧してきた。

「……貴様に何がわかるというのだ。我々には目的がある。そのためにはあんな小僧一人にかかずらっている暇など、本当はないのだ」

「血塗られた聖天使”の復活か？　そうだね。彼、いや彼女か？」

どちらでもいいが。まあそいつが復活すれば、聖石がなくてもルカヴィは不死の怪物として、本当のバケモノとして”こつち”の世界に来られるんだからね」

沸騰して頭に昇った怒気が少し薄らいでいるように見える。

ヴォルマルフが口を開いた。

「貴様、どこまで我々の事情に精通している……。貴様のような存在は我々にとってもイレギュラーだと言ってもいい。……何者だ、貴様」

「単なる”異邦人”さ。神の視点を持った、ね」

「それが何故なにゆえに我らの味方をする」

「単なる暇潰しだよ。どうセルカヴィになったんだ。ラムザに勝たせるより、ルカヴィに迎合した方が面白そうじゃないか」

ようやく冷静に、私の正体を測らんとヴォルマルフが怒気を無理やり打ち消したようだ。ハッキリ言ってコイツ、怒りの沸点が低すぎやしないか？

「……少し疲れた。ザルエラ、部屋を借りるぞ」

「そう言って立ち上がり、エルムドア侯爵に目配せもせず、応接室の出口に向かった。」

代わりにエルムドア侯爵が私に向けて口を開く。

「貴公の言葉はまるで聖アジヨラの託宣だな。どこでそれほどの知識を得た？」

「言っただろ。私は“異邦人”で神の視座を持つ者だって」

エルムドア侯爵が顎に片手をやって。

「……本来なら貴公はハシユマリムに殺されかけた者だ。マテイウスよ、我々が憎くはないのか？」

そう問いかけた。ヴォルマルフといいコイツといい、いい加減、名前の呼び方を変えない連中だ。

「あの時はルカヴィに殺されかけた。けれどルカヴィになった私はこのままだとラムザたちに討たれる。ならそれを回避するために、おまえたちに協力するのは当然の帰結じゃないと思わないか？」

私にとっては死活問題だ。なら私は、今のところルカヴィに迎合するしかない。

ふと、私はエルムドア侯爵に提案する。

「そうそう、おまえが眷属にしたクレスティア。彼女を私に出来ないか？ おまえにはそれを頼むつもりだった」

一瞬、エルムドア侯爵は考えたようだが、すぐに返答する。

「いいだろう。ルカヴィの一人として、眷属の一人や二人、持っている方がらしいといえばらしい」

「交渉は成立だね。あと一つ、いい情報をあげよう」

「……何かね」

「ベスラ要塞。北天騎士団と南天騎士団はそこで激突する。この情報をうまく使うといい」

「……よかろう。貴公の”神の視座”を検討してみるとしよつか」

「私みたいな小娘の言を聞いてくれて光栄だよ。侯爵様」

そう言つて、私は席を立った。

「今日はこれでお暇やすみさせてもらうよ。また暇潰しにでも来させてもらつていいかい？」

「貴公の情報はハシユマリムと相談しよう。また面白い話があったら聞かせてくれ」

眼が笑っていない、奇妙で不気味な笑顔——要するに下手くそな愛想でもつて私を送り出してくれた。

私は鬼面をかぶり、その場から転移して退出した。

さあ、お膳立ては済んだぞラムザ。

いざとなれば私が操るルカヴィたちの猛攻を止められるかな？

私は口の中で、クツクツクと今までのことのない暗い笑みを隠せずにいた。

幕間《クラウス・マツケンロー》

side：ラムザ・ベオルブ

城内を見て回った僕らは改めて城の中核にて、調査結果を確認し合った。

マラークが口火を切る。

「……何か、ものすごい力で潰された惨い死体ばかりだった……」

ラファが続ける。

「でも、その中にあなたの妹はいなかったんでしょ？」

僕はゆっくりとうなずく。

「……ああ、どこにもいなかったよ」

改めて考えると、僕にとっては辛い挑戦だった。

潰され、引き裂かれ、まるで挽き肉になったかのような死骸から妹を探すなんて。

「この城にいたのは間違いないんだ。連れ去られたんだろうな……」

マラークが僕の顔に視線をやりつつ、呟く。

多分、彼なりに僕を慮っているのだろう。

「この城を訪れた神殿騎士は4人……。それ以外は見ていない……」

「ルカヴィに変身した1人は僕が倒した。もう1人……。イズルードは死体になっていた……」

僕は述懐する。

「となると、クレスティアと最後の1人が連れ去った……？」

マラークが手を顎にやって意見する。

「グレバドス教の総本山、ミュロンドへ戻ったんじゃないのか？」

普通に考えればそうだろう。しかし……

「だって、奴らは教皇フューネラルの指示で動いているんだろう？
だったら、きみの妹を連れ去った神殿騎士はミュロンドへ戻ったはずだ」

「そうかな……？ 教皇が聖石の秘密を知っているとは僕には思えない」

オーボンヌ修道院での、イズルードとのやり取りとウィーグラフの

顛末を考えると、どうも食い違いを思えてくる。

「その証拠に、ウィーグラフは魔人ベリアスと契約を結ぶまで聖石の秘密を知らなかった……。それに、イズルードはルカヴィと戦って死んだように思える」

「どういうことだ？」

僕の見解に、マラークは懐疑的なようだ。

「戦争を影で操り、教会の支配力を強化する……。たしかにそれは教皇フューネラルの”野心”だろう」

一拍置いて、僕は続けた。

「だが、聖石を集めているのはゾディアックブレイブの伝説を利用して民衆の心を掴むため……」

「つまり、こういうことか。教皇の”野心”すら誰かが利用している……？」

疑いながらも、マラークは的確に僕の考えに追従した。

そこにラファがマラークに話を向ける。

「彼の妹を連れ去った神殿騎士は誰？」

「たしか、神殿騎士団の団長、ヴォルマルフだったと思う」

「もう一人の神殿騎士、クレスティアという線は？」

錯綜する情報の中で、彼女の線だけが浮いている。なぜか彼女だという線だけが透けない。

マラークもなんとなくそれを察しているようだ。

「不思議なんだが……。彼女だけはそういう目的で動いているように思えない。ヴォルマルフに従っているようで、そういう感じがしないんだ」

僕も同意見だ。この聖石を巡る争いを主導しているのはただ一人。

「おそらく、そのヴォルマルフが黒幕だ……」

マラークが話の向きを変える。

「これからどうするんだ？」

僕の中に浮かんでいる、最後の謎解きだ。こればかりは本人に聞かないとわからないだろう。

「……ゼルテニアにいるデイリータに会ってみようと思う」

「グリムス男爵の跡を継いで黒羊騎士団の団長となったあいつか？」
「……ディリータを裏側で操っているのは教会と神殿騎士団だろう」
ディリータの裏側にいる、得体の知れない思惑が僕の胸の内をかき乱す。

「ディリータはヴォルマルフの正体を知っているのか……？」
仮にそうだとしたら、僕はどんな顔で彼と相對すればいいのだろうか。

神殿騎士ヴォルマルフ。

この男について知ることが出来れば、姿を消したアルマに近付けるはずだ。

side：クラウドス・マツケンロー

「スマン、ラムザ。ちよつといいか？」

彼がオレに顔を向ける。

「どうしたんですか？ クラウドスさん」

「キラが……キラがないんだ。どこにもだ」

「キラがないだと？ どういうことだ？」

アグリアスさんが話を向ける。

「文字通りです、キラの姿がどこにもない。彼女だけがどこにも姿がない。今もミルウッドが探しているんです」

「死体はすべて改めたのか？」

「勿論です！ でもリオファネス城から彼女だけが姿を消しているんです！ オレたちがここに集まっているのは知っているはずなのに……！」

「姿を消したキラ、か……。ついに馬脚を現したのか、やつは」

アグリアスさんのあんまりなセリフにオレは思わず、反発する。

「あいつはそんなやつじゃありません！ やつの正義感はおれも、ラ

ムザも知つての通りです！ やつだけは裏切るなんて考えられませんか！」

「……すまない。今のは仲間に対してあまりにも礼儀を欠いた私の失言だった……」

俯き、素直に謝罪するアグリアスさん。

オレはどつかと膝を床につけ、頭を下げて嘆願する。

「頼みます、ラムザ、アグリアス様！ キラを……あいつのことを忘れないでやってください！」

「この通りです！」とオレは一生懸命にお願いする。他人から見たらさぞかし滑稽に見えたことだろう。

「落ち着け、クラウス」

「そうですね、彼女は僕にとっても士官アカデミー時代からの親友です」

「ただ」と言つて、ラムザは続ける。

「彼女が姿を消したのは何か理由があるのかもしれませんが。彼女の行方はもちろん探しますが、何らかの意図を感じます。いずれ、彼女は何かしらの目的を持って僕らの前に現れるのかもしれませんが」

「だけど、オレにとつてキラは……！」

「落ち着けと言っている、クラウス!!」

アグリアスさんの檄がオレを打った。

「私にとつてもやつはまがりなりにも戦友だ。おまえの言うことならおびなりにするつもりはない。ただ冷静になれと言っている」

「貴方の異邦人の視点で何か分からないんですか？」

オレは横に首を振った。

「……オレには読めないものが二つあります。一つはクレスティア、二つはキラ。この二人の思惑です」

「クラウスの視点でも分からないようなら、彼女を見つけるのは難儀だろう」

「お願いです！ 彼女を見捨てないでください！ 彼女を失ったら、オレは……オレは……！」

オレの必死な姿を見て、アグリアスさんはふつと口から息をつい

た。

「初めて、おまえの本音を聞いたな。おまえの隠し事はいい加減、見飽きてきた。だが今のおまえなら信頼しようと思える」

「すみません……、アグリアス様」

「かまわん、クラウドス」

アグリアスさんの不器用な優しさが、オレの胸をかき乱す。オレはまだ本音を全部晒していない。

オレにとってはクレスティアは敵。キラはオレの味方だ。それは変わらない。

だけど、二人ともオレの前から消えちまった。

そうになると、残されるのはオレ一人だ。オレがただ一人、ラムザたちと共にある。

そして、オレにとって残された呵責されるべきものは。

キラにとって、クレスティアにとって抱いていたもの。それが無い。

オレだけが。

ブレイブストーリーの楽しみ方が分からない、だなんて。

今まではキラと一緒にいた。クレスティアともなんだかんだで関わってきた。

彼女らにはブレイブストーリーに対するビジョンがあった。

オレだけは、それが無い。

オレはこのままラムザたちと一緒にいいいいのか？

キラがないこの”物語”を眺めていいいいのか？

オレはクレスティアの意固地も、キラの正義感も持ち合わせていない、ただ流されるだけ。

そんなオレが、ラムザたちと居ていいのか？

どこかで落とし前を付けなければならない。

それを考えるだけでオレは薄ら寒い心地になった。

いつかミルウーダに言った、いつでも首を獲っていいという言葉

は、キラを信用していたからだ。
でも彼女がここにはいない。

——怖い。

オレだけが取り残されたこの気分の悪さに吐き気を催しそうだ。
皆に面と向かって、深い本音を晒せばきつとオレは軽蔑されるだろ
う。

オレだけじゃない。

きつとキラにも疑念が向けられる。

何としてもこの本音だけは隠さないと……

……隠して、どうするんだ。

何をどう隠して、うまいこと本音をさらけ出すんだ？

その役目がこのオレ、”神崎タクマ”に課されてしまった。

キラもいない、クレスティアもいない、この”物語”の道化になっ
ている今、いつまで現実逃避すればいいんだ？

結局、オレに託されたのは行き場のない視座と感情だけ。

どうすればいい。

どうすればいいんだ、オレは。

降って涌いたこの唐突な事態に、オレは身震いを隠すしかなかつ
た。

Chapter 4 愛にすべてを 聖石を持つ男

side：シドルファス・オルランドウ
戦争も道半ば。

いい加減、辟易するこの戦争の終結は見えることなく、互いに消耗戦を続けてきた。

だが、両軍が動き出した。

北天騎士団と南天騎士団が、互いの所領地で頻発する賊徒の誅伐にすら向かえないこの事態に、両軍の決戦を以って戦争を決着すべく、各地の前線に散っている騎士団をも動員し、ベスラ要塞に集結しつつあるのだ。

前線を一旦退いた私はゼルテニア城内で当て所もな青い空を眺めていた。

そこに、一人の人物が背後で扉を開いて入ってくる。

「義父上、お帰りなさいませ！」

「うむ……、元気だったか、オーラン」

私は義理の息子であるオーランに体を向けて応えた。

「はい、私は大丈夫です。前線はいかがですか？」

彼の言葉に、私は冗談交じりに応える。

「おまえも知ってのとおり、ひどいものだよ。味方が味方の監視をしながらでないと戦えんほどだ」

両掌を上に向けて、私は続ける。

「わしの名も地に墜ちたものだな、はっはっはっ」

オーランはそれに実に困ったように応える。

「ご冗談を……。それを言われるならゴルターナ公でございませう」

ふむ、とその言葉に思索を巡らせる。オーランが続けた。

「義父上がいるからこそ、他の將軍たちがここにいるのだと皆、ウワサしております」

行き過ぎたオーランの発言に私は眉をひそめた。

「主君に生涯の忠誠を誓い命を捧げる……それがオルランドウの家訓だ。滅多なことを言うものではない」

オーランも失言が過ぎたと思ったか、頭を下げた。

「すみません。口が過ぎました」

「まあ、よい。……それよりも例の件はどうなった？」

私はオーランに密偵の役割を課していた。

経緯の推移によつては私もまた覚悟をせねばなるまい。

「機工都市ゴークで聖石らしきクリスタルが発見されたこと、亡くなった枢機卿が五十年戦争末期にゼラモニアの古城で聖石を発見したことは事実でした」

機工都市ゴーク。私が放った別の密偵によればそこから聖石が見つけたことは報告されている。オーランの言葉はその報告を裏付けることとなった。

「また、神殿騎士団が暗躍しているようですが、何をしているかまでは不明です」

神殿騎士団……やはり教会側も戦争の裏で暗躍して、戦争を長引かせて北天騎士団と南天騎士団の消耗を企んでいるのか。

”ゾディアックブレイブ”の再結成。

この目的を果たすため、神殿騎士団は動いていると見える。

教会は己の権威向上のため、伝説の騎士団を蘇らせようとしているのだろうか。

私は懸念していた件について、オーランに尋ねる。

「ミュロンドへ放った”草”はどうした？」

「残念ながら……」

オーランが俯く。

「できれば、教皇の謀略の証拠を掴み、和平への糸口としたいものなのですが……」

私はオーランに背を向け、懐に手をやった。

固い感触が指先に当たる。

私はそれを眺めた。

「やつらはいずれ、これに気付くだろう」

教会が意固地になって探しているそれは、自ら光を放つ。

「その時が本当の戦いかもしれぬ……」

聖石がかすかに輝き、私の真なる戦いに武者震いした。

ベスラ要塞で決着の着き方が如何にせよ、教会はその時に動くだろう。

だがこの”雷神シド”ありし今この時は、奴らの好きにはさせぬ。

改めて、私は決意を固めた。

ドグーラ峠

side：キラ・シルベント
ドグーラ峠。

フォボハム・ルザリア領とゼルテニア領を分かつ山岳に伝わる峠道で、通過するにはそこまで難関な道筋ではない。

だが、一本の道というのは大集団には要地であり、難所であることも確かだ。

現在は雷神シドが突破して以降、南天騎士団が防衛している要所である。

ザルバツグ将軍がルザリアで執務を取って、その時、北天騎士団の騎士が報せに来たのもこのことだ。

あれから北天騎士団は雷神シドの威容と艱難かんなんさを、自軍の兵力とを天秤にかけて一旦は放置していたという感じか。

本来ならここをラムザたちが突破して、北天騎士団がベスラ要塞へ侵攻する橋頭堡にする予定だったのだが。

私はダレポの魔法でこの峠に出現した。

そのまま悠々と南天騎士団の守備隊に向かって正面から相對する。

「待て！ その仮面の騎士！ 貴様、南天騎士団の者ではないな!?」
まあそうだろうね。

「北天騎士団の者でもなさそうだな……。貴様は何の目的で我ら南天騎士団の精鋭を前にこの峠に現れた？」

精鋭、ね。

私は不敵な笑みを仮面の中に押し込んで、堂々と告げる。

「精鋭……。ね。残念ながら、ここは私がこじ開けさせてもらうよ。もうすぐ知己がここを通るんで、その露払いさ」

言つて、背中に差した二刀の刀剣を抜き放つ。

南天騎士団の精鋭とやらがにわかになぞわついた。

「ここは立ち入り禁止区域だ、と言つても聞かなさそうだな……。我らに挑んだこと、あの世で後悔するがいい！」

「悪いが、そういう勇気と蛮勇をはき違えた愚かさ、私は好きじゃない

ね」

南天騎士団の面々が剣を抜き、槍を構え、魔法の詠唱を始めた。さあ、新生キラ・シルベントの初陣といこうか。

常に二対一に持ち込もうとする騎士たちと、その空隙から槍を繰り出し、一步離れた所から黒魔法の雷撃が飛び交う。

思った以上に南天騎士団の練度が高い。

ラムザたちの敵ではないだろうが、私一人では少々手に余る。

……こんなものか？ 聖石と契約した悪魔の眷属とやらの力は。

やはりルカヴィの威容を示さねば本当の力を出し切れないのか。

いや、むしろやれている方か。

敵の動きがすべて見える。体の動きがそれに付いていつていないだけだ。

後は敵の無力化さえできれば言うことはない。

だんだんと体を戦闘に慣らしていく。

その手段として、南天騎士団との戦いはそれ相応の経験を積ませてくれる。

見えた。

そして、体が動いた。

騎士の剣が私の胸を突き貫こうとする。それを半回転して私はその騎士の手元を狙った。

渾身の一振りがその剣を打ち上げ、どこへともなく飛んでいく。

その隙を逃すことなく、私は刀のみねで騎士の鎧ごと、したたかに打ち据えた。

鎧が深くへこみ、鈍い感触が私の手に伝わる。おそらく、肋骨から背骨まで粉碎骨折しただろう。死なねば運がいい。

そしてもう一人、騎士の手元を狙う。

こちらは両手首。

刀のみねがその手首を打ち払い、こちらも骨を砕く。

ガシャンと、騎士は剣を落としてその場にうずくまった。

これで近接戦の主とした騎士の無力化に成功。

続いて槍騎士の攻撃。

先の騎士の脇から繰り出された中距離からの攻撃を屈んで躲して。そのまま槍の穂先を二刀の打ち払いで叩き折った。

槍が棒っ切れになったところを、隙を与えずその両肩に刀を振り下ろす。

鈍い音と共にその槍騎士の両肩の骨を砕く感触を覚えた。

「くそッ!! 退け! 退けえッ!!」

残った黒魔道士たちが撤収の合図を出した。

無事に生き残っている者——まあ誰一人として殺してはいないのだが。

特に重傷を負った者だけ、傍に待る。

ロープを取り出して、その騎士の両手両足を縛り上げた。

そいつを無視しての残った南天騎士団の連中は逃げの一手を打つ。薄情な奴らだ。

「オ、オレをどうするつもりだ……?」

重傷を負って、さらに縛り上げて身動きが取れなくなったそいつは、若干ビビリながら私に意図を問う。なかなか根性はあるな。

私は応えた。

「もうすぐここを異端者ラムザ一行が通ろうとする。そいつらに教えてやってくれ。鬼面の武者がおまえたちを狙っているぞ、と」

言って、私はその場を離れるべく、ダテレポを唱えた。

彼らに会うのはここではない。

もつと相応しい場所があるはずだ。

まあ、ラムザたちにクラウスが付いている限り、身元が割れるのは少々早いだろうが。

しばらくは鬼面の武者として暗躍するのを楽しみにしていようか。

side：ラムザ・ベオルブ

僕らはリオファネス城を後にして、一路ドグーラ峠を目指した。ゼルテニア領、そこにデイリータはいるはずだ。

何のために彼はオヴェリア様をさらったのか。そして何のために彼女を女王に据えたのか。

もはや彼は僕と道を違えてしまったのか。

それはもはや身震いする心地ではあったが、教会の動きがある今、彼の動向は予想が付く。

この戦争を引き起こしたのは、ゴルターナ公だ。

彼がオヴェリア様の摂政として、オリナス王子の後見をするラーグ公に戦いを挑んだのが戦争の発端だ。

デイリータがオヴェリア様をさらったのはこの戦争を引き起こすためだったのか？

ただ、この戦乱を裏から操っているのは教会に間違いない。

だが、本当にこの戦乱を臨んでいるのは……

「……ルカヴィ……そしてヴォルマルフ」

僕は人ならざる者が人々の流血を望んでいるかのように見える。

ミルウーダがウィーグラフから聞いた。彼らは混沌を望み、人間の悲鳴を聞くことが目的だと。

いかにせよ、ルカヴィは僕ら人間の敵だ。アルマをさらったのも彼らの思惑の一つなのだろう。

いずれにせよデイリータには会わねばならない。

彼、いわんや教会の目論見を叩き潰すためには彼の目的を知ることが最良の道だ。

教会の陰謀を止めるため、僕らはゼルテニア城を目指した。

ドグーラ峠に差し掛かり、僕は違和感を感じた。すぐにその答えに至る。

「南天騎士団の警備がない……。どういうことだ？」

先へ進むと、ふと、人影が見えた。

両手両足を拘束され、脂汗をかいている。兵装から察するに南天騎士団の一員だ。

僕は駆け寄って、その騎士に近づく。

「しっかり！」

僕は手足の拘束を解き、彼を介抱する。彼が脂汗をかいているのは縛られていたからじゃない。誰かに重傷を負わされたのだ。

観察する。

脇腹の鎧が陥没している。

僕は即座にアグリアスさんに視線をやった。

アグリアスさんが頷く。

「アリシア、ラヴィアン！」

二人に介抱の命を下した。

治療バッグを持ち出し、その騎士のポジションをまぶしてから包帯で患部を縛る。

「おまえが異端者ラムザ、か……？」

傷を圧して僕に話しかける騎士に、僕は頷く。

「いったい何があつたんだ？」

「気を付けろ……。仮面の騎士がおまえを狙っている……」

「仮面の騎士？」

僕はすぐ、クラウスさんに視線を送った。彼は、首を横に振る。

「知らない。オレの知っている”物語”にそんなやつは見たことも聞いたこともない」

クラウスさんでも分からない、か。

そこに意を得たようにミルウーダが口を開く。

「これは大きな収穫よ。神の視点を持つクラウスですら分からないのなら、彼の知る”物語”に登場しない人物……すなわち、キラかクレステイアか、それかそれに連なる人物ということだわ」

「ミルウーダ……きみは」

僕の言葉に、彼女は首を横に振った。

「疑いたくない……だけど、キラもこの危難に襲われているのなら、いずれ私たちの前にどのような形であれ、現れてくるはず。私たちはそ

れまで油断できない、ということよ」

彼女はクラウスさんに視線を送って。

「期待しているわ、クラウス。仮面の騎士とやらの化けの皮を剥がして尻尾を掴む」

クラウスさんはコクリと頷いた。

「任せろ。オレたちを狙っているっていうなら、十中八九クレスティアの差し金だろう。ならキラと関係ないと言い切れない」

「……？」

僕はどこか違和感を感じた。

いつものクラウスさんだ。だけど何かが違う。

声が、震えているような気がする。

まるで何かに怯えているかのように。

僕の杞憂であればいいのだけれど。

真相は彼の中にしかないような感じがした。

side：クラウス・マツケンロー

仮面の騎士。

いなくなったキラ。

余りにも都合が良すぎる符号。

一方、南天騎士団の関門を単騎、あるいは少数の精鋭で破るほどの実力の持ち主。

現に縛られて放置されていた騎士以外は誰の死体も見当たらない。殺さずに、蹴散らしたのだ。

そんな芸当が出来る輩が、オレの知るブレイブストーリーにいったい何人いるというのか。

クレスティアにそこまでの芸当が出来るのか？

あわよくば、彼女と見知らぬ神殿騎士団が南天騎士団を駆逐したの

か。

オレは無意識に、キラのことを頭の隅に追いやって、都合の良い解釈を探していた。

クレスティア。

今、おまえはどこにいる？

どこで、何を企んでいるんだ？

オレはクレスティアに悪意のすべてを押し付けて、キラの無事を願っていた。

あのキラだ。そのうちに何事もなくひょっこりと現れて。

本当に、本当にオレは自分に都合の良い展開を思い描きながら、クレスティアの暗躍を期待していた。

自治都市ベルベニア

side：ラムザ・ベオルブ

ドグーラ峠を越えた先、まず眼に入るのが自治都市ベルベニアだ。かつて、聖アジヨラが生誕したこの地では、当時、黒死病が猛威を奮っていた。

聖アジヨラは生まれてすぐに立ち上がり、外の古井戸を指して「この井戸の水を飲んではいけない」と宣ったそうだ。

事実、その水を飲んだ民衆は病に倒れ、亡くなっていった。

しかしアジヨラの託宣を信じた親族は水を飲まなかったため生き延びた、という伝説がある。

聖アジヨラの生誕地であることから、ここはルザリア、フォボハム、ゼルテニアに囲まれた地でありながら、グレバドス教会の直轄地として認識されており、この戦争のさなかでも無言のままに戦禍に巻き込まれずにいた。

そして、僕らはその町を通過しようとする。

だがそこで僕らを待ち受けていたのは。

神殿騎士団。

教会の手勢が僕らの行方を阻んでいた。

side：メリアードール・ティンジェル
許さない。
私はラムザ・ベオルブを決して許しはしない。
弟を殺したあの異端者を殺すまでは、私の信仰心は留まったままだ。

あの男を殺して、初めて私の信仰は再び始まるのだ。
私の信仰心。

それを勝って補う復讐心。今の私はこれだけしかない。
さあ来い、ラムザ。

このベルベニアをおまえの墓場にしてやる……!!

「メリアドール様、肩に力が入り過ぎています。どうか自戒を」
脇に立つ斥候が余計なことを吹き込んでくる。

しかし、真つ当な意見だ。

猪のごとく突っ込んで孤軍で戦っても敗北は眼に見えている。
仲間との連携を大切にしなければ。

そんな折、奴らは現れた。

私は奴らを見降ろせる高台に立ち、声高に名乗りを上げた。

「私の名はメリアドール。弟の仇を討たせてもらうわッ!!」

先頭を行く青年、ラムザが私たちが臨戦態勢に入っているのを見て、すかさず身構える。だが、奴の言い分が戦闘の先手を打った。

「弟の仇だった？ 何のことだ？」

ラムザの言葉に、私は発奮する。大切な弟を殺されて、その態度。

私は威勢を上げて返す。

「シラを切るつもり！」

私の言葉は止まらない。憤激したままに応え返す。

「リオファネス城でおまえが殺したイズルードは私の弟ッ!!」

そう、おまえがリオファネス城で殺した私の最愛の弟。許せるものか！

「フューネラル教皇陛下の命令ではなく死んでいった弟のためにあなたを討つッ!!」

私の言葉を皮切りに、戦端が開いた。

もうすぐよ、イズルード。

貴方の仇は姉である私が取ってみせる！

私の大剣がラムザの剣を殴打する。武器ごと奴を両断できるかと思っただが、私が想像した以上に感覚が軽い。

こいつの技の冴えはあのウィーグラフ以上だ。
やおら、ラムザが私に向かって声を張り上げる。

「待ってくれ！ イズルードを……彼の命を奪ったのは僕じゃない！」

罪人はいつの世もそう主張するのよ。潔く罪を告解なさい！

「リオファネス城で何があったか知っているんだろう？ あれは人間の業ではない！」

リオファネス城での虐殺は知っている。だがそれもこれも、すべてコイツの仕業だ。

おそらく、ドラゴンやベヒーモスあたりの凶悪なモンスターを放ったのだろうことは容易に知れた。

「イズルードはヤツに……ルカヴィに殺されたんだッ!!」

……は？

「ルカヴィですって？ ルカヴィが現れて弟を殺したというのツ!？」

馬鹿馬鹿しい。そんなモノが現れてリオファネス城の兵士、民草を無惨に殺したとでも？

私は嘲笑する。

「ハハハハ、これは傑作だわ！ どうせなら、もうちよつとマシな嘘をついたらどうなの!!」

それに対し、彼奴はあくまで真剣な表情を崩さないまま、続けた。

「きみもイズルードと同じだ。真実を知らされていない！」

真実？ 私にとっての真実はイズルードがおまえに殺された、それだけよ！

「きみたちは皆、悪しき者どもの手の上で踊っている哀れな操り人形であることに気付いていない！」

異端者の言葉に、神殿騎士団が耳を貸すとも？ コイツは滑稽だわ！

罪人の言葉に聖職にある者が耳を立てると思っっているの、コイツは？

「聖石はただ”信仰”されるためだけのクリスタルではない!! 奇跡を喚ぶ”力”を持っている！ その”力”は使う側によって違うが、

少なくとも奴らは悪しき目的のために利用している！」

だが奴の表情は真剣そのものだ。

「目を覚ませ、メリアドール！ きみはヴォルマルフにだまされている!!」

「そんな話を信じると思うの？ ばかばかしい！」

奴の妄言にもはや付き合う気も失せた。

渾身の一言で黙らせてやる。

「ヴォルマルフは私の父よッ!!」

「なッ……!!」

私の言葉に、ラムザは絶句した。

先ほど諫言された通り、いささか私の脳は熱が入り過ぎているようだ。

しかし、このラムザだけは許さない。

イズルードを殺害し、あまつさえ私の父をも愚弄したこの男だけは殺さなければならぬ!

side:ラムザ・ベオルブ

メリアドールは本気だ。本気で僕を弟の仇と勘違いしたまま殺しに来ている。

彼女が語り出す。

「……弟は本気でこの腐りきった畏国を救おうと考えていた！ たしかに私たちの計画は乱暴かもしれない……」

そうだ。イズルードはオーボンヌ修道院でも本気で畏国を救おうと考えていたのを思い出す。

そして、畏国に邪悪な計画を企む”悪魔”と戦って死んだことも。彼こそが、真の勇士だ。

「しかし”変革”には”痛み”が必要だ！”痛み”なくして真の”変革”などありえないわ!!」

その言葉もイズルードの、いや、神殿騎士団本来の受け売りだろう。しかしこの戦争を裏から操る教皇フューネラルの野望には眼をつむっている。

けれども、それらが導くのが神ならざる、本来の人の性であるとしたら、僕には返す言葉がない。

「自分の背負った宿命すら全うできないおまえのような”甘ちゃん”にこの世界を変えられるものか!!」

一年以上前のジークデン砦の出来事と、ガフガリオンの言葉を思い出す。

僕には世界を変えられない。

ただその”変革”に対する人の”痛み”、”犠牲”が生まれることが許せない。

ならどうすればいいのか。

それはきつと、ゼルテニアでデイリータと出会うまで分からない。ならばこそ、ここでは止まらない!

「頼む、僕を信じてくれ! 彼の命を奪ったのは僕じゃない! 戦うべき相手は僕じゃない!! ルカヴィは実在するんだ!」

もはや論戦でどうにかなるものじゃない。

メリアドールは、本気で弟の仇を僕と、そしてヴォルマルフを信じている。

「きみは父親だと信じているその男はもう人間じゃない! ルカヴィに心と身体を奪われた悪魔なんだよ!」

「しつこいわよ、ラムザツ!」

「どうしたら信じてくれるんだ……!」

剣を交えているというのに、不覚にも思索を巡らせてしまっている。

だが、メリアドールは強い。

復讐心に燃える彼女の剣が僕の剣を打ち上げた。

隙を見せてしまった……！

その隙を見逃す間など当然なく、メリアドールの剣が僕の胸を貫こうとする。

が。

不意に彼女の後ろに現れた人影が、大上段に構えた彼女の剣を横から打ち抜いた。

「なにッ!？」

剣を手放さなかったものの、メリアドールの剣閃が僕から外れる。

メリアドールも背後の人影に振り向いた。

そこにいたのは。

「仮面の騎士……!？」

ドグーラ峠で僕らに注意を促したであろう、その人物が一振りの片刃の剣を振り抜いていた。

side：キラ・シルベント

「ラムザ・ベオルブ……メリアドール・ティンジェル……、雌雄を決するのは今ここではない」

分厚い仮面が変声機能の役目を果たしてか、男か女か分からない絶妙に中性的でくぐもった声でもって言葉を発した。

「くッ……、どきなさいー」

改めて正眼に構えるメリアドールの大剣を、私の二刀が交錯する。バキーン!!

その二刀は、メリアドールの剣を容易く叩き折った。

「く、くそッ……!ー」

柄だけになった剣を握り、そのままラムザへ視線を移しながら後背へと退避していくメリアドール。

最後に彼女はラムザに向かって罵声を飛ばした。

「おぼえておきなさい！ 次に会うときこそ、おまえが死ぬときよ！
いいわね！」

それだけ言い残して、配下の神殿騎士団を連れて撤収していく。
その場に残ったのは疲弊したラムザと私だけだった。

「きみは……、いったい……？」

ラムザの言葉には応えず、私は呪文を詠唱する。

そのまま魔法で消え去り、その場を立った。

「待ってくれ！」

消え去る直前、そんなラムザの言葉が背中越しに聞こえたような気がした。

side：ラムザ・ベオルブ

「いったい何者だったんだ……あの黒い騎士は……？」

僕の疑問にクラウスさんが応える。

「どうやらオレたちの他に、“異邦人”が現れたのかもしれない。
そう考えりやアレコレが納得いく」

「僕を助けて、メリアドールを逃したことも？」

「そういうことだ」

「でも……」

ラムザはどこか儂げな表情で、風に髪を揺らす。

「彼からは、どこか懐かしい感覚を覚えました」

僕の言葉に、されどクラウスさんは首を横に振る。

「それこそ杞憂だろ。だが厄介事がまた増えたことには変わりないけどな」

「そう……ですね」

ラムザはオレの言葉に賛同するように頷いた。

「他ならないクラウドさんの言うことです。今は……そう信じようと思えます」

「悩みがあるなら誰にでもいいから聞けよ。きみにはいくらでも仲間がいるんだからな」

「はい、ありがとうございます」

side：クラウドス・マツケンロー

マジかよ……

間違いねえ。あいつはキラだ。

第四の異邦人だなんて嘘っぱちもいいところだ。

だが、なんで姿を消した？ どうして素性を隠す？

あんな格好をしているくらいだ。ラムザたちに正体をバラしたくないんだろう。

じゃあ、あいつは今いったい何を考えてあんな格好をしているんだ？

何らかの思惑があるのは違いない。

なあ、キラ。応えてくれよ。

リオファネス城で、おまえに何があつたんだ？

なんで誰にも言わずに消えて、そんな恰好で現れたんだ？

頼むから。

オレに厄介事を増やさないでくれ。

本当に頼む。

オレは居もしない神様にでも祈る心地で、キラの思惑を慮った。

フィナス河

side：オヴェリア・アトカーシャ

「わあっ……」

私は広がる平原に、そこを流れる長大な小河を眺める。

高くそびえる木々とそれが天を指す青空という絶景に心を奪われた。

「オヴェリア、あまり景色に見惚れて川に近付いたりするなよ。この小河は見た目以上に深いんだ」

密かに私をゼルテニア城から連れ出し、外の景色を眺め見ることを許可したデイリータが私に忠告する。

風が気持ちいい。何より開放感に溢れている。

私は修道院と、ゼルテニア城から眺める空しか知らない。

ライオネル城からゼルテニアへの逃避行の間も見られたが、あの時はそんなものを楽しむ余裕はなかった。

女王になっても同じ。

むしろ城においては裏手の教会跡地で祈りを捧げていたが、そこは瓦礫に囲われた平野でしかなかった。

だから、こうして改めて外の世界を見ると、私がどれだけ公権力や城塞に囲まれていたか、嫌というほど実感する。

ずっとここにいらればいいのに。

「ねえ、デイリータ。私ね」

そんな私はデイリータに話しかける。

「もともと私は修道院の壁や、ゼルテニア城の城壁から眺める空と太陽しか知らなかった。だから今こうして、貴方が私を連れ出してくれて、本当に感謝しているわ」

「おまえは女王様だからな。本来ならこんな外界まで連れ出す事なんか禁忌に触れているんだが」

デイリータは木陰に座って私が平原ではしゃぐ様子を眺めて言う。

「まあ、おまえのそんな顔が見られるなら連れ出した甲斐もあったつてものだ」

私はデイリータの前で腰を曲げて、彼と視線を合わせる。

「共犯者、だものね」

デイリータが表情をひそませる。

「同志、だろ」

デイリータは立ち上がって、川向こうの遠くを眺めて独り言ちる。

「戦争はもうすぐ終わる。だが騎士団に被害は出させない。オレにはそれを止めるプランがある」

「戦争が……終わる」

「ああ」

デイリータが真剣な表情をしているのが理解できた。彼はまだ自分の起こした事実に関心を痛ませているのだろうか。

いや、それは私もだ。

この数ヶ月、食い詰めた難民や盗賊に墮した者、そして前線で血を流し続ける兵士たち。

デイリータとクレステイアが共謀して、私を女王に神輿に掲げた結果がこの戦乱だ。私は私という、女王の存在が皆に流血を強いているのだ。

決して他人事ではない。

そんな私がデイリータに甘えているのは、何も自分が可愛いからだではない。

私はデイリータの手を取った。それに強い力で私を引き上げてくれた彼に恩義と引き換えに、彼に協力することを決意した。

いったいこの戦乱でどれだけ途方もないほどの血が流れたのか、頭では理解しても感情が追いついていけない。

だから私は彼に付いていかなければならない。

彼の覇道がどれだけ罪深いものだろうと、それに私が共謀しようとも、私は見届けなくてはならない。彼が、いかなる手段を以って私を利用しようとも。

私は彼に問う。

「デイリータ」

「なんだ」

「あと何人の人が死ねば、この戦乱は終結するの?」

「両手の指の数でも数えていれば、それでいい」

チラリと、デイリータが背後の森へと視線を移す。そこには誰もいなかったはずだけど。

「そうだろう、鬼面の剣士」

その言葉に、私はハツとしてデイリータの視線を追う。

そこには、黒い甲冑に身を包み、鬼の仮面で顔を隠した騎士がいた。「気付いていたのか」

「当たり前だ。殺気を飛ばし過ぎなんだ、おまえは」

剣呑な口調でデイリータが応じる。私は不安な表情を隠せないまま、デイリータの鎧の背後に隠れた。

デイリータは私の方も見ずに応える。

「安心しろ。この騎士はオレの……、いや、オレたちの同志だ」

信じられない。いつの間にデイリータはこんな禍々しい人物と接触していたのか。

「ゼルテニア城にいたときにちよつと、な」

私はデイリータの背後から離れる。それを察して、デイリータは騎士に尋ねた。

「で、何の用だ」

「オルランドウ伯が前線に戻る気配がある。恐らくベスラ要塞に入り、南天騎士団を北天騎士団と衝突させて事態の終結を測る心づもりだろう」

「オレも前線入りか?」

「伯はそれを望んではいないだろうが、ゴルターナ公がおまえを頼りにしている。教会がバックにいる以上、おまえはそれを拒否する権利はない」

仮面の騎士は、くぐもった声音でデイリータと言葉を交わし合っている。

彼が、男性なのか女性なのか、それすらも定かではない。

ただ、その態度がどこかおどろおどろしい。

仮面が、私の姿を射抜いた。それだけで私は悲鳴を上げそうになっ

た。

「その娘が、女王オヴェリアか……」

「周知の上、だろ?」

「まあな……」

自分の知らないところで、私のことを知られているのはどうにも腰の座りが悪い。

女王になってからそういうことは多々あったが、それでもこの仮面からは禍々しきしか感じない。

仮面の騎士が私から視線を外した。

「ラムザがおまえに会いたいそうだ。それまではゼルテニアに残るところだな……」

そう言つて、仮面の騎士が背後に振り向いた。

そのまま、森林の奥へと姿を消す。

完全にその姿を消してから、私は改めてデイリータに問う。

「あの仮面の騎士……本当に私たちの味方なの……?」

「今は、な」

「でも、ラムザの事も知っていた……」

「ラムザも、まだオレの同志だ」

まだ、か。

いずれはラムザも、あの仮面の騎士も敵になるのだろうか。

「心配するな。おまえはオレが守る」

デイリータが私に、心ない常套句を投げかけた。

「おまえがオレに利用されている以上、おまえとオレは同志でいよう。だからそう、心配そうな顔をするな」

その言葉は本心から出たのだろう。利用価値がある限り、私は彼に見捨てられることはない。

それだけは、彼を信じる根拠になっていた。

彼は再び地面に座り込み、草をむしり取って口に当てた。

甲高い音色が辺りに響き渡る。

「……昔、オレの養父にあたる人が教えてくれた草笛だ。おまえも

やってみるか？」

言われて、私も草をむしって口に当てた。

城塞都市ザランダでのあの時、ラムザが教えてくれた草笛。

教えてもらった通りに、再び私は音を奏でる。

あまり高くない、鈍い音色が響いた。

「上手くないな。今度また教えてやるよ」

言って、彼はまた草笛を奏でてみせた。私もまたその音に重なるよう、鈍い音を奏でた。

あと何人の人が死ねばいい？ それで貴方の野望は実現するの？

私は、その時まで生かされていれば後は用済みになるの？

それはその時、考えればいい。

私は畏国の人々の血を浴び過ぎた。その報いを受ける時がきつとやってくるだろう。

デイリータにも降りかかるに違いない。けれど、彼だけは何故か生き残る気がした。

彼の野望が底なしであるのとは対照的に、私の理想は底抜けで、そこから冷たい手が私を捕らえようとしているのを感じていた。

デイリータの想い

side：ラムザ・ベオルブ

ゼルテニアに到着した僕らは、仲間たちに周囲の散策を頼んで密かに町外れの教会に入った。

そこで祈りを捧げながら、”彼”の来着を待つ。

文をゼルテニア城に送っておいたが、果たして届いたかどうか。

僕は彼を信じて、まさに神に祈る心地で跪いていた。

背後から扉を開ける音がした。

チラリと、背後を視線だけで見やる。

来た。

デイリータだ。

と、その隣を歩いてくる厚手の外套を被った人物を見た。

デイリータの腹心だろうか。

「……」異端者”と呼ばれる人間が教会に来るとはな。いい度胸だ」

パサリと、外套のフードを外すその人物は。

「!……オヴェエリア様!」

「ええ、お久しぶりですね、ラムザ」

オヴェエリア様はたおやかに微笑んで、僕に視線を合わせる。

だが何故か僕には、その表情に暗い影が潜んでいるのを感じていた。

「もういい、オヴェエリア。外套を被っている」

デイリータの指示に、彼女は素直に外套のフードを被り直してその場に跪いた。僕らと同様に膝を突き、祈りを捧げる。

「用件を聞こう」

「あ、ああ」

僕は突然の来訪者に驚きつつも、声をひそませてデイリータに事の次第を尋ねる。

「単刀直入に聞くとよ、デイリータ」

「ああ」

「きみをゴルターナ軍に送り込んだ教皇の狙いは何なんだ？」

デイリータがチラリと、オヴェリア様の顔を外套越しに窺う。彼女は小さく、コクリと頷いて先を促した。

「……それを聞くために、危険を冒してゼルテニアに来たのか。……いいだろう、教えてやる」

彼もまた小声で、僕とオヴェリア様だけに聞こえるよう続けた。

「オレの任務はゴルターナ公とオルランドウ伯の暗殺だ……」

僕はデイリータの顔を思わず窺った。

「なんだって……!!」

「大きな声を出すな……」

デイリータが僕をたしなめる。

「本当の計画はこうだ……」

そこからはつらつらと、彼らにとっては極秘の内容だろう計画を語り出す。

「王家や貴族に対して不満を抱いているやつら……、例えばあの骸旅団のような輩を煽り各地で反乱を起こさせる。戦争に疲れた民衆は、ますます悪化する国政に対して不満を抱くことになるだろう」

デイリータの講釈を聞く一方で、オヴェリア様の顔を窺う。

彼女はそんなデイリータの言葉を、表情も変えないまま聞いていた。

「どちらの陣営も互いの所領地で起きた反乱を肅清しゅくせいしたいが、そのために兵を割くことはできない」

デイリータはオヴェリア様を一片も見ることなく続けた。

「すると、どうなるか？ この膠着状態こうちやくを打破するために決着をつけようとするだろう」

僕はデイリータの言葉に返す。

「最近、各地で頻発している反乱もすべて教皇の企みなのか……。しかも、決着をつけようと、両軍がベスラ要塞に集結しつつある」

ダイスターグ兄さん、ザルバッグ兄さん。そしてオルランドウ伯。皆が皆、教皇の掌の上で踊らされている。

「まさに、きみたちの計画どおりというわけか……」

しかし、デイリータは冷徹な言葉で。

「ああ。……だが、決着はつけさせない」

冷たく続ける。

「その戦いの最中、ゴルターナ公とラーグ公は何者かに暗殺されることになるからだ」

僕は再び彼の顔を窺った。

「もちろん、その周囲にいる要人たちも同時に暗殺される……」

滔々とデイリータは続ける。

「南天騎士団のオルランドウ伯、北天騎士団の聖將軍ザルバツグ、そして、ダイスダーグ卿……」

両軍の主立った指導者を同時に片を付けようとしている。

そこで上げられた、兄さんたちの安否を気遣わない自分に、少々の驚きを感じていた。

「指導者を失った両陣営は戦いをやめ和平への道を歩まざるをえなくなる……」

両軍の決着を見て、疲弊した騎士団を教会が失った権威を復活させるために。

「そこで、教会が両陣営の”仲介者”となるわけか……」

「民衆は諸手を挙げてその仲介を歓迎するだろう。しかも、伝説のゾディアックブレイブ付きだ」

「しかし、聖石は……」

そう、いくつかの聖石を僕は持っている。これらがなければゾディアックブレイブの権威付けにはならないだろう。

「今の教会にとって、一番の障害はラムザ、おまえなのさ」

デイリータは教会の敵対宣言を僕に下した。

「きみだって、僕の持つ聖石を狙っているんじゃないのか……?」

「オレは教会の犬じゃない。オレはオレの意志で動いている」

「どういうことだ?」

僕の言葉に、デイリータは立ち上がった。僕に顔を向けて宣言する。

「必要なときは、遠慮なくおまえを殺すってことさ」

彼がそう告げて、されど僕は彼からにじみ出る殺気を感じ取れなかった。

今の言葉は、まるで僕を信頼してこそ言えるだろう言葉に聞こえたから。

「だが、安心しろ。方法は違っても目指しているものは一緒だ。目指す方向が一致している限りおまえはオレの敵じゃない……」

僕はデイリータに提案する。

「……僕と一緒にいこう」

その僕の言葉に、デイリータは少し戸惑ったようだった。

何かを秤はかりにかけ、それでも彼は首を横に振った。

「……すまない、それはできない。彼女にはこのオレが必要だ」

「彼女？」

デイリータはいつにない情熱的な言葉の中に、怜悯な気配を漂わせながら応える。

「扱いやすい方が残れば、王子だろうが王女だろうがどちらでもいいんだ」

チラリと視線を外套越しのオヴェリア様に向ける。彼女からは何の反応もない。

「教会は、どちらか一方を王位に据え影から操る……、傀儡かいらい政権の誕生、それが教皇の真の狙いだ」

僕はデイリータの思惑を疑う。

彼のことはよく知っている。どちらかを取るなら、どちらかを切り捨てる。

ティータを失って以後、彼の行動を察しているからこそ、彼が取り得る手段は決まってそれだ。

僕はデイリータの隣に跪くオヴェリア様を慮りながら、それでも尋ねずにはいられなかった。

「きみは自分の野心のためにオヴェリア様を利用しているのか？」

しかしデイリータの思いは、僕の想像を超えていた。

「彼女はオレの同志だ。彼女はオレを利用し、オレは彼女を利用する。」

ただ……」

「ただ？」

一拍置いて、彼は続けた。

「オヴェリアのためならこの命……、失っても惜しくない……」

そこで初めて、オヴェリア様がデイリータに顔を向けた。

彼女もまた、デイリータに猜疑心さいぎしんを持っていたのだろうか。

「デイリータ……」

デイリータはあえて、オヴェリア様を無視して僕に問う。

「おかしいか……？」

「いや、その言葉を信じるよ……。きつと、オヴェリア様も」

その刹那。

どこどかと教会の屋根を踏みしめ、大勢の気配が建物の外を囲う気配がした。

「異端者ラムザに告げる！」

聞き覚えのある、野太い声だ。

「この教会は完全に包囲した！ おとなしく出てこい!!」

居丈高なこの男の声は、王都ルザリアで聞かされた。

「……この声、ザルモウか!!」

僕は足早に教会の外へと向かった。教会の中で祈りを捧げている無辜の民を巻き込むわけにはいかない。

デイリータとオヴェリア様も、ゆつくりと僕の後を追ってくるのを感じ取っていた。